ハンカチの木

Gardenia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハンカチの木

【Ｎコード】
Ｎ０９７８Ｖ

【作者名】
Ｇａｒｄｅｎｉａ

【あらすじ】
機械技師の保坂（ほさか）一也（いちや）はもうすぐ２９歳。１年前に寮を出てマンションで一人暮らしを始めた。最寄り駅の近くで墨色の板塀に貼られた一枚の紙がきっかけで、亜佐美（あさみ）と出会います。昭和半ばに建てられたという家に住み、姉の子供を育てながら暮らしている亜佐美。実は社長の息子という保坂。二人がゆっくり育てる恋愛ストーリーです。

主な登場人物（前書き）

機械技師の保坂一也（ほさかいちや）はもうすぐ２９歳。
１年前に寮を出てマンションで一人暮らしを始めた。最寄り駅の近くで墨色の板塀に貼られた一枚の紙がきっかけで、ユニークなお弁当屋の亜佐美（あさみ）と出会う。昭和半ばに建てられたという家に住み、姉の子供を育てながら暮らしている亜佐美の明るくて柔軟な性格に、理系で引きこもりがちな保坂が心を開いていくストーリーです。

７月３１日から本編スタートです！

主な登場人物

■二条（にじょう）　亜佐美（あさみ）♀　２５歳　Ｂ型
自営業　両親と姉はすでに他界
両親の残した家で姉の子を育てながら、自宅を改造して弁当屋を始める
身長１５８ｃｍ　中肉　セミロングのヘアースタイルで少しクセっ毛

■保坂　一也（ほさか　いちや）♂　２９歳　Ａ型
会社員・技師　工学部　院卒　一人暮らし　両親と兄が２人居る
身長１７８ｃｍ

■香川　雅人（かがわ　まさと）♂　２７歳　Ｂ型
保坂の同僚
会社員・技師　工学部卒　一人暮らし　両親と妹が居る
身長１８０ｃｍ

■早瀬　薫（はやせ　かおる）♀　２７歳　ＡＢ型
保坂の同僚
会社員・技師　工学部卒　実家暮らし　一人っ子
身長１６３ｃｍ　スレンダーでスタイルが良い
栗色のストレートロングヘアー
仕事しているときは颯爽として見えるが、実家暮らしが長いため家事はまったくできない。

■二条　茜（にじょう　あかね）♀　９歳　Ｏ型

小学生　二条亜佐美の姪
ロングヘアーで少しクセっ毛

1　貼り紙

小さな貼り紙を見たのはほんの偶然だったように思う。
自宅から最寄り駅までの途中で雨が落ちてきたとふと立ち止まった。
空を見上げてそれほど暗くない雲にほっとしたときにそれが目がとまった。

『通学弁当　通勤弁当　愛妻弁当　彼女／彼氏弁当
その他ご要望相談のうえ　お弁当をお作りします』

白い四角い紙に手書きで書かれた紙はいつから貼られているのか少し色褪せていた。

そのまま通り過ぎたけれど電車の中でふと先ほど見た手書きの紙が気になって、それが貼られていた墨色の板塀の家を思い出していた。
小さなその家は古い建物で、保坂が1年前に引っ越してきてから今朝までは意識したこともなく、どんな人が住んでいるのかいないのか考えたこともない自己主張の少ない家であったはず。
板塀しか覚えてないよなぁと思いながら混雑する電車を降り、そこから１０分ほど歩いて勤務する工場に到着した。

保坂の勤務する工場は東京に本社があり名前を聞けば誰でも知っているような大会社。
その直轄工場だけど土地柄なのか全体にのんびりした雰囲気が漂って、駅から工場まで１０分たらずの道のりを同僚の何人かが「おはよー」と声かけながら自転車で追い越して出勤する朝の光景は、今日も変わらない一日のスタートでなぜか保坂をほっとさせる。
一年前までの保坂は駅を隔てて反対側に、徒歩で１０分自転車だと数分の距離にある工場の寮住まいだったので他の同僚たちのように

自転車で通っていたのだ。
自転車での通勤をしなくなってから少々運動不足気味かもと思いながら、いつもと同じ時間に正門をくぐり、更衣室で作業服に着替えていつものように給湯室でコーヒーを自分のマグに注いでから持ち場に着くころには、朝の貼り紙のことはすっかり忘れて仕事に集中していきました。

「そろそろ昼だぞ！」と隣の席の香川に言われて壁の時計を見ると１２時１０分前。
「今日は社食にするか？」と誘われた保坂は「今日はコンビニ行くよ」と断って少し早めに職場を出ようとすると、同期の早瀬薫に「私、ランチパック、ツナマヨネーズね！！」と声をかけられた。
保坂は足を止めて表情のない顔を薫に向け、それからゆっくりと職場を後にした。

「あぁ～、今日もダメかぁ～～」
大げさにつぶやいて机に突っ伏した薫の頭をパシッと叩き、
「毎度、毎度、懲りないなぁ。俺と一緒に社食に行こうぜ！」と香川が薫を誘います。
「えっ？お兄さん、奢ってくれるの？」
「ば～か、なんでお前に奢らなきゃいけないんだ？
それに兄ってなんだ？俺は同期だぞ、しかもお薫チャンのほうが１ヶ月ほど誕生日が早いはず（笑）」
「香川、嫌い～～。女に年上言うな！」
薫はそう言いながらお財布をつかんで香川と一緒にお昼を食べるべく食堂に向かった。

「それにしても、保坂チャンって何で普通に会話が出来ないんだろうねぇ」とＡ定食を頬張りながらつぶやく薫に、「会話ができないんじゃなく、薫チャンの下僕にはなりたくないだけなんじゃないの

？」

「普通、同僚とはコミュニケーションするでしょ、普通はさ」

「保坂は昔からああだよ。孤独を愛してるんだろう？（笑）」

「疑問系だよ（笑）香川チャン。」

「まぁ、どうでもいいからとりあえず食え。」

「ん」と素直に頷いた薫はご飯を半分残してご馳走様と手を合わせ、食後のお茶を飲み干した。

薫と香川が席に戻ってみると、保坂は食べ終わったサンドウィッチの包みをそのまま机に置きカフェオレを飲み終えたところだった。

「あれ？ここで食べたんだ？」という薫の声に振り向く様子もなく「雨が降ってきたからな」とだけ言ってランチの残骸を片付け始めた保坂に香川が

「午後は点検に行くのか？」声をかけた。

工場勤めではあるが保坂や香川の部署は製造部ではなく機械技術部だ。

紅一点の薫も含めて工学部を卒業してこの会社にやってきた。

保坂が作業服を着ている日は稼動している機械の点検をしたい日だというのは薫と香川にはわかっていた。

普段は作業着でなくてもよい職場だ。午前中はデスクに居たから午後から出かけるのだろう。

午後の仕事が始まってほどなくして香川に「ちょっと見回ってくる」と声をかけ保坂は出かけて行った。

「好きだよね、保坂チャンは」と薫がつぶやく。

「あれがあいつのスランプ脱出策だよ」と香川が応える。

あとは二人ともそれぞれのモニターに集中し、黙ったまま午後が過ぎていった。

退社時間間際になってようやく保坂が席に戻ってきた。

「何かあったのか？」と香川が聞くと、「あぁ」とだけ保坂は言ってしばらく目を泳がせていたが、「１５号機のワイヤーがはずれかけてたので直してた」と言葉を続けた。
「それって電気部の仕事じゃね？」
「うん、電気部のなんだけどワイヤーの留め方をちょっと提案してたものだから遅くなった」
「電気も好きだものなぁ、保坂チャンは」
「まぁね。手も必要だったし。で、そのことについて報告書作らなくちゃならなくなったわ」
「はいはい、頑張ってください。俺は定時であがるよ（笑）」
そういう会話をしながらも保坂も香川もタイピングを止めたりはしなかった。

実のところ保坂は次の提案会議に必要なものがまだ出来ていなかった。
行き詰っていたので、点検と称して機械を見に行くといくことで気分転換を図ったのだ。
いつも行き詰ると大きな製造機械を眺めに出かける。
機械の一定のスピードと動きが保坂に考える時間を与えてくれるような気がする。
そうやって今日も点検と称してデスクを離れた。
機械の間を歩きながら気になる箇所を見つけたので電気部の新人を呼び、一緒に作業しているうちに次の会議に提案するべきものが見えてきた。
いつもそうだ。ＰＣを眺めているだけでは思いつかなかったことが現場にはある。

定時を１時間ほど過ぎたところで保坂は報告書を仕上げ、帰る準備を始めた。
データを保存しＰＣをシャットダウンする。

まだ残ってる同僚に声をかけて工場を後にした。
朝と同じ道を逆にたどって電車に乗り2駅目で下車する。
東京から1時間半ほど離れているがそれほど田舎ではない。
特急が停まる駅と直結して有名デパートの支店や都市銀行が在り、
駅前ロータリー中央からまっすぐに伸びている道の両側は商店街に
なっていて、夕方はかなり活気がある。
でも確実に都心とは違う時間が流れていた。
保坂はそんな時間の駅前を嫌いではなかった。
商店街を中ほどまで進み、主婦の味方と店側のキャッチコピーが掲
げられたスーパーを右折し、１０分ほど歩くと保坂の住むマンショ
ンがある。
そこまで来ればもう繁華街の音もなく静かな住宅地になっている。
朝に見つけた貼り紙はスーパーの角を入って数軒目の家だったはず。
もう剥がされたのか、帰り道でみかけることはなく保坂もすっかり
貼り紙のことは忘れていた。

1　貼り紙（後書き）

大人のほのぼのとした描写はありますがセックス描写はありません。

2　女の子

何事もなく数日が過ぎていった。
月曜日から降り続いていた雨も止み、久しぶりに青い空が広がっている。
保坂は提案書をまとめ不在の課長のデスクに置き、帰り支度をした。
今日は木曜日だ。週末の明日朝に課長から質問があるだろう。修正があれば明日中に仕上げて週末は仕事のことを考えずに過ごせそうだ。
と、香川から声がかかった。
「保坂チャン、明日開けといて～♪」
そろそろ合コンのお誘いがあるはずだと思った矢先のことなので思わず笑いそうになった。
「明日はダメだな」
「即答かよ！一人足りないんだ。なんとか考えてよ」
「ん～～、相手は？」
「隣駅の短大の子たちだ～。女子大生だぞ～！ピチピチだぞ～」
「明日までに考えとくよ」
「まったく、相手聞いてから考えるの保坂らしいよな」
まぁあたりまえだろと肯いて駅前の道を香川と一緒に歩き出した。

それにしてもと思う。
短大生はちょっと若すぎやしないか？１０歳ほどの差があるだろ、子供だろ！と保坂は思う。
香川のほうはどうせ飲むなら若くて可愛い女の子が居て、わいわい楽しく飲めるほうがいいと気軽な考えだ。
女子大生との合コンは人数など足らなくなることはないが、保坂が意外に女子ウケするのを香川は知っていた。
身長１７８ｃｍでやや細身、理系出身にしては服装も野暮じゃなく

さりげないセンスが女子からは好感を持たれるみたいだ。会話も滞ることなく紳士的なエスコートに保坂が参加する合コンはいつでもトラブルがなかった。
結構コイツは場慣れしてるんだよな～と香川は保坂のことを思う。出身地も大学も違うためお互いにどんな青春時代を過ごしたかはわからないが、どうも同じ匂いがすると香川は感じていた。

「なぁ、新しいプロジェクトのこと聞いたか？」と、駅が見えてきたところで香川が言った。
「うちの部署に関係あるのか？」
「改善や提案の上手な誰かさんが居るからなぁ。上のほうが一度話を聞きたいようなこと小耳に挟んだよ」
「一体どこからの情報だよ～。もしかして・・・」と保坂はあてずっぽうでつぶやいてみた。
「そういえば秘書課に香川好みのおねえちゃんが居たな」と小さな声で言うと、
「うぅぅ・・・。おまえ・・・」と言葉に詰まった香川が保坂の肩をこづいた。
「女子大生と合コンしてる場合かよ（笑）」
「まだそんなんじゃないから・・・・」歯切れの悪い香川を見て笑っていると、改札が見えてきた。

薫が改札を通ろうとしている。
栗色のストレートヘアーが少しだけ風に動かされてスレンダーな顔のラインが見え隠れする。
そんな視線に気がついたのか、薫が二人に手を上げた。
「同じ電車かぁ」と香川がわざとがっかりした声を出すと、「一緒の車両についてこないでね」と薫も言い返している。
この二人は同じ歳だ。実は保坂は大学院を出てからの入社なので同期ではあるけれど彼らより2歳年上だ。

同じ年に入社し研修も配属先も同じになって5年ほど毎日顔を合わせている。
保坂は反対方向のためそんな二人と改札を入ったところで別れた。

電車を降りて、会社からたった二駅しか離れていないのに気分が変わるのがわかる。
この切り替え感がほしくて4年ほどの寮生活から一人暮らしを始めた。その選択は間違ってなかったと思う。
いつも右折するスーパーの先にある本屋に行こうかとふと思ったが、本屋は休日の楽しみにしようと思い直してマンションに帰ることにした。
スーパーの角をまがると数軒先の黒い板塀に女の子が手をついていた。
肘が軽く曲がったかと思うとその女の子が板塀に吸い込まれていくのが見えた。
えっ？と思って目を凝らすと、ゆるやかにウエーブがかかった長い髪をした女の子だった。髪にはピンクと白の小さな飾りがついたピンが留まっていて、白いハイソックスにピンクの靴、そしてピンクのランドセルが最後に視界から消えてドアが静かに締まった。
スローモーションのように見えたが実際はあっという間だったんだろうなと我に帰って、板塀をじっと見てみる。
その板塀には小さなドアがついていた。勝手口なのだろうか、通常のドアより小さ目なことに気がついた。今までドアがあることに気がついていなかったのでまるで女の子が異次元に吸い込まれるように見えただけだろう。
保坂は少しほっとしてマンションに帰る足を速めた。

3　合コン

金曜日の朝、アラームで目が覚めた保坂はまずコーヒーを淹れた。
淹れるといってもカプセルコーヒーも水も前夜のうちにセットしているので電源ボタンを押せば２５秒で本格的なコーヒーが出来上がる。
無駄のないスタイリッシュなデザインが気に入って春に購入してしまったエスプレッソマシンだ。
ＴＶをつけＣＮＮニュースを聞き流しながらパソコンの電源を入れる。
コーヒーを飲みながらひと通り世界のニュースをチェックするころにようやく目がさめてくる。
おもむろに部屋を片付けて、身体をほぐすためにストレッチをし、そしてシャワーを浴びる。
一連の行動が決まっているので時計を見なくても時間に余裕があるのがわかっている。
冷凍しているパンを取り出してオーブンで温め、野菜ジュースを飲み、その日は合コンだったことを思い出しビタミン剤を多めに摂ることにした。
飲み会や夜更かしが少し楽になるかもしれない。
簡単な朝食が終わったら着替えて出社するだけだ。

保坂も同僚たちと同じようにスーツを着る。
入社当時から体系に変化がなかったのだが、一人暮らしを始めてから筋力トレーニングを増やしたため肩まわりや首が少し太くなっている。
今は少しきつく感じるくらいだが、次の購入時はサイズを変えなくてはならないかもしれないと思っていた。
スーツの色を決めているのでシャツも毎回同じような色を買えば良

い。
ネクタイだけはインターネットでファッションをチェックしてそのときの流行をとりいれるようにしている。そのネクタイも普段はしなくてもよい職場なのでポケットに入っていることが多いのだが、会議などでは必要になるので保坂としてはこだわりを捨てられないものだ。

家をでてスーパーの手前でふと昨日のことを思い出した。
歩くスピードを落とさずに黒の板塀の小さな扉をちらっと確認する。ピンク色のランドセルが印象に残っている。ドアは今朝は開くことがなくきちんと閉まっていた。

いつもの電車に乗る。
いつもの駅で降りていつもと同じ道を歩き職場に到着する。
保坂にはいつもと同じというのが好ましく感じられる。

始業時間になると課長から呼ばれた。
課長は前日に保坂がデスクに置いた仕様提案書を持っていた。
「1時間後に会議室に来るように」と言われ、「はい。わかりました」と答えたものの内心は、いつもだったらその場でダメ出しされるか部屋の一角にあるミーティングコーナーで詳細まで詰めるのだが今日はおかしいと思っていた。
いつもと違うということは工程や結果もいつもと違うことになるんだろうなとは思った。

会議の少し前、会議室が使われていないことを確認した保坂はノートPCを運び、課長からの質問をシュミレーションしていた。
どうせ来週の会議でも提案者として発表することになるので頭の中を整理しておく必要がある。
ほどなくして課長が顔を出す頃には保坂の準備はすっかり出来上が

っていた。

課長は「この改善案の説明を火曜日の定例会議でできるか？」とすぐに聞いて来た。

「文章だけではなくサンプル画像も取り入れたほうがいいでしょうか？」と保坂が聞くと、

「この場合、あったほうが現場がはやく理解できるんじゃないか？きっと次のバージョンアップのときに参考になるとおもう。」という言葉が返ってきたので、「それでは展開図と完成予想図も入れてみます」と保坂が答えた。

「ただ火曜日までには精密な展開図は無理なのでドラフトで、あとは採用後に設計するというコメントを入れて、そういう形でいいですか？」とノートＰＣにあらかじめ出しておいた画像を見せると、

「あぁ、問題ない。保坂は手回しがいいな。コストの計算もしてあるし、まぁこの機種が製造される限りバージョンアップ時に採用になるとおもう。」

「はい、火曜日までに仕上げておきます。早瀬に手伝ってもらっていいですか？」

「早瀬は今急ぎのプロジェクトがないから大丈夫だろう。本人がＯＫなら手伝ってもらえ。」

「はい、ありがとうございます。」

「さて、話は変わるが・・」と課長は言葉をつないだ。

「本社でな、先月の論文が話題になってる。」

「あぁ、あれですか。」

数ヶ月前に工学関係の本に保坂は新しい論文をひとつ送っていた。院生のときから保坂は定期的に論文を発表している。まだどれも大絶賛されたことはないが、毎回少しばかりは反響があったし、論文を楽しみに待っててくれる人が居ることも励みになってた。

「実はかなり前から新しいプロジェクトの立ち上げを計画していて

いよいよ実行だというときにお前の論文が発表された」
タイムリーなことだと思った。いずれどこかが作るものだ。この会社が作るなら俺が発表しておいて良かったよと保坂は思っていた。
「来週本社に出張だぞ。たぶん木曜日か金曜日。」
「はい」
「その後、新しいプロジェクトにお前が必要だと判断されたら移動することになる。この5年で基礎も覚えたから次は応用やってみろってところだ。」
「はい。わかりました。本社で話聞いてきます。」
会議室を出る前に「この話はまだ極秘だぞ」と課長が一呼吸分だけ心配そうに保坂を見つめた。

職場に戻った保坂は薫が手伝えるということなので、火曜日の会議に使う資料を渡した。
薫は資料をわかりやすくまとめるのに長けている。
一緒にひと通りざっと見てフローを確認すると、「展開図のページだけ保坂チャンが作ってね」と言って、月曜最終までにやっとくと請け負った。

保坂は就業時間まで展開図に取り組んで、定時に仕事を終わった。
本当は少し残業したかったのだが、「今夜は合コン♪　忘れないでね～」と香川に可愛くお願いされたのでしぶしぶ定時あがりだ。

合コンは保坂の住まいの最寄り駅前の洒落た居酒屋の予定だ。
一度マンションに帰って着替えてから行くつもりで電車を降り、スーパーの角を曲がった。
黒い板塀の扉はひっそりと閉まっていた。

保坂は帰宅すると必ずスーツを風通しのよいところにきちんと掛けておく。

クローゼットに入れる前にブラシをかけて仕舞うことにしている。
軽くシャワーを浴びて今シーズン最初に買ったジーンズとシャツを着、ブレザーを手に持ってでかけた。
集合時間ちょうどくらいに店に到着したものの保坂がいちばん最後だった。
皆の気合の入れ具合がわかると言うものだ。気づかれないようにはぅっとため息をついてしまったのは仕方ない。
男女５人ずつの合計１０人。ちょうど良い人数だ。
１０人で同じ話題を続けるのは無理だから、やがて隣の人とだけ話していれば場はつくろえる。
少しくらい話さなくなっても気がつかない場合もあるし、メンバー観察ができるので合コンで盛り上がりきれない保坂としては都合がいいのだ。
女の子の飲み物を気遣い、会話の流れが滞らないように話題を振り、こっちを見つめている子が居ればニッコリ微笑んでおけばほとんどの場合何の問題もなく終われる。二次会に参加しなければ大丈夫だ。たいていの場合、保坂は女の子から電話番号を教えてもらえる。学生の頃は楽しく活用させてもらったが、社会人になってからは合コンで知り合った女の子には連絡をしないことにしていた。
さて、この夜の女子大生は１０歳近く年下なのでとても子供っぽい。皆お酒を飲んでるがはたして何人が成人しているのだろうか。
話に夢中になるばかりにグラスを倒しそうになったり、汚れたお皿にブラウスの袖がくっつきそうになったり、その都度さりげなくグラスやお皿を移動させるのに忙しい夜だった。

場所を移動する時間になり、あらかじめ香川と打ち合わせたとおり集めたお金を保坂が店側に払ってる間にみんな二次会に流れて行った。
あとはひとりのんびり帰るだけである。
今夜は何もしないでぼんやりと過ごそうと保坂は思った。

4　出張

金曜の夜、合コンが終わった後の保坂は酔い覚ましも兼ねて歩いてマンションに帰った。
来週からのことを飲みなおしながら考えようとウイスキーボトルを取り出した。強い酒が飲みたくなってシングルモルトにする。
これからは今までのようなわけにはいかないだろうことは想像できた。
火曜日は会議、おそらく木曜日は本社に呼ばれることだろう。
論文の説明をしなければならない。それとその内容についても自分と同等かそれ以上の見識をもつ技術者に説明しなければならない。
木曜日だけでは終わらずに金曜日も本社に足止めのはずである。
そのまま週末は久しぶりに東京で過ごそうかと考えた。

いろいろ思い巡らせているところに着信があった。
相変わらず行動が早い。実家からの電話だ。
「こんばんは。母ですよ。覚えてる？（笑）」
「もちろんです。こんばんは、おかあさん」
「まったくぅ、母親が居ることを忘れちゃったのかもといつも心配になるわ。今いいかしら？お話できる？」
「はい。大丈夫です」
「週末はこっちに泊まってちょうだいね」
「相変わらず情報が早いですね、さすが母さんだ。明日にでもこちらから連絡しようと思ってたところです」
「息子が久しぶりに東京に帰って来るのに、こんなチャンスは逃さないわよ（笑）」
「僕だって今朝聞いたところですよ、木曜日から出張だって」
「木曜日からなのね。家で食事して欲しいわ」
「たぶん大丈夫です。久しぶりに母さんのあれ、食べたいな」

「まぁ、それは張り切らなくては！！」
「でもまだ詳しいスケジュールが決まってないので、水曜日に電話します。それでいいですか？」
「実家までの道順覚えてる？（笑）」
「あははは、迷子になっても母さんのあれの匂いでたどり着けると思いますよ（笑）」
「他にも作っていいかしら？新作もあるんだけど？」
「日曜日にこっちに帰ろうかと思ってます。それまでに食べきれるくらいでお願いします」
「うわ～、嬉しいわ～。夕食待ってるから本社では適当に切り上げてよ～？」
「善処します（笑）」
「いやだ、善処しますだなんて（笑）」

それからしばらく雑談して電話を終えた。
それにしても相変わらず仲の良い夫婦だ。
社長である父が一也が木曜日に上京することをさっそく母にリークしたのだ（笑）
この調子じゃ週末は兄たち家族も全員集合だなと、久しぶりに華やいだ母の声を聞いたら胸がほんわりと温かくなった。
言う必要もないので会社で保坂が社長の息子だとは誰にも言ってない。
本社ではなく工場ということもあるが、大きな会社なので社長と同じ名前でも勘ぐられたり尋ねられたことは一度もない。
直属の部長は遠縁に当たるので知っているが、課長はおそらく知らないだろう。
そういう環境を保坂は好ましく思っていた。
しかしあの論文が採用されると、これからは今までのようなわけにはいかない。
プロジェクトの責任者にはならなくとも技術担当にはなるはずだし、

このプロジェクトが終了したら最終的には本社役員になってゆくのだ。
今夜はこれ以上は考えにことにしようと保坂は思った。
もう一杯だけウイスキーを飲み終えたら、眠ってすべては明日から考えようと思うのだった。

休日の朝は目覚ましアラームは鳴らさない。
自然に目が覚めるまで寝ているのだが、いつもと同じような時間に起きてしまう。
トレーニングを少し多めにこなしてシャワーを浴びた後に保坂は出張用の資料をまとめはじめた。
多くはパソコンでの作業になる。発表した論文にもっと詳しいコメントをつけていく。
発表しなかったこともあるのだ。知的財産として守る準備をしなければならない。完成予想図も作らなくてはいけないだろう。
個人としての主張もしなくてはならない。
自分の意向を明確に持っておかなければならないことに保坂は気を引き締めた。

気がつけばすっかり午後も半ばになっていた。
冷凍のパスタがあるので温めて簡単な食事を摂ってから近所のスーパーまで買い物に行くことにした。散歩を兼ねて本屋も寄ってみるつもりである。
スーパーが見え始めた頃、その手前の黒い板塀から人が出てきた。
ランドセルの女の子ではなく、２０代前半の女性である。
じっと見るわけにもいかず、保坂は黒い板塀から距離をとって女性を見ないように通り過ぎた。
あの子の母親にしては幼さの残る顔立ちのような気がしたけど、最近の女性は若く見せ方もあるのだろう。そんな風に考えてるとスー

パーを通り過ぎて本屋の前に差し掛かっていた。
本屋では雑誌をざっと見るだけにして、スーパーで日用品を買っての帰り道、あの黒い板塀にちらっと目を向けた。
さっきは無かった白い紙が貼られている。
今度は保坂も板塀に近づいてその貼り紙をじっと見てみた。

『通勤弁当　愛妻弁当　彼女／彼氏弁当
その他ご要望相談のうえ　お弁当をお作りします』

文章は同じような感じだけど手書きではなくパソコンで作られたアイコンや写真入りの可愛い貼り紙だった。
この家は弁当屋なのか？ここで作ってるんだろうか。そんなことを思いつつ部屋に戻った保坂はコーヒーをセットしてまた仕事に頭を切りかえていった。

結局翌日の日曜日も同じように筋力トレーニングをし、掃除や出張準備をし、そして今週から始まる会議の脳内シュミレーションをしておいた。
月曜日は課長に呼ばれ、部長にも呼ばれ、薫と翌日の会議へ向けての打ち合わせをし、空いた時間はデスクでひたすらコンピューターに向き合っていた。
部長には一緒に本社へ行くことになったと告げられた。案の定、木曜と金曜の2日間本社に呼ばれている。泊まりはどうする？と聞かれて、実家にしますよと答えると、部長は少し笑った。
「まぁ、ほおってはおかれないな。私も一緒に夕飯をどうかと誘われたよ」
「ほんとご一緒にいかがですか？」
「いや、木曜日は遠慮しよう。久しぶりだから水入らずがいいよ」
「少々敷居が高いので一緒してもらえると助かるんですが・・・」

男の子なんだからそれくらい自分でなんとかしろと言われて苦笑するしかない。
木曜日の出発時間を確認して自分のデスクに戻ると、香川が声をかけてきた。

「今日はやけに忙しそうだな？」
「木曜日から出張が決まった」
「何だ？それは。聞いてないぞ」
「今言った」
「週末はこっちに戻るのか？」
「いいや、久しぶりに実家に顔出さないと・・・。戻りは月曜だな」
「あちゃ～～、合コンの女子大生に保坂を連れて行くって言っちゃったよ」
「何だそれは？」
「土曜日にどこかへお出かけしようって話さ」
「呆れたヤツだな。俺に断りもなく・・・」
「保坂チャン人気あるから、撒き餌にしたんだよ～」
もう言い返さずに軽く睨むと、香川は諦めたようにため息をついた。

4　出張（後書き）

ここから保坂の家族が登場します。ときどき『一也』と書くことになります。
家族がでてくると保坂がたくさんになるので難しいですね。

5　会議

火曜日は会議に半日費やし、水曜日は通常業務、そして木曜日の朝に本社に向けて出発した。
到着駅には会社から迎えの車がきていた。
部長と一緒に乗り込んで本社に向かう。ほどなく田舎にはないタワービル街が見えてきた。目指す本社はこの高層ビル群の１つでしかない思うと、大会社ってたくさんあるよなと保坂は思う。保坂の勤める規模の会社はいくらでもあるということだ。
車は地下の役員用車寄せに進んだ。
「なんか大げさですね」と保坂が言うと、部長が「あまり見せたくないんじゃないか？」と言った。
「なるほど」
「うむ、そういうことかもしれん」
部長がじっと運転手の後頭部あたりを見ている。
それ以上は会話がなかった。

専用エレベーターで案内され、誰にも会わずに社長室に到着した。
「長谷川部長、一也様、お久しぶりです」という秘書の声をさえぎるように社長の「入ってくれ」という大きな声が聞こえた。
「高瀬さん、お元気そうですね」と部長が挨拶し、保坂は「とりあえず高瀬さん、こんにちは。ご無沙汰しております。今日はお世話になります」と部長の後ろから声をかけた。
そして「父がいつもお世話かけてます」と小さな声で高瀬をねぎらいながら部長に続いて社長室に入った。

「久しぶりだな、二人とも」と父は上機嫌のようだった。
近況をあれこれ話していると長兄がやってきた。
保坂より１０歳ほどの兄は専務として父を支えている。見合い結婚

で一男一女を儲け貫禄もでてきたようだ。昔から保坂の憧れでいつまでたっても同じ場所には立てないカリスマの兄だ。
挨拶もそこそこに兄が「土曜日は全員集合だぞ（笑）父さんもどこにも出かけちゃだめだって指令が出てる」
「5年ぶりくらいだもんなぁ、皆で集まるのは」
ほんの一呼吸分だけ会話が止まった。
「いや、皆予定があるだろうから気にしないでくれ」と保坂が言うと、
「母さんの命令に逆らえるかよ」
「それに秀が今こっちに居るんだ」
「え～？秀兄さんが？」
確か医者になると言って猛勉強していた次男の秀一（しゅういち）は、医師免許はとったものの、ある日突然地理学者になると言って大学に入りなおした。そしてそれを辞めて画家になるとかまでは聞いている。
「秀は今は東京に居る。よく出かけるけど今週末は家に来るよ」
「そうなんだ」
「あいつの絵、結構いいセンいってるんだよ。絵の才能もそこそこある。
そしてそれよりもバイヤーとしての能力があるんだ。まぁ秀のことは土曜日にゆっくり話そう」
「うん。楽しみだな」

長兄と保坂の会話を聞いていた父が「高瀬、そろそろ今日のスケジュールを言ってやってくれ」と仕事の話にもどるように言った。
「はい。では、これから昼食を摂っていただきます。
そして午後1時から社長室で社長、専務、長谷川部長、一也様の4名様で打ち合わせをしていただきます。
午後2時から4時まで、これは予定ですが、新しいプロジェクトに関しての会議があります。第一会議室で各役員が出席します。
その後、社長室に戻っていただき再び社長、専務、一也様で打ち合

わせを考えております。
長谷川部長には会議の後、技術部部長と打ち合わせが入っています。そして明日は・・・」
と大まかなスケジュールが読み上げられた。

「お昼は葵亭でよろしいでしょうか?」という高瀬に「社食に行きたいな」と保坂は返した。
長兄も「私はちょっと部屋に帰らなくてはならないので1時に戻ってくるよ」という。
社長が「じゃ、長谷川君と僕だけ葵亭だな。個室とってくれる?」と高瀬に言った。
保坂は純粋に社食で食べたかったが、長兄は社長と部長の邪魔をしないようにしたのだきっと、そう保坂は思った。

案内の秘書課の女性に社食のお勧めをきいて日替わり定食を食べた保坂は、そのまま社長室に戻り兄がもどってくるのを待った。
案の定、長兄は早めに社長室に戻ってきた。
社長たちの戻りはちょうど1時くらいになるだろう。その前に兄弟二人で話したいというのはどちらも同じだ。
「今回お前の論文を見つけたのはラッキーだったよ。何も知らずに進めていたらたいへんなことになってた」と長兄が切り出した。
「こっち（本社）に移動するか?」
「いや、いずれはそうなるだろうけど今じゃないよね」
「そうだな。もう少し後のほうが自然かもしれん」
「このプロジェクトはメインチームは本社だろうけど、技術と製作は工場に新チームを置いたほうがなにかとやり易いとおもう」
「情報漏れも含めてそれのほうが管理しやすい?」
「うん、そういうこと。それに工場のほうが広いし」
「何年くらいかかるんだ?」
「早くて5年かな」

「3年でメドつけろよ」
「無理だよ、それは。これが完成して起動にのったら僕の実績となって本社に来れるよ」
「だめだ、お前が帰ってくるのは3年後だ（笑）」
「途中で他の人に丸投げしてこいってか？イヤだ」
「まぁ少しずつ口説くか」
「兄さんは交渉上手だからなぁ、口利かないようにするよ（笑）」
そんな話をしていると社長が部長と共に帰ってきた。

「さて、時間になったら知らせてくれ。それまでは誰も入れないように」と社長が高瀬に行った。
長兄が主に今日の会議とそれに続くプロジェクトの立ち上げのフローを説明し始めた。
いよいよ始まる。保坂は気を引き締めて会話に集中した。
保坂と会社間の取り決めも話し合った。プロジェクトの概要とスケジュール、一也と部長の役割と役職、そしていずれは本社に移動になる一也のための道が見え始める。
父と長兄で考えられていたその展開図に一也の意見が足されて4人の前にはかなりはっきりと筋書きが現れてきた。

やがて2時になり役員会議が始まった。
そこで一也の論文についての質問が出る。それに澱みなく答えながら一也なりの手ごたえを感じていた。質問があるということは下調べしてきたからこそである。
不況のこの時勢に膨大な投資をして新規開発をするというのはかなり慎重になっているはずだ。危機感もありさらに慎重になれば、話し合いも深いものになっていく。
ようやく父と兄と一緒に会社を守っていくことができるんだと思うと一也は強くなれるような気がした。

5　会議（後書き）

実は、一也は兄二人とは異母兄弟なんですよ。そのあたりの事情はいつか書きますね。

6　家族（前書き）

6　家族

本社での役員会議のあと、翌日のプロジェクト会議のため1時間ほど準備をして一也が会社を出たのは午後6時を少し過ぎたころだった。

社長である父と共に車で家に帰るのだが、窓から見る景色にかつて住んでいた街はこんなだったかと思う。

たった5年離れていただけなのに、少しずつの変化が重なって街も自分も変わってしまったように感じた。

母の歓迎ぶりは想像したとおりだった。母ならこうやって迎えるだろう、こんな言葉は言うだろうと思ったとおりにやってくれる。

父も想定済みなのだろう、家に着くとすぐに着替えに行ってしまった。

玄関先に残された一也は10分ほど靴を脱ぐこともできないまま母の歓迎を受けていた。

「一也さんは少し痩せたみたいよ〜。今夜はたくさん食べてね。先に着替えてらっしゃいよ」とようやく靴を脱ぐことができたときはほっとした。

「手、洗ってらっしゃいよ〜」とまで言うか普通、と思いながらも大人しく自分の部屋だったドアを開けた。

そこは何一つ変わった様子はなく、5年も家を離れていたことが不思議なくらいだ。

ただ、パジャマと家で着るのに適した服は洗濯したらしくふんわりと洗剤の匂いがした。

ダイニングに入っていくと、「あなた、手洗った?」と父が母にチェックを受けてた。これには笑える。子ども扱いなのは何も自分だ

けではないようだ。
良い匂いが漂っていた。献立は一也の好きなシーフードグラタンのはずだ。
「もうすぐ出来るからワイン開けてちょうだいね♪」と母が父に頼んでる。一也はワイングラスを出すことにした。
「どれにするんだ?」と父が聞くので、「軽めの赤がいいな」と一也が答える。
「お前はいつもちゃんと欲しいものを知ってるな。助かる」
「シーフードだけどグラタンだから赤のほうが合うよ」と言いながら、父が差し出したボトルを受け取って器用にコルクを抜く。
テーブルの上にはすでにつまみになりそうなものやサラダ、冷たいスープが並べられている。グラスを飲み干す頃にシーフードグラタンがオーブンから出てきた。
「母さんのグラタンが一番だよ」
「まだ食べてないのに・・・(笑)」
「食べなくてもわかるよ、この匂いは美味しい匂いだ」
そんな一也と母をみて父が静かにワインを飲んでいる。
明日はまた会議続きだ。今夜は仕事を考えないで過ごそう。
そんな風に思っていたのに、食後は父に書斎に呼ばれた。

「どうだ、こっちにはいつごろ戻ってくる?」
「兄さんにも言ったけど、そう簡単にはいかないよ。最低でも5年はかかる」
「3年だ」
「3年は短すぎるよ。やること多いし。実際に試作できる段階までには2年ほどかかるんじゃない?」
「それはなんとかする。3年経ったら工場と本社と両方だな」
「頑張ってみますよ。でも保障はできませんよ」
兄さんは口がうまいが、父さんは押しが強いなと苦笑する一也だった。

リビングに戻ったら母がまだワインを飲んでいた。
「結構飲めるねぇ、母さんも」
「息子たちは寄り付かない、父さんも夜遅いし、すっかりキッチンドランカーになっちゃたわ」
「今宵は僕が付き合いますよ」
「うわっ、嬉しいなぁ」
「ウイスキー貰っていいですか?」
父も呼んで3人で酒盛りすることにした。

「ところで一也さん、そろそろお付き合いしている人を連れてきてよ」
「え~~?誰ですか?それ」
「だって、もうすぐ29歳よ。いい男に誰も居ないってことはないでしょ?」
「よしてくださいよ。付き合ってる女性は居ません」
「え?いやよ、よしてそれだけは」
「は?」
「同性愛は母は認めませんよっ」
「母さん、いくらなんでもそれは・・・」
絶句する僕を父は笑いながら見ていた。
「それくらいにしてやれ」と母に次をうながした。
「知り合いのお嬢さんでね、とってもいい子が居るのよ。一度会ってみない?」
「え?」
さらに僕は絶句した。
「あら、聞こえなかった?写真見る?」
驚いてる僕の目の前に大きな写真が広げられた。
スナップ写真ではなくちゃんと表紙のついたお見合い用の立派なものだ。

「父さん・・・」と助けを求めたが、こういう時はちっとも役に立たない親父だ。
自分の身は自分で守るしかないということだ。母のお見合い攻撃が一段落したところで僕はおもむろに反撃した。
「僕は恋愛結婚をしたいと思っています。まだ出会ってませんがね。あと5年くらいはそっとしておいてもらえませんか？」
母がまだ未練たらたらで何か言い出しそうになった。
「それから僕は、母さんみたいな人が好いんです」
「え？」今度は母が絶句する番だ。
「母さんみたいな温かいグラタンを作れる人を見つけるつもりです」
「この子ったら・・・」ちょっと涙ぐみながら母が父を見た。
「一也は何が欲しいか知ってるんだ。ちゃんと知ってる。そういう子なんだよ」と母を慰めている。
「私みたいな女の子、なかなか居るもんですかっ！いき遅れるわよそんなマザコン」
「確かにそうかもしれませんね。そうなったら一生マザコンのままでいいですよ？」
これには父も母も笑い出してしまった。
そうやって帰省第一日目は過ぎていった。

翌日は朝から会議、会議、その合間に打ち合わせや質問など受付けて多忙を極めた。
弁護士も呼ばれて法律的な見解を調整し、長期にわたってのスケジュールやプロジェクトの人選もほぼ決まった。
だいたいのメドがついたのが午後7時。父はそのまま接待があるからと高瀬秘書と出かけて行き、長兄が飲みに行こうと誘いにきたけど断って、一緒に実家に帰らないかと逆に誘った。
ちょっと考えて一緒に行こうということになった。
兄弟が一緒に帰ってきたのを母が喜ばないわけがない。
食事のあと、3人で次男の秀兄の話や長兄の子供たちの話をしてそ

の夜はぐっすり眠った。

土曜日も朝から何かと忙しかった。
コーヒーだけを所望してリビングでぼんやりしていると弁護士が来て父の書斎に呼ばれた。
打ち合わせが終わってリビングに入っていくとすでに長兄と家族が来ていた。
久しぶりに見る長兄の子供たちははにかむ年頃になっており、お嬢さんぽかった兄嫁はすっかり奥様風になっていた。
そこに次男の秀一がやってきて保坂家は家族全員顔をそろえた。
やがて母の手料理で賑やかな昼食が始まった。
兄弟の好きな料理ばかりの食卓は母の思いが伝わってくる。
そこで秀一が「俺、結婚したい人が居るんだ」と言い出した。
次男秀一は長男優一(ゆういち)より2歳年下だから今年37歳になる。
とっくに適齢期を過ぎているので誰も反対しない。逆に女遊びの多いであろう秀一を落ち着かせれてくれることになるので大賛成だ。
「今年はもう一度、俺の結婚式に集まってくれ」とまで言ったので、どこのお嬢さんだ、もうそこまで話が進んでいるのか、デキちゃったの?とか皆で言い放題だ。
「デキちゃった?」と姪がつぶやいた声に一同はっとして会話が止まった。

「何でもないよ。ところで秀一、どんな人なんだ?」と長兄の優一がとっさに話を振った。
「皆も知ってる子だよ」と珍しく秀一が照れている。
「恵(けい)ちゃんなんだ」
今度も全員驚いた。数軒隣に住む島崎家の末っ子、恵香(けいか)は幼馴染だ。
「最近はずっと海外に行ってるって聞いてるけど」と母が言った。
「イタリアでばったり会って、通訳やってるんだよ恵香は」
「そっか。じゃ島崎家に挨拶に行かないとな」と父が言い、話題は

秀一と恵香の結婚話で大いに盛り上がった。

やがて秀一が「島崎の親父さんに結婚の承諾をもらいに行ってくる」と出かけていき、「まだだったのか」と父が呆れてつぶやいた。

「恵ちゃんがお嫁に来るのね」と母が嬉しそうな顔をしているので、一也もちょっと安心した。母は当分次兄につきっきりだろう。見合い話もしばらくは忘れてくれるはずだ。

その夜は母を慰労する意味で父と3人で鮨屋に行き遅くに家に戻った。

お手伝いの人が居るにもかかわらず、家族の食事は主に母が作っていた。

今は子供たちも家を出て父は帰りが遅いらしい。腕が落ちたわよ～と恨みがましく言う母に「明日の朝ごはんは僕が作ってみようかな」と提案してみる。

「え～～～？作れるの？」

「父さんが洋食でもよければ挑戦してみますよ」

「まぁ、たまにはパンでもいいな」と父が言ったので

「じゃ、母さん明日は朝寝坊してもいいですよ」ということになった。

翌朝キッチンに行ってみると誰も居ない。

コーヒーをたっぷり作っておこうとセットした。

テーブルにお皿とコーヒーカップ、そしてバターを出しておく。

レタスを見つけて洗って千切り、胡瓜やプチトマトも洗って適当に盛り付ける。

サラダは盛り付けてから冷蔵庫に入れておいた。食べる直前に出せばいいだろう。

そこに次兄が起きてきた。

「お？一也が作ってんの？」

「うん」
「とりあえずコーヒーくれっ」
「セルフだよ。カップはそこ、コーヒーはここ」
「ところで秀兄」
「なんだよ」
「オムレツ作れる？」
「なんと言うことだ。お前オムレツ作れないのか？」
「うん、スクランブルエッグは作ったことあるけど、オムレツはない」
「しようがないなぁ。兄ちゃんの特製オムレツ教えてやるよ」
「オネガイシマス」
そんなところに母が起きてきた。
結局、次兄と母に挟まれてオムレツ特訓となった。兄が見事に焼き上げたオムレツは一也が食べ、一也が教えられながら作ったオムレツは兄と両親が食べた。
５年前には考えられなかった光景だ。オムレツに奮闘している３人を見て父はどう思っただろうか。次兄も一也も大人になったと内心喜んでいるだろうか。

7　同級生

帰り支度をしていると次兄が呼びにきた。
長兄が着いたとの知らせを聞いて、父の書斎に入って3人で打ち合わせをする。
父と母は次兄の結婚話で数軒隣の島崎家に行っているらしい。

次兄はとりあえず画家としてそこそこ売れ始めているようだ。
一也は気がつかなかったが、本社にも数点ほど展示しているらしい。
次兄は画商としても才覚を表しているようで、新人を発掘する目を持っているとのこと。
会社の傘下に美術を扱う会社があってそこに入ることになったようだ。
「社長になるか？結婚もすることだし」と長兄が言うと、
「社長はいやだ。かったるいよ。しっかりした人を社長にに選んでくれればいいよ！」
ということであっさりと社長を辞退した。

「じゃ、次は一也？」と促されて、昨日まで話していた新プロジェクト以外の提案をしてみる。
次々に話すことを二人の兄は真剣に聞いて、やがてほぉ～とため息をついた。
次兄が「田舎の工場に行ったはずなのにそこで何してたんだ？」と言うと、
「こいつは工場での5年間に現在使われている機械の改善案、機種変更時の提案をやってきたんだ」と長兄が説明してくれた。
「ちょっと秀に見せてやってくれ」というのでＰＣを立ち上げてざっとこれまで手がけたものを見せた。
改善案も単に提案書も実現したものもあるがまだ実現していないも

のもある。
しかし改良を考えたときにかならず一也のまとめたものを見る必要があった。そこにはデザインを含めたものまでしっかりと次世代の完成図になっていたからだ。
次兄に説明している間に長兄がコーヒーを取ってきてくれた。
コーヒーカップを受け取りながら「ふたりとも、これからが本題なんだ」と一也は話を続けた。
工場のこと本社のこと、そして保坂グループの抱える問題、これから起こるであろう出来事とその予防策などと一気に話した。
「細かいことはいいんだ。それぞれ質問には答えるよ。でも一番大事なのは僕が必要なときに着手できるようなポジションが欲しいってこと」
「わかった。3年くらいはかかるな。それまでは俺に直接連絡くれ」と長兄が答えた。
「じゃ、俺は油絵だけじゃなくグラフィックデザイナーも発掘しておくよ」と次兄が笑いながら答えた。
「まったくイマドキこんなにセキュリティの甘い会社はないよ。よくこれまで大事にいたらなかったのが不思議だ。」
「まったくだな」
「ま、一也、お前の仕事だということだ」
「秀兄、絵の会社のセキュリティも僕がチェックするから」
長い説明を終えてほっとしていた。

「昼飯どうする?」と次兄が聞くので、「僕はそろそろ出るよ」と一也が答えた。
「まっすぐ工場に戻るのか?」
「いいや、ちょっと新宿寄ってから帰る」
「俺は恵香をここへ連れて来なくちゃ」
「恵ちゃんによろしく言っといて」
「おお!」

次兄が島崎家に行ってしまい、長兄のほうを見ると難しい顔をして座っていた。
「これから優兄にはちょくちょく電話させてもらいます」
「ああ、そうだな。何かあったら携帯に直接かけてくれ」
新宿まで送ってくれるというので長兄の運転で素直に送ってもらうことにした。
行き先をパークハイアットと言うと驚いたような顔を一瞬一也に向けたが、何も聞かずに正面玄関につけてくれた。

ルームキーを受け取って部屋に入った一也はさっそくPCの電源を入れてメールをチェックした。
昨日メールを送った同級生から了承の返事が届いていた。
早速電話すると1時間後にホテルに来るということなので喫茶室で会うことにする。
矢野は同じ工学科で学んだ仲だ。
宇宙開発に進みたがったが3年のときに父親が亡くなって、なんとか卒業だけはしてそのまま親の会社を継ぐことになったんだった。
いや、亡くなった時点で会社を引き継ぎ、学生も続けたんだったよなと思い出した。

東京に来たときには実家に帰らずとも矢野には会っていたから「よおっ！」というだけで挨拶は終わった。
矢野は彼の父親が遺した調査会社を潰しもせずにそのままやっている。
保坂は矢野の会社の内容を知らなかった。
友人として付き合うなら知らないことがあってもいいではないかと思っている。
ただ今回は矢野に頼みたいことができた。簡単な説明をして協力を仰いだ。
話を聞いたあとで、「時間はいいのか？」と矢野が聞いた。

「あぁ、特に予定はない」と答えると、「俺の事務所が近いからそっちで話を聞こう」と矢野は立ち上がった。
歩いて10分ほどのところの小さなビルの二階が矢野の会社だった。
「従業員は？」と聞くと
「今は5人だ」と簡潔に答え、保坂に椅子を勧めた。
「仕事は請けることにしよう」
「じゃ、これは一番上の兄貴の名刺だ。契約書ができたら兄貴から連絡させる。会社に行ってくれるか？」
「もちろんだ。で、詳細を聞こう」
保坂はあらましを説明し始めた。
「契約の前に動き始めてもいいのか？」と矢野が尋ねるので、「もちろんできることからやってくれて構わない」と保坂が言うと、
「こっちの部屋に来てくれ。俺の部屋だ」と矢野が奥の部屋のドアを開けた。
PCが何台か並んでいる。2台ほどサーバーもあった。
「おぉ、お前らしいな」
「だろ？」
「まだやってるのか？」
「時々。昔のやつらも時々コンタクトあるよ」
「これは心強いな」
大学時代、保坂と矢野は妙にウマがあってよくPCで遊んだものだ。
「ちょっとやっていくか？そっちのマシンを使ってくれ」
矢野に進められてオンライン対戦ゲームをやり始めたらあっという間に2時間が過ぎていた。
「腹減ったなぁ」
「じゃ、そろそろ移動するか」ということで、矢野の事務所をあとにし矢野お勧めの居酒屋に繰り出した。
チューハイを飲みながら「お前、玲子覚えてるか？」と矢野が聞いた。

「あぁ、懐かしいな、玲子か」と保坂が思い出していると
「行ってみるか?」
矢野が玲子の今を知ってるのは意外だった。
玲子は同じ大学で別の学部に通ってる女の子だった。
どういう経過で知り合ったのかは忘れたけど、保坂や矢野がやっていたオンラインゲームに仲間が連れてきてそのまま一緒に遊ぶようになったような気がする。
メンバーが動き易いように考えて行動するようなプレイヤーだった記憶がある。
今は週に何度かジャズシンガーとして近くの店で唄っているらしい。
「あいつ唄えたっけ?」素直に声に出すと、
「ピアノ結構弾けたのさ。で、唄ってみたらイケそうだっていうので採用されたらしい」
「てっきり結婚でもして奥様になってるのかと思ってた」
「あははは、本人に言ってやればいい」
玲子が唄ってる店に行くにはまだ少し早いということで、時間まで居酒屋で飲むことにした。

やがて矢野の案内で玲子が唄う店に移動したが、新宿にそんな店があるとはと驚くような静かな店だった。
ステージの合間に客席に来た冷子は挨拶が終わると、
「今日は日曜日なので特に静かなのよ」と言った。
「それにしても驚いたな」と保坂が言うと
「良い女になっただろ?」と矢野がニヤニヤしながら保坂に聞いた。
確かに学生のころの玲子はもうすこしぽっちゃりした可愛い女のだったはず。
今目の前に居る玲子はそれよりもスレンダーになっていて保坂には戸惑いが先にたつ。
「唄うって聞いたんだけど?」と矢野の問いかけには答えず、玲子にそう聞いた。

「この時間はほとんどがピアノなの。お客さんを見てピアノだけの日もあるよ。

今日は遅い時間に唄うかな。リクエストで唄うときもあるし、日曜日は気分で決めていいのよ」と玲子は笑って話した。

保坂と矢野は飲み物をウイスキーに変え、玲子の歌を聞いてから帰ることにした。

玲子は次のステージまでの時間を保坂たちと居て学生時代のことを３人で懐かしく語り、ステージに戻って行った。

玲子はポピュラー曲をジャズ風にアレンジしたものをピアノだけで一曲弾いて、二曲目から静かに唄いだした。

しっかりと安定した発声の合間にわずかに震えるような不安定さがあり、それが玲子の声を魅力のあるものに作り上げているようだった。

保坂と矢野は水割りをロックに変え更けていく夜を楽しんだ。

8　ピンクのランドセル（前書き）

8　ピンクのランドセル

月曜日の朝、朝一番の特急に乗ってそのまま工場に出勤した保坂を待ち受けていたのは相次ぐ製造機械のトラブルだった。

すでに出勤していた同僚におはよーと声をかけていると課長が出勤してきた。さっそく課長に挨拶をしに席まで行くと、部長のところに顔を出すように言われた。

「１１時から会議室で部長と私と君とでミーティングだそうだ。でもその前に部長のところへ行くようにと言ってきてる」

「はい。わかりました。メールチェックをしたら早速行ってきます」

「うん、頼むよ」

そしてＰＣを立ち上げていると、誰かが「げっ、１０号機動かないってよ」と叫んだ。

お知らせはメールで届く。朝一番は皆メールをチェックするのでトラブル発生の連絡が入ったようだ。

保坂のメールにも同じ連絡が入っていた。

他にも部長から、先ほど課長から聞いたのと同じ内容のメールが送信されていた。

本社の兄からも届いている。

朝東京のホテルでメールチェックをしたからそれ以後になって２０件のメールが届いていた。

ざっと目を通してＰＣをスリープにし部長の部屋に急いだ。

「おはようございます。先ほど東京から直接出社しました」と言いながら入っていくと、部長が難しい顔をして電話で話していた。

手で、座ってろという合図があったのでソファーに座って待つことにする。どうやら先ほど知らせがあった機械トラブルのことらしい。

ほどなく電話を終えた部長が保坂の前に座った。
「深刻なんですか？」と保坂がトラブルのことを聞くと、「深刻でない故障などないよ」と部長が強く言い返した。
部長自信がその声に驚いたように一呼吸おいてから「修理部も電気部もついてるから、まぁ大丈夫だろう」と言い直し、「それよりも１１時から会議室だ」と言葉を続けた。

「新プロジェクトの件があるから、近いうちに技術管理部の主任にする。それから、専務から聞いたが新プロジェクト以外の企画を持ってるそうだな。そのこともこの工場で考えることになった。そのために新しい部を作る。誰をひっぱるか決めておいてくれ」
「新しい部の名称は？」
「まだ決まってないが、プロジェクト管理部というのはどうだ？技術部も離れるし、企画部にまるまる入れるわけにもいかん。企画開発管理となると長くて舌噛みそうだし」
「名称を決めるのを副工場長の最初の仕事にしてください」
部長はそれには何も言わずに、「じゃ、１１時に」と言っただけで電話をかけるためにデスクに戻った。先週の東京出張で東京本社に移動の打診をされたはずだが、長谷川部長は夫人がこの街の出身であること、そして新プロジェクトに関わっていたいからと本社移動を断ったそうだ。
では工場を頼むと言われて副工場長となる予定だ。

１１時から会議室で部長、課長、そして保坂の３人でミーティングが始まった。案の定、課長は次々に報告される事柄と新プロジェクトの重大性に声もでないようだ。
一也が社長一族であるということに関してはそれほど驚いてないようだった。保坂という名前からなんとなくそう思ってたということだ。
「本社のほうで正式に新プロジェクトもまだ発足していないので、

すべてが極秘になります。しかも私は他の新商品開発も手がけるつもりですから、新しい部屋が欲しいです」

「そうだな。どこか場所はあるか？」

考えていた場所は機械技術部の倉庫で、古い書類を他に移動すればかなり広い空間になる。そこを臨時で使わせてもらうことにした。

１時間の予定だったのでそこで打ち切って、翌日の朝一番でまた３人でミーティングをすることにした。

会議室を出て自分のデスクに戻ると、「まだトラブル修復してないらしいよ」と香川が話しかけてきた。

「いったいどんなトラブルなんだ」と聞いても肩をすくめるだけだ。

「昼はどうする？」

「お腹空いてないな」というと

「では、社食に行ってくるわ」と香川が立ち上がった。

香川の背中に「課長が４時にミーティングだって。薫にも言っといて」と投げおいた。

片手を挙げていたからちゃんと聞こえてはいるんだろう。

念のために二人にメールを送っておいた。

メールボックスには受信メールがたくさん届いてた。何事かなと開けてみると、１０号機のほかにもトラブルがでているとのこと。

念のためにＰＣの電源を落とし、自分のノートＰＣを持って保坂は製造部にでかけた。

そして保坂が自宅に帰れたのは水曜日の夕方だった。

修理の合間に部長や課長との会議もあった。香川や早瀬とのミーティングもあった。

どれも最短で切り上げ、機械トラブルの修復に手を貸した。

時折会議室で携帯電話を握り締めて仮眠をとりながらすべてが一段落するまで工場に留まっていた。

香川と早瀬とは週末の金曜日にミーティングのやり直しをすることにした。

ようやく修復作業のメドがついた3日目の水曜日、「今日は早く帰れ」と課長が言ってくれたので、定時には少し早かったが帰宅できることになった。

工場からでて駅から向かうのは同じ道だというのに違う風景のような気がした。

電車も学生が多かった。

マンションの最寄り駅は1週間ぶりだったことに気がつき、懐かしい気がした。

駅の改札やファーストショップには学生が多い。

いつもスーパーを右折して顔を正面に向けるとピンク色のランドセルが目に入った。

黒い板塀に手を突いて扉を開けようとするのだろうか。

と、その子は手を離して扉の前にたたずんだままだ。もういちど手を上げたが扉を押さずにくるりと扉に背を向け塀にもたれかかった。

少女がほぉっとため息をついた時、保坂がその正面を通るところだった。

保坂に気がついた少女は強い目で下から睨んだ。

後姿は優しそうな女の子と想像していたのに、意外に気が強そうだ。

一瞬目が合ったものの、保坂は表情を消したまま女の子を残して通り過ぎた。

部屋に戻った保坂はむっとする部屋の空気を入れ替えるため窓を全開にした。

エアコンも点ける。シャワーからあがるころには空気も入れ替わっていることだろう。

洗濯物をほおりこみ、熱いシャワーを浴びると眠気もあるが元気もでてきた。

食べるものは冷凍庫に入ってる。でも冷たくてシャキシャキした生野菜が食べたい気分だ。

角のスーパーまでサラダとビールでも買いに行くかとお金をいくらかポケットに入れてでかけることにした。

マンションの前に小さな公園がある。すぐ正面ということはないので子供の声は聞こえないが確か児童公園と書いてあったような気がする。

そこからひとりの女の子が走って出てきた。

あれ？と思ったのはピンク色のランドセルだったからだ。

髪の長い女の子。あの板塀にもたれて保坂を睨んだ子だ。

まだ帰ってなかったんだと思いながらその背中を見送った。

保坂がゆっくり歩いてもほどなくピンクのランドセルに追いついてしまった。

女の子が板塀の前でまた扉を見ていたからだ。

やがて肩落とした少女は扉を押して中に入っていった。

9　チームゼロ

それからの保坂は多忙だった。
機械故障の特定箇所をみつけた件は工場内でちょっとした話題になっていたし、主任に昇格したことや新チーム編成をして独立した部屋を持つことも異例のことであった。

製造機械はすべてコンピューターで作動している。コンピューターの不具合なのか機械そのものの故障なのか、それとコンピューターと機械の途中で不具合を起こしているのか見極める必要がある。１０号機は機械側の故障であることがわかった。自社製品の機械なので部品は何日かで届くが、その入れ替えにまた何日か必要だ。代替の機械は手配できるのか。手配の間生産が落ちても納期に支障がないのかあるのか、支障があるようだったら営業部に連絡しなければならない。
もうひとつの不具合はある製造棟がまるごと不具合だった。コンピューターそのものが調子悪かった。モニターに映る画面も不安定だし、数値を入力しようとしても正常作動をしないとＳＯＳが入ったのだが、再起動を繰り返しても安定しないため、最後には主電源を切ることになった。一瞬ウィルス侵入の懸念をしたが、これもコンピューターのハード部分の損傷が特定でき、今は部品の交換中だ。まだ原因がわからない各部からの応援スタッフを束ねるように保坂は働いた。
わからないことは専門分野に質問し、その後の的確な指示が好感をもたれたらしい。
メドがついたらさっさと帰宅してそれぞれの部に任せたのもよかったようだ。

ようやく自分の仕事に戻れた保坂は金曜日に香川と早瀬を引き連れ

て新しい部屋となる資料室へやってきた。
資料室というと体裁はいいが、それまでは倉庫と言っていたし事実物置と化していた部屋だ。
「皆テキトーに座ってくれ」と保坂がニヤニヤしながら言った。
「椅子ないじゃん～～」「立つ場所もないんですけど？」と二人は文句たらたらだ。
「簡単にこれからのスケジュールを言う。簡単だから口頭でいいよな」
「今はまだ技術部を出ない。そこでこの向いの小さな倉庫にここの資料を移動する。
それだけでは入らないので、現在の技術部の壁前面に棚を作ってそちらにも収納することになった」
三人ともほこりっぽい棚にはもたれられずに立ったままだ。
「そしてこの部屋のペンキを塗りなおし、オフィス家具を入れる」
「何日くらいかかるんだ？」という香川の質問に、「一週間でやる」と保坂が言うと「冗談でしょ」と薫がつぶやいた。
保坂は「いや、今夜から業者が入る。来週の金曜日には終了予定だ。デスクは金曜日の午後に設置予定。その次の月曜に各々ＰＣや備品の設営をすることになる」
「マジかよ」と香川と早瀬が顔を見合わせていた。
「それだけじゃないぞ～（笑）」
「今は４時半だ。これから各自デスクに戻って私物をまとめて、箱に詰めてくれ」
げっ。。と香川がつぶやいた。
「月曜日、午前１０時の特急で三人で東京本社へ行く。
今日中に私物が片付けられないなら月曜の９時までに箱詰めしてくれ。
箱は本社へ行く前に部長室にあずけることになっている」
「なんで部長室なの？」
「隣の部屋も同時に棚工事にとりかかるから出張前にどこかにあず

けたほうがいいんだ。
部長は技術部の長だからな。部下の荷物を置いてもいいだろう」
「了解、主任」「ラジャー」と諦めたように二人が言った。

「さて、出張は月曜日から木曜日まで東京本社。これが電車の切符とホテルのパンフ。ホテルは予約済み。帰りの電車はまだ未定だから東京で受け取る」
「うへ～、４日間も東京か」
「でも、二人とも東京は久しぶりじゃないのか？」
「だね、同窓会でもするか？」
「仕事だってば、香川チャン」
ちょっとなごんだところでとりまとめをする。
「さて、もう一度言うぞ。
こらから私物をまとめる。箱は今頃デスクに届いてるはずだ。
それが終わったら６時半に駅前に集合だ。今日は無礼講で飲み放題食べ放題だ。
で、月曜日は午前１０時の電車に乗る。
どう？覚えた？」
「って、いつの間にか飲み会が増えてますけど？（笑）」
「きゃぁ～、私お泊りセット持って来てないわ～」
「お前は終電で帰れ！終電逃したら歩いて帰れ！！」
香川と早瀬はまったくお笑いコンビだ。彼らの明るさが保坂にはありがたかった。

誇りっぽい倉庫から出た三人は箱に私物を詰めた。三人とも私物はそれほど多くなかったので、その日のうちに部長室に運び終えた。
そして駅で集合と言いながらも正門のところで一緒になった。
駅までは一本道なので同じ時間に仕事を終えたら同じような時間に途中でお互いを見かけたりする。
駅からは保坂はいつもとは反対行きの電車のホームへ誘導した。二

人にとっては帰る方向である。薫の帰宅を考えて、薫の実家の近くのイタリアンを予約していた。

この店はガラス張りの渡り廊下があって、その奥に個室があった。サービスの人からは部屋まで見渡せて、しかも少々騒いでも店内のダイニングには影響がないようになっている。

入り口に立つと香ばしいオリーブオイルとニンニクの香りが漂ってきた。

「お腹空くなぁ、このにおいは」香川はくんくんしながらお腹をさすっている。

ほどなく部屋に案内されて席についたところにシェフがやってきた。飲み物も食事もお任せで頼むと、「まず食前酒と前菜をお持ちします、その後でワインとメインディッシュをいくつかお持ちしますので、それぞれ取り分けてお好きなだけ召し上がってください」と好みも聞かずに下がっていった。

三人で一緒に来たのは初めてだが、それぞれはシェフと顔見知りになるくらいには来ているので好みはわかってるはずだ。

「会社では話し難いことがあるのね」と薫がシャンパンを飲みながら言った。

「まぁとりあえず話を聞こう」と香川も言う。

「会社の壁は薄いから。それにこの三人で始まる新しいチームの発足なので祝いも兼ねてる」

「メインが来るまでに聞きたいわ」と薫が先を薦めた。

「僕は大学院を出てからも専門分野で論文を発表していたんだ。それがこの会社の新プロジェクトと一致していてね、技術担当マネージャーになる」

「ほう、それを我々で?ということ?」

「それもそうそうなんだが、新し過ぎて極秘の上に認可やらいろいろで実行はまだ先になるんだ。お金もかかる。

そこでスタートできるまで、そのプロジェクトとは全然関係ないと

ころで一般消費者に売れるようなものを作ってしのごうじゃないかというのが僕のプランなんだ」

「面倒臭そうな話だなぁ」

「うん、実際に面倒なんだよ。今のところ、開発、製造、企画、販売は別の担当者がそれぞれ責任を持ってやってるわけだが、たまたま僕が技術開発も企画も販売もマネージできるのではないかと本社で提案したら、なんかＯＫってことになったんだ」

ふたりとも一瞬あっけにとられた顔をした。

そして「保坂！「保坂チャン」と同時に叫んだ。

「保坂一族かぁ、やっぱりお前は」と香川が言い出した。

「今頃気がついたの？社長にそっくりじゃん、この顔」

「え？うちの親父知ってるの？」と薫に聞くと、「やだぁ、会社のホームページに載ってるわよ」としれっとして答えた。

「これからは僕と一緒に二人には開発、そして新商品の立ち上げを手伝ってもらう」

「おぉ！！」「わかった」と二人はそれぞれ返事した。

「そういうことで、０から売れる商品を立ち上げるチームとして『チーム　ゼロ』と名称をつける！」

「「おーっ！」」

シャンパンをごくごく飲んでいると、メインディッシュが運ばれてきた。

イタリアワインとアクアパッツア、パルメジャンがたっぷりかかったステーキ、カラスミのリゾットや冷たいサラダなどが並べられてウエイターが下がっていった。

食べながらも３人の話は続いた。

「とりあえず、あと２人は補充する。１人はコンピュータ専門、もう１人は雑用のプロ、まぁ秘書みたいなものかな」

「どんな子？」

「まだ決まってないけど本社出張中に皆で決めたいと思ってる。候補はだいたい絞ってるから」

「可愛い子がいいな」
「私は年下ぁぁ」
ふたりは勝手なこと言い合ってる。

「で、ふたりにはそれぞれの商品のマネージャーになってもらうつもりだ」
「どういうこと？」
「つまり、昇格するってこと」
「部下を持つようになる」
「すごいな」「面倒そう～～」
違う反応に笑いながら、
「大きな仕事の前の練習だと思えばいい」保坂はそう言ってふたりを安心させた。

１０　姪っ子（前書き）

ここからはしばらく亜佐美の話が続きます。

10　姪っ子

その頃、亜佐美は姪の茜のことで悩んでいた。
昨日はお気に入りのピンクのランドセルを汚して帰ってきた。
白いハイソックスと靴も少し汚れていた。
自分で気に入って使ってるものを汚すような子ではないはずだ。
その茜は今はお風呂に入っている。宿題も終わったと言っていたからお風呂から上がったらおやすみなさいを言いにくるはずだ。
茜が何も言いださないならもう少し様子をみたほうがいいかもしれないと亜佐美は思う。
あまり神経質な保護者は小さな子どものためにはならないだろう。

ちょっと早いけれどとビールを取り出した。
そこにお風呂上りの茜がやってきて牛乳を飲みたいと言ったので、あーちゃんと一緒に乾杯しようとグラスを取り出した。
小さい頃から茜は亜佐美のことをあーちゃんと呼ぶ。
お風呂上りの牛乳はこうやって飲むのよと、仁王立ちになって左手を腰にあて、ビールグラスを一気に飲み干してみせた。
「あーちゃん、それ牛乳じゃないから。もうやめてよね、いい年頃の女がそんな品のないこと！」と茜は彼女の祖母とそっくりの口調を真似て笑わせてくれる。
「でもそんなあーちゃんに合わせてあげる」そう笑って同じポーズで牛乳を一気に飲み干す茜。
「あ～か～ね～～～」と言って小さな身体を抱きしめてすりすりする亜佐美から、
「おやすみ、あーちゃん。私、眠い。もう寝るわ」と逃げようとする茜をさらに抱きしめて、
「私は茜の母であり叔母であり妹であり、そして親友だよね？」と茜に言ってみる。

茜は亜佐美の頭をなでながら「わたくし茜はあーちゃんの姉であり母であり姪であり子供であり、そして親友でしょ？」

「うんうん、よく言えました」と言うとようやく離してもらった茜が「おやすみ、あーちゃん。明日はお弁当なしだね」と言って部屋に戻った。

茜は小学2年生の可愛い可愛いひとりっきりの身内だ。

出戻った姉の子で5年ほど一緒に暮らしているが、亜佐美の両親が事故で亡くなっていろいろなことを姉と一緒に乗り越えたところに今度は姉が倒れた。

くも膜下出血で倒れてから数日で帰らぬ人となったのだ。

茜と引き離されないようにするためにはまた膨大な労力が必要だった。

亜佐美は短大を卒業するまで何も考えて生きてこなかったのだ。

就職活動も真剣にはなれず、一社も内定をもらえなかった。しかも就職に難色をしめしていた両親は両親は家事手伝いをすればいいと喜んだくらいだ。

そんな亜佐美がここ数年、葬儀や相続など急に悲しい出来事に向き合わなければならなかったのだ。

ようやく半年前に茜と落ち着いて暮らせる環境が整ったのに、今度は茜のいじめ問題である。

残りのビールを飲みながら部屋の中を見渡した。

アイランド型のキッチン、それに続くリビング。中庭に面したガラス窓の側には小さな丸いテーブルと2脚の椅子。ソファーには淡い色のファブリックをかけ、足元のラグはふかふかだ。リビング側は吹き抜けのように天井が高くなっている。リビングの床をキッチンより数段低く作り、天井板を取り省いたためリビングだけ開放的な空間になった。

亜佐美はキッチンとリビングの間に配した作業台ともいえる大き目

のダイニングテーブルに座っていた。1年前にはなかった空間だ。
姉を失った直後は何も考えられなかった。やがて明日のことを考えられるようになったとき、居心地のよい空間を作りたいとなじみの工務店に相談して改装したのだ。

姉が倒れたとき茜は小学一年生になったばかりだった。ピンクのランドセルが欲しくて、姉に強請っていたのを昨日のように覚えてる。ようやく買ってもらって入学式には姉と一緒にここから出かけたのだ。
茜の父親は、姉の元旦那は海外勤務と聞いている。連絡もとってない。
祖父母と母親が居ない茜を鍵っ子にはしたくなかった。
亜佐美とてお勤めをしたことがないのだから、パートに出るという選択は無理があると自分でもわかっていた。
亜佐美の父が営んで姉が引き継いだ駅前の不動産屋を廃業し、その場所を貸出した。他にもいくつかの賃貸物件を引き継いだので、今はその管理をしているだけだ。
事務作業をする部屋はキッチンの奥にあった。就職をする必要はないのだが、茜のためにも自分のためにも何かしらやってみたかった。
両親の残した古い家を改装しながら、茜が学校から帰ってくる時間には家に居たい、朝の仕事がよかった。家に居て午前中にできる仕事、そのことばかりを考えていた。

いざ改装が終わってみると思った以上に心地よく、ほとんどその部屋で過ごすことになっていた。
『改装終わりました♪』
庭の写真や空の写真にまじって時々料理の写真も更新しているブログに載せたら、いつも見てくれてるブログ仲間から『おめでとう～～！素敵ですね！！』というメッセージがたくさん届いた。
茜のために時々必要なお弁当も写真を撮ってＵＰした。

亜佐美自身高校生のときから時々自分のお弁当は作っていたけれど、インターネットで見かけるいまどきの子供用のお弁当を見てびっくりだ。

楽しげなお弁当がたくさんある。最近では参考にしながら茜のお弁当も彩りよく作れるようになった。

ひとつわかったことがある。

小さなお弁当はその分だけきっちりとおかずを作ることができない。多めに作ってその一部をお弁当に詰めるということになる。

たとえば卵焼きは3個の卵を割りほぐして作るが、お弁当に入れるのはたったひときれだ。卵1個用のフライパンもあって買ってみたが、1個分で作ってその4等分した一切れを入れるくらいだ。

朝と昼と同じおかずを食べるのは茜が嫌がるし、もちろん亜佐美も自分用にお弁当に詰めたりとっておいてお昼に食べたりするのだが、それよりも何かに活用できないか考えていた。

そして思いついたのが、『お弁当作ります』という貼り紙だ。

個人宅のキッチンということと、自分が作れる量ということで、4～6人分くらいが最適かなと亜佐美は考えた。もとよりこの少ない数で儲けるつもりもお弁当屋として手広くやっていくつもりもない。

作ったものが無駄にならず1ヶ月の食費分くらいになれば充分だ。

茜と自分の分で2人分、ということはお客様は4人がマックスだなと決まった。

早速茜にも話した。そして二人で文面を考えて亜佐美が手書きの貼り紙をしたのだ。

１０　姪っ子（後書き）

漢数字とアラビア数字の使い分けが難しかった。ちょっと読み難いかもしれません。ごめんなさい。

11　伯父

亜佐美の朝は早い。
子供の頃から朝は苦手だが、子供を持ちお弁当とつくるとなるとそうは言っていられない。
６時にはとりかかることにしている。
ざっと顔を洗って紅茶用のお湯を沸かしながら冷蔵庫から材料を取り出すのだ。
前日の夜にはたいだいの下準備を終えている。
亜佐美はそれほど器用ではない。そのうえ起きぬけはぼんやりとしているのでなおさら時間がかかる。
何度か手早くしようと時間を決めてとりかかってみたが、お弁当に詰める頃にはぼろぼろに疲れてしまって味もそうだが美しそうに出来上がらない。
その度、茜に「あーちゃん、今日のお弁当はひどがったよ」と言われているのだ。
時間に余裕をもって自分のペースで作らないとだめだと何度も反省している。
その日の気分の茶葉で熱々のお茶を淹れ、飲みながら作るのが亜佐美流だ。

月曜日はお弁当を４個作った。
７時には完成し、茜を起こして一緒に朝食を摂る。
以前の朝食はコーヒー１杯だけで何も食べなかったが、お弁当作りは結構お腹が空くので食べる習慣がついた。
茜が登校準備をし始めるころにはお弁当は冷めているので、蓋をしてランチボックスに入れたり包んだりと少し慌しくなる。
７時半頃に相次いで登校前や出社前の注文主が訪れる。
今日は週３日予定の５０歳くらいのサラリーマンと今週だけという

期間限定の高校生だ。
サラリーマンの男性は単身赴任中の栄養のバランスを考えていて、しばらく実験的に注文してくれた。
近所の男子高校生は母親が風邪で寝込んだので今週だけ代わりに作ってほしいと昨日電話が入ったのだ。部活をしているのでお弁当だけでは足りないのだが、1週間コンビニ弁当や学食というのも味気ない。同じ町内ということもあるので電話をもらってすぐにその家までお弁当箱を預かりにいった。
茜の小さくてかわいいお弁当と、4個めは隣駅で商売をしている伯父の分だ。
先週のうちに義伯母から電話があって、伯父のところまで来るならお弁当届けてよというものだった。気さくな人で亜佐美にもよく電話をくれる。その日は義伯母は女友達と人気のイタリアンで昼食の約束があるらしい。出かける前は慌しいので亜佐美ちゃんが作ってくれると助かると笑ってお願いされた。

2人がお弁当を取りに来て茜を学校に見送ったあと、ほっと一息つくためにコーヒーを淹れた。
1杯をゆっくり丁寧に飲んでから、リビングの隣にあるハーブコーナーに行って水をやる。
それが終わったら掃除にとりかかる。なるべく手早く、四角い部屋を丸くてもいいからとりあえず掃除してしまうというのが彼女の流儀だ。苦手なものを先に済ませて午後はのんびりしたいというのが心情だ。基本的にぐうたらな亜佐美である。
両親亡き後、部屋が乱雑になってしまうのにそれほど時間はかからなかった。姉に徹底的にしごかれたおかげで今では好きではないもののひととおりは掃除ができるというところまできた。今は茜が居るからお手本にならなくちゃと頑張っているが、茜が居なかったらこの家はどうなっていることか。

掃除を終え、シャワーを浴びて化粧をすればもう午前１１時だった。
そろそろでかけたほうがよさそうだ。
伯父は隣駅の駅前で不動産屋を経営している。亜佐美の父とは１歳違いの兄で、亜佐美と茜にとっては一番近い親戚になる。物件の賃貸契約は全部伯父に任せている。今日はアパートの契約更新がひとつあるので訪れるわけだが、それ以外にも時々会いたくなる陽気な伯父だ。
短大を出てから父の不動産事務所で少しだけ事務などを手伝っていたので一般的な契約書の内容は亜佐美にもわかっていたが、もしも何か不備があったら対応できるとはとうてい思えない。
契約に関しては伯父に任せ、大家としての修繕や管理は亜佐美が対応していた。

「伯父さん、こんにちは。亜佐美です」
来客用の駐車スペースに車を停めて、店のドアを開けながら声をかけるとデスクに座っている伯父が顔を上げた。
「おぉ、久しぶりだな」
「先週会ったじゃないですか」と亜佐美が笑いながら答える。
「あの時はうちのとばかり話してたじゃないか。俺とは全然話してないぞ」と拗ねている。
「今日はおばさんに頼まれてお弁当を持ってきました」
「そっか、そっか。亜佐美の手料理とは嬉しいな」
「おばさんもお料理上手なのに。でもたまには変わった味もいいでしょ？」
「大歓迎だよ」
「お茶淹れようか？」
「あぁ、ちょっと早いけど昼にするかな。でもその前に更新の件、報告しとくよ」
伯父は亜佐美に来客用のソファを勧めながら書類を取り出した。
伯父からひととり説明をうけて、書類と計算書とお金を引き継いで

それらを亜佐美は鞄に仕舞った。

お茶を淹れながら、「あとでそこの銀行に行く間、車停めといていい？」良いのはわかってるが一応伯父に聞いてみる。

「あぁ、いいぞ。銀行だけじゃなくて、いつでも遠慮するな」

「だってお客さん用だからさ。ダメなときは銀行の駐車場い入れるから」

「そんなの気にするな」と伯父はいつも言ってくれる。

亜佐美はお金が入ったらすぐに銀行に入れることにしている。そうしないと使ってしまいそうで怖い。お金の記録がないと確定申告のときに困るのは亜佐美自身だからだ。

パーテーションで仕切ったミーティングコーナーで弁当を食べ始めた伯父の前に座り、とりとめのない話をしていく。

伯父には子供が3人居て長男と次男は別に暮らしており、今は長女と伯父の母親、つまり亜佐美の祖母と同居している。女3人に囲まれて窮屈な毎日だと伯父はいつもこぼしている。祖母と義伯母とはいつも何かしらバトルがあるらしい。

家に祖母と居るのも窮屈らしくて義伯母は伯父の仕事を手伝っていた。

「最近さ、俺が飲み会で遅くなるとあの二人は一緒になって俺を責めるんだぜ。そういうときだけ息ぴったりなんだよ。仲が良いのか悪いのかわかん！」

「伯父さんさ、こんな田舎の飲み会で朝帰りなんかするからじゃないの？」

「おっと、もう聞いてるのか」

従兄妹達とは幼馴染だし伯父の一家とは子供時から頻繁に行き来しているので、伯父一家の情報は随時更新されている。しかも今日は他から新ネタが入っている。亜佐美は伯父を少し困らせることにした。

「スナックKのケーコさんと温泉に行く約束してるんだってね?」
「お〜〜〜、お前何故・・・どうして」と伯父は絶句して、卵焼きを取り落とした。
「何故そんなこと知ってるんだ?」
伯父はありえないくらいうろたえている。
「ケーコ、同級生だよ」
「えっ?同級生?」
「しかも高校のとき3年間同じクラスだったの」
「マジかよ。しかし、同級生には見えないな」
「ケーコは大人びてたからね、昔から」
ふぅ〜と伯父は大きなため息を吐いた。
「あそこの大ママ、ケーコのお母さんなの。親の家業を手伝い始めたんだけど、ちょっと年上に見えるようなお化粧してるのよ」
先日街でばったり景子に会って立ち話をしたばかりだ。わざわざお茶するような付き合いでもないが、会えば気軽に近況報告するくらいの仲だ。
そこで伯父の話がでた。景子はもちろん伯父と温泉に行く気などないが、それを亜佐美に活かせということなんだろう。
食後のお茶を淹れながら、「ケーコ、引っ越したいらしいよ。その時は物件探してあげてね」と伯父に言うと、「おぉ、わかった」と伯父は力なく答えた。

「ところで、お前彼氏居るのか?」と伯父が突然言い出した。
「え?居ないよ。知ってるでしょ?」
「やっぱり居ないか」
「うちの次男坊はどうだ?」
「あははは、やめてよ」
「年下だぞ?流行ってるだろ、そういうの」
「伯父さん、何考えてるんだか。怒るよ〜」

「ま、うちの次男は冗談として、そろそろ結婚考えてみないか？」
「ん～～～」ほんと困る。先ほどのケーコの件の仕返しかもしれない。
「いや、うちのとおばばがそんな話してた」
「嫁と姑でそんな話してるんかいっ」
「亜佐美のところに直接話が行くのも時間の問題だな」
「伯父さん、未婚の母だよ、私」そう言うと伯父はまたため息を吐いた。
「茜は元気そうに見えるけどまだ姉さんの死から立ち直ってないし、しばらくはあの子の生活の場を安定させないと」
「そうだよな。まだ1年経ってない」
「でしょ？」
茜のいじめのことはまだ伯父には話せなかった。
伯父の食べ終えた弁当箱を仕舞ってから、「そうそう、おばさん、欲しいバッグがあるって言ってたよ」と言って店を後にした。

12　亜佐美の日々

伯父の事務所を出てすぐに銀行に行き入金を終えて亜佐美はほっとした。
今年の春先の確定申告では収入がどうなっているのか計算するのにすごくたいへんなめにあったのだ。
それまではお金はすぐに入金することもあるし、買い物をした残りを入金することもあった。
使ったお金も個人消費と経費とがごっちゃになっていた。
父の仕事を手伝っていたのでそのままの方式で書類だけは保管していたのでなんとかなったのだ。
その後おおいに反省して、どうやって数字を管理するのか亜佐美なりに考えてみたのだ。
今は伯父からお金を受け取ったら全部一度銀行に入れるという方法をとっている。

ほっとしたらこのままっすぐ家に帰るのはもったいないと思ったので、車でそのまま郊外の農家に行くことにした。
亜佐美が卒業したのは女子短大だ。勉強が好きでもなく、家から通えることと学校だけは出ておかないとという親の勧めもあって選んだのだが、似たような境遇の学生が多かった。
東京からよりも地方から来た子のほうが多かったし、この土地の同級生ももちろん何人も居た。
その同級生のなかには実家が農業を営んでいる家もあって、今でも亜佐美は同級生の実家に野菜を買いに行くことがある。
農家に行くにはもう少し小さな車のほうがいいかもしれない。古い父の車を運転しながら、車の買い替えのことを伯父に相談すればよかったと思った。

２０分ほどで住宅街も終わり、目指す農家が見えてきた。
農家の手前で路肩に車を止め畑を注意深く見てみる。誰も見当たらないので車に乗り込んで農家の裏側にまわってみた。ハウスのほうにトラックが見えたのでそちらに近づいていった。
今の時間は母屋に行っても誰も居ないことのほうが多い。直接畑やハウスを探すほうが早いのだ。
「こんにちは～。よかった。ハウスのほうで助かったわ」と作業をしていた農家の奥さんに声をかけた。
「亜佐美ちゃん。久しぶりだね」
「また美味しい野菜をわけてもらいにきました」
「今日はインゲンかな。南瓜もあるよ。南瓜はほれ、そこ」
と指差すほうを見ると大きな南瓜が十数個、作業小屋の入り口に並んで置かれてた。
それと胡瓜とトマト、そして茄子も選んで車に積む。
「どう？泰子ちゃんは元気してる？」泰子というのはこの家の娘で亜佐美の同級生だ。
「うんうん、相変わらずだよ。男もいないようだし、職場との往復」と泰子の母が笑って言った。
「亜佐美ちゃんのほうはどうよ？」
「お弁当作ってるのよ。今日は４個」と苦笑しながら答えた。
「いろいろたいへんだったものね、しばらくはのんびりしなよ」と泰子の母は優しく言ってくれる。
お金を払いながら、「あ、そうだ、おばさん。私最近ハーブを植えているんだけど、もう少し種類が欲しいんだ。どこかハーブの苗を売ってるところ知らない？」と聞いてみた。
「ハーブねぇ。うちらはあまりそういうの使わないから・・・」
「そうなの？畑の隅っこに植えてくれると助かるんだけど？」
「あ、そうだ。農協は行ってみた？」
「最近はＪＡって言うんでしょ？」
「うん、そう、ＪＡだったらいろいろあると思う。種とか苗とか、

探してくれるんだよ」
「そっか、じゃ、これからちょこっとＪＡに行ってきますわ」
「うん、そうしなよ」
「じゃ、今日もありがとうございます。泰子ちゃんにたまには電話ほしいって伝えてくださいな」
「はいよ。またお茶でも飲みに来なさい」
泰子の母はいつも3時になると作業を終えて母屋に戻る。お茶の時間にはケーキも作ったするお料理上手で気さくな小母さんだ。
今度はお茶の時間に来ようと亜佐美は思った。

ＪＡでは苗のコーナーに行ってハーブが無いかと探したがあまり気の利いたのはなかったので受付で尋ねてみた。
欲しい苗は取り寄せてくれるが、ＪＡの性質上季節のものしか手配できないということと、最低限の購入ロットが決められているため素人には量が多すぎるのではないかと指摘された。
時間がかかるが小袋に入った種はあるのでそれを植えてみたらどうだと勧め、「小さい袋でしょ。でも全部生えてきたらすごい量になるからね」と対応してくれた女性が笑った。
苗は、送料も居るし割高だけど通販で欲しい量だけ買うほうが賢明と教えられ、お勧めどおりＪＡでは種を3種類ほど買ってあとはインターネットで探すことにした。

家に帰るともう茜が帰宅する時間になっていた。
とりあえず野菜をリビングの窓際にある小さなテーブルの上に置き、キッチンで手を洗う。
料理する前に写真に撮ってホームページの更新に使おう。新鮮で美味しそうな輝きがそのまま写真に撮れないものかと考えていた。

亜佐美がひととおり写真を撮り終える頃に茜が帰ってきた。
「ただいま～」と言って勢いよく自分の部屋に鞄を置きに行く茜の

様子をそっと伺う。
今日はどこも汚れていないようだ。心配しすぎだったかもしれない。
やがて茜が宿題を持ってリビングに戻ってきた。
今日はリビングで宿題をするらしい。亜佐美はちょうどＰＣを立ち上げているところだ。
「手洗ったの？」と聞くと、「うん、ちゃんと洗ったよ」と茜が答える。
「何か飲む？」と聞くとちょっと考えてから茜は「カルピス飲もうかな。あーちゃんも飲む？」と言って冷蔵庫からカルピスウォーターを出した。
二つのグラスを慎重に運んできた茜からカルピスを受け取ると、茜は半分ほど一気に飲んでから宿題を始めたようだ。
茜が今のように自然に他人（ひと）を思いやれるいい子に育ったと亜佐美の胸が少し温かくなった。
ぼんやりしている間にＰＣが立ちあがり、先ほど撮った写真を取り込んでいるとメールが届いているのに気がついた。何通かメールが届いていたが、その中にここの市が発行しているタウン誌からの問い合わせがあった。
亜佐美は3回ほど繰り返しそのメールを読んだ。
メールには亜佐美のホームページを見て、この近くの人だと思っていること、タウン誌のなかで『素敵なわが街紹介コーナー』に亜佐美のホームページと写真を取り上げたいことなどが書かれていた。
特に写真がそのコーナーの趣旨に合うらしい。
確かにプロフィールのところにはだいたいの住所を書いたはずだと亜佐美は慌てて自分のホームページを確認した。

「茜、どうしよう？」と亜佐美は茜に相談してみた。
茜はあっさりと「やりますってお返事しなよ」と言う。
「え～、どうしよう」と迷っている亜佐美に「あーちゃんが有名になったらカッコ良いよ」とか「ホームページやってる叔母さんが居

るって自慢」とか「嫁の貰い手があるかも」とかわけのわからないことを言っている。

散々迷っている亜佐美に最後に茜はこう言った。「あーちゃん。何でもやっておいたほうがよいよ。これが私にだったらどうする？絶対にあーちゃんはやってみろ、何でも経験だと私に言うとおもうよ？」

茜は何時の間にこんな大人びたことを言うようになったんだろうか。亜佐美はほっとため息をついて、「夜まで考えるわ」とだけ言って夕食の支度にとりかかった。

その夜の献立は、甘口のキーマーカレーライスに夏野菜（茄子と南瓜）乗せ、レタスとトマトと胡瓜の小さなサラダ、コンソメスープだった。

テーブルセッティングを終え食べる前にまた写真を撮った。メールの件もあり写真に力が入ったのは言うまでもない。

キーマカレーは多めに作って、少しだけ熱々のジャガイモに混ぜコロッケの準備をした。胡瓜は一口大に気ってピクルスの調味液に漬けた。どれも明日のお弁当用である。

寝る前になってようやく亜佐美は、『お受けしようと思います。つきましては詳細をお知らせください』という内容の返信をした。

送信ボタンを押してもなかなか落ち着かなくて眠れそうになかったが、元来おおらかな性格である。あれこれ考えても無駄だよね。次の連絡がきてから考えればいいかと思い至るとすぐに目を閉じることができた。

翌朝も同じようなスタートだった。

お弁当を作って写真を撮り、茜が出かけるのを見送った。

ブログに載せるお弁当の写真は注文してくれた人に予め許可をとっている。全部を載せるわけでもないが、最初の注文時にそのことは話してあった。

その日は外出の予定がないので、ＴＶをつけたまま前日農家で買ってきた野菜を調理することにする。
南瓜はかなり大きいので、一口大に切ったのはお弁当用、マッシュしたのはスープ用とコロッケ用などを想定して次々と作っていった。
他の野菜はそれほど多くないので数日で使い切ってしまえるだろう。
トマトは数個選んで薄くスライスしてオーブンで軽く焼き、ドライトマトを作っておく。
これはパスタにも他の料理にもかなり重要なアクセントになる。

気がついたらお昼前になっていた。
キッチンをざっと片付けて、紅茶を淹れることにした。
ようやくダイニングテーブルに座った亜佐美は、ＰＣの電源を入れた。
ハーブの苗を探そうと思っている。今日はブログの更新もしたい。
熱い紅茶を飲みながら、自分のブログをチェックするとコメントがいくつか届いていた。
返事を書いたあと、仲良くなっている人たちのブログを訪問してみる。
最近はみんな頑張って更新しているので写真もたくさん観るし、それらは亜佐美にとってよい刺激になっている。学校を卒業してしまって、さらにはお勤めもしていないとなると付き合いが極端に減るからだ。
出かけるのは食材や日用品の買い物か伯父のところ、銀行くらいである。茜が居るから夜は外出しない。そんな亜佐美には自宅に居て交流できるブログ友達は大切なものだった。

13　初めての取材

ハーブの検索をしているところにメールが届いた。
うっかりものの亜佐美はメールチェックを忘れることもあるので、一定時間でメール受信を知らせてくれる設定にしている。
メールは昨日返事を送ったタウン紙からの連絡だった。
『取材予定は・・・』と書いてある一行に亜佐美は素直に興奮した。
「取材ですって！私に取材?!まぁ、どうしましょう！」と心のなかで大きく叫んでみた。
家には誰も居ないんだもの、少々大げさに喜んだっていいよねと亜佐美はひとりごちた。

その週はメールのやりとりをして、次の週に亜佐美の自宅で取材をということになった。
編集者とカメラマンの2人で伺いますとのことだ。
亜佐美はブログ友達からのアドバイスで、こっそりとタウン紙やそのホームページからその担当者の名前を確認しておいた。
亜佐美はそういうことは全然思いつかなかった。ただ、取材させてくださいというメールに喜んでいただけだ。
タウン紙を入手してコラムを記事を確認し、思い切ってタウン紙の担当者にも電話をかけてみた。
担当者ちゃんと存在し、亜佐美の質問にも答えてくれたのでほっとすると同時に、もっとしっかりしないとだめだと自分の甘さを反省した。

いよいよ取材当日になったが、お弁当を作る日で何かと慌しい。茜に朝ごはんを用意し、お弁当を注文者に渡してキッチンを片付けているともう時間が迫っていた。前日に念を入れてお掃除はしたもののキッチンとリビングが気になって仕方が無い。

女性担当者と男性カメラマンの2名が約束の時間に訪ねてきた。
お弁当を渡し終えたらもう一度玄関の花を見ておこうと思っていたが何もできないまま担当者が到着してしまった。
女性のほうが取材をし記事を書くとのことである。
予め仕事場がいいということだったので応接間ではなくリビングに二人を案内した。

「これは素晴らしいですね」とカメラマンが言い、「ほんと良い空間だわ」と編集者が言ってくれた。
女性のほうは少し亜佐美より少し年上で、答え易いように質問してくれる。失敗してはいけないとよく考えながら亜佐美は答えた。
質問が終わってから写真を撮ることになっているようで、編集者と話しているときはカメラマンは静かに座っていた。最後に、窓際の小さなテーブルにノートPCを置いてその前に亜佐美が座っているところや、キッチンでお弁当を作ってると想定したものを撮った。
他に数点撮影して取材が終わって雑談していると、カメラマンの男性が「このリビングは光の入り方が良いですよ。素敵な写真が撮れますから頑張ってくださいね」と言ってくれた。
「ありがとうございます。でもどうやって撮ればいいのかよくわからないんですよ。いつもテキトーで・・・」と亜佐美が言い淀むと、「失敗したりどうしてもわからないことがあれば連絡ください。先ほどの名刺にメールアドレスを載せてますので」と言ってくれた。
「ありがとうございます」と名刺を確認していると、今度は編集者の女性が亜佐美に「もしかして二条さんって、二条由佳さんの妹さん?」と聞いて来た。
「はい、由佳は姉ですが」
「やっぱり。どことなく似てると思ってた。由佳さんとは同級生だったのよ。一度街でお姉さんと一緒の貴方を見かけたことがあったわ」
「そうですか。ごめんなさい、私のほうはちっとも思い出せなくて」

「同級生とはいっても別のグループだったから。でも一緒に遊んだことはなくてもお互いには知ってたわよ。お姉さんにはお気の毒なことだったわね。もしよろしかったらお線香だけでもあげさせてもらえないかしら」と言ってくれたので、カメラマンの男性にはリビングで亜佐美お手製のゼリーを食べてもらうことにして、姉の同級生だけ仏間に案内することにした。

丁寧に手を合わせ焼香したあとに「ほんとにまだ若いのに・・・・・」と誰にともなくつぶやいていた編集者の女性は、名刺に綾瀬（あやせ）　知美（ともみ）とあったはず。

「同級生の集まりで話題に出たものだから気にはなってたの。今回の取材が二条さんというお名前なのでもしかしたらご親戚かもとは思っていたのよ」

「綾瀬さん、ほんとうにどうもありがとうございます。姉も喜ぶと思います」と亜佐美はお礼を言った。

「今はここにお一人で？」と聞かれたので「いえ、姉の子供と二人で暮らしています」と答えると、「また何かあったら連絡させてもらっていいかしら？他の雑誌とか企画でお料理できる人を探しているときがあるの。亜佐美さんをご紹介してもいいなら助かるんだけど」

「はい。私でお役に立つことは少ないと思いますが、何かあればよろしくお願いします」と頭を下げた。

仏間からリビングに戻る途中で、綾瀬が亜佐美に「カメラマンの馬場ちゃんね、連絡くださいってさっき言ってたけど、適当にね」と耳打ちした。意味がわからずに亜佐美がきょとんとしていると「女子だけの暮らしはなにかと気をつけたほうがいいわよ。私からも彼には釘さしておくけど」と綾瀬が言った。

「はぁ」とだけしか亜佐美は答えることができなかった。

タウン紙の二人が帰ってから、亜佐美はぼーっとしてしまってしば

らく何もできなかった。
ダイニングテーブルに突っ伏してお昼ご飯も食べてない。
気がつけばそろそろ茜が帰宅する時間だ。
今日はまっすぐ帰ってきてねと茜に言っていたので、ほんとうにもうすぐ帰ってくるだろう。茜と一緒にホイップクリームをたっぷり乗せたゼリーを食べようと思い立って、生クリームと砂糖を取り出した。
ハンドミキサーで生クリームを泡立てていく。しっかりときめ細かく泡立ったら冷蔵庫に入れておけば食べる直前にクリームを乗っければいいだけだ。
準備だけしておいて洗濯物を取り込むことにした。

洗濯物をたたみ、お弁当を包むハンカチにアイロンを当て、仏間に行って仏壇の線香も片付けた。全部終わってリビングに戻っても茜はまだ帰って来ない。
いつもの時間だけど、今日は少しくらい早いかもしれないと思ってただけだ。まだまだいつもの時間になってないくらいだ、待ってるときは遅く感じるものだと亜佐美は思うことにして、早めに夕飯の支度に取り掛かった。
今夜は茜の好きなニース風サラダとマカロニグラタンにしようとまずジャガイモと卵を茹でた。次にマカロニを茹でる。茹でてる間にホワイトソースを作る。
亜佐美はいつも2〜3個のメニューを平行して作る。時間の配分を考えながら効率よく作らないと、ダラダラと一日中かかってしまうからだ。手際の悪い自分を自覚して、手際よくやれるように挑戦しているのだ。
この日は手際がよかったのか翌日のお弁当の準備まで一気に済ませてしまった。
ふと気がつくと茜が帰ってくる時間がとっくに過ぎていた。なぜか急に不安になった。

突然、携帯電話の着信が響いた。
びくっとしてしまった亜佐美がおそるおそる画面を見ると義伯母からの電話だった。
「亜佐美ちゃん、この前はお弁当ありがとね～」と陽気に話す伯母からは先日伯父に届けた弁当のお礼の電話だった。
「こちらがありがとうございますって言わないといけないんじゃないかな。お得意様なんだし」と亜佐美が言うと「いやいや、うちの人は喜んじゃってあの日はすごく機嫌よかったのよ」
「そうなんだ」と亜佐美が言うと、「何かあったの?」と伯母が問いかけてきた。
「あなた、声が暗いわよ」
「それが・・・、茜がまだ帰ってこないのよ」
「まだ外は明るいじゃん」
「それがね、私が今日はまっすぐ早めに帰ってきてと言っておいたのでもうとっくに帰らないといけないんだけど・・・」
「子供はそういうことがあるわよ。こっちが心配してても全然関係なく遊んでるんだから」
「そうだよね。心配し過ぎはよくないよね?」
「亜佐美ちゃん、何かあるんでしょ」
「それがね・・・」と亜佐美は先日茜がランドセルと靴を汚して帰ってきたことを伯母に話した。
「それ一度だけだったので様子を見てるんだけど何故か気になってね」と亜佐美が言う。
「じゃ、暗くなっても帰らなかったら連絡もらえる?その時は皆で探しましょう」と伯母が言ってくれた。
「伯父さんには先日会ったときに言ってないの。確証があっての話じゃないから」
「うん、わかった。伯父さんにはちゃんと説明しておくから。良いわね、電話頂戴ね」と言って伯母との電話を終えた。

13　初めての取材（後書き）

次回いよいよ亜佐美と保坂が出会います。どういう出会いにしようか悩んでここまで引っ張ってしまいました。ごめんなさい。

14　公園

亜佐美は茜の部屋に入ってみた。
毎日掃除しているので部屋に居たところで何が分かるわけではない。ないが、茜の部屋の真ん中に立ってぐるりと見渡してみる。次にベッドの端に腰掛けてみる。
茜には何か言えない秘密があるようだ。
そういえば、2年生になってから友達の話をあまりしないと思い当たった。
普通はクラスメートの仲の良い子の名前くらい頻繁に言ってもいいんじゃないか？
それから、登下校は誰かと一緒に行っているんだろうかと考える。
誰かが迎えに来ているわけでもない、友達の家で宿題するわけでもなくうちにも連れてこないじゃないか。
じっと座ってられなくて思わず茜の部屋から出てリビングを突っ切って裏木戸を開けた。

開けたところで視界を遮られた。
ぶつかったわけではない。板塀に沿って男性が通りがかっていたのだ。
お互いにあっと声が出て、とっさに身体を止めようとした亜佐美の足元がふらついた。
「大丈夫ですか？」気がつけばその男性は亜佐美が転ばないようにと彼女の肘を掴んでいた。「あ、ごめん。痛かった？」とその男性は亜佐美の肘を2度ばかり擦るようにしてから手を離した。
その声にはっと我に返った亜佐美は男性とすごく近い距離で立って顔を凝視してるのに恥ずかしさを覚えた。
「えっと・・・。大丈夫です」
「じゃ」と言ってそのまま通り過ぎようとするその人の背中に「あ

りがとうございました」とようやく声が出た。
男性は歩きを止めることなく少し振り返りごく軽く会釈をして歩いていってしまった。

それにしても、と男性の整った顔立ちに亜佐美はびっくりしていた。美形だ。めずらしいくらいイケメン！とは思ったものの、目は充血しており目の下に隈ができていたのを見逃さなかった。そして彼からは少しだけ汗の匂いがした。
外に出る気を失くした亜佐美は扉を閉め家の中に戻った。
茜はどこに居るんだろう。

一方、若い女性とぶつかりそうになった保坂は眠くてしようがなかった。プロジェクトをいくつか抱え奔走している合間に本社出張や機能が停止している東北工場の見回りもあった。
今日はちょうどその工場からの帰りである。工場に行っていた3日間はほとんど睡眠はとってなかった。業務だけではなく彼らの生活が重くのしかかっているようで、それが保坂を暗くした。工場からは早めに引き上げても、滞在先のホテルでは確認事項や資料を集める作業があった。
夜遅くにベッドに横になってもなかなか寝付けなくて、睡眠も浅かったように思う。
電車のなかで報告書をかなり終わらせたので、今日は出張先から直帰してしっかりと睡眠をとるつもりだ。

住んでいるマンションが見えてきた。その手前の公園を差し掛かったとき、そういえば先日ピンクのランドセルの女の子がここから出てきたことを思い出した保坂は、公園の入り口をじっと見つめた。
あの黒い板塀の家に入っていった女の子。さっきぶつかりそうになった人は母親だろうか。
保坂がよけられないほど急に扉が開いたことを思い出した。あの女

性は何故あんなに慌てていたんだろう。
決して閉鎖的な公園じゃないのだが、公園の入り口からは中が見えない。歩道沿いに少し進むと全体が見渡せる場所があった。
保坂は公園には入らずに公園の中が見える場所まで歩いてみた。
もう夕暮れも近くそろそろ夕飯の時間になるせいか公園には子供が数人遊んでいるだけだ。
保坂が見たのは膝にピンクのランドセルを乗せてベンチに座っている女の子だった。
ふと女の子が顔を上げゆっくりと保坂のほうを見た。徐々に焦点を合わせ、保坂と目を合わせた。
かなり距離があるのだが、女の子のほうも保坂を思い出したようだ。
しかし、今日の女の子はどこかぼんやりしているようで保坂を睨んではこなかった。

とその時、どこから現れたのか一人の男が女の子に近づいた。
ベンチに座っている女の子はランドセルをきゅっと引き寄せて初老の男を見上げた。
男が何か女の子に話しかけているようだ。女の子が首を横に振っている。
少し様子を見ていたが男は女の子に話しかけるのを止めない。
女の子はじっと前を向いて口を一文字に結んだり、時々男の顔を見上げたりしている。
やがて男が女の子の肩に手をかけた。

「おい、何してるんだ！」
公園をほんの数秒で横切った保坂が男の背後から声をかけた。
保坂としては初老の男より上背もあるし、年齢的にも腕力があるだろうと思ったことは確かだ。交番は駅前まで行かなくてはならないし、公園の付近はもうあまり人通りもなかった。
なんとかするしかないと考える暇もなく思わず初老の男をとがめる

ように声をかけたのだ。
「その女の子に何を話しているんだ?」と今度はゆっくりと言った。
初老の男はゆっくりと振り向き、顔を上下に動かして保坂を上から下までまるで挑発するように見た。
「お前こそ誰だ」初老の男の腹から出た大きな声に、この人は喧嘩慣れしてるかもしれないと警戒しながら「俺のほうが先に聞いたんだ」と返した。

その時、ベンチに座っている女の子が身動ぎした。
保坂も男も目の端で女の子を捕らえてはいるが、お互いに油断することなく目をはずすことはない。
やがて男が口を開こうとしたとき、「あっ、あーちゃんだ」と女の子が小さくつぶやいた。
女性が二人走ってくる。
一人は先ほど黒い板塀の勝手口でぶつかりそうになった女性だ。
「伯父さん」その女性が初老の男性に言った。
そしてその後ろに隠れるように座っている女の子を見た。
「茜」と言ってベンチの後ろにまわり、女の子を背中から抱きしめた。

年嵩の女性が初老の男の隣に来ていた。
保坂を見てから「あの、こちらの方は?」と初老の男に問う。
男は困ったように「えっと・・・」と言って保坂を睨んだ。
説明しようもなく保坂に自分で説明しろと言う事だろう。保坂はほっと肩を下ろしながら、「あのマンションに住んでいる者です。帰宅途中に少女に話しかけてるこちらの男性を見かけたものですから声をかけさせていただきました」と言うと、女性は不思議そうな顔をして「で、ご用は?」と保坂に聞いた。
「いえ、用といいますか、ちょうど声をかけたときにお二人が来られたものですから」どう言っていいものか言い澱んだところに、初

老の男性がクツクツと笑い出した。

「わかったぞ、あんたあれだろ。俺が小さな女の子に声をかけてる不審者だと思ったんだろう?」と保坂に投げた言葉に、とっさに眉間に皺が寄った保坂だが何か言わなければならないと口を開こうとした。

だが、初老の男性を見ると人の良さそうな弓形の目をして笑っている。

「ご親戚の方だったのですね」と保坂が聞くと、「あの子は俺の弟の孫だ。帰りが遅いので探していたんだ」と答えてくれた。

男は隣の女性を「家内だ」と紹介してくれた。「ご主人を、その・・・勘違いしてすみませんでした」と女性に謝った保坂ではあるが、なぜ僕が謝らなくてはいけないのだと思ったことも確かだ。

保坂が彼に謝りたくないのが分かったのだろう。隣で初老の男が更に笑った。

その時、女の子の手を?いで立ち上がらせた若い女性が保坂の前にやってきた。

「先ほどはどうも。そして、いろいろとありがとうございました」と綺麗なお辞儀をして謝った。

「いえ。じゃ、僕はこれで失礼します」若い女性にだけというわけではなく、その場の全員に軽く会釈して立ち去ろうとした保坂の背中に、「お名前だけでも」と声がかけられた。

名前なんかとは思ったものの、ここで言わないと日本では押し問答になるかもしれないととっさに判断した保坂はもう一度家族のほうに向き直った。

「保坂と言います」と名前だけを告げた。

「私どもは二条と言います。今日はほんとうにありがとうございました」と若い方の女性が言った。

「では」ともう一度軽く会釈して今度こそ保坂は公園を後にした。

１４　公園（後書き）

ようやく保坂と亜佐美が出会いました。
これからはもう少し早い展開で話を進めていきますね。

15　コンビニ

茜はあの公園から帰った日、伯父に問い詰められ学校でのことをポツポツと語り出した。
やはり学校にいじめっ子が居るらしい。
ただ、ランドセルや靴が汚れていたことは直接手をだされたわけではなく、いじめっ子が来たので帰り道を変えようときびすを返した時に後ろから来た子にぶつかって転んだということらしい。
派手に転んだのでかえっていじめっ子に見つかって、ひと騒ぎあったとのこと。
いじめっ子の一人はクラスメイトの男の子で、茜を見ると大きな声で茜の嫌がることを言ったりする。掃除当番のときには掃除の邪魔をしたりするらしい。
もうひとりはその男の子と仲のよい女の子で、かならずその男の子が居ないときに茜に声をかけてくる。
あの日は早く帰ろうとする茜を掃除当番だった男の子が掃除を代われと引き止めたのだが、それを振り切って帰ろうとしたところに女の子のほうにばったり会った。
そして茜に酷いことを言ったらしいのだ。
何を言われたのかは茜は言おうとしない。
そんな茜に伯父が「わかった」とひとこと言った。
「今日は亜佐美ちゃんに心配掛けたことはちゃんと謝るのよ」と伯母に言われてこくんと肯いた茜に「わかったら『はい』と声に出して言うんだ」と伯父が言う。　小さな声で「はい」と茜は伯父に答えた。

その夜、亜佐美はお風呂から上った茜の髪を乾かしながら「学校のことは心配しなくていいよ。私も伯父さんたちも気をつけて何か考えるから。

いじめっ子のことは、触ったり叩いたりされたらすぐに言いなさい。」と茜に言ってみる。

茜は顔をしかめたものの静かに肯いた。

「茜を殴ったらこのあーちゃんが殴り返してあげるから」と言うと、「あーちゃんが殴っちゃだめだよ」とクスクス笑う。

「いじめっ子が言うだけなら言わせておきなさい。あまり煩いようだったら、『根も葉もないこと言わないで！誰も信用してないよ？』と言い返してもいいよ？」

「え～～～？そんなこと・・・」とまた茜は俯いてしまった。

「茜が言い返すことによって相手が手を出したら、あーちゃんの思うツボよ！後は私が相手を叩きのめすなり、警察に突き出すなりするからねっ！」と言うと、「それ、この前見たドラマと同じストーリーだよ、あーちゃん」と茜が笑った。

「あ、バレた？」と亜佐美も一緒に笑う。

「よく聞いて、茜。茜はちっとも悪くない。悪いのはいじめっ子のほうだから、何を言われても放っておきなさい。茜はいつも胸張って堂々としているのよ？わかった？」

「うん」と茜が肯いたので、「はい！でしょ？」と亜佐美が訂正した。

ちょっと間があったけどやがて茜は「はいっ！」と返事した。

「は～い。じゃ、そろそろ寝ようか。明日も学校だしね。準備は終わってる？」と亜佐美が言い出すと、「うん、もう終わったよ」が答え、「そういえば今日の男の人、ちょっと変わった人だったね」と言葉を続けた。

「時々見かけるよ、あの人」と茜が言う。「そうなんだ」と亜佐美がそっけない返事をすると、「いつもそこのスーパーの角曲がってうちの前を通ってる」と言った。

「伯父さんが変な人だと間違われちゃったね」

「うんうん、大きいじいじの顔見た？怖かったんだよ～」と二人は顔を見合わせて笑った。

翌日伯父から電話があった。茜の担任に話したほうがいいと言うのだ。
ちょうど次の週に担任の家庭訪問がある。その時に伯父も同席してくれることになった。
亜佐美は担任になんと切り出して良いのかよくわからなかったので、伯父の参加は心強いばかりである。

あの日以来亜佐美は保坂を時々みかけるようになった。
気がつけば会釈するようにしている。保坂のほうも気がつけば会釈を返す。
ほとんどは朝で、茜を見おくる時や、お弁当をとりに来た人に渡すときなど勝手口まで行くときがあるのだ。
通勤路なんだから毎日のように亜佐美の家の前を通るので今までも見かけていたのかもしれない。
ただ保坂が気がつかない場合も多く、亜佐美が無言の挨拶をしている前をすっと素通りしてしまうこともある。
最初は自分だけが気がついたことに恥ずかしさを感じていたけれど、無視されているのではなくほんとうに気がついてない様子になんだか苦笑すら出るこの頃である。
朝が苦手な人なのかもしれないと亜佐美は思うのだった。

そうやって何日か過ぎ、来週には亜佐美のことが掲載されているタウン紙が発行されるという。茜の担任の家庭訪問も終わった。担任の先生は学校での茜といじめっ子の様子を気に掛けてくれることを約束してくれたのでほっと一安心だ。
夏本番が近づき暑い日が多くなってきた。そろそろ茜も夏休みである。
ある夜、ＴＶを見ていた茜がアイスクリームが食べたいと言い出した。

切らしてしまっていて、冷凍庫には全然入って無い。
「あーちゃん、そこのコンビニに買いに行こうよ～」
「え～～、今から行くの？」
「すぐそこじゃん、ねぇ、ねぇ、行こうよ～」
「いったい何が食べたいの」
「えっと、えっと、さっき宣伝でやってたのがいい」
「あ、それなら私も食べたいかも」
「やっぱりあーちゃんも食べたいのね」
「違うよ～、茜が食べたいって言うから、私も仕方なく食べるのよ」
笑いながらそんなやりとりをして、亜佐美は茜と一緒に外に出た。

駅とのちょうど中間くらいにコンビニがある。ほんの数分先だ。
コンビニのお目当てのアイスクリームの冷蔵庫までの間に気になるお菓子の棚があった。
「茜、アイスクリームは最後に買おう。ちょっとここのロールケーキ見ようよ」と亜佐美が誘う。
二人であれこれ見て、茜はシュークリームを亜佐美はロールケーキを籠に入れた。
アイスクリームは2個ずつ選んで4個買うことにする。

レジに行くと保坂が並んでいた。
「あっ」と茜が先に気づき、亜佐美はその声で顔を上げると保坂の横顔が見えた。
保坂は亜佐美たちに気がつく様子は無い。
亜佐美は気がついて欲しいような、でももし気がつかなければこのままでもいいかと声をかけるのをためらっていた。
カウンターに保坂が並べたものを見ると、ビールが2本と頭痛薬の小さなボトル。
あらっと思って保坂の顔をみようとしてもすでに保坂の背中しか見えない。

保坂が会計を済ませ、コンビニの袋を取り上げたところで後ろから「こんばんは」と声をかけてみた。
保坂はその声には気つかずにレジの前から移動しようとしていた。
「こんばんは、今お帰りですか?」ともう少し大きな声で言ってみる。
ゆっくりした動作で横に移動しようとしていた保坂が振り返った。
保坂の目の焦点が合うのが少し遅いように感じたが、それでもゆっくりと保坂は亜佐美を見た。
そして亜佐美の後ろに隠れるしている茜と交互に見てから、「あぁ、こんばんば」と答えた。
アイスクリームが入った籠をレジのカウンターに置き、茜にこれで支払うようにと二千円を渡した亜佐美は、保坂を促して他のお客の邪魔にならないようにレジ横に移動した。
保坂は少し痩せたようである。そして顔色がよくなかった。

「お仕事、今終わったのですか?」と聞くと、「えぇ、」と保坂答えて会話が終了しそうになった。
「もしかして具合が悪いんじゃないですか?」と亜佐美は頑張って聞いてみた。
「いや」とだけ否定の言葉を言ったまま保坂は後を続けない。
どうしよう、声はかけたもののこの沈黙は辛いなと亜佐美は汗っていた。
「じゃ、これで」と保坂が言いかけたときに会計が終わった茜がやってきた。
3人でコンビニを出て、無言のうちに亜佐美の家までは並んで歩くことになった。
「あの」と亜佐美は保坂に話しかけた。その声で亜佐美のほうを見た保坂はどことなく元気がないように感じられた。
「保坂さん、いつもこのくらいの時間に?」
「いや、今日はちょっと早めに帰ってきました」

「お夕飯は済みました?」
「いえ、まだ」
「お昼ご飯は食べました?」
しばらく保坂は答えなかった。
「お昼は何を召し上がりました?」と亜佐美が更に聞くと、びくっと保坂が亜佐美を見た。
もう亜佐美の家の前に来ていた。
「茜、鍵あけてちょうだい」と亜佐美は茜に言ってから、「さて、保坂さん。あまり気分がよろしくないんでしょ?でも、うちで軽く食べていってください。」と保坂を家に誘った。
保坂は最初亜佐美が何を言ったのかわからないようだった。
ようやくその言葉が理解できたのか「いえ、結構です」と断ってマンションの方向に歩き出そうとしたが、亜佐美は保坂の前に回りこんで、「保坂さん、もしかして熱があるんじゃないですか?ふらついてますよ。お顔の色もよくないでし」
「僕は早く帰りたいんですよ」と保坂が言ったが、「冷たいものが飲みたいからビールですか?そして鎮痛剤でも飲んで早く寝ちまえば明日には楽になるとでも?」と亜佐美は食い下がった。保坂はとっさに怖い顔になって亜佐美を睨んでいる。
やがてほぉっと息を吐き出した保坂は、「どうも寝冷えをしたのか昨日の朝から具合がよくなくて、熱っぽくなってきたので早く上ってきたのです」とぽつぽつと話し出した。
「昼はチョコレートをひと欠片とポカリスケットをたっぷり飲みましたよ?」
亜佐美は何も言わずに保坂の顔を見上げていた。
「あなたの言うとおり喉が渇いたのでビールが飲みたくなったのです」と言った保坂の口元がちょっと上って、笑ったようだった。
そこに茜が戻ってきて、「今日はパンプキンスープだったよ。あーちゃんが作ったの」と保坂に声をかけた。

16　パンプキンスープ

帰ってきたときに部屋が暗いのが嫌なので、リビングの電気を点けてコンビニに行っていた。
亜佐美は保坂をリビングのドアから中に案内した。
先に入った茜がダイニングもキッチンも電気を点けたらしく部屋は煌々と明るい。

亜佐美は茜に声をかけた。
「アイスクリームは？」
「もうフリーザーに入れたよ～」
「じゃ、私はスープを温めるので、保坂さんを洗面所に案内してちょうだいな」と茜に言って、冷蔵庫からパンプキンスープを取り出した。
取り出しながら、「茜が今ご案内しますので。保坂さん、手洗ってきてくださいね」と言うと、保坂は口の端をちょっと上げてから亜佐美に会釈をして茜のあとに続いた。
その後ろ姿を見ながら、あれ今の笑ったんだよね？と亜佐美はくすっと笑った。

キッチンに戻ってきた茜に「茜、体温計とってよ」と頼む。
「うんっ」と言って茜がリビング棚に行こうとする背中に「あ、箱ごと持ってきて」と亜佐美は言いなおした。
保坂が戻ってきたのでダイニングテーブルに座ってもらった。
リビングのソファーだと寛ぎすぎて眠気がでるかもしれない。疲れているときはそういうものだと亜佐美は思っていた。もう少しの間、しゃんとして食事をしてもらわないとと考えていた。

座った保坂に体温計を差し出して「まず、お熱から計りましょうか」

と言うと、茜が亜佐美の隣でくすくす笑った。
「あーちゃん、私が風邪引いたときも同じことを言うんだよ」と保坂に話してる。
「じゃ、茜、保坂さんのお手伝いをしてね」と亜佐美は薬箱を覗いた。
「保坂さん、喉は痛いですか?」と聞くと、「少しだけ、です」と保坂は肯いた。
スープはもう少しで沸騰してくるはず。喉が痛いとサラっとしているほうが食べ易いかもしれない。
そう思って、出汁を少し足してよくかき混ぜながら濃度を調節していく。
その合間にお皿を出して、スプーンも出して、亜佐美は手馴れた手順で保坂の前に並べていった。

熱は37度を少し超えたところだった。もしかしたら今夜は熱が上ってしまうかもしれないと亜佐美は考えた。
ぬるま湯のコップを保坂の前に置き、「スープを食べる前にこの漢方薬を飲んでください。これは風邪の初期症状のときに飲む薬なんです。もうちょっと強いほうがいいかもしれないけど、とりあえずこれで汗はでますから」と漢方薬を手渡した。
保坂は大人しく漢方薬を飲み、亜佐美が勧めるままに白湯を飲み干した。

「じゃ、熱いから気をつけて食べて下さい」と白湯のカップと交換でパンプキンスープを保坂の前に置き、亜佐美はキッチンに戻った。
一口スープを口に運んだ保坂は「熱っ」と言って茜に笑われている。
「スープは逃げないからゆっくりと召し上がれ!」といつも亜佐美が言っていることを、今夜は茜が保坂に言っていた。
亜佐美は卵を取り出して手早く割り卵焼きを作っていた。平行して明日のお弁当用にと漬けこんでいた照り焼きの魚を一切れ取り出し

た。時間がないのでフライパンで焼き、途中で蜂蜜とマスタードをかき混ぜたものを魚の上から加えて一品を作った。
スープを食べ終わった保坂お代わりはどうですか？と聞くと、「いただきます」と言うので、スープをもう少し準備する。
今度はスープのお皿と入れ替わりに保坂の前にご飯と卵焼きが置かれた。その向こうによい匂いのする焼き魚と水菜の煮浸し。保坂が魔法のように出てきたそれらに見とれていると、少し遅れてお椀に入ったスープが運ばれた。

「茜は明日の準備はしたの？」と亜佐美が聞くと、「とっくだよ」と茜が自慢そうに答える。
「じゃ、保坂さんには後でお出ししますので、私たちは先にアイスクリームを頂きますね。」と亜佐美が言って、保坂に箸を取るように勧めた。

「いただきます」と言って保坂は食事を始めた。
亜佐美と茜は夕張メロンにアイスクリームを乗っけて食べている。
静かに食べている保坂を亜佐美と茜は時々様子を伺っていた。ちらちらと女二人が盗み見てるのに、保坂のほうは一向に気にする様子も無く無心に食べている。
普段から無口そうではあるけれど、決して変な男性ではないようだし、今は特に熱のせいでぼんやりしているのかもしれないと亜佐美は思った。

お椀に入ったパンプキンスープを一口飲んで、保坂の箸が一度止まった。
亜佐美の顔を見たので目があってしまった。何か亜佐美に問いかけているようでもある。
その意味がわかったので、「ちょっと味を変えてみました」と言って、保坂を見返した。

「これは意外でした。味噌仕立てなのでお椀に入っていたのですね」
「アドリブなんですけど、先ほどスープの味見をしたらイケルかなと思いついてもので」
「味噌と南瓜が合わさるとこういう味になるんですね。でも、この味噌は初めてです」
「白味噌も少し入れたんです」
うんうんと肯いて、保坂は食事を続けた。綺麗にお箸を使う人だなと改めて亜佐美は感心した。

保坂はご飯をおかわりした。食欲があるなら大丈夫だろう。目も気だるそうではあるが先ほどよりはしっかりしている。
デザートのメロンにアイスクリームを添えたものを保坂に出しておいて、「ちょっと失礼しますね」と茜を寝室に連れてきた。
「茜、ちゃんと手を洗うのよ。そしてウガイもしなさい」と茜に言う。
「うん、あの人、風邪ひいてるからでしょ？」
「そうよ、あまり酷くはないけど、風邪が移ると駄目だから」
「あの人、そんなに悪い人じゃなさそうだね」と茜が言うので、「親切な人じゃない。公園で茜を助けようとしてくれるんだから」と亜佐美は言った。
「見ず知らずの他所の子を助けようとしてくれるのってなかなか居ないよ。さ、もう休みなさい。お帰りになってから後片付けするからちょっと遅くなるけど、明日のお弁当はちゃんと作るからね」
「はい。おやすみなさい」その夜の茜は素直だった。

ダイニングに戻ると、保坂はアイスクリームをすっかり食べ終えていた。
「では、保坂さん」と亜佐美は薬の説明をした。
「今夜は汗が出るはずですから、汗が出たらその都度着替えてくださいね。

そして夜中でも朝でもいいから着替えるときにこの漢方薬をもう一包み飲んでください。
それでも熱が上ってしまったら解熱剤を摂ってください」
「いいんですか？これを頂いて」と保坂が遠慮がちに聞いた。
「貰っていただかないほうが気になります」と亜佐美は答えた。

「ほんとうに有難うございました」と保坂が立ち上がったので、亜佐美は冷蔵庫から保坂のコンビニの袋を取り出した。
「ビール、ぬるくなっちゃうといけないので・・・」といいながら保坂に手渡すと、保坂は苦笑しながら受け取った。
外の扉まで見送りに出た亜佐美は思い切って保坂に言ってみた。
「あの、明日は仕事をお休みになるならいいのですが、お仕事に行かれる場合は、朝ちょっと立ち寄っていただけませんか？」
保坂は一瞬考えて、「それはどういう？」と聞き返してきた。
「明日、お仕事に行くくらいお元気になられていたら安心できますので。ここにインターコムがあります。押すだけでいいですから」と扉の外にあるボタンを亜佐美が教えると、少し考えて「わかりました」と保坂は答えた。
「ほんの少しのお時間ですし、遅刻しそうでなければお願いします。もしも熱が上って欠勤するような場合は押しに来ないのはわかってますから」亜佐美は顔から火がでそうだった。私は何を言っているのだろう。

保坂の口の端がまた持ち上がった。「僕も今夜は熱が上りそうな気がします。現に体がほかほかしていますしなんだかぼんやりしていますから、明日は出勤できるかどうかわかりません。でも、治ったら、出勤できるようになったらお知らせさせていただきます」
あまり立ち話もさせたくなくて、「ではお大事にしてください」と亜佐美は保坂を見送った。
「では、また。おやすみなさい」と礼を言って保坂は帰っていった。

17　サンドウィッチ

翌朝、亜佐美はお弁当や茜の朝食を作りながらインターコムが鳴らないか気をつけていたが、結局保坂は立ち寄らなかった。
やっぱりあれから熱が上ったのだろう。
今日一日ゆっくり休めるほうがあの人には良いことかもしれないと思い直して、掃除でもすることにした。
この数日は慌しく、いつもより時間がなくなってお掃除も手抜きがちのこのごろである。
少し埃が気になってきた亜佐美はその日は水回りだけでも念入りに掃除をするつもりになった。
両親が建てた古い家を姉や亜佐美の成長に従って増築や改装を繰り返してきた。
最新式ではないものの充分に小奇麗な風呂場と洗面所そしてトイレを磨きあげながら、先日どれかの雑誌で素敵なバスルームの写真を見たことを思い出した。
いいなぁと思う。思うがこの古い家には似合わないだろうなとも思う。それよりも思い出のたくさん詰まったこの家が良いと亜佐美は思い直した。

掃除の後、洗濯物を干してようやく一段落した。
お昼にはもう少しだけ時間がある。アイスティをグラスに注いでようやくダイニングに座った亜佐美は、そういえばハーブの苗をまだ探しきれてないのを思い出しインターネットで検索を始めた。
いくつか興味のあるハーブを見つけてメモしておく、後で再度考えることにしてそろそろ昼食にしようと立ち上がったときだった。インターコムが鳴った。
モニターを見てびっくりした。保坂が映っている。
「ちょっと待っててくださいね」と言って亜佐美は慌てて扉まで走

っていった。

一方、扉の前で保坂は戸惑っていた。

インターコムを押して挨拶するだけだとばかり思っていたからだ。

何か言い出す前にちょっと待っててと言われたのだが、どうにも手持ち無沙汰だ。

有難いことに時間を空けずに亜佐美が扉を開けたのでほっとした。

「保坂さん」と亜佐美は言ったきり次の言葉が出てこない。

何も話さない間に決まりが悪くなって保坂から口を開いた。

「こんにちは。夕べはお世話になりました、すっかり熱も下がりましたのでこれから出勤します」と一気に言った。

亜佐美は保坂の顔を見ていた。確かに熱はなさそうだ。でもまだ顔色が優れない。

「あれから、お帰りになった後に熱は上らなかったのですか?」と亜佐美が聞くと、「夜中に確かに熱はあがったのですがすごく汗がでまして、頂いた薬を飲んだらまた汗が出たんです。その都度着替えたら朝方にぐっすりと眠ることができました。」亜佐美は肯いて聞いている。「目が覚めたらすっかり今の時間になってました。でも熱が下がって気分も良いので午後からだけでも仕事しようかと思いまして」と保坂が説明すると、「あぁ、よかった」と亜佐美がつぶやいた。

「わざわざ寄ってくださってありがとうございます」と亜佐美は言いながらふと思いついたことがあった。

「保坂さん、ちょっと、ちょっと待っててくださいね」と言うと慌てて扉の中にひっこんだ。

保坂があっという間もなく亜佐美は家のなかに入ってしまった。

いつも慌てているなこの女性(ひと)は、と保坂は思っていた。

ほどなく亜佐美が戻ってきたときには手に紙袋を持っていた。

「保坂さん、これ」と言いながら紙袋を保坂の手に押し付けた。

「サンドウィチです。お昼に食べてください」
「えっ？」と驚いた保坂は「頂くわけには・・・」と言って返そうとしたが、亜佐美はさっと数歩下がってしまって受け取らない。
「もしすぐに食べなければ冷蔵庫に入れておかれると、食べるときにひんやりして美味しいですから」
「いや、こういうことをしていただくわけには」と返そうとするのだが、そんな保坂に亜佐美が言った。「じゃ、こういうことではいかがでしょうか？サンプルです」
「はい？」保坂にはわけがわからない。
「私はお弁当を作る仕事もしています。一人でも多くの方に知っていただこうと商品サンプルを提供するというのは当然のことです」
「はぁ、当然と言われましても」紙袋を持ったまま保坂は困っていた。
亜佐美は勝ち誇ったような顔をして保坂を見て「今日限りのキャンペーンです」とすかさず言った。

亜佐美の得意そうな目をみて保坂はくすっと笑いがこみ上げてきた。
「面白い人だ、あなたは」
亜佐美は保坂にサンドウィッチを持たすのを成功したのがわかった。
「では、遠慮なく頂いていきます」
「貰っていただいてありがとうございます。出勤前にお引止めして申し訳ないです。電車1本行っちゃいましたね」
「今日はあまり仕事しないつもりですから」
「では、ほんと無理しないように。行ってらっしゃいませ」と亜佐美は扉の前で保坂を見送った。

サンドウィッチは茜の要望で作ったものだ。
自分用にもと余分に作ってブログ用に写真を撮るためにキレイに詰めたもので、それほど恥ずかしくないはずだ。
写真を撮った後、冷蔵庫に入れておいたのでこの暑い時期でも大丈

夫だろうと考えた。とっさに保冷在も入れた。
どうせ保坂さんのあの顔色じゃ今朝は食べてなさそうだし、好き嫌いがないといいんだけどとしばらく亜佐美は保坂のことを考えていた。
使い捨てのサンドウィッチ用紙箱を使ったので、普通のお弁当箱のように返しにくることないと気がついたのはその時だった。

亜佐美に見送られた保坂は、炎天下を駅から会社まで歩いていった。
いつもと同じ道のりなのに酷く疲れた気がする。
まだ本調子じゃないんだろうと思う。涼しい会社の中に入ってほっとするが、玄関から自分のデスクに行くまでも軽く疲労感を覚えた。
ＩＤをドアにスライドさせて中に入ると誰も居なかった。鞄を開けて亜佐美にもらったサンドウィッチの袋に気づき冷蔵庫に入れる。
改造するとき、小さな冷蔵庫を部屋に設置したのだ。お昼休み半ばで皆食べに出掛けているのだろう。誰も居なくてよかったと思った。
それにしても面白い子だなぁと椅子に座りながら再び亜佐美のことを思い出していた。
保坂は汗がひくまでそうしていたが、やがて仕事に気持ちを切り替えていった。

デスクの上には伝言が重なって置いてあった。
ひとつひとつ目を通しながら、その横にある報告書にも目を通す。
今週中に処理するもの、来週になってから手をつけていいものなどを仕分けていく。
目を通し終わるころ、スタッフが次々に戻ってきた。
３人からスタートしたスタッフは今は１０人になっている。最初は広いと思っていた部屋も手狭になってきた。
「おぁ、保坂！もう良いのか？」と部屋に最初に入ってきた香川が声をあげた。
「皆居ないとはめずらしいな」と保坂が言うと、「鬼の居ぬ間に皆

で命の洗濯だよ～」と香川が返す。
他のスタッフも次々を保坂のデスクに近寄ってきて、「チーフもう良いんですか？」「顔色まだイマイチですね」と次々に声をかける。薫が「午前中、チープが居ないから仕事きつくてさ。休憩とる暇もなく働いたのよ。」と言うと「それで一斉にランチ突入ですよ」と誰かが引き継いだ。

香川の下に3人、薫の下にも3人ほどスタッフを補充し、それぞれに新規開発の商品を一つずつ任せている。保坂はどちらのリーダーでもありその他にもプランを抱えていた。
その他に多様な雑用を一手に引き受けてくれる事務アシスタントが一人居た。
技術部の倉庫だった部屋を改装する際に、壁は完璧とは言えないが可能なかぎり防音にした。扉はＩＤとパスコードがないと入れない。この部屋の向いは給湯室にしたが、そこからカメラで出入りを記録している。
人数分のデスクと書類棚、ミーティングテーブル、大きめのソファー、ＴＶも設置している。ＴＶはＰＣとも？いであっていろいろ活用している。ソファーは終電を逃してしまったスタッフの仮眠用にもなっているようだ。
大きな工場のなかにぽつりと出来た離れ小島みたいな存在だった。

その日の保坂はやはり集中が続かないようだ。
書類からふと顔を上げるとまだ午後2時。頭の中がすっきりしないなと立ち上がった保坂は喉の渇きを覚えた。そういえば朝家を出る前にスポーツドリンクを飲んだきりだ。
冷蔵庫からコーラを取り出そうとして紙袋に気がついた保坂は、食べないと叱られそうだなと亜佐美を思い出しクスっと笑ってしまった。
普段はデスクで何かを食べることは少ない。保坂は誰も使ってない

のを確認してミーティングテーブルに移動した。
スタッフのデスクを背にして座り、窓の外を見ながら紙袋を開ける。四角い紙の箱が入っていた。開けてみると、箱には４種類のサンドウィッチが隙間なく詰まっていた。保坂が無造作に鞄に入れるなどして扱っていたわりにはキレイな状態でてきたサンドウィッチに一瞬見入ってしまった。
茹で卵のサンドウッチから手に取ってみるとひんやりと冷たい。口に入れると冷たいパンが心地よく感じられた。次々に食べて最後にコーラを飲んで、あまり空腹を感じてはいなかったはずなのに一気に食べてしまったことを保坂は驚いていた。

18　茜のアルバイト

翌日もまだ気だるいながらもなんとか仕事をこなした保坂は、明日の土曜日と続く日曜日は仕事をせずに休もうと思った。
ずっと土曜日か日曜日のどちらかに出勤していた。やはり休息は必要なんだと思う。ゆっくり睡眠をとって完全に風邪を治してしまいたい。
金曜日はかなり頑張って仕事を片付けた。それでも会社を出たのは午後9時だ。
ほんとうにやることが多いのだ。本社のこと工場のこと、それに加えて震災で壊滅状態の東北工場のことがある。４ヶ月ほど経った今もまだ不安定な状態が続いている現地は、処理に時間がかかるものだとは理解していても焦ってしまう自分が居た。
従業員は約３００名ほどの工場だが、他に営業所も何箇所かある。従業員の家族を含めると２０００人近くの安否と生活を考えなければならなかった。一番の難関は代々その土地に根付いている人たちで、先祖代々からの土地から離れることはできないと思っていることだ。
とりあえずは他の安全な工場や営業所に振り分けることはできる。しかし彼らが家族ぐるみで移動するかどうかはなかなか難航していた。
そのことを考える度に保坂はため息をつきたくなった。

電車を降りて駅前の通りを歩く。居酒屋かファミレスでなにか食べて行こうかとも思ったが、なんとなくいつものスーパーを曲がってマンションの方向に進んでしまった。これから先は住宅地になるので飲食店などは無いに等しい。
黒の板塀が見えてきた。電気が点いているようなので今頃は週末の一家団欒をしていることだろう。

自然に脚が止まっていた。ぼんやりとした気分で板塀を眺める。今朝の場面がありありと思い出された。

しばらく板塀の家を眺めていたが、やがて自分の住むマンションに歩きだした。

帰宅した保坂を待っていたのはむっとする部屋だった。

窓を開け、エアコンを点ける。空腹を感じたので冷蔵庫を空けて缶ビールを取り出した。

手に取ると昨日のあの女性が思い出される。背が低いので、やや上を向いて強い目で保坂を睨んでた表情は、そういえばあのランドセルの女の子とよく似ていた。

ビールと解熱剤を一緒に買った保坂を攻めてたよなと思い出すと保坂の口の端がきゅっと持ち上がる。

保坂は手に取ったビールをまた冷蔵庫に戻した。

冷凍ピザを取り出してオーブンに入れ、保坂はシャワーを浴びた。

冷蔵庫のほうは飲み物くらいしか入れてないが、冷凍庫のほうは充実している。

箱から取り出して温めれば食べられるものを常に用意している。

郵便物をチェックしながらピザを食べ終え、最後にウイスキーを一口だけごくりと飲み込んで保坂は寝室に向かった。

翌日、お昼頃目が覚めた保坂は、久しぶりに軽くストレッチをしてシャワーを浴びた。

洗濯物を機械に入れ、部屋をざっと片付ける。メールのチェックをしてその日2杯目のコーヒーを飲んだ。

メールチェックのついでにインターネットで検索もしようかと一瞬思ったが、それを始めてしまうとまた仕事になってしまう。

気分もすっかりよくなったので、外は良いお天気で暑そうだが部屋の中にいると考えることが多くなってしまうので、気分転換に外にでることにした。

日用品とあとは食べるものを何かかってこうと、角のスーパーまで行くことにした。
ジーンズに洗いざらしのシャツを着てのんびり歩いて行くことにする。
黒い板塀の家まで来ると、ピンクのランドセルの女の子が長い箒をもてあまし気味に何かしている。そちらを見ないようにして通り過ぎることもできると思いながらも、保坂は立ち止まらずにはいられなかった。
ピンクのランドセルはしょっていなかったが、確か茜と呼ばれていた女の子はピンクが好きらしい。
ピンクのTシャツにジーンズ、そしてピンクの靴を履いていた。

立ち止まった保坂に気がついた女の子がいぶかしげに保坂を見た。
あっと言って、「おじさん、保坂さん?」と聞いた。
「そうだよ。こんにちは」と保坂が言うと、「誰かと思った。いつもの服じゃないからわかんなかった」と茜が言う。ジーンズ姿の保坂に驚いているらしい。
「あぁ、今日は休みだからな」
「そうなんだ。もう風邪は治ったの?」
「はい、おかげさまで」
「もう熱はさがったってあーちゃんからは聞いてたんだよ」
こんな女の子と会話していることが不思議な気がする保坂だった。
「おかあさんにもお礼言っておいてくれる?」
「ん〜〜っと。はい、わかりました」
歯切れの悪い女の子の返事を疑問に思った。
「あのね・・・」と女の子が保坂に近づいて声を小さくした。
「あーちゃん、私のママじゃないの。でも一緒に居るからママだと思ってる人も多いと思う」
「そうなんだ。それは驚いたな。君たちはよく似てると思ってたのに」

「あーちゃんは叔母さん。ママの妹なのよ」
女の子は大事な秘密の話を打ちあけてますというように保坂に話してくれた。
保坂は少し興味　を持った。叔母さんの家に遊びに来てるわけでもなさそうだけどと思う。
「そっか。ここに皆で住んでるんだね」と保坂が言うと、「ううん。ママ、死んじゃったから。死ぬ前はここでママと私とあーちゃんとで住んでたんだよ」と女の子は眉を寄せて小さくつぶやいた。
「あ、ごめん。悪いこと聞いてしまったね」ほんとうにすまなく思った。少しばかりの好奇心が芽生えてうっかりと言ってしまったのだ。
「ううん、仕方ないよ。ママが死んじゃったことはおじさんは知らなくてあたりまえでしょ？」
「ああ、それでも、ごめんな」
「ほんとにいいから」
「ところで、何をしてるの？」保坂はさりげなく話題を変えることにした。
「えへへ、お掃除してるのよ」
「へぇ～、感心だな。お手伝いするなんて」
「あのね、夏休み、遊園地に行きたいから」
「ふ～～ん」茜に先を促すように見た。
「あーちゃんが、お手伝いをいっぱいしたら連れてってくれるって言うから」
「なるほどね。で、どこの遊園地に行きたいの？」
「ディズニーランドだよ！」
「ほぅ、ディズニーランドか。それはたくさんお手伝いしないとだめだろ？」
「そうなのよ、あーちゃんもそう言った」と顔をしかめて茜が言う。
「パスポートは持ってるの？」
「は？」

「海外に行くにはパスポートってのが居るんだ」
「え?ディズニーランドって外国なの?」茜は目をまん丸にして驚いている。
「でも入り口で買えると思うよ。昨日ちょっと調べたもの」と茜が言うと今度は保坂が考えている。
「一日パスポートってその日は何でも乗れるんだよ」
「あっ、ディズニーランドって東京にもあったんだった」保坂がようやく気がついた。二人は顔を見合わせると肩を震わせて笑い始めた。
だんだん笑いが大きくなったところに、板塀の扉が開いて「茜、茜、お帽子被らないとだめでしょ!」と亜佐美が茜の帽子を手に飛び出してきた。
亜佐美は保坂と茜がお腹を抱えて笑っているのを目にして唖然としていた。

「あーちゃん、おじさんが・・・」
「いや、すまん」と二人とも会話にならなくて笑い続けている。
亜佐美は茜の前髪を手でなでつけて、茜に帽子を被せた。
「外の掃除が長いからと心配で来てみたら。まったく。帽子被らないと日射病になっちゃうよ、茜」茜は笑いすぎて出た涙を手の甲で拭いていた。
「あ、申し訳ありません。僕がつい話しかけてしまって」と保坂が炎天下で茜を気遣わずにいたことを詫びた。
「おじさん、面白すぎ~」と茜が言った。「おじさんじゃなくて、こちらは保坂さんっておっしゃるのよ」と亜佐美が茜に教える。
その二人を見ながら若い母親だとばかり思っていたのにと保坂は思っていた。

「そうだ、茜ちゃん、だっけ?喉が渇いたでしょ」と保坂が言うと、茜は保坂に肯いてそして亜佐美を見た。

「じゃ、茜、手を洗ってジュース飲んでらっしゃい」と亜佐美が言うのを制して、「どうですか？このまま冷たいものを飲みに行きませんか？」と保坂が言った。
「ちょうど駅前のマックでアイスコーヒーが飲みたい気分なんです。熱も下がってすっかりよくなりましたので、是非ご一緒にお願いします」真面目に誘う保坂に茜と亜佐美は顔を見合わせる。
「アイスコーヒーならうちにも」と亜佐美が言い出すと、「それではだめなんです。一昨日もそして昨日のサンドウィッチもご馳走になったままですから、今日は僕に誘わせていただけませんか？」と保坂が言う。
「でも・・・」と躊躇う亜佐美に、「お誘いするといってもマクドナルドで申し訳ないのですが。あ、よかったらミスタードーナッツでもいいですけど」と保坂は畳み掛けるように言った。
茜がくすくす笑ってる。茜は亜佐美の手を軽く引っ張るようにして行きたいことを伝えた。

茜が箒を片付け手を洗いに、亜佐美はバッグを取りに一度家の中に入っていった。保坂は板塀の外で待っている。
それから3人で駅前のマクドナルドにぶらぶらと歩いて行った。

19　笑顔

マクドナルドに向かいながら亜佐美はさきほど二人が一緒に笑っていた光景を思い出していた。
茜の帽子を持って扉を押したとき、一瞬茜が若い男性と話しているのにビックリしたのに加え、男性をよくみるとスーツ姿じゃない保坂だったことにも驚いた。
ジーンズにシャツ姿の保坂は若く見え、何気ないシンプルな服装でもイケメンはどこまでいってもイケメンなんだということがわかった。
そして何より、茜の屈託の無い笑顔は姉が亡くなってから初めて見たものである。
もちろん保坂の笑い声にもどきっとしたが、茜の笑顔に勝るものは何もない。
この二人、何時の間に仲良くなったんだろうと不思議に思った。

土曜日のマクドナルドは混んでいたがなんとか3人座れる席を確保した。
茜はオレンジジュースと結局アイスクリームを買ってもらっていた。
亜佐美と保坂はアイスコーヒー、そして皆で食べようとポテトも買った。
アイスコーヒーを一口啜った亜佐美が「さっきは二人とも何故あんなに大笑いしていたの?」と聞くと、茜が嬉しそうに説明を始めた。
「私がディズニーランドに行きたいって言うと、おじさんがパスポート持ってるか?って聞いたの」
「僕はてっきりロスのディズニーランドに行くのかと思って、海外へ行くにはパスポートが必要だって言ったら、茜ちゃんが一日パスポートは入り口で買えるって・・・」と二人でくすくす笑い始めた。
亜佐美は「一体どこにカリフォルニアのディズニーランドに行く人

が居るんですか」と呆れてしまった。
「しかも、今からお手伝いしたくらいでは本場まで行けませんって」
と言うと二人は再び笑い始めた。

「おじさんは行ったことあるの？」とようやく笑いが収まった茜が聞いた。
「うん、あるよ」と保坂が答える。
「茜ちゃんは初めて行くの？」
「そう、初めて。どきどきしちゃう」
「ディズニーランドっていうのは、とっても広いし乗り物もたくさんある。だから行く前にどれを見たいのか、どれに乗りたいのかよく考えておくほうがいいんだよ」
「へぇ～、そんなにたくさんあるの？」
「そうなんだ。うかうかしてるとあまり見れなかったりする」
「うわっ、どうしよう」
「夜のパレードも見たいんだろ？」
「うん、行ったことのある子がパレード見たって言ってた」
「だろ？だから行く前にうんと調べておきなよ」と二人はすっかり打ち解けて話している。
「まぁ、とりあえず今夜はディズニーランドまでどうやって行くのか、電車を調べようね」と亜佐美が茜に言った。
「うん」と返事する茜に、「はい、でしょ？」と亜佐美が直す。茜は「はいっ」と言い直してオレンジジュースを飲み始めた。

「あ、確か二条さんとおっしゃいましたよね？僕は保坂一也と言います。二駅向こうの工場に勤務しています」と保坂が自己紹介をした。そういえば、まだ名前を知らなかった。
「あ、私も気がつかずにごめんなさい。二条亜佐美と言います。こちらは茜です」
「二条茜、９歳だよん」とピースサインでおちゃらける茜を「茜、

大人にそういう言葉遣いはいけません」と亜佐美が嗜める。
「できればこれからはおじさんと言わずにお兄さんくらいは行ってほしいな」と保坂は茜に頼んだ。
「は～い。保坂のお兄さん」茜は保坂を見てクスクス笑った。
それからしばらく茜のアルバイトの話になった。
一つお手伝いする度にリビングに置いた貯金箱に１００円、亜佐美が入れることになっている。
本当は１０円くらいが相場なんだけど、ディズニーランドはたくさんお小遣いが要るので今回にかぎり奮発して１００円になったそうだ。
今のところ、外の掃除、庭の水遣り、食事の手伝いなどを考えているが、他に茜が思いつけばその都度お掃除の場所を増やして良いらしい。
今時１０円というのはないだろうとは保坂は思ったもののそのことについては何も言わないことにした。
茜と亜佐美の会話で少しずつ茜の夏休み計画が保坂にもわかってきた。

気がつけば外はすっかり夕暮れになっていた。
「あ、いけない」と亜佐美が慌て出した。茜も「あーー」と言っている。
「今日は伯父のところに行くと約束しているんです」
「お時間、間に合いますか？」
「はい、間に合いますけどあまり余裕がなくて・・・」と亜佐美が言うので、「僕はこれから本屋に行くだけですので、どうぞお先に出てください」と保坂が片付けを請け負った。
亜佐美はほんとうに急いでいるらしく、「じゃ、ご馳走様でした」と自分たちの飲んだカップだけ持って立ち上がった。
お礼もそこそこに帰ってきた亜佐美たちは、大急ぎで着替えて亜佐

美の伯父の家に急いだ。
時々夕飯を食べにいくのだが、今日も夕方から呼ばれていたのだ。
予め作っておいたパウンドケーキとクッキーの箱を車の後部座席に置き、ようやく出発してほっとした。なんとか間に合いそうだ。
助手席に座っている茜が亜佐美に、「ディズニーランドにいつ行くの？」と聞いて来た。
「そうだねぇ。いつにしようか。どうせだったら夏休み始まってすぐにしようか？」
「ほんと～～？」
「でも、お手伝いは夏休みが終わるまでずっと続けるって約束できたらだけど？」
「する！する！もちろん終わりまでするよ～」と茜は調子よく言った。
「夜のパレード見るから、ホテルに泊まらなくちゃね」
「え～～？ホテルに？」
「うん、そうだよ。夜のパレード終わったら遅くなるから電車はもう無いと思う」
「うわ～～、凄い！楽しみ！」
「あとでどうやって行くのか、二人で調べてみようね」
「うんうん。調べようね」
「もしかしたら車で行ったほうが楽かもしれないし」
「でも車だとあーちゃんが疲れてしまう」
「そうなんだけど、電車だと荷物があるからたいへんじゃない？」
「あ、そうか。私も手伝うよ」
「ありがとね。いろいろ考えてみようね」
茜はそれからはディズニーランドのことを考えているようだった。
いじめっ子の居る学校で茜は頑張っている。この夏休みは子供らしく発散させてやりたかった。思いっきり楽しい旅行にしたいと静かになった車内で亜佐美は思っていた。

伯父の家に到着するといつものように賑やかな歓迎を受けた。
祖母と伯母が一緒にキッチンで料理をし、亜佐美と従兄妹の瑠璃は伯父にビールを持っていったり食卓の準備をした。
伯父は茜と犬を相手にビールで晩酌だ。
茜は伯父に夏休みの計画を話しているらしい。楽しげな茜の笑い声が聞こえて、祖母と伯母が手を止めた。
「今日の茜は上機嫌だね」と祖母がつぶやいてまた料理に戻った。
「今日は楽しいことがあったのよ、茜」と亜佐美が言うと「へぇ、なんだい？」と祖母が聞き返したが、皆に一度ですませたいからと午後のお茶のことは後回しにした。

「なんだか量多くない？」どんどん出来上がるおかずを見て、亜佐美は不思議に思った。
「あとで、慎(しん)や昌(まさ)も来るって言ってたからね」と伯母が答えた。
伯父の長男の慎吾(しんご)と次男の昌紀(まさのり)は家をでて暮らしているが、こういう食事には時々顔を出してくれる。
「遅くなるらしいから先に始めるけどね」と伯母が嬉しそうに言った。
二人が帰ってくるときは祖母も伯母も特別に張り切るようだ。

さあ、出来たわよという祖母の声で、皆がダイニングに集まった。
「あ、これ忘れないうちに。クッキーとキャラメル味のパウンドケーキです」とデザートを伯母に渡した。
「亜佐美ちゃんのケーキは美味しいから、ありがたいわ」と伯母が言ってくれる。
「瑠璃もちょっとはお料理しなさいよ」と祖母に従兄妹が言われている。
瑠璃は「ふん、上手な人が周りにたくさん居るんだから、私はいいの」と、とんだとばっちりがきたもんだと言いたげに亜佐美を見た。
でも、目は笑っている。

可愛い顔をしている割には気性はさっぱりしてて、亜佐美はこの従兄妹が大好きだ。
「そうだ、先日言ってたタウン紙に来週出るのよ～。みなさん見てね！」取材を受けたときに伯母や伯父にもアドバイスをもらっていたので、掲載日を知らせておくべきだと思ったのだ。
「写真も撮ったんでしょ？」
「家とか？」
「顔写真は？」
一斉に話しかけられてそれに一つずつ答えていく亜佐美。
「気をつけるんだぞ」と伯父が言った。
「あ、そっか。家や顔写真が載るなら気をつけたほうがいいかも」と瑠璃も言う。
それもそうだと亜佐美は思う。
「何かあったらすぐに電話しますから」
「ほんと、そうしてちょうだいね。携帯電話はいつも側に置いておくのよ」
「そうだ、駅前の交番にもちょっと言っておくか」
「伯父さん、それはあんまりじゃない？」
「いや、あそこの新米警官の親を知ってるんだよ。何気なく頼んでおくよ」と伯父は一人で頷いている。
瑠璃が亜佐美に「諦めたほうがいいよ。超過保護なんだから」と耳打ちした。

祖母が茜に「これも食べてご覧よ」とおかずを取り分けてくれていた。
「おいしいね、貴子さん」と茜がにっこり笑ってる。
祖母は亜佐美にも茜にも頑として『貴子さん』と名前で呼ばせている。おばあさんと言われるのはどうにも気にいらないらしい。
そういう性格のせいか、家の中でもはっきり言うので伯母となにかと揉めるらしい。

それでも一緒にキッチンに立ち毎回美味しい手料理を振舞ってくれる姿を見ると、伯父が言うほど仲が悪いわけではなさそうだ。
「今日は茜は大人しいな」と伯父が言うと、「私、食べてるんもん」と茜が言う。
そのやり取りに皆で笑った夜だった。

20　団欒

茜が食べ終わったようなので、亜佐美は「夏休みにふたりでディズニーランドに行ってこようかと思ってるの」と皆に計画を話した。
「あら茜、それは楽しみだわね」
「何に乗りたいの？」
「パレードは観るの？」と茜に質問攻撃だ。
茜はそのためにアルバイトを始めたということを自慢げに話し始めた。
しばらくは茜が計画を話しているだろう。亜佐美は今のうちに食事を食べてしまおうと思った。
瑠璃は何度も行った事があるらしく、茜にどのアトラクションに並ぶべきかいろいろ教えている。
「どのホテルに泊まればいいのかしら」と亜佐美が瑠璃に聞くと、
「もちろんディズニーランドホテルに決まってるじゃん」とすかさず答えが飛んできた。
「電車で行こうか車にしようか迷っているのよ」と亜佐美が言うと、
「電車で行きなさい」と伯父が言った。
車で行かれたら心配で落ち着かないというのだ。確かに心配もわかる。亜佐美の両親は車の事故で亡くなったからだ。きっと伯父だけでなく祖母も同じ気持ちだろう。
「ん、電車にします」と亜佐美が言うと、「今は荷物は宅急便で送っておけばいいから」と瑠璃が教えてくれた。
「あぁ、そうか。宅急便ね、それなら手ぶらでいけるね。じゃ、電車で楽々コースにします」と言うと、伯父が笑っていた。
食事も終わったので、瑠璃はＴＤＬの本を茜に見せるという。
「あとでいいからホテルの情報をメールで送ってくれる？」とお願いすると「任せて！」と言って茜と一緒に本を取りに言った。

片づけを手伝いながら、お茶の準備をする。お腹が一杯なのだがお茶と亜佐美の焼いたクッキーを出していると、二条家の長男慎吾が帰ってきた。
伯母は慎吾に夕飯を出している。亜佐美はリビングで祖母と伯父にハーブティを出し、その近くで瑠璃と茜がディズニーの本を見ている。
祖母はおしゃべりに夢中な茜を見ながら微笑んでいた。
「ディズニーランドに行くのをそれはそれは楽しみにしてるの」と亜佐美は祖母の腕に手をかけながら言った。
「そりゃ、子供は外で遊ばないとだめだよ？しっかり遊ぶ子はまっすぐに育つよ」
「貴子さんも一緒にどう？」
「まだ死にたくないよ。瑠璃は何度も行ってその度いろいろ話してくれるのよ。年寄りには拷問だわ」
「この時期暑いから並んでる途中で倒れないようにしないとね」と亜佐美が言って笑った。

次男の昌紀も帰ってきた。次々に食事の世話で伯母が忙しそうなので亜佐美も少し手伝った。茜とＴＤＬに行くことを話すと二人とも心配していろいろ情報をくれる。
このままだと茜と亜佐美は何もしなくても旅行の手配は全部終わってしまいそうだ。
「ちょっと、待って」と亜佐美は二人に言った。
「あのね、今回のＴＤＬ行きは茜と一緒に電車の切符を買ったり、ホテルの予約とかしてみたいの」
「なるほど」と慎吾が言った。
「もうあの子も2年生なんだからそろそろ電車の乗り方とか教えたいのよ。
学校ではお勉強を教わるけど、家庭ではそのほかのことを教えたいわ」と亜佐美が言う。

「それもそうだよな」と昌紀も言う。
「それに、女の子はこれから食事のマナーとかホテルでの過ごし方とかきちんと躾けたいの」
「それは確かに必要だわね」と伯母も口添えしてくれる。
「これからインターネットで検索したり、予約したり、実際に実行していくことが学習だと思うのね」
「わかったよ。どうしてもわからないとか、予約取れないとかのときは連絡してよ」と慎吾も昌紀もそう言って亜佐美に賛成してくれたのでほっとした。
「それにしても、いきなりお母さんぽいこと言うようになったなぁ」と慎吾が笑う。
「だって、お母さん役なんだもの」と亜佐美は大げさに目をまわしてみせた。

伯父が息子たちに、「そろそろ一杯飲まないか」と誘ってウイスキーを取り出した。
「えー。飲んだら帰れなくなるよ」と昌紀が言っている。
「泊まっていけばいいだろう」と伯父が言っているのが聞こえた。
亜佐美はダイニングの片づけを手伝ったあと、水割りの準備をした。

茜は瑠璃と祖母にＴＤＬに着ていく服のことで注意を受けていた。
帽子と日焼け止めを忘れずに持っていくことを約束させられていた。
亜佐美が忘れっぽいので茜が荷物の再確認をすることも言われていて苦笑せざるを得ない。
ＴＤＬに行くまでにはまた来るだろうし、その時までに決まったことだけでも報告することを約束させられて亜佐美と茜は帰宅することができた。

今日の茜はよくおしゃべりをしたので疲れたのだろう。車に乗るとあっという間に眠ってしまった。亜佐美は伯父の家でのやりとりを

思い出しながら、そういえば車の買い替えの相談をしようと思って結局していないことを思い出した。

翌日、朝食を終え亜佐美が植木に水をやり茜はリビングで宿題を始めたころだった。
瑠璃から電話があった。
「亜佐美ちゃん、お昼頃何してる？」
「ん～、何も予定はないけど？茜とＴＤＬの下調べをするくらいかな」
「あのね、お兄ちゃんたちと大きな本屋に行こうって話してるの。亜佐美ちゃん家の近くにあるでしょ？」
「うんうん、あの本屋ね」
「亜佐美ちゃんたちの都合がよければ、お昼ご飯一緒にどうかなって思うんだけど」
「え？慎吾さん達も一緒？」
「うん、慎兄と昌兄が奢ってくれるって言うから」
「え～？私たちも良いの？」
「もちろんでしょ（笑）慎兄と昌兄が一緒にってのはめずらしいから皆でどうかなって思って。夕方には二人とも帰っちゃうし」
「うん、ありがとう。喜んでご馳走になります」
「あははは、亜佐美ちゃんを誘い出すのは簡単だね（笑）じゃ、お昼前にお家にお邪魔するわ」
「はーい。待ってます」
そんなやりとりがあって、従兄妹達三人が亜佐美の家に来ることになった。
「茜、聞こえてたでしょ？瑠璃ちゃんとお兄ちゃんたちが来るって。一緒にお昼食べに連れてってくれるらしいの」
「うん、聞こえてたよ。じゃ、私、宿題終わらせちゃうね」
茜も嬉しそうだ。亜佐美は瑠璃の好きなレモネードを作っておこう

とキッチンに移動した。

１１時少し前に従兄妹達三人が到着した。慎吾と昌紀は夕べ伯父さんと遅くまで飲んで今朝は少々二日酔いらしい。

ちょうどよかったと亜佐美はお手製のレモネードを振舞った。

「改装したとは聞いていたけど、なかなか居心地良いね、このリビング」と三人ともキッチンやダイニングを勝手に行き来した後、「叔父さんたちにお線香あげたいわ」と瑠璃が言った。

三人には「仏間は変わってないからどうぞ、どうぞ」と勧めておいて、茜と亜佐美は出かける準備をした。子供の頃から行き来のある家である。案内などしなくても迷うことなく従兄妹達は仏間に入っていった。

まず本屋に行ってその後で昼食をとることにしようと慎吾が言い、五人はぞろぞろと商店街を歩いて本屋に行った。

本屋からは出ないように言われて、瑠璃と茜はＴＤＬのコーナーに行き、慎吾と昌紀もそれぞれの興味のある専門誌のほうに行った。

亜佐美は久しぶりに新刊書や文庫のコーナーをゆっくり見てまわった。興味をひいたタイトルの推理小説を2冊手にとって生活関連のコーナーに行くと、可愛いお弁当の本がたくさん目に付いた。

サブタイトルに簡単にできるとか１５分でできるとか書かれてあるが、とうてい簡単にはできそうにないような写真である。料理の専門誌もたくさんあったので、パラパラとめくってみるとかなり高級そうなレストランのレシピのようで写真もとても素敵だった。

ため息がでそうになっているところに茜が亜佐美を探してやってきた。

慎吾たちにＴＤＬの攻略本を一冊買ってもらったようだ。

亜佐美も手に持った推理小説の会計をしにレジを探していると、従兄妹たちがレジに並んでいた。

「ちょうどよかったわね」と亜佐美が一番最後に並んで、この後は

中華料理はどうだということになった。
茜と二人だと種類を頼めないので、この日のように大勢の時にはチャンスかもと亜佐美は二つ返事で同意した。

子供の頃から家族で行きつけている中華料理店に行くことになった。
従兄妹達もここはよく来ていたはずだ。
「あらあら、皆さんお揃いで」と店の奥からオーナーが出てきてテーブルまで案内してくれた。オーナー自らナプキンを広げたりお茶を注いぎながら今日のお薦めを説明してくれる。
みんなの好物も記憶しているらしく、それらを取り混ぜながら如才なく新しいメニューも加えていく。ほぼオーナーの言いなりでメニューは決まってしまった。
「今日はここにして良かったな」と昌紀が慎吾と話している。
やがて料理が運ばれてきたが、その都度慎吾と昌紀がお皿に取り分けてくれるので亜佐美たち女性軍は食べるだけだ。
お腹が一杯になったところにデザートが出てきた。後で考えようということになっていてまだ注文してなかったはずだ。
顔を見合わせているとオーナーが出てきて「これは店からのサービスです」と言ってみんなにデザートと食べるように促す。茜の好きなマンゴプリンだった。
「お腹一杯のうえにまた食べると幸せを感じますよ。さ、食べて、食べて」とオーナーの巧みな誘導で全部食べてしまった。
確かに幸せな午後である。亜佐美たちはまたぶらぶらと家まで歩いて帰った。

従兄妹たち三人を送り出すと一気に静かになった。茜は買ってもらったばかりのＴＤＬの本を広げてはいたが眠そうに目をこすり出した。
「茜、今日はお昼寝しようか?」とベッドに連れて行き、亜佐美も自室で少し横になることにした。

数日後にタウン紙が発行される。亜佐美は少しずつ忙しくなっていくのであるが、生活のリズムがすっかり変わってしまうことをこのときはまだ知らずにいた。

20　団欒（後書き）

いよいよ次章から保坂が絡んできます。茜ちゃんもイイシゴトしますから応援してくださいね。

21　夏休み1

例のタウン紙に掲載されてから亜佐美は少し忙しくなっていた。
発売日はさすがに落ち着かず、恐る恐るタウン紙を広げてみると明るい表情で写っている自分に少しほっとした。背景の庭は程よくぼかしてあり、緑の割合がナチュラルなイメージとぴったり合っていた。亜佐美の職業はブロガーとなっていた。編集者の綾瀬さんと話し合って決めたものだ。
ご近所さんや友達から「見たわよ～」という連絡が入る。その都度、最近どうしてるから始まってブログのこと、同級生の消息などを話し込むことになる。
街で知り合いにばったりと遭遇したときもだいたい同じだ。
お互いの近況を報告して、共通の知り合いのこともアップデートする。今度一度飲みに行こうよとか合コンに誘うねとか言ってくれるのは有難いけど、夜に外出することはとうてい考えられない。
ブログでのコメントも増えた。お返事も律儀に返さなくてはならない。義務とは思ったことはなかったが、丁寧にと心がけていた。

茜はというと、終業式の翌日にＴＤＬに行くことが待ち遠しくて待ち遠しくてという様子である。
その前に成績表を見て決定するよとは言ってあるが、すでにホテルも一日パスポートも予約済みとあれば成績はどうであれ行くのは本決まりだ。

あれから保坂を何度か見かけることがあった。
朝、茜を見送るときに出勤する姿を見つけて、茜は「保坂のお兄さ～ん」とランドセルを揺らして走っていく。　途中まで同じ方向なので一緒に並んで歩くようだ。
亜佐美はいつも会釈だけしてスーパーの角を曲がる二人を見送って

いた。
夜は見かけないのでいつも遅く帰ってくるのだろうか。ちゃんと食べてるのかしらとか、睡眠はとってるのかしらと心配になるのだが、途中でいやいやそれは私の考えることじゃないと頭の中から追い出すようにしている。

お弁当のほうは相変わらず3個か4個の注文があるが、夏休みになるとそれも休止になる。
亜佐美たちがＴＤＬへ行くのでお休みが欲しいというと、学生は夏休み、会社員はお盆休みになるので9月に再開で良いということになったのだ。思いがけず亜佐美も夏休みを貰ったようで嬉しかった。ただ、タウン紙を見たという女子大生たちから、デートの時のお弁当をいくつか頼まれた。
一回限りのことなのでそう負担にはならない。スケジュールを確認して、亜佐美は引き受けることにした。
ブログを見たという女子高生からもお菓子を作ってみたいというメールが届いた。
両親は共働きなので母親からお料理を教わるチャンスが無いらしい。以前亜佐美の作ったクッキーやパウンドケーキでいいから教えてもらえないかということだった。

他にも2~3お料理に関する問い合わせが届いていた。
亜佐美がやりたいなと思ったのは、デザイン会社からのものだった。近郊に何軒かあるスーパーのチラシに挿入する料理写真だ。
毎月カラーのチラシを作るのだが、料理のイメージ写真が少し古いタイプのものなので今風の料理写真にしたいと言っている。撮影のほうはデザイン会社のカメラマンが来て撮ってくれるとのこと。先日のタウン紙の編集者の人のご推薦なので前向きに考えて欲しいと言われた。

もうひとつは買い物に行ったら直接打診されたもので、ＪＡの仕事だ。

顔見知りになっているカウンターに座る女性が意気込んで亜佐美に説明した。毎月発行している会報誌に野菜料理のレシピを掲載しているのだが、その料理完成イメージ写真というのをお願いできないかというのである。

事前にレシピを送るので、それを元に亜佐美が作り写真を撮ってほしいと言うものだ。

今は職員がイラストを描いたり、イラストが描けないときはレシピだけなので味気がないというのである。どれも職員が担当していてよいアイデアがないということ、イメージチェンジを計る予定だそうだ。

会報誌はモノクロ印刷だが、ホームページのほうにはちゃんとカラーで載るらしい。

「うちもウエッブってのがあるんですよ」と女性がニッコリ微笑んだ。

来るときは一気に来るものだと感心していた。

打診されたものを考えてお返事を出し、ミーティングもしてスケジュールや諸条件を詰めていった。

デザイン会社からのスーパーチラシの仕事に関しては、紹介者である綾瀬さんに連絡をとった。「プロを使うと高いから、マシな素人にしたというのもあるんじゃない？」と言うのでなんとなく納得してしまった。

「それに小さなデザイン会社だからスタッフが少なくてお料理までしてられないんだと思うよ」と笑っていた。時間の都合がつけば引き受けてあげてくれると助かるわと言っている。

プロの人と一度仕事をするのは良いことかもしれないと亜佐美は考えていた。

そして綾瀬さんは「そろそろ亜佐美さんも名刺作っておくといいわ

よ」とアドバイスしてくれた。

そんな風に普段より亜佐美が忙しくしている間に、茜の終業式の日がきた。

泊まるホテルへ荷物を発送した。電車の切符は数日前に茜と一緒に行って買った。東京までの特急に関しては指定席である。

そして茜の成績表はたいしたものだった。父兄面談で成績は事前に先生から聞いたので知っていたが、本人を褒めることが大事なので、成績表を出した茜を思いっきり褒めて一緒に仏壇に見せに行った。

「さあ、これで心置きなくディズニーランドだね！」と亜佐美が言うと、

「あーちゃん、デジカメのバッテリーは充電した？」と茜が確かめるように亜佐美に聞いた。

「あ。。。今夜充電しておくわ」

「今夜じゃなくて今やったほうがいいんじゃない？」

「はい、そうします」

「それから、携帯電話の充電器はどうしたの？」

「携帯は今夜充電しなくちゃいけないでしょ？」

「じゃ、今夜充電したら明日の朝、忘れないようにバッグに入れてね」

「はい」

「じゃ、早速デジカメの充電しておこうか？あーちゃん」

「茜さ、急にどうしたの？」と亜佐美が言うと、「瑠璃ちゃんたちがそう言えって言った」

「そっか、どうりで」とため息が出た亜佐美だった。

翌日は朝早く起きた。パンとミルクの食事を終え、戸締りを確かめた。

先日、室内の電気に伯父がタイマーを取り付けてくれた。門燈は以前からタイマーで時間がきたら点くようになっているが、それだけ

では無用心だからとリビングなども暗くなれば電気が点くようにしてくれたのだ。

時間を確かめて家を出る。荷物は送ったのでバッグ1つで身軽なものだ。茜はピンク色のポシェットにハンカチとティッシュ、そして皆から貰ったお小遣いを入れ首からたすきにかけている。
その中には昨夜二人でつくった連絡先のメモも入っている。茜には携帯電話を持たしていないので、もし迷子になった場合の連絡方法を一緒に考え、ついでに泊まるホテルの名前を暗記させた。
予定通り10分前にホームに到着した。改札で茜が「3号車が止まるのはどのあたりですか？」と駅員に聞いていたので迷わずに停車位置に来ることができた。
窓際に茜を座らせて、亜佐美のバッグに入れておいたTDLの攻略本を出す。今日行くべき乗り物を確認しておいたほうがよいと思った。

発車間際に同じ列の通路を挟んだ席に男性が座った。
茜が身体を起こして手を振っている。
あれっと思って横を見ると、保坂が座っていた。
「いったい・・・これは」と亜佐美が慌てていると、「東京に出張でして」と保坂が言った。
「おはよう」と茜が嬉しそうに保坂に挨拶した。
「おはようございます、茜ちゃん、そして二条さんも」
「お、おはようございます」
どうもうろたえているのは亜佐美だけのようだ。なぜ茜は驚かないのだろう。

「茜、知ってたの？」
「うん、ほっちゃんが東京へ行くことは知っていたよ」
「え～～～？ほっちゃんって・・・」

保坂が口に手を当てて下を向いていた。
「もしかして保坂さんをそんな風に呼んでるの？」
「だって、保坂さんって舌噛みそうなんだもの」
「何時の間に・・・」
「それよりもあーちゃん、電車の中だから大きいな声は恥ずかしいよ」と茜が言った。
「スミマセン」亜佐美は冷や汗がでるばかりである。

「ディズニーランドに行くことは前から知っていました。数日前に出張が決まったので、朝早い電車だと特急はこれしかないですから」と保坂が言っている。
「びっくりでしょ？同じ日に同じ電車に乗るなんて」と茜がニコニコしながら言った。
「3号車だとは茜ちゃんから聞いていたのですが、隣席になったのは偶然です」
二人の会話が亜佐美の頭の中を通り抜けていった。ただただ驚くばかりである。
「そうだ、亜佐美さん」
「はい？」
「私は2～3日東京に居ます。何事もないとは思いますが、もしも何かあったら対応できますので連絡先を交換しておきませんか？」と保坂が言った。
「いえ、そんなこと。とんでもないです」としどろもどろになりながら亜佐美が答えると、「もしもの場合に備えてです。何事もなければいいんですから」
「いえ、ほんとうに・・・」
「携帯電話を出してください」
「は？」私断ったんだけど、保坂さんって押しの強い人だったんだと亜佐美がびっくしている隙に、茜が亜佐美の携帯電話を保坂に渡した。

「じゃ、ちょっと失礼します」そう言って保坂は赤外線でお互いの電話を登録していた。
すぐに操作は終わって、亜佐美に電話が返される。
「保坂一也で登録させていただきました。テストメールも送りましたので、あとで確認しておいてください」
見れば携帯電話にメール着信のランプが点滅していた。

22　夏休み2

それっきり保坂は書類を出して仕事をし始めた。
電車のなかで器用な人だなと亜佐美は保坂の横顔をしばらく眺めていた。

茜が亜佐美が手にしているＴＤＬの本を取り上げたので、午後にどのアトラクションに行くのか二人で確認をすることにした。
すでに行く順番をリストにしている。電車の中なので声は出さずに指先だけでリストを指し頷きあって確認する。亜佐美もＴＤＬが楽しみになってきた。今日と明日の2日間は茜に精一杯茜に付き合おうと思う。
あとはシートに背中を預けて目を瞑った。眠るわけじゃないが目を閉じるだけでリラックス効果がある。亜佐美はしばらくそうしていた。

先ほどまで亜佐美と茜は肩をくっつけるようにして仲良くしていたと思ったら、今は目を瞑って静かにしている。亜佐美の瞼がわずかにピクピク動いているのを見て、眠ったわけじゃないと保坂は思っていた。
書類を確認していてふと気がついたら通路を隔てた隣のお嬢さん方は静かになっていたのだ。
亜佐美とはあまり話したことがなかった。
ぶつかりそうになったときや公園でのことは会話とは言えず、話す時間があった夜には保坂は熱で朦朧としていた。偶然と思い付きが重なってマックに誘ったが、ＴＤＬの計画を聞いただけでたいした話もしていない。
そうだ、お互いに名前を名乗ったなと思い出して笑いがでそうになった。

不思議な人だと思う。亜佐美という女性はあまり近づいてこない。会話も最小限だ。保坂にあれこれ尋ねることはないし、自分のことも話さない。

用心深いのかと思うとそうでもなくて、意外に抜けているところもある。

亜佐美がほんとうに笑うときは実に無防備だ。彼女が他にどんな風に笑うのか、もっと見てみたいと思った。

そんなことを思っていると亜佐美の肩越しに茜と目が合った。なんとなく居心地が悪くなったところでちょうど車内アナウンスがあり、もうすぐ東京に到着するという。

亜佐美が目をぱっちりと開けた。茜を確認してから彼女はゆっくりと振り向いて保坂を見た。

「そうだ、二条さん」と保坂はとっさに思いついたように亜佐美に話しかけた。

「今夜、確認のメールをしてもらっていいですか？」

「はい？」

「何事もないとは思いますが、先ほど送ったメールに返信してもらえたら安心です」

「返信ですか」と亜佐美はまだ考えている。

「テストメールですよ。それにディズニーランドを楽しんでらっしゃるかどうかも知りたいですし」

「はい。わかりました」

亜佐美があっさりと同意すると、保坂は安心したように降りる準備を始めた。

親切なことに保坂は亜佐美と茜を次の電車のホーム近くまで誘導してくれた。

人混みの中を移動するのが苦手な亜佐美たちには大助かりだ。

夏休みに入ったので次の電車の近くになると家族連れが多くなって、

この人たちと一緒にＴＤＬに行くんだなとそんな風に亜佐美は思っていた。

「じゃ、メールを忘れないでくださいね」と保坂に言われ、お礼を言うのが精一杯だった。

保坂は「茜ちゃん、もしも迷子になったり困ったことがあったらここに電話してくるんだよ」と

小さな紙片を茜に渡している。どうやら保坂の携帯番号のようだ。

茜がそれを丁寧にポシェットに入れると、もう電車の発車間際だった。

もう一度お礼を言って、茜とともに電車のホームまで急いで移動した。

そんな二人の背中を見送っていた保坂は、明日の二人の帰りの特急までには死に物狂いで仕事を終わらせようと考えていた。何時の特急なのかは茜に聞いている。

朝の出勤途中で茜に出会うことが多くなった。一緒に歩くのはわずかな時間であるが、少しずつ茜から亜佐美の様子を知ることができて興味深くなってきたのだ。

保坂は携帯を取り出して迎えにきているはずである車を呼び出し、急ぎ足でそこを離れた。

保坂が本社で最初の打ち合わせに入るころ、亜佐美と茜はＴＤＬの駅に到着していた。駅舎からして楽しそうなところである。亜佐美は子供の頃に来たことがあるはずなのだが、あまりはっきりとした記憶がなかった。

茜がはやくというように亜佐美の手を引っ張るが、まずはホテルへ行くことにしている。

ホテルで荷物の到着を確認して、茜にここを覚えて置くように言う

のを忘れなかった。
チェックインできる時間になれば荷物は部屋に運んでくれるそうだ。
安心して亜佐美と茜はＴＤＬに繰り出した。

茜が亜佐美の手を引っ張って歩いていく。予めルートは決めていたが、噂どおり人気のアトラクションは凄い行列だ。水分の補給を忘れずにまず一番乗りたいものから並んだ。
夏休みの特別プログラムに予約しているので集合時間に遅れないようにするのもたいへんだった。何しろ広い。
お昼はディズニーのキャラクターを型どったデニッシュやアイスクリームで軽く済ませ午後になるとゆっくりとショップを見て回った。
茜はお気に入りのキャクラクターグッズを何点か選び、オリジナルのストラップが作れるというコーナーでは亜佐美とお揃いのストラップを色違いで購入した。

ホテルに電話をすると部屋の用意ができているというのでチェックインすることにした。
汗を軽くシャワーで流し、１時間ほどタイマーをセットして茜と二人お昼寝する。
茜は「眠れそうにないよ、こんな昼間に」とは言ったが、「眠らなくても目を瞑ってるだけでいいから」と言い聞かせてベッドに横になった。
茜は先ほどショップで悩んでいたものを買って良いかと聞いて来た。夕方にもう一度乗り物に乗ることになっているのでその話しもしていたがやがて茜は静かになった。
亜佐美は保坂が言ったことを思い出していた。メールに返信してくれと言っていたが、いったい何時送ればいいんだろうか。考えているうちに亜佐美も眠りについた。

やがてアラームで目が覚めた二人は、数十分の午睡だったが身体は

軽くなっており、手早く準備を整えて再びＴＤＬに飛び出した。
夜は瑠璃から聞いていたお勧めのレストランに入った。家族連れが多くとてもにぎわっている。食事が終わって亜佐美はコーヒーを頼んだ。茜はデザートを食べている。
夜のパレードまで少し時間があるので、瑠璃にメールを送っておこうと思った。
「茜、こっち見て？」と携帯を向けると、デザートのお皿を持ち上げてニッコリ笑う。
その写真を添付して瑠璃に送信した。瑠璃からはすぐに『夜のパレード、楽しんでね』という絵文字つきの可愛いメールが帰ってきた。
受信ＢＯＸには瑠璃からのメールの前に保坂の名前があった。朝、電車の中でテストと称して保坂から送られたメールだ。
どうしようか、という呟きが声になってたらしい。
茜が「あーちゃん、ほっちゃんにメールした？」と聞いてきた。
「あー、どうしようかと思って・・・・」
「今、しといたほうがいいんじゃない？パレード始まったらできないよ？」
「うん。やっぱり送らなきゃいけないのよね」
茜は何も言わずにじっと見ている。
「何て打てばいいのか・・・」
「そうだ、あーちゃん。私がとっても楽しいって言ってるって、そう伝えて？」
「そだね、そうするか」
亜佐美は少し考えて、レストランの綺麗な天井の写真を撮った。
それを添付して短い文章を打つとそのまま考え込んでしまった。保坂は仕事中のはずである。時間も時間なので誰かと会食中かもしれない。あまりくだけた文章にならないほうが良いと思った。
亜佐美が携帯を見つめたまま動かないので、茜は心配になって声をかけてみた。
「あーちゃん！」

「ん？」
「どう？もう送ったの？」
「あ、いや、まだだけど・・・」
「文は書けたの？」
「うん、一応ね」
「じゃ、送信ボタン押して！」
「うん、送信・・・っと」言われるままにポチっと押してから気がついた。
「あぁ～、送っちゃったよ～」亜佐美は慌てている。
今になって押した指が震えてきた。いやな汗も出てきた。
「送ったら、あとはパレード楽しめるよ？」
「う、うん。そうだね・・・・・」
亜佐美は喉が酷く渇いた気がしてコーヒーに手を伸ばしたが、コーヒーはすっかり冷めていた。
パレードの時間が近づいたので席を立ってバッグに手を伸ばしたとき、携帯が光ってメールの受信を知らせた。
携帯を開けると、新着に保坂の名前があった。つい先ほど送ったばかりなのに返信がはや過ぎる。保坂さん暇してたのかしらと思ってしまった。
保坂からのメールを開いて亜佐美は驚きを隠せない。
『楽しんでおられるようで安心しました。夜のパレードの写真も見たいです。遅くなってもいいですから送っていただけませんか？／一也』

「どうしたの？あーちゃん」と茜が聞いた。
「う～～、保坂さんからメールが帰ってきた」
「なんて？」
「パレードの写真送ってほしいって・・・」
「じゃ、あーちゃん頑張らなきゃ～。デジカメ持ってるよね？」
「うん、ここにある」

「デジカメと携帯と両方で撮ろう？」
「そだね」と亜佐美は苦笑して茜の後に続いた。先ほどのメールでもドキドキしたのに、またメールを送らないといけないんだ？なぜ？と亜佐美は思っていた。

パレードは素晴らしかった。写真もたくさん撮った。
茜はペンライトが欲しいというので一個買ってあげた。その茜と人の少ないところに移動し、
「茜、そのライトを顎の下に当ててよ。うん、下から顔を照らして？」
「こう？」
「うん。そしてちょっとしゃがんでくれる？」
亜佐美は自分も腰を屈めて、低い位置から綺麗にライトアップされたお城のような建物をバックに茜の写真を撮った。
なかなかの出来映えである。亜佐美はニヤリとしながら保坂にメールを送った。
今度は指は震えなかった。

23　着信

亜佐美たちがＴＤＬで夕食を楽しんでいた頃、保坂はその日の会議をすべて終えて各担当者と細かな打ち合わせに入っていた。
次から次へと報告があり、それについて指示を出す。普通は言わなくてもわかってるだろうと思われることでも一つずつ確認していく。担当者が驚くくらい保坂は細かなことまで指示していた。
担当者たちは入社してから今までにないスピードで仕事をこなしていた。大きな会社に入って１つのプロジェクトを大勢のスタッフでやっていくので、割とのんびりしていたのだ。
このまま失敗をしなければ、あるいは変な上司が担当にならなければ一生このまま生活には困らずに暮らしていくのだろうと思えた。
ところがこの社長の三男に呼ばれてからいつも全力で走っているような気がする。以前の部所を離れて新しい職場に来たが、１週間かけてやっていたことを2日でこなしているようなスピードだ。最近では合コンにも参加していない。職場の飲み会もない。当然だ、みんな山のような仕事をトップスピードでこなしているのだから一緒に飲む時間なんてない。それでも誰一人文句は言わなかったし、合コンよりも今の仕事のほうがずっと楽しかった。

打ち合わせが続く中、１０分間の休憩を取った。外の空気を吸うか、コーヒーでも飲まなければオーバーヒートしてしまう。
緊張の糸が緩んで部屋を出て行くスタッフが多い中、保坂は窓に近づいた。もう外は薄暗い。
ポケットに入れた携帯が振動した。携帯を確認すると亜佐美からのメールである。
思わず口の端が持ち上がった保坂は、窓際に来ていてよかったと思った。
『今日は駅までお送りいただきありがとうございました。今、夕食

中です。茜から保坂さんにとっても楽しんでると伝言です。このメールがお仕事の邪魔でなければよいのですが。』

メールには写真がついていた。どこか建物の天井みたいだ。白のなかにピンクとブルーが基調になっていてかにもＴＤＬらしい。

それにしてもそっけないメールである。保坂はまた亜佐美がメールを送らざるを得ないように次のメールを返した。亜佐美はきっとまごつくだろう。

保坂は思わずニヤつきそうになる口元を手で囲って、外の景色を見るふりをしていた。

休憩が終わるとまた打ち合わせである。何人かのスタッフが入れ替わり、その都度進行具合を確認しながら次の指示を出していく。

保坂が立ち上げようとしているブランドの商品化が形になってきたのでこれからはもっと忙しくなるだろう。技術担当の仕事はもうほとんど終わりに近づいて、これからは営業と広報のセクションに忙しさが移っていく。

技術のほうには新しい開発プランを持っていくことにしている。それにしてもうちの会社は良い人材が揃っていたと保坂は有難く思っていた。

全体にのんびりした社風なのでぼーっとした社員ばかりかと思ったら、各分野で能力の高い社員がたくさん居たのだ。新規採用しなくてもよかったのでスタートも早くできたのだ。

ようやく今日の打ち合わせが終わろうとしていたとき、社長秘書の高瀬から電話が入った。

「一也様、まだ会社ですか？」

「はい、そうです」

「もうそろそろ今日は終わりませんか？」

「はい。もう少しで終わりますよ」

「では、そちらに社長が寄りますので」

「はい？社長はとっくに帰られたんじゃないですか？」
「会食があったので出られてましたが、一也様が終わられるようでしたら会社に寄って一緒にお帰りになりたいそうです」
「なるほど。母の命令ですね？」
「私からはなんとも。しかし奥様が心配されているのはわかります」
「わかりました。では、あと２０分で終わりますから、３０分後に下で」
と保坂が言うと、「承知しました。では１０時１５分でよろしいですか？」と念押しして高瀬は電話を切った。
東京本社に来たときでも保坂が実家に帰るのは少ない。今日こそは帰ってらっしゃいという母の意思表示だろう。きっと父に命令したのだ。そう思うと少し嬉しくなった。

ようやく打ち合わせが終わってスタッフが帰っていく。
保坂も書類を片付けながら、お疲れ様でしたというスタッフに頷いているときだった。
保坂の携帯が震えた。携帯を確認したい気持ちはあるけど、一人のときに見たいのでポケットに入れたまま出さずにエレベーターホールに急いだ。
本社に来たときの保坂には秘書役のスタッフが一人付く。彼に明日のスケジュールを確認しながら、できれば夕方には工場には戻りたいと伝える。本心は、”できれば”のレベルではなかった。絶対に４時の電車に乗るつもりだ。
「夕方ですか。何時ごろの電車をお考えですか？」
「４時だ」
「４時。４時はちょっと難しいかもしれません」
「何とか頑張ってみるから、午後の会議を１つだけにしてくれる？朝一番で調整してください」

そのスタッフと正面玄関で別れてすぐに、ポケットから携帯電話を

取り出した。
迎えが来るまでに素早く見てしまおうと携帯をあけると、やはり思ってた通り亜佐美からのメールが届いていた。メールに本文はなく写真だけついていた。
写真を見て保坂はぷぷっ・・・と噴出してしまった。
ヤンキー座りをしている茜の顔が、下から照らされた僅かな明かりでぼんやりと暗闇に浮かんでいた。背景には遠くにライトアップされたファンタージックなお城が浮かんでいた。
「やられたなぁ」思わず声が出ていた。
やがて保坂の肩が揺れ、その笑いは迎えの車が到着するまで続いた。

「お待たせしました」と高瀬が降りて車のドアを開けてくれる。
笑っている保坂を怪訝そうに見ながらドアを閉めた。
「おぉ、楽しそうだなお前」と父も怪訝そうに見ていた。
「お酒臭いよ、お父さん」
「ま、しかたないだろ。しかしお前が笑っているの、久しぶりに見た」
「僕だって笑うよ（笑）あ、そうだ。母さんに電話しておくよ」
と父に断って母に電話を入れる。
「母さん？一也だけど。うん、今父さんに拉致された（笑）」
「そう。あの人もたまには役に立つわね」
「帰ったら軽く食事できる？」
「もちろんよ。適当でいいでしょ？」
「うん、何でもいいよ。でもこんな時間だから軽いのが嬉しいけど」
「は～い。じゃ、待ってるから」いつも優しい母である。

「そうだ、父さん。明日夕方には工場に帰るよ」
「そうか」
「帰る前に社長室に寄って良いかな？2時過ぎ、もしかしたら3時ごろ」

「3時でしたら大丈夫かと思います」と高瀬が答えた。
「明日、出勤前にもちょっと時間ほしいんだけど」
「わかった」と、今度は父が答えた。

実家に到着すると、「着替えてくるよ」と言って保坂は一度自室に入った。
着替えてから手を洗う。手を洗わなければ食事にはありつけない。
きっと二条家もそうだろうと保坂は想像していた。
亜佐美にメールを送ろうとして携帯を手に取ったが、考えを変えて電話を掛けることにした。亜佐美は驚くだろうなとわかっている。
何度が呼び出した後、電話が繋がった。
「保坂です」と言うと、案の定詰まったような亜佐美の声が聞こえた。
「今、お電話して大丈夫な時間ですか?」と言うと、「びっくりしました」と亜佐美が応えた。
「素敵な夜景の写真をありがとうございます」
「気に入りました?(笑)」と亜佐美が保坂の反応を面白がるように言った。
「大いに。ところで今はもうホテルに帰られました?」
「はい。先ほど帰ってきました」
「それなら安心しました」
ところで、と保坂は続けた。「今から食事をしないといけないので、少しあとでもう一度電話してもいいですか?」と亜佐美に聞いてみる。
「後にですか?」
「ええ、少し遅くなりますけど」
少し考えてから亜佐美は「わかりました」と答えた。「今ちょうど茜をお風呂に入れるところだったので、私も後のほうが都合がいいです」と言ってくれたので、安心して電話を終えた保坂は急いでダイニングに下りていった。

適当でと言ってはいたけど、やはり母の手料理は心がこもっていた。魚の天婦羅に大根おろしがたっぷり入った餡がかかっていた。こういう組み合わせは初めてだ。とろりとした餡には濃い出汁で味がついており、天婦羅のはずの魚を非常にあっさりと食べさせてくれる。興味深くそれを食べた保坂はほぉっとため息が出てしまった。省エネでエアコンは弱めにはなっているが、オフィスに一日篭っていると体の芯は冷えているのだ。

明日も早いからとあまり無駄話もせずに自室に引き上げた保坂は、まだもう少し仕事が残っていた。

PCを立ち上げながら携帯電話を取り出した。あまり遅くなってもいけないと思って亜佐美に電話をかけた。

今度はすぐに亜佐美は電話をとった。

「保坂です」

「こんばんは」と亜佐美が言った。

「お風呂終わりましたか？」

「はい。さっきまで茜も起きてたのですけど、疲れたのか寝ちゃいました」

「楽しんだようですね」

「駅に到着したときからもうテンション上っててたいへんでしたよ」と亜佐美が笑う。

「あ、そうだ。先ほどの写真ですが、僕はパレードの写真が見たいってリクエストしたのですが？」と保坂が言うと、

「あ、そうでしたか？そうでしたね。でも夜景もいいかなと思って（笑）」

どうやら亜佐美はいたずらのつもりであの写真を送りつけたようだ。

「ちょうど会社の玄関であの写真を見たんです。警備員が突然笑い出した僕を怪しげに見てましたよ」

「くすっ」と、亜佐美の笑いが聞こえた。

「今、してやったり！と得意になってるでしょ？」
「そんなわけでは・・・」とは言っているものの、きっと得意げになってるに違いない。
「写真はたくさん撮りました？」
「はい、デジカメでも携帯でもたくさん撮りました」
「それはよかった」
「茜がこんなに喜ぶとは思っていませんでした」
「帰ったらいつか今日の写真を見せていただけますか？」
「あ、はい。私の撮った写真でよければ」と亜佐美は答えた。それから少しだけ話して、「おやすみなさい」と電話を終わった。

２４　帰りの電車

電話を終えて、亜佐美はほ～っとため息をついた。
とにかく緊張した。せっかくお風呂に入ったのにまた汗がでてしまったじゃないのと思いながら洗面所に入る。鏡を見ると頬が赤い。
短大は女子ばかりだったけど、それまでは近所の公立で共学だった。男性に免疫がないと言う訳ではない。
付き合った男も多少なりとも居たし、従兄妹の慎吾や昌紀とは普通に話せるのに、保坂と話すとやけに疲れる。いったい何者なんだ～と心の中で突っ込んでみたけれど、今日一日疲れたうえに、最後に保坂との電話でダメ押し状態だ。頭の中も靄がかかったようでよく考えられない。もう寝ることにした。
枕が頭についた記憶も無いままに深い眠りに落ちた亜佐美だった。

一方保坂はますます明日の帰りの電車が楽しみになった。絶対４時発のに乗ってやる！そう意気込んで仕事を続けた保坂が寝たのはもう朝に近い時間だった。
朝は兄の優一が来ていた。朝食前に父と兄と三人で書斎に篭る。特許待ちになっている大きなプロジェクトの件だ。父が苦い顔で「難しいことがあって、難航している」と言った。
「どうせ行政がなにか言っているんでしょう？」と一也が聞く。「あぁ」とだけ言って父は黙ってしまった。
新しい製品を発売することによって国の立場が悪くなると考えているらしい。保坂たちが作って売ろうとするものは消費者には受けがよくても、今まで国としていろんな方面に規制をかけてきた手前、なかなか承認し難いのはわかっている。
「僕はもう少しあとになったら世論があの製品の後押しをするようになると思う。いくら国が反対しても動かせるだけの材料は揃うはずなんだ」と一也が言うと、今度は兄が「それについてなんだが、

とりあえず海外の特許をとるのはどうかな?」と言い出した。
「兄さん、それグッドアイデアだ!」
「海外のほうが特許申請が早いし、ついでに海外で生産しても、というかそれのほうがいいと思う」
「なるほど」と父が言った。
「海外で生産して流通させ、それを日本に持って入ってもいいんじゃないか?」
「そうだね。僕もそれをなんとなく考えてた」と一也が言い、父も「それがいいな」と頷く。「調査のほうは兄さんにしばらくお願いしてもいいかな?」と一也は兄に頼んだ。
「専務に指示するのは10年早いっ!でもやってやるよ」と優一は請け負った。

朝食は父と同じように和食だった。「やっぱり母さんの朝ごはんは美味いな」と兄が言った。「僕もそう思う」と一也も言う。
「しっかり働けるようにご飯食べなさいね」と母が笑いながら言った。
「そういえば秀一兄さんのほうはどうなってる?結婚式はいつごろ?」
「結婚式は12月25日なんだって。でもなかなかねぇ、思うようにはいかないわ」と母が浮かぬ顔になった。
「島崎さん反対してるの?」と聞くと、「そうじゃないんだけど、怪しい画家の肩書きで恵香ちゃんに来てくださいって言うのはなんだか申し訳なくて」
「イマドキそんなこと誰も気にしないんじゃないの?」と言うと、「それはそうなんだけど。島崎家も何かと格式高いのよ。もちろんご本人たちは何も言わないけど、大事に育てた島崎家の娘を嫁に貰うんだと私が気を揉んでるだけ」と母が説明した。
なるほど、母の言うこともっともだ。
「会社には入ることになったものの、頑として社長は嫌だとゴネて

るよ秀一は」と優一が言った。
「なぁんだ、そんなことか。あの会社の株はどうなってたっけ?」
「あれは本社が過半数、残りをうちの系列のファイナンス会社が持ってる」
「なら問題ないじゃん。お祝い代わりに秀兄に会社の株を譲ればいい。ファイナンスにも交渉していくらか売ってもらって、本社も少しだけ資金を残して秀兄が買ったことにすれば問題ないと思う」
「うむ~」と父が唸ってる。
「本社の株主総会いつだっけ?9月でしょ?ちょうどいいと思う。その時議題にしてすっと承認させちゃえばいい」
「なるほどね」と少し考えて兄が言った。
「社長がいやならオーナーにすればいいでしょ」
「今度は秀一も嫌とはいわんだろうな?」と父も了承したようだ。
「それに、別のしっかりした人が社長のほうが会社のためにもいいよ(笑)」と言って皆で笑った。
「母さんは当分黙っててね、島崎にもだよ?」「父さんは根回ししてください。総会で問題なく売却案が通るようにしてくださいよ」
こんな風にいちいち念押しするところが一也らしいところでもある。

さて、その頃亜佐美たちも朝食を食べていた。バイキング形式のレストランで、美味しそうなものがたくさんある。それでも、茜にはよく考えて自分が食べられる量だけを皿に取るように言い聞かせた。午前中は茜が予約している子供向け夏休み特別プログラムに予約を入れていた。聞いたところによると舞台の上で歌って踊るショー形式のものらしい。茜は凄く楽しみにしていて朝食を食べながらもパンフレットを確認している。亜佐美は茜の写真をたくさん撮ろうと張り切っていた。

正午になって、亜佐美たちはＴＤＬを後にした。
まだ遊び足りない茜ではあったが、また来ればいいんだからとなだめて電車に乗る。
特急に乗り換える駅の近くにデパートあるので、そこで買い物をする予定だ。せっかく東京に来たのだから亜佐美は製菓用品の専門店にも行きたいのだが、あいにく今回は帰りの電車の指定券も買ってしまってるため時間がなかった。
せめて駅近くのデパートに立ち寄って、できれば茜と亜佐美の洋服や靴を選びたかった。
駅が近づくにつれ、ふと昨夜保坂と電話で話したということを思い出した。差しさわりのないことだけを話したような気がする。あっと言う間に終わってたなぁ、もう少し何か話してもよかったんじゃない？と保坂の前ではいつも遠慮している自分に気がついた。

デパートでは少しではあるが秋物が少し入荷していた。
まず茜の夏用と新学期の秋用と少し買って、靴も見繕った。それが終わると同様に亜佐美の洋服も見る。女同士であれこれおしゃべりしながら試着したり鏡をみたりするのは楽しい。
たくさん買ってしまったので全部自宅に宅配の手続きをとって特急までの時間をおやつタイムにすることにする。
ランチもこのデパートに入ったときに軽く食べていたけれど、さすがに買い物はお腹が空く。まよわず二人ともケーキセットを注文してカフェの椅子に深く座り込んだ。
「茜、時間がの余裕があれば地下もちょっと寄りたいんだけどいいかな？」
「うん、いいよ」
「見るだけでも勉強になるからさ」
「じゃ、これ食べたら行こう」と茜が言ってくれたのでもう少しのんびりしたかったけど、どうせすぐに電車に乗るんだからいいかと地下に移動した。

特急の発車時間近くまで二人はデパ地下を楽しんで、5分前にようやくホームに到着した。
指定席を探して席に座ってすぐに電車が動き出した。
「楽しかったね」と茜に言うと、「とっても楽しかった」とＴＤＬでのことを思い出しているのか黙ってしまった。
「それはよかったですね」と突然通路側から声がした。
びっくりして声がしたほうを見上げると、保坂が通路に立っていた。
「あ、ほっちゃん」と茜が嬉しそうに保坂に気がついた。
「こんにちは」と茜が言う、亜佐美も慌てて「こ、こんにちは」と挨拶したが保坂の顔を見ていられなくて目のやり場に困った。
保坂は「こんにちは。帰りもご一緒できてよかった。僕はここだな、前の席です」と言って亜佐美のすぐ前列の席に座ってしまった。
亜佐美からは保坂の頭というか髪の毛が見えた。自然なウエーブなのだろうか、ゆるやかに両サイドから後ろに流れる髪が柔らかそうで思わず触りたくなった亜佐美は慌ててしまった。
実際に手がでたわけではないのだが、無意識のうちにそういうしぐさをしなかった気になって回りをみてしまった。

茜が亜佐美の肘を触って「あーちゃん」と携帯を指差す。携帯電話にはメール受信のランプがついていた。
恐る恐るメールを開いてみると『ＴＤＬは楽しかった?予定通り電車に乗ったの?』と瑠璃からのメールだった。
『うん、茜がとっても喜んで、楽しみました。今予定の特急の中です。伯父さんにもよろしく伝えてね』と返信をして、慎吾や昌紀にもメールしておいたほうが良いことに気がついた。茜と一緒に文面を考え、簡潔なメールを二人に送る。ついでに伯父にも直接メールを送っておいた。
それが済むと茜はうとうとと眠り始めた。もう電車はとっくに都会を抜けてのどかな風景が広がっていた。

なんとなくそのまま携帯電話を手に持っているとまたメールを受信した。瑠璃からかと開けてみると、なんと保坂からのメールだ。

『お疲れさまでした。夕べは遅くに電話してすみませんでした。お声が聞けて安心しました。茜ちゃんは今朝のＫＩＤプログラムに間に合いましたか?』

し、信じられない人だ、すぐ前の席に座っているのにと亜佐美は保坂の座っている椅子をじっと睨んだ。

と、いきなり保坂が振り返って亜佐美を見た。とっさのことだったので目線をはずすタイミングを失って固まってしまった亜佐美に、保坂は携帯電話を指差してその指で今度は自分の携帯をトントンと二度軽く叩いた。

あぁ、メールを送れってことね。お返事送ればいいんでしょ?と思ったのでコクリと頷きメールを打ち始めた。

『ご心配いただいてありがとうございます。保坂さんこそお仕事がたいへんじゃないですか?私たちはたくさん遊びましたが疲れてはいません。茜はＫＩＤプログラムのステージでかなり飛び跳ねてました。』

保坂からは『写真をたくさん撮られたのでしょ?約束どおり今度見せてください』と返事が来た。

近くの席だというのにメールで会話しているのが面白くて、何度かメールをやりとりして退屈しない帰り道だった。

25　写真

亜佐美たちの降りる駅が近づいてきた。そろそろ出口に移動しようと立ち上がると保坂が亜佐美たちがデパ地下で買った袋を持ってくれた。

今度も「いいですから」と亜佐美が言うのを無視して、亜佐美に先に行くように勧める。

電車が原則ホームが近づく。保坂は亜佐美に紙袋を渡して、「僕は会社に寄るので先の駅まで行きます。今夜も電話していいですか？」と亜佐美に言った。

ここで降りないのかとびっくりしながら「はい。ではお疲れ様でした」と一礼して茜と電車を降りた。

「またね～、ほっちゃん。ばいばい」と茜は手を振っている。

保坂が茜に手を振り返しながら亜佐美を見た。

電車が動き出したので、軽く会釈をして保坂を見送った亜佐美は、ＴＤＬより疲れたわと思った。

気がつけば茜がじっと見ていた。見返すと、茜の顔がほんのり赤く見える。あれ？と思って茜の顔を両手で挟むと心なしか熱い。

額に手を当ててみるといつもより体温が高めだというのがわかった。

そういえば茜は帰りの電車では大人しかったと思い出し、「気分悪く無い？」と聞くと首を横に振る。

「ちょっと暑いだけ。それと喉が渇いた」と言うので、急いで茜の手を？いで家に戻った。

一泊空けただけなので家は何も変わっていなかった。

とりあえず茜に水を飲まして着替えを済ませた。

熱を測ると３７度２分。特別高くはないが用心したほうがいいだろう。

軽い熱中症かもしれないし、もしかしたらＴＤＬで興奮した知恵熱かもしれない。

「茜、荷物は明日届くから、今日はもうこのまま何もしないでのんびりしちゃおうか」と何気なく茜に言った。

茜もだるいらしく「うん」と言って、亜佐美が慌てて解凍したスープを飲んだあと、ベッドに入った。

「喉が渇いたらできるだけたくさんジュース飲んで良いからね」と言うと頷いた。

「汗が出たらパジャマ着替えるのよ。それから苦しくなったら夜中でも私を起こしていいから」と言って、茜が目を閉じるのを待った。

亜佐美も顔を洗って軽くシャワーを浴びた。それほどお腹も空いていない。

ブログもメールもチェックしてないことに気がついてＰＣを立ち上げた。

ブログへのコメントもメールもたくさんあって、気軽に返せるものは片っ端から返事を出した。

途中で一度茜の様子を見に行ったが、茜は熱も下がったようでよく眠っており安心した。

まだ時間も早い。久しぶりに夜をのんびりと過ごすことにした。

キッチンに行き、冷蔵庫からよく冷えたビールを取り出して一口飲んだところに電話がなった。

「こんばんは」と、保坂からである。

「こんばんは、先ほどはありがとうございました」と亜佐美が荷物を持ってもらったことのお礼を言った。

「いえ。今日は疲れたでしょ？」

「さすがに少しぼんやりしています。保坂さんはまだお仕事ですか？」

「まだ会社なんですよ。もう少し詰めることがあって」

「まだお仕事なさってるのですね」

「今はちょっとした休憩時間です。それよりも写真もう見ました？」
「いえ、まだなんです。今からＰＣに取り込もうかと思ってたところです」
「是非見せていただきたいな」
亜佐美はちょっと考えていた。どうやって見せるというのだろうか。
「あの、保坂さんは知ってらっしゃるでしょうか？写真をアルバムみたいにしてウエッブで見せるのがあると思うのですが・・・」
「あ、おっしゃる意味はわかります。ありますよ」
「簡単に教えていただけますか？」
「ひとつは写真だけを見せられるようにするサービスを提供しているところがあります。
カメラ会社のユーザー用とかグーグルなどでもアカウントを持っていればできます。
あとはホームページとかブログを持っていればそちらに写真をＵＰするという方法もあります」そこまで保坂が言うと
「あ、そっか・・・」と亜佐美は独り言みたいにつぶやいて黙ってしまった。
「二条さん？」
「あ、ごめんなさい。私ブログを持ってるのにすっかり失念しておりました（笑）なんだかそれが可笑しくて」と笑っている。
「どこか無料のサービスのを使ってるんですか？」と聞くと、「〇〇のです」というので、
「差し支えなかったら二条さんのブログを教えてもらっても良いですか？」
「はい、いいですよ」と亜佐美はあとでＵＲＬを携帯に送ろうと考えていた。
「今、僕はコンピューターの前に居ます。ＵＲＬ言ってもらったらすぐに見てみます」というので「覚えられますか？」ととっさに聞き返した。
保坂は笑いながら、「そこのサービスのアドレスはわかるので、ユ

ーザー名だけ貰えば大丈夫です。あるいはサイト名をいただければＧｏｏｇｌｅで検索しますが？」と言った。
まずユーザー名を告げるとすぐに保坂が「はい。ありがとう。見つけました」と亜佐美に言う。
「で？もうですか？そんなに早く？」と驚く亜佐美に、保坂は笑っている。
「それで二条さん、このブログですが、無料サービスで写真のスライドを作れますよね？しかも高画質で」
「あ、あったかもしれません。そういうの見たような気がします」
「僕もはっきりは覚えていないのですが、作ったスライド写真には確かパスワードをつけて知り合いにだけ見せるということもできたはずです。プライベートな写真ですから、パスワードをつけて、それを伯父さんやお友達だけに知らせればいいんです」
「なるほど。そんなことができるのですね」亜佐美はただただ感心するだけだ。
「もしそれを作ったときは僕にもパスワード知らせていただけますか？」
「もちろんです。今から時間があるのでちょっとやってみます。保坂さんもこのブログを使っているのですか？」と亜佐美が聞いた。
「いえ、僕じゃなくて友人たちがいろいろ使ってるので」と苦笑まじりの保坂である。
しかし、保坂は亜佐美と話しながらも、一方では亜佐美のブログのページを次々に読んでいた。
「では、僕はそろそろ仕事に戻りますので」と保坂が電話を切ろうとする。
亜佐美は慌てて「ありがとうございました。おやすみなさい」と言って保坂が電話を切るのを待った。
電話を終わってからも保坂はしばらく亜佐美のブログを見ていた。
「あら、この人・・・、知ってる人？」と突然後ろから早瀬薫の声

がした。
「びっくりさせるなよ」
「だって何度か呼んでるのに気がつかないんだもの」
どうやら保坂はブログを見ながら考え込んでいたらしい。
「この前、タウン紙に載ってた人のブログだと思うんだよね。ちょっと待って」と薫がなにやら探していたが、
「捨てるところだった（笑）」と笑いながらタウン紙を持ってきた。
「ほら、ここ。この人だと思う」
保坂がタウン紙を見てみると、亜佐美の顔写真が出ていた。
「ここにＵＲＬがあるじゃない？可愛いブロガーさんなのでサイトも見てみたんだわ」と言いながら薫は帰り支度をしている。
「もう要らないから読んだら捨てておいてね。じゃ、お疲れ様でした」
「はい。ご苦労様。また明日な」顔を見ずに手だけ振った保坂は、タウン紙を丁寧に読んでから再び亜佐美のブログに戻った。
過去の記事を読んでいてある日の日記にぎょっとした。先日保坂が亜佐美にもらったサンドウィッチの写真がでてきたからである。
あの女性のランチを食べちゃったんだよな、悪いことしたなぁと思いながら記事を読むと、サンドウィッチの具について書かれていた。
そうそう、あれは４種類のサンドウィッチが入ったんだった。こんなことならもっと味わって食べるんだったと思った。
それからスタッフに声をかけられるまで、亜佐美のブログの前で腕を組んで難しい顔をしていた保坂であった。

ようやく仕事を終えて帰宅した保坂の携帯にメールが入った。
亜佐美から写真までのＵＲＬとパスワードを知らせるメールだった。
少しヒントを言っただけなのに早いなと思いながらＰＣを開けてみると、ＴＤＬで楽しそうに遊ぶ茜の写真の数々がスライドになっていた。
明日の朝、もう一度ゆっくり見ようととりあえずＰＣの電源を落と

しベッドに横になった保坂は、長い一日だったと改めて思った。

26　お弁当

翌朝には茜の熱も下がっていて元気いっぱいだ。
先ほど届いた宅急便の荷物を茜は嬉しそうに開けていた。
夕食は伯父の家に呼ばれている。
伯父の家に持っていくお土産を確認して、玄関近くに一まとめにした。
デパートで買ったものはもう一度試着してそれぞれの場所に仕舞った。
だいたいが終わるともう3時のおやつの時間だった。

紅茶を淹れておいてＰＣを立ち上げる。
明日は3人の女子高校生とのお菓子教室だ。メールで明日の確認をしておこうと思った。
目印に黒い板塀にリースを掛けておくこと、その下にインターコムがあるので押してくださいと忘れずに書いてメールを送信した。

受信メールを確認すると、いくつかメールが届いていたがその中に保坂からのメールがあった。
携帯じゃなくてブログにメールが届くとは思いもよらなかった亜佐美。メールの題名がお弁当の注文に関してだからさらに驚いた。
亜佐美は3度メールを読み返した。仕事の依頼には慎重な亜佐美である。
要約すると、来週月曜日から木曜日の間のどれか1日でよいから保坂のスタッフの通勤弁当をお願いしたい。数は１１個。一度に無理なら2日にわけてもよいということであった。
日程を数に問題なければお返事がほしいと書いてあった。
来週は女子大生のデート弁当が一件ある。あとは伯父の事務所に行く用事があったがそれだけである。

他はメールで済むものばかりだった。
『水曜日ではいかがでしょうか』と亜佐美はメールを返送した。
スタッフの年齢層、男女比率など質問事項を書いておいた。
さらに料金設定とブログのなかに参考になりそうなお弁当があるのでその写真のＵＲＬも記載した。
なるべく打ち合わせメールの数を少なくしたかったので、質問や提案をたくさん書き入れ、忘れたことがないか何度か見直してから送信した。
保坂のメールにはスタッフへの慰労のためと書いてあったが、どうもそればかりではないような気がした。

考えながらメールを送るともう夕方になっていた。
その夜は伯父の家に行き、ＴＤＬの話で盛り上がり楽しいひと時を過ごした。
伯父の家に居る間にブログ用のメールをチェックすると保坂から返信が来ていた。
亜佐美の質問に丁寧に返信してくれている。とりあえず家に帰ってからゆっくり検討しようと少しの間仕事のことは頭のなかから追い出した。
伯父の家を出るときに、伯父が亜佐美に「月曜日、事務所に来れるか?」と聞くので「はい、その予定です」と答えると、「茜も来るよな?」と聞く。
ひとりでは家に置いておきたくないので連れて行くつもりだ。
「じゃ、お昼前に来てくれるか?うちのが茜に水着を買ってやりたいらしい」
「いいよ、そんな・・」と断るのを構わず、「昼もうちのが連れて行くから」と伯父は言った。なにか茜に聞かせたくない話があるのかなと感じて伯父の顔を見ると頷いた。
「じゃ、１１時ごろ伺おうかな」と亜佐美が承諾すると、「そうだな、そのくらいが良い」と言って見送ってくれた。

伯父の話は何だろう、嫌な話でなければいいなと思いながら帰宅した亜佐美は、茜を就寝の支度に追いやってＰＣを点けた。
ＰＣの準備ができるまで、茜のところに行って額に手を当ててみたが熱はもう大丈夫らしい。
「茜、明日は高校生のお姉ちゃんたちとお菓子を作ることになってるの。知ってるでしょ？」
「うん」
「明日、茜にアシスタントをお願いしていいかな？」
「うん、でもアシスタントって何するの？」
「私の横に居ていろいろ手伝う人よ」
「わかった。やる」
「じゃ、お願いします」
亜佐美が茜に軽く頭を下げると茜がクスっと笑った。

ＰＣのところに戻るとすでに使える状態だ。亜佐美は保坂からのメールを注意深く読み始めた。
何度か読んでみて趣旨はわかったところで、引き受けることと、料金の確認、そしてお弁当容器のサンプル写真、受け渡し方法等を書いて保坂に返送した。

そのメールを保坂はまだ会社で受信した。
亜佐美のメールを読み、サンプル画像やその他詳細を確認して意外に亜佐美をいう女性は仕事向きだなと思った。
必要な言葉で簡潔に書いてあり、僅かながらの提案も的を得ていた。
それは昨日、東京で調査会社の矢野から受け取った資料のなかに二条家のことが含まれていて亜佐美の置かれた環境を少しばかり知ってしまったからかもしれない。
あの天然でぼんやりしていそうでそうでもない不思議な亜佐美ともう少し知り合いたいと思い始めたところだというのに、今はタイミ

ングが悪いことは事実だ。
亜佐美が保坂のことを知ったときどういう反応を示すのか、それは保坂にとっても賭けだ。
通常は凄い速さで物事の展開が考えられる保坂にとって、亜佐美は非常に不透明で読めない人物だ。
賭けが裏と出たとき怖いなと思っている。それでもサイを投げてしまった保坂だ。
社内メールをスタッフに出すことにした。
『毎日、ご苦労さま。次の水曜日はご褒美に皆の昼食を注文しておきました。
お昼前に届く予定です。その日は正午に部屋に集まってください。
一応、仕事の食事会ですから時間厳守でお願いします。』
日ごろから新企画のことで急な招集をかけている。水曜日も大丈夫だろうと思った。
社長には新企画で弁当の試食をしてもらいたいのでよろしくお願いしますと一方的なメールを送っておいた。

結構遅い時間にはなっていたが、まだ亜佐美は起きていることだろう。
あのふわふわの頭でいろんなことを考えているんだろうなと思うと保坂の口の端が持ち上がった。
決心すると行動は早い。亜佐美に『でわ、水曜日にお願いします』とメールを出して、携帯電話を手に取った。

「もしもし、保坂です」
「あ、こんばんは」
亜佐美の反応はやや鈍い。眠いのだろうか。
「夜分にすみません、弁当の件を承諾していただいて助かりました」
「いえ、水曜日なら１１個大丈夫です」
「もう皆にも水曜日の昼食は任せておけ！とメールしたところです」

「あはは（笑）素敵な上司さんですね。でも、ほんとうに慰労のためだけですか？」
「うむ。二条さんって意外に鋭いですね」
「鋭いって、普通そう思うでしょ？」
「いや、僕はそれしかご説明してないのにそれだけではないと思う根拠は何ですか？」
「それに意外にってどういうことですか？（笑）」
「質問には答えていただけないんだ？」保坂も笑いながら応えている。
「私のブログを見てお弁当を注文してくださるなら、ご自分のだけ1個ですよね。
しかもそれなら週に何度かということになります。しかし、今回は11個も、しかも一回きりですから」
「それだけですか？」
「そういうお弁当は普通、会社の近くのちゃんとしたお弁当屋さんか仕出し屋さんに頼むでしょ？」
「そうなんです」
「じゃ、どういう意味なんですか？」
「ブログを拝見して亜佐美さんに作ってもらいたくなったからです」
「わけわかりませんよ（笑）だから何で私なのですか？」
「大きな理由はセンスです」
「はい？」
「あのブログにあるセンスです。イマドキの可愛いお弁当。そういうお弁当を注文したかったというところです」
「あぁ、それはありがとうございます」
「で、お察しのとおりそれだけではありませんけどね」
「え？・・・まだ何か・・・」
少し保坂の声が途切れた。ガサガサと紙の音がして、「二条さん、ちょっとすみません。歩きながらでいいですか？」と保坂が言った。
「どうしたんですか？」と聞くと、「もう工場には僕しか居ないの

で早く帰れって守衛さんに言われました」
亜佐美がクスクス笑い始めた。
「また今度でいいです」と亜佐美が言ったとたんに、「そうだ、二条さん、明日はどうされてます？」と保坂が訊ねた。
「え？明日ですか？お菓子作りのレッスンがあるんですよ」
「何時からですか？」
「１０時からですね」
「では、お昼間は忙しいと思うので、夕方ちょっとお目にかかれませんか？」
「え？」亜佐美は絶句している。
「続きは電話ではもどかしいのでお目にかかってご説明させてください」
「はぁ」とまだ亜佐美は歯切れが悪い。
「そうだ、夕飯をご一緒しましょう。茜ちゃんも一緒に何か食べにいきましょう」
「え？夕食ですか？」
「そうだな、仕事の話でもあるから、夕方そちらにお邪魔して仕事の話が終わったら食事にでどうですか？」
「はぁ、仕事の話ですね。でわ、わかりました」
仕事と言うと亜佐美はとたんに興味がでるらしい。
「１時間ほどで済むと思いますので、そうですね、５時ではいかがですか？」
「はい。わかりました」
「よかった。僕も一度ゆっくりと話したいと思っていたんです」
「では、明日、お家を出るときにお電話でもメールでもいただけますか？」
「わかりました」
ととんとん拍子に明日会うことを取り付けて保坂は電話を終えた。

27　保坂のお願い

いつの間にか明日、保坂さんが来ることになってしまった。
どうしようかと思う。思うが何も思いつかないので、とりあえず朝はお菓子のレッスンに向き合おう。
それから考えるしかないなと思い至ると、亜佐美は眠ることにした。

一夜明けて翌朝は茜をアシスタントにレッスンの準備をする。
以前に焼いたパウンドケーキを冷凍室から一個出して置いた。これはレッスンが終わったら皆で食べるつもりである。
クッキーは一種類しか焼かないので、お土産用に種類の違うクッキーを小袋に入れラッピングする。
いかにも女の子の喜びそうなラッピングに茜も楽しそうだ。
女子高生が来たときは茜に迎えに行ってもらった。リビングの入り口から入ってもらい、ダイニングやキッチンを見て回った後、早速クッキー生地からとりかかった。

3時間があっという間だった。それぞれ焼いたケーキやクッキーを大事そうに抱えて少女たちは帰っていった。
材料や焼き型の選び方や、オーブン取り扱いの注意など初心者に教えるにはエネルギーが必要だった。
茜も少々疲れたらしい。二人で無言で簡単な昼食を済ませて、キッチンを片付けると少し横になることにした。
リビングのソファーでだらしなく転がって天井を見ていたら、ふいに保坂が来ることを思い出し亜佐美は横で同じように転がってる茜に、「どうしよう、茜、5時だよ、5時!!」と話しかけた。
「何？あーちゃん、5時がどうしたの？」
「今日ね、5時に保坂さんが来てお仕事の話をするって言うの」
「え〜〜？何でまた」

「いや、よくわからない。よくわからないから説明しに来るって」
「あーちゃん、携帯は？」
「ん？ここだよ」
「４時にアラームセットして」
「は～い。４時ね。おっけ」
「じゃ、４時までは転がってよう」
「あっ」
「今度は何？」
「保坂さん、一緒にお夕飯食べに行こうって言ってた」
「え～～？でも、楽じゃん。今日は疲れたから外食がいいってあーちゃんが言うはずだからちょうどいい」
「ん、そうだね」
と話しているうちに二人はだんだん口数が少なくなって眠ってしまった。

アラームがなる前に亜佐美は目が覚めた。昼寝にしては眠り過ぎてしまったが身体は軽くなっておりそのままシャワーを浴びるて身支度を整えた。
リビングとキッチンを片付けるともうすぐ5時だった。どのような話になるのだろうか。
茜には仕事の話のときは自室に居るように言い聞かせた。
応接間に案内しようか迷ったものの、お弁当の注文でもあるし他の注文者と同じようにリビングに通すことにした。

到着した保坂を茜が迎えに行き、リビングに案内した後は「宿題してるから終わったら呼んでね」と言い残して自室に行ってしまった。
保坂は改めてリビングやダイニングを見渡して、「こういうお部屋だったのですね。前回は熱のためにあまり覚えていないんですよ」と亜佐美に話しかけた。
「あの時の風邪があまり長引かずに良かったですね」と答えながら、

すでに印刷しておいた保坂とのメールの紙を手に取ってダイニングへと保坂を促した。
亜佐美のダイニングテーブルは時としてミーティングテーブルになる。
リビングのローテーブルより話しやすいからだ。

保坂は名刺を取り出して「ご挨拶が遅れました。私、こういう者です」と亜佐美に手渡した。
亜佐美も最近綾瀬のアドバイスで作っておいた名刺を取り出す。
「この度は、私のお弁当をご検討いただき有難うございます」
お互いにお辞儀をしてから顔を見合わせてどちらからともなく笑ってしまった。
保坂の笑う声を久しぶりに聞いたと亜佐美は嬉しくなっていた。人の笑う声がこの家に響くのは良い感じだと思う。
「二条さんが仕事の話をきちんとできそうな人で助かりました」と保坂が言った。
「出来そうな人って・・・」と亜佐美が笑いながらつぶやくと、「それはまだ一緒に仕事したことがないのでわかりません。これからです」と保坂が答えた。

「では」と印刷用紙を前に亜佐美はお弁当の打ち合わせに入った。
メールで保坂の回答をリストにしておいたので、ひとつづつ手短に確認していく。
１１個のお弁当を保坂の出勤にあわせて作り上げることも可能だが、運搬の問題もあり、保坂の目的によってはその時間でいいのか他に適当な時間があるのかが亜佐美の一番の気がかりだった。
亜佐美はリストの余白に気がかりなことをすべて小さな字で書き込んであった。
結局、その日は亜佐美がＪＡに打ち合わせに出る日なので、そのついでにお昼前に保坂の工場に届けることになった。工場の門には守

衛が居るのでその者に僕の名前を言ってくださいと保坂が言った。

「お弁当の内容なのですが、みんな同じでいいのでしょうか？それとも何種類が作りますか？」と亜佐美が聞くと、「どうして違うお弁当が必要だと思いますか？」と保坂が逆に聞いた。

亜佐美はちょっと考えてから思い切って言ってみた。「保坂さんが皆さんの慰労のためにお弁当を用意するからということでしたが、どうもそれだけじゃない気がします。何か意味があるんじゃないかって」保坂は黙って聞いている。

「私のほうは同じ素材で2～3種類違うものを作れますので、もし同じお弁当じゃないほうが良いというのでしたら、作ることが可能です。」これから先は保坂の発言を待ちたいと亜佐美は思った。

保坂が口を開いた。「では、うちのスタッフ用の構成から、女子用が3個、若者男子用が6個、そして少し年齢の高い人用が2個。内容を変えてもらって作っていただけますか？」と聞いたので、亜佐美は「わかりました。大丈夫です」と答えた。

「さて、ここからが本題です。と言ってもそれはあくまでもこちら側の本題なのですが、このお弁当とも関係してきますからとりあえず聞いていただけますか？」

亜佐美は頷いて先を促した。

保坂の話は亜佐美にとってはかなり大きな話だった。

工場を拡張しようとしていて将来従業員が増えること。

今でも工場内に社員食堂があること。人が増えると社員食堂も利用が多くなり今のままでは手狭になること。そういうことが予定されていて、この機会に社食のメニューも一度考え直したいことや、食堂の拡張工事は最後になるだろうからそれまでは小さな食堂で大人数の食事を提供するために新しいアイデアが必要なことを語った。

「まだ企画の前の段階なのです」と保坂は言った。「二条さんのお

弁当を見て食べることによってスタッフに新しいアイデアが湧けばいいのですが、所詮私たちは技術バカばかりで無理ですから誰か専門の外部スタッフを考えているんです」

「それが私ですか？」と亜佐美は驚いた。

「二条さんも候補の一人です。二条さんのように今風にセンスよく作れる人が居て、長期でなく短期の期限付きでお仕事をお願いできる人は私どもにとって都合がいいですから」そうはっきりと保坂は言った。

「実際に作る人はたくさん社内に居ますので、社員のやる気になるような献立を一緒に考えてレシピを作って下さる人を探しているんです。もちろんこれはまだ確定したわけじゃない。ですが、僕の担当はそういうまだ無いことを作っていくことなので、今いろいろ考えているところなんです」

亜佐美はもう一度頭のなかで保坂の説明を反芻し、「よくわかりました」と答えた。

「いずれにしても先のお話になるでしょうから、とりあえず私は水曜日のお弁当だけを作らせていただきますね」と亜佐美は保坂に言ってニッコリ笑った。

「それでお願いします」と保坂は行ったもののまだ少し何か話したそうにしている。

亜佐美はお茶を淹れることにした。

キッチンでお茶の準備をしている亜佐美に保坂がようやく口を開いた。

「ただ工場の拡張と言うわけではないんです。うちの会社が全国に工場や支店を持っているのはご存知ですよね？」

「はい。大きな会社ですからね」

「3月の地震で東北工場が全滅なんですよ」

「まぁ、お気の毒に、、、」

「一箇所じゃないですから。ほんと多くの犠牲と今でも不安な生活

を強いられている従業員が居るんです。その人たちの一部をこちらに引き取らなくてはなりません」

亜佐美は言葉が出なかった。黙って熱いお茶を保坂の前に置く。

「そのために工場を拡張するようなものです。改装工事をしなくてはなりません。それから従業員の住まいも考えなくてはなりません」

保坂は言葉を続ける。

「会社のほうから隣町で不動産屋をなさっている二条さんにもお願いに行くはずです。ご親戚ですよね？」亜佐美は黙って頷いた。

保坂はどこまで話すか迷っていたが、亜佐美には簡潔に言ったほうがよさそうだと思い、「お弁当の件も工場の件もありますが、それを別にしてまだお願いがあるんです」

「なんでしょう？」とようやく亜佐美は声を出した。

「僕は東京生まれで学校も東京でした。こちらには入社してから来ました。社内には仲の良い同期も居りますが、社外では気軽に話せるような人が居りません」

亜佐美は保坂の顔を正面から見ていた。

「二条さんみたいに気楽に話せる人が居ないので、よかったら今後もメールやお電話を続けさせていただいてもよろしいでしょうか？」

亜佐美は保坂の喉仏がゆっくり動くのを見ていた。

やがてそれに返事をしないといけないんだと思い至り、「ええ、私でよければ、もちろんです」と答えると保坂がほっとしたようにニッコリ微笑んだ。

28　蕎麦屋

正面で向き合っていることに恥ずかしくなった亜佐美は保坂にお茶のお代わりを勧めながらキッチンに移動した。
とても喉が渇いている。冷たいソーダがあればお願いしますというのでコーラを2つのコップに入れてひとつを保坂に渡した。
「ところで、隣町で不動産屋をやっているのは伯父です。以前保坂さんと公園でお目にかかっております」と言うと、保坂は一瞬イタイ顔をした。
「あの親父さんですか」と苦笑している。
それから、と亜佐美は続けた「保坂さん、あの、お友達になるってことですよね?私たち」
保坂が頷くと「じゃ、敬語ってヘンじゃないですか?保坂さんのほうが年上だろうから、私は敬語でもいいですけど保坂さんが私に敬語というのはちょっと可笑しいです」と一気に言った。

「そうですね」と保坂は考えるフリをして、「じゃ、亜佐美さんとお呼びしていいですか?」と聞く。亜佐美は頷くと「二条さんだとうちは二条ばかりになるので」と笑った。
内心、亜佐美さんとようやく名前を呼べることにガッツポーズをしたいくらいの保坂だが、そこは慣れたポーカーフェイスで乗り切った。

「さて、そろそろ夕食に出かけましょうか。お腹が空いたでしょ?」と保坂が言ったので、ようやく亜佐美は時間に気がついた。結構話し込んでた。
「じゃ、茜を呼んできます」と保坂を待たせて支度のために足早に出て行く亜佐美の姿が消えると保坂はニンマリと笑ってしまった。
実のところ、矢野が調査した二条家のことを全然知らないフリも出

来た。そうかと言って知らない顔でこのまま話を進めたところでいつかは、会社と二条家と取引があることを亜佐美は知ることになる。知ってて知らぬ顔で付き合ってたことがバレた時、きっと亜佐美は激怒するだろう。

二条不動産を知ってることくらいがちょうどよかった。

保坂が窓の向こうの庭に目をやると、外は日没の陽射しが庭の一角に差し込んで影が長くなっている。

塀の近くの大きな木に白い花が満開に咲いていた。

茜が「お腹空いたよ～」と言いながらリビングにやってきた。

「茜、お行儀が悪いよ」と後に続いた亜佐美は手にバッグを持っている。

「何食べたい？お待たせしたから茜ちゃんの好きなものにしよう」と保坂が言うと、茜は「う～～ん。お蕎麦が良いっ！」と答えた。

「即答じゃないの」と亜佐美が呆れている。

「でも、駅前のはイヤ！」と茜が保坂に言っている。

「こらっ、ご馳走してくれる人にお任せしなくちゃだめじゃない」と亜佐美が嗜めるものの、保坂が「美味しい蕎麦屋はあるにはあるが・・・歩いては行けないなぁ」と考えている。

「あの山の中のお蕎麦屋さんでしょ？」と亜佐美が保坂に聞くと、「そう、そこ。僕が考えているのと同じ店だとおもうよ」と言うので、「そこにしましょうか」と言って亜佐美は携帯を取り出した。

亜佐美は親しげに蕎麦屋に電話をし、２０分ほどしたら3人で行くからと言って予約をしてしまった。

「あの蕎麦屋、予約できるんですね」と保坂がびっくりしている。

「親の代からのつきあいですので。それに行っても売り切れてたら困るので」と言って、二人を車に促した。

亜佐美の車は古いクラウンだった。親の残したものだという。
「もうそろそろ買い替えたいんですけど、伯父に相談するのをいつも忘れちゃって」と亜佐美は苦笑している。
茜が「ほっちゃん、車は？」と聞いた。
「今日は運転させてしまって申し訳ないですね。車はまだ実家に置いてあるんです」と亜佐美に詫びた。
「今度取ってくるよ」と茜に言っている。

ほどなく蕎麦屋に到着すると、茜は保坂の手を引っ張って「こっち、こっち」と言っている。
茜が保坂を連れて行ったのは蕎麦屋の裏口だった。裏口を開けて「着いたよ～！」と茜は声をかけた。
「おっ、茜ちゃん。元気かい？今日は表に回ってね」と女性の声がして、「わかった！」と茜が扉を閉めた。
そこに亜佐美が来たので3人で店の入り口に移動した。
「今日は表からだって（笑）」と茜が亜佐美に言っている。「3人って言ったからお客様と一緒だと思ってるのよ」と亜佐美が答えて、暖簾をくぐった。

テーブル席に案内されて注文を終えると、「忙しいときは茜と二人、厨房で食べるときもあるものだから」と亜佐美は保坂に説明した。
山の中にある店だが蕎麦通の常連さんや美味しい蕎麦との評判で遠くから訪れる人も多く、時々行列にもなる店だ。茜たちはまず厨房に声をかけて到着を知らせ、店に入るのか厨房で食べるのか指示されるらしい。厨房の隅に従業員の作業テーブル兼休憩用テーブルと椅子が置いてあるので、そこで食べるということらしい。
蕎麦湯を持ってきた女性が、「亜佐美ちゃんも茜ちゃんも久しぶりだね」と声をかけた。
「一ヶ月ぶりくらいかな」と亜佐美は答え、「今日のお蕎麦、夏なのに香りがするね？」と聞いていた。「亜佐美ちゃんにはニュージ

ーランドの新蕎麦粉かな」と女店員が言っている。その後も厨房から従業員が出てきては一言、二言亜佐美や茜に声をかけていく。

「蕎麦のお代わりはいかがですか？」と保坂も聞かれたので「もう一枚いただいていいですか？」とせいろのお代わりをした。

年配のここの亭主だと思わせる風格の男性が出てきて、「亜佐美ちゃん、新粉だってわかったんだって？やっぱりわかると思ったよ」と気軽に声をかけてきた。「だって、香りがたつじゃない。誰でもわかるよ」と亜佐美も気楽に応えている。

「そちらの方は？」と言う質問に保坂は蕎麦をむせそうになった。慌てて、「保坂と言います。二条さん達とはご近所で、今日はここに連れてきていただきました」とはっきり返した。「で？」とその先を促すので、亜佐美がすかさず「お友達なの。今日は茜と私にご馳走してくださるって言うから、茜がここの蕎麦が良いってことで」と答えた。

店が立て混んでることもあって亭主はそのまま「ごゆっくりしていって下さい」とだけ言って厨房に帰っていった。

蕎麦湯を啜りながら、「茜ちゃん、このあと夏休みはどうするんだい？」と保坂は茜に聞いてみた。「宿題だけだよ」と茜は肩を落として言った。

「何かしたいことはないのかい？」

「えっとね、国語のドリルが欲しい。漢字をもっと覚えたいから」

「それだけなの？」

「算数のドリルも欲しい。もっといろんな計算を覚えたいの」と亜佐美がびっくりするようなことを言っている。

「茜、あなた、お勉強がしたいの？」と聞くと「うん」と頷いた。

駐車場に停めた車に戻りながら、「びっくりしたわ。茜がお勉強好きだなんて」と亜佐美はまだ驚いている。

保坂は「このあと、茜ちゃんのドリルを買いに行かないか？帰り道

に大きな本屋があるでしょ」と提案した。
「私どんなドリル買って良いかわからないです」と亜佐美が言うので、「茜ちゃんが選べると思う。僕もお手伝いするから」と保坂がかってでた。
そのまま本屋に行くことになり、茜は嬉しそうだ。

本屋に到着すると一緒に子供の教育書コーナーまで行ったが、保坂に任せて亜佐美はカメラ雑誌を見てくるといってその場を離れた。
茜が勉強好きだとは思わなかった。姉に似たのだろう。そういえば茜の成績はよかったと思い出して、なぜ早くそのことに気がついてやれなかったのかと亜佐美はちょっと落ち込んでいた。
カメラ雑誌を手にとっても集中できずになんとなくページをめくっているだけだった。
後ろから、「お待たせしました」と保坂の声が聞こえたときドキっとして飛び上がりそうになった。振り返ると茜が5冊のドリルを抱えている。
保坂が亜佐美が手にしている雑誌を取り上げて、「カメラ、興味あるんですか?」と聞いてきた。「ブログ用に写真を撮りますので」と言うと、「僕も昔ちょっと凝ったなあ、カメラ」と言いながら雑誌を棚に戻した。どうやら単に見ているだけなのを感づかれたらしい。
茜が「あーちゃん、はやくレジ行こうよ」と言って手を引くので、皆でレジに向かった。

帰り道、茜と亜佐美は保坂にお礼を言って保坂の住むマンションの前で彼を降ろした。
ようやく家にたどりついたときは亜佐美はぐったりしていた。
お菓子レッスンから始まり、最後の本屋まで濃い一日だった。
明日は何も予定も無い日曜日だ。のんびりしようと亜佐美は思った。

29　兆し

月曜日、お昼前に伯父の事務所に茜を連れて行った亜佐美は伯父にお茶を淹れていた。
茜はとっくに伯母に誘われて買い物に出かけている。
「伯父さん、何か言い難いことがあるんじゃないの？」と水を向けてみる。
「うん、まぁ、そうだな」とソファーに座った伯父は亜佐美にも座るように促した。
伯父の前にお茶を置き、自分用にも淹れたお茶を啜って伯父の言葉を待った。

「いくつかあるんだが、そうだな、まず茜のことだ」
「茜の？」
「茜の父親には連絡取ってるのか？」
「ううん。とっくに縁の切れた人だもの」
姉はまだ茜が2歳になる頃離婚して実家に戻ってきた。
それから亜佐美は義兄だった人に会ったことは無い。
養育費のこともあるので姉は連絡を取っていたようだが、義兄が海外赴任になったと言うのは聞いたことがある。
姉の持ち物を調べれば連絡先くらいわかるのかもしれないが、亜佐美は調べようとも思わなかった。
「彼から連絡があったんだ」と伯父は言った。
「いつ？」と亜佐美が聞く。
「ちょうどお前たちがＴＤＬに行ってた時だ」
今更何の用があるというのだろう、とっさにその言葉がでそうになったが、よく考えてみれば茜のことしか用は無いはずだ。出掛かった言葉を亜佐美は飲み込んだ。
「由佳が死んだことを彼は知らなかったぞ。茜のことでメールを送

ったが、由佳に何度もメールを出しても返事が無いのでこっちに連絡してきたんだ」
「そうなんだ。でも何で伯父さんのところよ」
「親父さんの事務所に電話してももう無い電話になってるだろ。で、俺のところを覚えてたってわけだ」
「ふ〜〜ん。で、どんな用なの？」
「まぁ、今はショックになってはっきりとは言えないけどいずれ茜を引き取りたいと言っていた」
「どういうことよ、海外じゃないの？それとも日本に帰ってきた？」
「まだアメリカだそうだ。当分あちらで居るようだよ」
「なんかピンと来ない。アメリカでクレイマークレイマーするって？」
どうやって父娘二人で暮らすというのか、亜佐美には現実感のない話だった。
「どうする？お前が話すか？」
「ん〜〜、しばらく伯父さんに頼める？」
「わかった。ただ、お前のところの電話、昔と変わってないから彼が電話しようと思えばできると思うぞ」
「はい、わかりました。気をつけておくね。しかし一体今頃どういうわけかしら。茜も覚えてないくらい昔の人だよ」
「茜の父親だ。娘のことは忘れないだろうよ」
親とはそういうものだと伯父は言った。亜佐美は気分がずんと重く沈むのを感じていた。

「さて、次の話だ。その前に、これ更新の契約書」と言っていつものように賃貸物件の書類とお金を伯父が渡してくれた。
「確かに。いつもありがとうございます」と中を確認して鞄に仕舞った亜佐美は、伯父の話がこれだけじゃないことを感じ取っていた。
「次は、ま、不動産のことなんだが」と伯父は切り出した。

「隣駅の大きな工場知ってるだろ？」
「あ、A社の？」亜佐美は保坂を思い出してドキッとした。
「先週、そこの会社の人が来て工場を拡張したいと言うんだ」
「うん、そういう方向らしいね」とさりげなさを装いながら伯父の話しを待つ。
「で、あの工場の横の空き地さ、今資材置き場として貸してるだろう？」
「あ、そういえばそうだった」
「その場所にも建物を建てたいと言ってきた」
「そうなんだ。いいんじゃない？あの土地はいびつだから借りてくれるんだったら嬉しいけど？」
「そうだな。資材置き場よりも建物のほうが高くとれるし」
土曜日に保坂が話していたことはこれなんだなと思った。彼は亜佐美がどんな立場にあるのか知っているようだ。
「賃料は伯父さんが相場を考えてよいと思える数字だしてくれるでしょ？」
「あぁ、それは問題ない。先方は貸すのが嫌なら買ってもいいと言ってるんだ」
「ん～～、私は貸すほうがいい」
「そうだな。じゃ、この物件は貸しの方向でいくよ」
「はい、よろしくお願いします」
「それから工場拡張にあたって、従業員も他所から移動して増えるらしい。賃貸住宅のほうもよろしくと言っていた」
「A社が保証人になってくれるなら、便宜を図っていいんじゃない？どうせこっちに親戚居ない人が多いんだから」
「わかった。俺のところの物件と一緒にリストにしておくよ」
「はい、よろしくお願いします」と亜佐美が頭を下げると、「ほんと、お前はぼんやりしているようで実はしっかりしてるよ」と伯父が笑っている。
「え～？何が？」と亜佐美も笑って答えると、「自分に何が得なの

かがわかってるって言ってるんだ。目先のことだけを見ないから、お前は安心だ」と言って言葉を続けた。

「で、A社のことは知ってるか？」
「大きいってことくらいかなぁ」
「A社グループの社長は保坂と言うんだ」
「あれ？保坂・・・さん？」
「お前知ってるのか？」
「あ、うん。社長じゃないけど、たぶん私の知ってる人は同族だと思う」
「こっちの工場に三男坊が居るらしい」
うっと亜佐美は胸が詰まった。たぶんあの保坂さんだ。
「何歳くらいの人？」
「たぶん３０前後だろう」と伯父が言った。
亜佐美はちょっと考えてからバッグから一枚の名刺を取り出した。
「伯父さん、これ」
「ん？」受け取った伯父はしばらく考えている。
「これがその三男か」
「たぶんね。伯父さんも会ったことあるよ」
「むむ～～？」
「いつだったか、茜がプチ家出したときに公園で声かけてくれた人だよ（笑）」
「あー、あいつか。そういえば保坂って言ってたか？」
「たぶん、名前名乗ったと思う」
「そうか。しかし何で亜佐美が持ってるんだ？この名刺」
「えっとね、友達になったから」
「何？どういうことだ？」
「あの公園の前に住んでて、毎朝うちの前を通ってて、顔見知りになったのよ」
「で、すぐに友達か？まったく今の若い者は・・・」と伯父は亜佐

美を睨んでいる。
「その後でいろいろ話すようになって、あのタウン紙を見てくれて、今はあの工場の社員食堂の献立作りの打診を貰ってる」
端折れるところは全部端折って、簡単に伯父に説明した。
「気をつけろよ。相手はＡ社だ」
「何もせずに大きくなったわけじゃないって言うんでしょ？」
「あぁ」
「うちのパパもいつもそう言ってた」
「そっか、弟の教えか」そう言って伯父は満足そうに笑った。
「でもね、あの人悪い人じゃなさそう。こっちにあまり友達居ないんだって。仕事ばかりしているようだし、あまり休みも無いみたい」
「じゃ、どうやって交際するんだ？」
「伯父さん！友達だってば、友達！」
「ほう、お友達からってやつか・・・」
「違うってば！」と否定しながらも、本当は友達からってことなのかな？と亜佐美はふと思った。

ほどなく伯母が茜と戻ってきた。茜は水着を買ってもらってご機嫌だ。
伯母と交代で伯父と一緒に昼食に行くように言われたが、茜に余計なことを言わせたくなかったので、その日はそのまま茜を連れて銀行に行くと早々に退散した。

伯父から渡して貰ったお金を入金して、亜佐美は茜とドライブがてら農家に行くことにした。食材の仕入れである。
いつものように同級生の実家である農家に立ち寄り、ついでに近くだったのでＪＡにも茜を連れて行った。
ＪＡのカウンターにはいつもの女性が居て、亜佐美を見ると「ちょ

うどよかったわ」と言って手招きした。
「今日は苗を見に見に来ただけなの。予定通り水曜日にも来ますから」と亜佐美が言うと、
「ううん、今日ね、作ってもらう予定の野菜が届いたのよ」
「あら」亜佐美が驚いていると、「持って帰って、これで作ってみてくれる?」
ＪＡにはまだ市場には珍しい野菜が時々入荷する。新商品的にこれから種や苗を各農家に紹介するために、実際に使用して完成品を作るのが亜佐美の新しい仕事であった。
「それだけじゃ作れないだろうから、他に必要なものも選んでここに置いてくれる?」とカウンターの上をパンパンと手で叩きながら、
「伝票書くから」と言ってくれた。
茜を従えて野菜を選び言われたとおりにカウンターに置くと、「じゃ、あとは頼んだわよ。私もこれで肩の荷が降りたわ」と嬉しそうに言われた。

車に積み込んで伝票の控えを貰いに行くと、「前にも言ったけど、ここの材料は無料ね。ＪＡが払うから。他に必要なものを買ったらレシート持ってきてくれればいいから。
でも、あまりたくさんは出ないよ。亜佐美さんにも少ししか払えないけど、その代わりＪＡの仕事してますって適当に使ってよいからね」と笑っていた。
「じゃ、出来次第持って来ます」と言って亜佐美と茜はＪＡを後にした。
あまり見かけない食材は市販では高く、野菜の収穫期に左右されるものの亜佐美にとって嬉しいものだ。すでにブログにも時々載せていいと許可も取ってある。
報酬は僅かだけれどやってみたい仕事だった。

30　配達

保坂の会社にお弁当を納める日、亜佐美はかなり早起きをした。
前日に下ごしらえは済ませているけれど、いつもより数が多いので調理に時間がかかる。
お弁当容器は使い捨てのものだ。一回限りのオーダーなのでコスト高になるけれどそれは仕方ない。
女子用の3個はナチュラル素材のもの、男子弁当の6個は量が入るもの、シニア向けは長方形で和風のものを用意し、3つのグループに分けて置いた。

魚類、肉類、野菜を別の調理法で作る。今回ご飯はどれも普通の白米だ。卵焼きはどれにも必須だ。
おかずを次々に作っていき、完成するとお皿に乗せてダイニングテーブルに並べた。
全部できたら詰めに取り掛かる。まずはご飯を詰めて冷ましておく。ご飯が冷めるころにはおかずも冷めるので一気に詰めて蓋をした。
予め印刷しておいた可愛い献立をお弁当に添えて包んでいく。買い置きがあったので小さなお手拭とお箸も一緒に包んで完成だ。
一度きりの注文なので、納品書よりも請求書でいいだろうと思う。
その請求書と共に今回使った素材と調理するうえでどういう点に留意したかを簡単にコメントしたレポートもつけた。

キッチンの片づけをしてもまだ充分時間はあった。
残ったもので茜と自分自身のお弁当も作りテーブルの上に置いて、亜佐美は手早く身支度を整えた。
お留守番の茜にいくつか注意を与え、持ち物を確認して車のハンドルを握った。
今まではのほほんと暮らしてきたが、なぜか今日が亜佐美のスター

トになるような気がしていた。

予定の１０分前にＡ社の工場に着いた。正門の手前でわき道に入り、資材置き場になっている場所を確認する。建物を建てたいと言ってきた場所だ。

広さはあるものの、用水路の際の細長い土地であまり使い道がない。今はＡ社のトラックとか板パレットとか木材が少し置いてあるくらいだ。

一通り見渡してから車に戻り、予定時間ちょうどに正門に車を乗り入れた。

亜佐美が名乗ると守衛さんが車を正門の横に誘導し、「保坂チーフに連絡をとるのでしばらくここでお待ちください」と電話に手を伸ばしたとところに、保坂がやってくるのが見えた。保坂はゴルフ場で見かけるような電気カートに乗ってやってきた。

「今日はご注文ありがとうございます」と言ってお弁当を渡そうと車のトランクを開けると、保坂は後ろを振り返り「同じ部署の小阪です」と若い男性を紹介してくれた。

どうやら保坂の部下のようである。「こちらは今日のお弁当を作ってくださった二条さん」というと、「今日は皆で楽しみにしておりました」と挨拶してくれた。

小阪がお弁当をトランクから出して電気カートに乗せている間に、保坂が「二条さん、少しお時間ありませんか？それほど手間はとらせませんからうちの食堂を見ていってくださいませんか？」と聞いて来た。

「午後のＪＡでのミーティングがなくなりましたので、時間は大丈夫です」亜佐美がそういうと満足そうに頷いて、「シニア向けのお弁当はどれですか？」と言うのでひとつ取り出すと、「それだけは持っていきましょう」と保坂が手に取った。

「小阪、カートで戻って良いからお弁当を持っていってくれ。１２時には戻るからそれまで開けないように」と言って亜佐美をエスコートする。
小阪は慎重にゆっくりとカートを運転して行ってしまった。
「さあ、僕も１２時には戻らないと皆に拗ねられるからはやく食堂をご案内しましょう（笑）」と言うので亜佐美は笑ってしまった。
亜佐美の車は正門横に置いたまま、今度は保坂の運転でもう一台の電気カートで食堂棟に移動した。
食堂はもうお昼を食べる従業員でかなり混雑していた。
「交代で食べるものですから１１時半から１時半までは混むんです」と保坂が説明した。
厨房は業者と提携しており、今は外部の会社が調理を請け負っているらしい。
メニューや器、厨房設備を遠くから一通り確認した亜佐美はいろいろ考えているようで口数が少なかった。

「じゃ、もう一箇所行きましょう。食堂はまた後日ゆっくりとご案内しますので」と保坂が亜佐美を誘導する。
再び電気カートで別の棟に移動した。そこは工場というより感じのよいオフィスのようだが、誰にも会わずに奥深い部屋に到着した。
保坂がドアをノックすると女性の声で「どうぞ」と声がしてドアが開いた。
「居る？」と保坂が聞くと、「はい。今は大丈夫ですよ」とその女性が電話を取り上げて「保坂さんがいらっしゃいました」と伝える。
電話を置くと、「どうぞそのままお入りください」と保坂と亜佐美に言った。

「お弁当を届けに来ました」と保坂が言いながらドアを開けると、奥の大きな机に中年男性が座っていた。
ゆっくり顔を上げて保坂を見て、それから亜佐美のほうに目を向け

た。

「ご紹介します。二条亜佐美さんと言います。今日のお弁当担当者です」と手短に亜佐美を紹介した。

保坂は亜佐美を大きな机の前に誘導する。

中年の男性が立ち上がって亜佐美に「工場長の長谷川です。今日はご苦労様です」と手を出した。

亜佐美はすごくびっくりしたものの、なんとか手を出して握手をした。緊張で手が汗ばんできたので余計に緊張してしまった。

「二条亜佐美と言います。今日は保坂さんにご依頼いただきお弁当を作らせていただきました。お口にあうとよろしいのですが」と挨拶したものの、声が震えないようにするのが精一杯だ。

保坂は、じゃ、「これお弁当です」と工場長の机に置き、「表の彼女に二条さんを正門まで送ってもらってもいいですか？僕はこれからお弁当の試食があるので」と早口で言った。

「あ、いいよ」と気軽に応えた工場長は、入り口にいた女性に「このお嬢さんを正門までご案内して差し上げて」と声をかけてくれた。

「外にカートを停めてあるので、それ使ってくれたらいいから。正門に乗り捨ててね」と保坂も声をかけて、「じゃ、二条さん、僕はここで失礼します。お弁当の感想はまたあとで送ります。慌しくて申し訳ない。ではっ！」と言ってあっというまに出て行ってしまった。

亜佐美は保坂の出て行ったドアに向かってお辞儀をした。

「では、こちらに」と言って工場長が部屋の外までお見送りしてくれた。

「秘書の菊池です。そうだ、菊池さん、僕が二条さんを届けるよ。あなたは別のカートを見つけて正門まで来てくれる？」と言って亜佐美を正門まで自ら送ってくれると言う。

亜佐美が恐縮していると、「弁当も気になるが、弁当は逃げないだ

ろう?亜佐美さんは今度いつお目にかかれるかわからないからな」と言って亜佐美の先に立って歩き出した。

亜佐美が菊池さんと言われた人に頭を下げると、菊池さんは感じよくニコリと微笑んで「先いらしてくださいね」と言ってくれた。慌てて工場長のあとを着いていく。亜佐美が追いついたところで、工場長は歩調を緩めて、亜佐美と並んで歩き出した。

「保坂とはどこで知りあわれたのかな?」と長谷川が聞いて来た。

「保坂さんと家が近所で顔見知りになりました。その後タウン紙を見てくださって、私のお料理ブログも見てくださって、それで今回のお弁当を注文していただきました」と亜佐美は澱みなく答えた。

「そうでしたか」とだけ長谷川は言って、建物の外に乗り捨ててあった電気カートに亜佐美を乗せ、自らハンドルをとった。

次に「二条さんとおっしゃいましたね。二条さんというのは隣駅前の不動産屋さんのご親戚ですか?」と聞いた長谷川に、やっぱり工場長只者じゃないと亜佐美は思った。

「はい、不動産の二条は伯父にあたります」と答えた。

「では、保坂の住む駅前の二条さんは?」

「はい。その駅前で同じく不動産をしていたのは両親です」

「そうでしたか。いつもお世話になっております。ご両親様のことはお気の毒でした」と工場長はお悔やみを言ってくれた。

「有難うございます」亜佐美がお礼を言ったとき、工場長が運転するカートが正門に到着した。

亜佐美に手を貸してカートから降ろすと、「今後もよろしくお願いします」と工場長が頭を下げた。お弁当のことなのか、資材置き場になっている土地のことなのかわからなかったが、「こちらのほうこそ、至りませんがよろしくお願いします」と亜佐美も頭を下げた。

車に乗るように促すので、「今日はありがとうございました」ともう一礼して車に乗り、工場を後にした。

帰り道、正門が見えなくなってようやく、「ふ〜〜っ」とため息がこぼれた亜佐美は、どっと疲れを感じた。
早く家に帰って茜と一緒に冷やしてあるゼリーを食べようと、それだけを考えながら運転したのだった。

31　夏の日々

亜佐美がお弁当を配達した日の夜、保坂は仕事の帰りに亜佐美の家に立ち寄った。
「もう、遅いからここで」と入り口で立ったまま保坂はお弁当の代金が遅くなったことを詫びた。
「あの時は時間がなくて焦っていたものですから、すっかり失念していました」とぴったりの金額を封筒にいれて渡してくれた。
「いかがでしたか？あれでよかったでしょうか？」と亜佐美が聞くと、「メールにも書きましたが、大好評でした。もう少しリサーチをして企画書を作るつもりです。秋ごろになりますが、少しお待ちいただいてもよろしいですか？」
「はい、それは構いませんが。保坂さん？」と亜佐美は少し首を傾けて保坂を見上げ睨んだ。
「はい？なんでしょう」と保坂が応えると、「また敬語です」と言ってクスクス笑った。
「あ、仕事の話でしたからね。でも今から敬語は止めます。できるかぎり」
「なんか言い分けっぽいです（笑）」
保坂の口の端が持ち上がって「敬語は僕のデフォですからね。頑張りますけど、イマドキの若者のようなタメ口とかは無理ですから、僕は」と宣言した。

「はいはい、頑張ってください」と亜佐美が言って笑っていると、
「あ、ほっちゃんだ。こんばんは」と茜が気がついて外に出てきた。
「茜ちゃん、こんばんは。遅くまで起きているんだね」と保坂は茜に話しかける。
「お昼寝したから眠くないのよ。でももう寝る準備はしてるけどね」と得意そうに言った。

「あ、そうだ、かなりドリルやったんだよ。一度見てみる？」と保坂に言うと、保坂は「もう今日は遅い時間なので週末でいいかな？」と茜に聞いた。
「ほんと？やったぁ！土曜日？日曜日？」と言うので「茜、保坂さんはお忙しいから無理言ちゃだめ」と亜佐美が嗜めた。
「う～～ん、今のところどちらになるかわからない。明日にでも亜佐美さんに連絡するよ。それでいいかい？」と茜に言っている。
「はい、楽しみ～～」と茜が喜ぶのを見て、亜佐美は保坂に「すみません。ご無理しないでくださいね」と言った。
「僕も楽しみであるんだから、大丈夫です。それにちょっと勉強をみてあげたいし」
「じゃ、無理のないようでしたらお願いします」と亜佐美が言った。

保坂はそんなやりとりを思い出しながら夜道を部屋まで歩いて行ったが、自然に口元が綻んでいる。
以前は仕事のことばかり考えながら歩いていた同じ道を、今は亜佐美や茜のことを思い出して歩いている自分に気がついた。
と、同時に、自分はいったいどうしたいんだろう。どういう人生を作り上げてゆくのかゆっくり考えてみないといけないなと作戦好きの保坂は思った。

茜はお天気のよい日は学校のプールに通っていた。行き返りを一緒にする友達も出来たようだ。勉強も頑張っている。どんどん知識が増えていくのが楽しいらしい。
亜佐美はＪＡの仕事を終わらせて、女子大生に頼まれたおデート用弁当を作ったり、女子高生のためのお菓子作り教室第二弾などを楽しくこなしていた。保坂からもお弁当についての感想も届いたが企

業の分析とは凄いものだとそのレポートを読んで感心していた。
社食の献立作りはまだ先になることもあって亜佐美はいまのところ情報を集めるだけにしている。
毎日のように保坂とはメールか電話で話している。少しずつ言葉も敬語がなくなってきて、気軽に話せる友人同士のように話せるようになってきた。
あるとき、亜佐美は夏休みの間に茜をちゃんとしたレストランに連れて行く計画があるのを保坂に話した。すると保坂も参加したいと言う。
お盆休みは保坂は実家に帰って過ごし、亜佐美と茜はお墓参りと伯父の家に行っていた。
保坂は休みが終わってこちらに戻るときに実家に置いていた車を運転して帰ってきていた。レストランに行くときはお迎えに行きますという。亜佐美も最近は遠慮がなくなって、「じゃ、お願いします」ということになった。
どのレストランが良いのかも二人で相談した。テーブルクロスを使ってる店で、でも比較的カジュアルなフレンチレストランを選んだ。場に慣れる練習でもあるということで個室ではなく一般席を予約する。お店のほうには9歳の子供を同伴してもいいかと予め伝えると、もちろんでございますということだった。

もう夏休みが終わりに近いある週末、いよいよ茜をレストランに連れて行く日が来た。
亜佐美は茜に東京のデパートで買った服を着せ、自分も少しお洒落して保坂の到着を待っていた。
時間通りに現れた保坂は、スーツではなく品の良いブレザーを着ていて茜が思わず「ほっちゃん、カッコ良いね」と亜佐美に同意を求めるように言って手を引っ張った。
保坂は小さな花を二つ持ってやってきた。一本はミニチュアの向日葵でそれは茜に、亜佐美にはスイトピーを数本束ねたものだ。男性

に花など貰ったことがない二人はそれだけで有頂天になってしまう。
大急ぎでキッチンに行くとグラスに水を入れて花を挿した。
保坂の車は大きなＲＶだった。ドアを開け、茜を手伝って後部座席に乗せた保坂は、「そのパネルでＴＶやＤＶＤが観られるようになってるから」と操作をしてディズニーの映画をスタートさせた。
茜は「凄いね！ありがとう」と言って喜んでＤＶＤを観始めた。

「さて、亜佐美さん。こちらへ」と言い、助手席のドアを開け亜佐美を座らせる。
その後も和やかに亜佐美と話をしながら実になめらかな運転だった。
レストランに到着した後もさりげないエスコートで気を配り、さすがの亜佐美もこの人はこういう場面にすごく慣れているんだと気がついた。
茜にプレッシャーを与えないほうが良いということで、ちょっとお洒落なレストランに行くからねと言っただけで情報を与えることなく連れてきた。
ナイフやフォークが並んでいて緊張するかなと思っていたが、茜はそれほど気にならないようだ。料理が運ばれてくると目を見開いて嬉しそうな顔をしてから食べ始めた。

食事中、３人はお盆休みの出来事を話した。先ほど車内で茜が観ていたＤＶＤは兄の子供たちから借りたことや、保坂の以前の車は小さい車種だったので、今回家族に交渉してＲＶと交換してもらったことなどを聞くと、あの豪華なＲＶとトレード出来るほどの小さい車っていったいどんなのだ？と亜佐美は思ったが、知れば心臓に悪いような気がして小さな疑問は胸の中に仕舞っておくことにした。
茜は水泳で３０ｍ泳げるようになったことや、プール通いで出来た新しい友達の話をした。
亜佐美はスーパーのチラシ用の料理撮影の話を保坂に聞かせた。
デザートも食べてしまうと動くのが億劫になるくらいお腹が一杯に

なった。

「じゃ、少し散歩してから帰りましょう」と保坂は途中のショッピングセンターで車を停めた。ガラス越しに店を覗きながら先に歩く茜を見ながら、保坂と亜佐美はその後をゆっくりと歩く。

「先ほどはご馳走さまでした。私が出そうと思っていたのに・・」と亜佐美は保坂にお礼を言った。レストランで会計をしようと思ったら、いつのまにか保坂が支払いを済ませていたのだ。

「今日は僕に良い想いをさせてください。素敵なレディー達にご馳走できるのは喜びですから」保坂はニコリと微笑んでキザなことを言う。

「でも、いつも気にかけてもらってばかりで・・・」と亜佐美が恐縮しているので、「では、こうしませんか?」と保坂が提案した。

「今度、亜佐美さんの作った料理を食べてみたい。だめですか?」と言う。

「え?そんなのでいいんですか?」と亜佐美が答えると、「亜佐美さんのお弁当美味しかったですよ。毎日仕事してると他に楽しみないですからね。時々あのお弁当を思い出して食べてみたくなるんですよ」と保坂が言った。

「わかりました。保坂さんのお好きなものを作りましょ!」と亜佐美は笑いながら請け負った。

保坂の運転での帰り道、茜がやけに静かだと思ったら後部座席で寝てしまっていた。

家に到着して起そうと思っていると、保坂が茜を部屋まで運ぶと言ってくれた。

保坂が茜を抱き上げたので、亜佐美が玄関を開け茜の部屋まで案内する。

「ほんとうに有難うございました。私一人だったら無理でしたので助かります」そうお礼を言って、「お茶でもいかがですか?」と保

坂に聞いた。
保坂が「いや、今夜はもうこれで失礼します」というので再び玄関に向かった。

玄関には脱いだ靴がそのままになっていたので、亜佐美は保坂の靴をそろえて立ち上がると、すぐ近くまで保坂が来ていたので驚いてよろけそうになった。
保坂はとっさに亜佐美の腕を掴み、もう一方の手で亜佐美の腰を支えた。
亜佐美が一人で立てるようになっているにも関わらず、保坂はしばらくそうしていた。
「亜佐美さん」と保坂が小さな声で囁く声が亜佐美の頭の上から聞こえる。亜佐美は返事はできなかったが身じろぎをして声のほうに顔を向けようとすると、「いや、そのままで」と保坂が言った。
「今夜の貴方はお洒落をして、とても素敵です。これで帰らなければ僕は・・・」最後まで言わなかったが亜佐美はその意味がわかって緊張してきた。
「亜佐美さん」保坂がつぶやくように言った。今度は亜佐美は顔を上げて保坂を見た。
ゆっくりと保坂の顔が近づいて、保坂の唇が亜佐美の柔らかい唇に重なってすぐに離れた。
保坂の顔が近づいている間に亜佐美は拒むこともできたはずだ。でも亜佐美はそうしなかった。

保坂が「おやすみなさい」と言ったので亜佐美も「おやすみなさい」と言ったが、声が掠れて聞こえたかどうかはわからない。
靴を履いてドアを閉めるとき、保坂は鍵を指差して「鍵閉めてくださいね」と言って亜佐美が頷くのを待っていた。
やがて扉が閉まり亜佐美は言われたとおり鍵を閉めた。保坂はその音を確かめてから車に戻った。

31　夏の日々（後書き）

とうとう保坂はガマンできなくて亜佐美にキスしちゃいました。ようやくです。

32　二度目のキス

あれから亜佐美はどうやってベッドに入ったのかあまり覚えてなかった。
寝つきが悪かったせいで目が覚めてからもぼんやりしている。
遠慮がちなノックが聞こえて茜が部屋に入っていた。
「あーちゃん、具合悪いの？」
「あ、おはよう。ううん、大丈夫だよ。ちょっと寝坊しちゃっただけ」
「お腹空いた・・・」
「あ、ごめんね。今起きるから」
そのまま茜と夕べの話をしながら手早く着替え、「茜も手伝ってね」と言って朝食の支度を始めた。
「今日はパンにしよう」と言いながら野菜と卵を取り出して簡単なサラダとスクランブルエッグを作る。
その間に茜はパンをトースターに入れて、飲み物を出していた。
「あーちゃん、水っ！！レタス流れてるよっ」
「あ。いけない！！」
「信じられない、あーちゃんがレタス流しちゃうなんて」と茜は呆れていた。
ボールに水を入れながらそこにちぎったレタスを放りこんでいたのだが、水が溢れても気がつかずにレタスが流れ出していたのだ。
夕べ保坂とキスしたことを思い出してたとは言えず、「うん、まだ寝ぼけてるかも」とつぶやきながらスクランブルエッグを焦がさないように仕上げ、お皿に移すとテーブルに置いた。
簡単な食事を終えてコーヒーを飲みながら茜に夏休みの宿題のことを聞いてみた。
「茜、宿題はしてるの？」

「うん、もうほとんど終わった」
「あとは何が残ってるの？」
「えっとね、絵日記だけかな」
「え～～、残っているの？」
「日記は休みが終わるまで書くんだからできてないよ」
「それはそうだね（笑）」
「今から昨日の絵日記書くよ」と言って茜は自分の部屋に行ってしまった。

茜が居なくなったダイニングテーブルで亜佐美はまた夕べのことを思い出してしまった。
保坂はなぜキスをしたんだろう。おやすみの挨拶だったのかな。いや、いくらなんでも日本でおやすみのキスを唇にすることはないだろう。好きってことかしら。
亜佐美の頭の中でぐるぐるといろんな考えが浮かんでは消える。
単に触れてすぐに離れていった。あっという間の感触に戸惑っているうちに保坂は帰ってしまった。
あの時は離れないでと引き止めたい気持ちが少しあったんだよねと亜佐美は思う。
テーブルに肘をつき、手のひらの上に顔を乗せた亜佐美は深いため息をついた。
『私、保坂さんが好きなんだ』
知りたくないことを知ってしまった気分だ。
保坂はきっとA社の御曹司として別世界の暮らしをしてきたはずである。あの顔だし、さぞやモテることだろう。それに引き換え私はこんな田舎町の２５歳の冴えない普通の女。後ろ盾になる親も居ないうえに未婚で子供付きだ。どう考えても幸せな未来には繋がらない。
解っていても話したり会ったりするのは止められない。話せば話すほどまた話したくなり、話すと会いたくなるのだ。

とりあえずこのままで、でも慎重になろうと亜佐美は思った。

うだうだしていても気分が落ち込むので洗濯をすることにした。
茜と自分の寝室に言って、ベッドシーツを力いっぱい引き剥がす。
洗濯機に放りこんでおいて、換えのシーツを取り出す。作業をしていると、携帯が震えた。メールを受信した携帯を握り締めてドキドキしながら開けると、亜佐美が予感したとおり保坂からのメールが届いていた。
『おはようございます。日曜日ですが出勤しています。差し支えなかったら仕事が終わってからお電話してもいいですか?』とあった。
こころなしか保坂はまた敬語が戻ってきているようだ。しかも夕べのことに何も触れていない。
すぐに返事を出すのも癪なのでそのままにして、とりあえず掃除と部屋の片づけを優先させることにした。

朝が遅めだったこともあり、お昼は簡単に素麺にした。
食べながら茜に「ねぇ、今夜はカレーにしない?」と言うと、「うん、いいよ。カレー大好き!」と二つ返事だ。
「じゃ、茜、作るの手伝ってくれる?」
「うん、手伝う〜」
「創作カレーにしよう。茜の好きな材料で新しい味のカレーに挑戦しようね」
「え?創作カレー?」
「うん、いつもはお肉と玉ねぎと人参とジャガイモでしょ?今日は違うものを入れて作ってみない?」
「ふ〜ん。大丈夫かな?」
「実験だよ、実験。あとで冷蔵庫の中を調べてカレーの材料決めようよ」
「うん、わかった」

食べ終わって、茜と一緒に冷蔵庫の食材を点検する。
横で茜が小さな手で玉ねぎを触るのを見ながら、女の子でよかったなと思う。一緒に料理できる今を大切にしたいと亜佐美は思った。
だいたい作るものが決まると、茜がアイスが食べたいと言って冷凍庫からバニラアイスを取り出した。
「部屋で食べてもいい？」と聞くので、「うん、いいよ。食べ終わったらカップはこっちに捨てなさいね。部屋のゴミ箱に捨てると蟻がくるから」と言うと、茜はアイスクリームを大事そうに持ってキッチンから出て行った。

そういえば保坂のメールがそのままだった。お返事しなくちゃなぁと考えながら亜佐美は携帯に手を伸ばした。
『こんにちは。今日も遅くまでお仕事されるのですか？今夜の夕食は茜とカレーライスを作ります。よかったら帰りに食べに来ませんか？お仕事が終わったらお電話ください』と書いて返信した。

保坂は亜佐美に何も聞かずにキスをしてしまったことを少し気にしていた。
あの時はビックリした顔が可愛かったと思うのと同時に、後になって何をされたのかわかった亜佐美が怒るかもしれないと心配だった。挨拶程度の触れるだけのキスは物足りなかったが、あれ以上は無理だったと思う。
保坂は学生時代から女性に関しては困ることがなかった。いつも女性のほうから話しかけてきたし、デートや食事もだいたいは女性のほうから申し込んでくる。
経験を積む毎に女性の表情で求めるものが解るようになった。好きと言ってと乞われれば好きだと言ってきたし、会いたいと言われれ

ば会う時間も作ってきた。でも保坂のほうから特に望む事はなく、それが相手には不足らしくていつも保坂は振られるのだ。
社会人になってからはこの街で特定の彼女は作ってはないが、デートの相手には困ったことが無い。
そんな保坂だが自分から会いたいと思う女性は亜佐美が初めてだった。

朝送ったメールに返事が来たのは午後になってからだった。カレーライスを食べに来ませんかと書いてある。
どうやら怒ってはいないらしい。
ニヤリとした保坂は凄いスピードで仕事を処理し始めた。

午後5時を少し過ぎたころようやく仕事が一段落したので帰り支度をする。
同時に亜佐美に電話を掛けた。
「はい」と亜佐美の声がする。
「保坂です」と言うと亜佐美は「はい」ともう一度言って黙っている。
きっと彼女は夕べのことでどんな顔していいのかわからないはずだ。
保坂はそう考えて「お夕食のお誘いありがとうございました。今、仕事終わりました。そちらに伺ってもいいですか?」と聞くと、少しの沈黙のあと「保坂さん、また敬語ですよ」と呆れたように言い返してきた。
なかなかいいぞと保坂は思いながら「あ、仕事してたらすっかりこんな言葉になってしまたみたいです（笑）」と悪びれずに言うと、「敬語使ったらお夕食は取りやめですからね」と亜佐美が返す。
「わかったよ。じゃ、今から会社出るけど、今日は車なんです。亜佐美さんのところに駐車場ありますか?」
「はい、玄関の左側がガレージなのでそこに止めてください。ガレージ開けるから到着したら電話してください」

いつもの調子に戻ったのでほっと安心して、緩みそうになる頬を引き締めて帰りを急いだ。

夕食はほんとうにカレーライスだった。

茜との合作らしい。冷たいサラダとシーフードカレーライスだけの簡単な夕食だが、なかなか美味しいカレーで保坂はお代わりをしてしまった。

子供用なのか甘めのカレーだが、大人用に辛いスパイスが添えられている。

茜が実験カレーの話をして座を盛り上げ、保坂と亜佐美は聞き役だ。時々亜佐美が茜のスプーンやフォークの使い方を注意し、保坂にお代わりを勧める。

テーブルには昨日保坂が持ってきたスイトピーが真ん中を飾っていた。

食後、保坂はコーヒーを飲みながら茜のドリルを添削していた。

茜はほとんど出来ているものの、時々うっかりミスが見つかった。注意するべき点やミスに印をつけて返してやると、茜は「ありがとうございました」とお礼を言った。

「そうだ、茜ちゃん。昨日車で観たディズニーのＤＶＤ貸しておくよ。英語版があるんだ」と保坂が言うと、嬉しそうにした茜の顔が一瞬曇った。

「私、英語しらないもの」と言う。

「わらなくてもいいんだよ。観ていればいいから。何度も観て何度も聴くことが大事なんだ」と言って車からＤＶＤを降ろしてきた。

保坂の甥っ子のものだという。

保坂が持ってきたＤＶＤはシリーズになっていた。そのうちいくつか同じものの日本語版を茜が持っていることがわかった。

「甥っ子たちはこのシリーズ卒業したから、しばらく持っていて大丈夫だよ」と言うので有難く借りることにした。

茜がそれを持って部屋に行ってしまうと、リビングに二人だけになった。
保坂が亜佐美を見ている。亜佐美は気詰まりを感じて喉が渇いてきた。
「亜佐美さん、僕は明日からまた忙しくなります。あまりお会いできないですが、メールや電話は今までどおりしてもいいですか？」
と保坂が聞くので「はい」とだけ亜佐美は答えた。
「僕は、あなたが好きなんです」と保坂が言うと、亜佐美ははっとしたように保坂を見た。
「では、今夜はこれで」という保坂の後に続いてガレージまで来ると、保坂は亜佐美を振り返って手を取った。
「嫌じゃないですか？」というので首を横に振ると、保坂の顔がゆっくりと近づいて唇が重なった。夕べよりは長く重なっていたが、すぐに離れていく。
「おやすみ」保坂はそう言って車に乗り込むと帰っていった。

33　秋の夜1

それからの保坂はほんとうに忙しいようだった。
夏休みも終わり茜は二学期が始まっている。
朝は茜の見送りに門まで出ると保坂の姿を見かけることもあった。
そんなときはお互いにおはようと挨拶するだけで、茜が保坂と途中まで一緒に歩くのを見送るだけだ。
相変わらず数行のメールを送ってくるか、遅い時間に電話で話すことが二人の日課になっていた。
出張も多く、土曜日か日曜日のどちらかは出勤しているようだ。
保坂はたまに亜佐美のブログを観るようになっていて、亜佐美の日常はだいたい知っていた。
亜佐美は打診されている仕事の依頼や茜の勉強のことを相談したり、保坂は時々仕事で起こった話を面白く亜佐美に話して聞かせたりしていた。

そうやって何日か過ぎ、ある日の夜、いつものように保坂は仕事が終わってから亜佐美に電話をかけてきた。
「保坂です」
そういった声がやけに疲れているように聞こえて眉を顰めた亜佐美は、「まだお仕事しているのですか?」と保坂に聞いた。
「いや、今終わってこれから会社をでるところです」
「今から走ると終電には間に合うでしょうね」と辛辣に言うと
「ん～、今日は早いほうでしょ。まだ１０時過ぎだ。終電にはまだまだ余裕です」と保坂が返した。
「お夕飯は?」と亜佐美が聞くので、「途中で何か食べますよ」と答えると
「電車から降りたらうちへ寄ってくださいな」と亜佐美が言った。
「その分じゃお夕食はまだでしょ?簡単に用意しておきますから寄

ってください」
「いや、もう遅い時間だし・・・」
「何言ってるんですか。どうせ朝はコーヒーとパンで、お昼はコンビニでしょ？この時間はもう定食屋さんは閉まってるので、よくて居酒屋へタするとまたコンビニ弁当じゃないですか？」
「何にするか電車のなかで考えますよ」と曖昧に逃げようとしたが、いつもと違って亜佐美が強く勧める。
「私たちはもうとっくに夕食が終わってるので簡単なものしか作りませんよ。それに私の作るのはそれほど美味しいってわけじゃないですけどね」
「いや、絶対に美味しいです」
「じゃ、寄ってください？」
保坂は観念して「はい。もう会社でましたから。次の電車に乗ります」と言うと、「じゃ、お待ちしてます。私は準備があるのでこれで」と言って亜佐美は一方的に電話を切ってしまった。

保坂は手に持っていた携帯をまじまじと見つめてしまった。
亜佐美は時々急な思いつきで行動してしまう。
保坂の話を聞いている時でもそうだが、時々とんでもない発言や発想をして保坂を驚かせることがあった。
今も急にご飯に誘った自分の案に気をよくして、嬉々として料理を作っていることだろう。
そんな亜佐美の姿を想像し、盛大に口の端が持ち上がってしまった保坂だ。
駅に到着するとちょうどタイミングよく待たずに電車に乗ることができた。
そして亜佐美が「お疲れさま」と迎えてくれたときは、久しぶりにほっと気が緩むのを感じた。

リビングには良い匂いが漂っていた。

「今日はグラタンだったの」と言ってキッチンに行こうとする亜佐美の背中に手を伸ばして引き寄せてしまいそうになったが、保坂は思いとどまった。
まだ仕事モードから完全に離れてはいなかった。今日はあまり良い一日ではなかったのだ。
嫌な空気を亜佐美に移したくなかった。
保坂は上着を脱いでダイニングの椅子に掛け、シャツの袖を折り返して手を洗いに行くことにした。

洗面所から戻るとダイニングには夕食の準備が整っていた。
保坂が席に着くと、亜佐美がオーブンから皿を取り出して「マカロニグラタンよ」と自慢げに置いた。
「熱いから気をつけて食べてね」と言われたが、かまわず一口食べてみる。
「熱っ」と保坂が言うと、「だから気をつけてって言ったのに」と亜佐美が笑っている。
「うちはマカロニグラタンというと具はマカロニだけなの」と亜佐美が説明する。
「う〜ん、これはこれでシンプルで美味しいな」と保坂が言うと、「でしょ？その代わりサラダとか他のも作ったから」と言って、他のおかずも勧めた。
「で、今夜はこれどうかな？」とワインを取り出して見せた。
「明日も仕事と言うのはわかるけど、一杯くらいならいいんじゃない？」と言ってワイングラスを2個テーブルに置いた。
「どれ、かしてごらん」と保坂がワインを受け取って栓を抜いた。
「あ、やっぱり慣れてるわね。私はどうもまだオープナーの使い方がイマイチだわ」と言って亜佐美は自分のグラスを差し出してくる。
ワインを注ぎながら「グラタンに赤ワインは合うよ」と保坂が言うと、「よかった、私もそう思ったの。覚えておくね」と亜佐美が笑った。

保坂がグラタンを食べ始めると亜佐美はリビングに行き、音楽ＣＤを換えた。先ほどまでは軽いＰＯＰだったのに今度はボリュームを絞ってカンツォーネだ。
戻ってきた亜佐美は小さなガラスに入ったキャンドルをテーブルの中央に置いた。
「野菜も食べてね」と笑いながら言う。
小さなお皿にオリーブオイルとバルサミコ酢を注ぎ塩と胡椒を振り掛けて、切ったバゲットの横に置いて保坂に勧める。
亜佐美はゆっくりとワインを飲んでいる。保坂もワインを飲みながら勧められたものを黙って食べていた。

亜佐美がこういう食べ方はどうやって知ったのだろうか。イタリアのワインにカンツォーネ、冷えたサラダには珍しい野菜、バゲットの洒落た食べ方。美味しい前菜の数々にキャンドルだ。
急に保坂の胸にどす黒いものが湧いてきた。誰か他の男とこういうデートをしたのだろうか？亜佐美はまだ若い。きっと年上の男のほうが洒落たレストランにでも誘って口説いたことがあるのだろう。

「亜佐美さんはほんとお洒落な料理を作るなぁ」無意識に言葉が出てしまって保坂はぎょっとした。強い調子で言ったわけではなかったが、亜佐美が気分を害さないか心配だ。
「あら、ほとんどはブログで見たんですよ～」亜佐美はニッコリ笑いながら言った。
「友達のブログとかお料理サイトで、こういうお洒落な写真がたくさんあるものだから」
「そうなんだ」
「実際に食べに行きたいけど、夜は出かけないし、お昼だっていろいろすることがあるのでお洒落な店に行くことないですもの」
保坂はほっとしていた。

「それに今日はＪＡに行ったので珍しい野菜ももらったからラッキーかな」
「あぁ、ＪＡの献立の仕事だったね。まだ続いてるの？」
「はい。月に一度ですけど楽しくて」
ワインをそれぞれのグラスに注ぎ足していると、亜佐美は保坂の食べ終わったグラタンとサラダの皿をキッチンに持っていった。
バゲットと前菜を彩りよく並べ替えてそれをつまみながらワインを一口飲んだ。

「今日はちょっと仕事の話、聞いてもらって良いかな？」保坂が言うと亜佐美は小さく頷いた。最近は電話でも時々仕事の話を聞いてもらうのだ。回答がなくても誰かに聞いてもらうだけでよかった。
「お弁当を届けてくれた時にうちの社員食堂を見てもらっただろう？」
「はい」
「今ね、地元の業者に委託してる。これはもう話したよね」亜佐美は頷いて聞いている。
「毎年、年末に来年の分の契約更新をするのだけど、今度の更新を迷ってるんだ」
「他の会社にするってこと？」
「いいや、自社でやろうかと思って」
「ああいう食堂って業者にやらせたほうが安いんじゃない？」
「うん、まぁ、確かに。人材の確保や管理こともあるし地元の業者を使うってのも大事なので、今までそうしてきたんだけどね」
「迷ってるんだ？」
「うん。業者の社長にそれとなく打診してみたんだけど継続してやりたいって言うんだよ」
「やっぱり仕事切られたくないよ、社長は」
「そうなんだけど、うちの事情もあるし」
「東北工場の人たち？」

「それも大きな原因だな。被災者をなるべく安全な場所に移して仕事も与えて、暮らしを安定させたいんだけど、家族で引越しとなるといろんな問題があるらしくて。なかなか転勤をＯＫしないんだ」
「それはそうでしょうね。もちろんすぐにＯＫする人もいるだろうけど、したくないって人も多いだろうな」
「そうなんだ。交渉事が多くて。今日は食堂の業者の社長に粘られて参ってたところだった」
「それで元気がなかったのね」亜佐美は笑いながら保坂にワインを勧めた。

しばらく二人とも黙ってワインを啜っていたが、亜佐美が突然言い出した。
「保坂さん。いくら優良な大会社とはいえあの地震の影響は大きいでしょ？」
「それは・・・ね。もちろんたいへんな被害なんだ」
「だろうと思ったわ。こっちの工場の拡張工事だけでもたいへんなのに、全国規模だろうし」
そう言ったまま亜佐美はまたしばらく黙った。
沈黙は苦痛ではない。ワインのせいで少し赤くなった頬をした亜佐美の表情を見るのが楽しかった。
保坂もまた黙ってワインを一口飲んだ。
思いがけず長い夜になりそうだったが、電話だけでなくこうやって逢うことが嬉しい夜でもあった。

３４　秋の夜２

ワインをもう一口飲むと、亜佐美が突然口を開いた。
「保坂さん、食堂の業者のほうだけど」
亜佐美はまだ食堂について考えていたようだ。
「契約更新は年末だよね？」
「うん、そうだよ」
「じゃそろそろ交渉の時期なんだね。あのね、業者の社長さんにこう言うのはどうかな？」
亜佐美のストーリーはなかなか面白かった。
その会社を買収したいと社長に言って、会社を手放すかそれとも自分の会社を手放す意思がないなら契約解除かその社長に決断をさせろということだった。
従業員はＡ社で引き取るし、希望であれば辞めてもらっても良いと提案すれば良い。
会社を買えばその後はＡ社でどうにでもできるし、売らないならそのまま引き上げてもらって、１月までにＡ社でスタッフを構成して運営すればいいじゃないというのが亜佐美の意見だ。

東北工場の人が転勤し難いのは家族の問題が大きいだろうから、家族の仕事まであるとなれば生活ももっと楽になると考えるだろう。
実際若い夫婦は共働きでないとやっていかれないだろうから、夫婦共に働く環境があると知れば転勤話も少しはスムーズにいくはずだと言う。
亜佐美はこうも言った。「代々住み慣れた土地を一時的にも離れるのは、移動先に希望がないといけないんじゃない？離れてしまうと情報がなくなるという不安もあるだろうから、役所にも連携とってもらって、以前のところからの報告や連絡事項を遅滞なく届けてもらったり、ご近所さんだった家族との連絡網も作ったほうがいいし・

・・」

「それから、また食堂の話に戻るけど本社や他の工場も全部委託なの？」とも聞いて来た。

「A社の新卒採用予定は？」とか「新たに借入れとかするんだろうな」ともブツブツ言っていた。

「あぁ、駄目だ。私の脳みそはもうオーバーヒート寸前だよっ」と最後に亜佐美はそう言って深く息を吐き出して保坂を見た。

「保坂さん、毎日こんなこと考えてるの？」

「うん、そうなんだ」

「他にも新しい商品がどうのって言ってるよね」

「うん、そうなんだよ」

酔った亜佐美の目が濡れたようになって保坂はドキっとした。亜佐美を喜ばせようとして、「うちの工場の食堂だけど、業者を買収ってことはちょっとだけ考えたこともあったけど、買うか引き上げるか社長に選ばせるというのは考えてなかったなぁ。これは採用させてもらうよ？」

いきなり亜佐美の目が輝いた。「ほんとう？」「こんな私でもお役にたてたかな？」とはしゃいでいる。

「社員食堂のことは手伝ってもらえるかな？」と保坂が言うと、「もちろんよ～、できるだけのことはさせて下さい」と亜佐美が答えた。

「時期がきたらちゃんと正式に仕事として依頼するからね」

「はい、楽しみに待ってます」

「ただ・・・」と保坂が続けた。

「巻き込んでしまって悪いね」

「そんなこと」

「仕事の話を聞いてもらうのが悪いなと思うときあるんだよ。でも

あなたは物事をよくわかってるし、とても素晴らしい発想をするときがあるんだ」
「そんな・・・」
「あなたに話すと元気をもらったり、解決の道がみつかったりするんだ。魅力的な人だ、あなたは」
「保坂さん・・・」
二人はしばらく黙って見詰め合ってたが、やがて保坂が「お暇するよ」と立ち上がった。

「もっと会う時間が欲しいな。迷惑じゃない?」と聞く保坂に、首を横に振る亜佐美。
「そうだ、今度は僕の部屋に遊びに来てくれる?何かご馳走するよ」と言うのでびっくりしてしまった。
「お料理できるんですか?」と聞く亜佐美に、「サラダとパスタくらいは作れるさ」と保坂は笑って言った。
お手並み拝見とばかりに「うふふ、それは楽しみ!」と笑っている亜佐美の腕に手を伸ばし、保坂はそっと引き寄せた。

急に引っ張られた亜佐美は保坂の厚い胸に閉じ込められた。
ちょうど頭のてっぺんに保坂の顎が乗っかったようだ。上から保坂の声が聞こえてきた。
「今日はありがとう。美味しいグラタンだった。ワインも美味しかったよ」
亜佐美は心臓がドキドキして飛び出しそうだったが、「また時々寄ってください」とだけ何とか言うことができた。
「僕は、あなたのことが好きだと言ったけど・・・」と言うので亜佐美はコクンと保坂の胸の中で頷いた。
「あなたは僕のこと、好き?」
さらに心臓がドキドキしたけどもう一度亜佐美は頷いた。
「キスしてもいい?おやすみのキス」と言うので頷くと保坂との間

に少し隙間ができた。
寂しく思って保坂の顔を見上げると、保坂の顔がゆっくり近づいてきた。
「僕のこと好き?」ともう一度聞いたので頷くと、「言ってみて」と言われた。
保坂の唇がもうそこまで来ている。亜佐美はその唇が欲しくて「好き・・です」と言った。
大人のキスだった。本格的なキスにくらくらしながら、なんとか「おやすみ」と言って保坂を見送った亜佐美はしばらくリビングのソファに座り唇に指を当ててぼんやりしていた。

一方保坂は亜佐美に好きと言わせて満足していた。ただ、仕事が立て込んでいて自分の時間がままならない。亜佐美と会う時間をどう作るか考えていた。
亜佐美と過ごす時間は楽しいし、何よりも癒される。彼女の笑顔をもっと見たい、あの柔らかい唇をもっと味わいたいと思うのだが、プライベートな時間を取るには工夫が必要だった。根本的に仕事のやり方を変えなくてはいけないのではないかと保坂は思い始めた。

それからも二人はほとんどメールと電話の日々が続いた。
保坂は本社と工場を行き来している。やがて社員食堂の新プロジェクトを始めると亜佐美に連絡があったのは秋も半ばのことだった。
結局委託業者は買収に応じずに年末で撤退することになったらしい。
東京本社に本部を置き、新年からさっそく稼動できるように準備をする。まずこの工場でスタートして徐々に全国の支店や工場の食堂を直営に変えていくと保坂は言っていた。
亜佐美の仕事はその食堂での献立を考えることだ。社員が食堂を利

用したいと思うようなメニュー構成にしなければならない。
東京本社で行われる会議のいくつかに出席してもらわなければならないと保坂は亜佐美に言った。
しばらくは一緒に仕事ができると二人は喜んでいたが、実際に食堂が稼動する頃には保坂の手からプロジェクトは離れてしまう。それに推薦者の保坂に恥をかかせるわけにはいかないので亜佐美はかなり頑張らなければいけないと思った。

同時に亜佐美が東京での会議に出席する場合、茜のことが心配だった。
早朝に出発する場合もある。帰宅が遅くなる場合もある。とりあえずは伯父の家族に交代で頼むしかない。伯父や伯母も協力してくれるとは言っているが度重なると甘えてばかりもいられないと亜佐美は思った。
そのことを電話で話したときに保坂に漏らすと、保坂は少し考えて「そのうち提案しようとは思っていたのだけど、お手伝いの人を頼んだらどうだろうか」と言った。
「お手伝いさんを?」と考えても見なかった話なので亜佐美は驚いた。
「うん。亜佐美さんの家、結構広いよ?それにこれからしばらく忙しくなるし、そうそう亜佐美さんが家の隅から隅まで掃除できないと思うけど?」
「う〜ん。確かに真剣にお掃除するとかなりたいへんだけどさ」
「ちょうど東北から赴任してくる人たちの家族で、通いで来て貰える人を探すのはどうだろうか。家族と言っても若夫婦だけじゃなくてその親たちも一緒に引っ越すケースもあるんだしね。年配の人に来てもらったほうがいいんじゃないか?」
「う〜〜ん」亜佐美は唸りながら考えている。
「時間のある今のうちにちょっと試してみて、亜佐美さんと合う人だったら継続して来てもらえば忙しくなった時にも安心じゃないか

な」

「そうだね、そうしようかな」もともと掃除や洗濯が好きだとは思わない亜佐美なのでもし良い人がいたらと思ってしまった。

「じゃ、現地に問い合わせておくからね」と言うことで、募集のほうは保坂に任せてしまった。

「それと、亜佐美さんと会社間で契約をしないといけないので時間とってもらえるかな?」と保坂が言った。

「はい、わかりました」

「来週、水曜日の午前中はどうかな?」と言うので時間を決めて電話を切った。

いよいよ仕事が始まるんだと亜佐美は少しばかり気分が高まるのを感じた。

約束の水曜日に保坂の工場を訪れると会議室に通された。

すぐに保坂が弁護士を伴ってやってきて説明を受けた。理解できないことは素直に訊ね、納得したところで亜佐美は契約書に署名と押印をした。

熊澤弁護士と紹介された初老の男性は、亜佐美の質問にも丁寧に答えてくれ亜佐美はほっとしていた。

「あなたが二条さんのお嬢さんですか。先日は伯父さまにお目にかかりお世話になりました」と熊澤弁護士が言ったので、「土地の件でしょうか?こちらこそ有難うございます」と亜佐美もお礼を言った。

その後は保坂と工場での担当者を交えて打ち合わせをした。亜佐美は東京での分厚い会議資料を渡されて説明を受けた。

担当者が「二条さん、明後日金曜日にもう一度来社していただいてよろしいでしょうか?同じ時間に来ていただいて、資料の不足分を話し合いましょう。その後昼食はここの社員食堂でご一緒してください。月曜日は東京で会議になります。それも大丈夫でしょうか?」と言ったので、亜佐美は「わかりました」と答えた。

保坂は途中で何度か中座していたが、担当者との打ち合わせが終わると駐車場まで送ってくれた。
「これ、お手伝いさんの候補者です。目を通して置いてください」と言うので、「もうですか?早いですね」と亜佐美が驚いていると、「今夜仕事が終わってから家に寄ってもいいですか?」と保坂が聞いた。
「じゃ、軽くお夕食を・・・」と亜佐美が言うと、「楽しみにしています。後で話しましょう」と丁寧に見送ってくれた。

35　始動

家に帰って分厚い資料を読み始めた亜佐美は、その内容に驚いていた。
もうすでにかなりの部分が手配されている。保坂はいったい何時これを準備したのだろうか。
亜佐美が保坂の注文でお弁当を届けた時はまだ保坂の頭の中だけの構想だったはずだ。
保坂は他にも企画や開発を担当しているはずだ。そうだとしたらきっと保坂にはたくさんの優秀なスタッフが居るに違いない。
うかうかしていられないと思った。来週月曜日の本社での会議は顔合わせだと言っていたが、具体的な献立を作ったほうがいいと亜佐美は判断した。
その前に金曜日に工場の担当者とミーティングがあるのでその時に持って行こうと決心した。
就職したことのない亜佐美は企業での仕事の仕方がわからない。怖気づきそうになりながらも契約した以上やるしかないんだと言い聞かせて資料を読み進んだ。

いつの間にか茜の帰宅時間になっていた。
昼食を忘れて資料に没頭していた亜佐美は、茜とおやつを食べながら、「今夜、保坂さんがお夕食を食べに来ることになったよ」と茜に言った。
「うわ～、嬉しいな。ほっちゃんが来るのね。でも水曜日だよ、今日」
「そうだよね、いつも週末だものね。ただし、お仕事終わってからだから遅めだと思う。」
「そうなんだ」
「私たちはいつもの時間にお夕食にするからね」

「え〜〜？待たないの？」
「うん、待つと保坂さんが気にすると思うんだ」
「わかった。でも一緒にご飯食べられるといいなぁ」
「そうだね。あとで何時ごろになるかメールで聞いてみる」
これから亜佐美が保坂の会社の仕事をすることを茜に伝えた。
「保坂さんはお仕事の話もあっていらっしゃるのよ」
「茜とお話する時間あるかなぁ」
「それは大丈夫だと思う。茜が寝る前に来ればだけど」
それから亜佐美は来週から時々仕事で東京へ行くこと、その間は伯父の家族が交代でここに来てくれることを話した。そして、お手伝いさんが来るかもしれないと言った。
「これからずっとじゃないの。東京には数回だと思うし、工場のほうも来年になったら手が空くと思う」
「うん、わかったよ」
「『うん』じゃなでしょ？『はい』って言って」
「はい、わかりました」
「茜、３ヶ月ほどだけど忙しくなることごめんね」
「え〜？なんで？謝らなくていいよ」
「今までみたいにのんびりとするのが良いんだけど、この仕事やってみたいの」
「うん、わかってる。あーちゃんがんばって！」
久しぶりに亜佐美は茜を抱きしめて「茜、大好き」と言うと、「私もだよ、あーちゃん」と言って茜は亜佐美の肩に顔を乗せた。

夕食までの間、茜はリビングで宿題をした。
保坂は早めに仕事を終わらせると連絡を寄越したが、それでも８時を過ぎるというので茜と二人で夕食を終わらせた。茜はお風呂も入

って明日の準備も終わってリビングで計算ドリルに取り掛かっている。
そんな茜を見ながら、この子がもっとお勉強をしたいというならその環境を整えてあげたいと思う亜佐美だった。
「ねぇ、茜。もっとお勉強のドリルが欲しい？」
「うん。これが終わったらもう無いもの」
「じゃ、土曜日に買いに行こうか？」
「え？良いの？国語のも欲しいんだ」
「わかったわ。でもたくさんは買わないよ？算数と国語を一冊ずつだよ」
「うん。ありがとう。それと・・・」
茜はちょっと言い難そうだった。「何よ」と亜佐美が促すと、「えっとね。私、英語の勉強したい」
「え～～？英語？」
「うん。この前ほっちゃんにＤＶＤ借りたでしょ？あれ観てたら英語を知りたくなってきた」
「マジですか？」
「クラスの子も英語の勉強してる子も何人か居るんだよ～」
「そうだね。ちょっと考えても良い？」
「ほんと？ちゃんと考えてくれる？」
「うん、保坂さんにも相談してみていいかな？」と亜佐美が言うと、
「うん、いいよ～。ほっちゃん、英語できそうだよね」
「あー、確かに、そんな感じかな」
と二人が話しているところに保坂が到着した。
茜が走って保坂を迎えに行った。相変わらず玄関ではなくリビングのほうのドアから保坂が入ってきた。
保坂は今日も疲れているようだ。目の下にうっすらと隈が出来ているのを亜佐美は見逃さなかった。
先に食事を勧めて、亜佐美と茜はデザートのプリンを同じテーブル

で食べることにした。
茜と保坂が英語のＤＶＤの話で盛り上がってるのを聞きながら、亜佐美は保坂にお茶を淹れた。
保坂は食事が終わると茜に、「茜ちゃん、亜佐美さんと一緒にお仕事をするようになったんだ。もう聞いてるかい？」と切り出した。
「うん、聞いた」と茜は答える。「茜、『うん』じゃないでしょ？」と亜佐美が言うと、素直に「はい、聞いてます」と言い直した。
「申し訳ないね。来週は東京で会議があるんだ。亜佐美さんにも出席してもらう」茜は頷いて聞いている。
「茜ちゃんを一人にはしておけないし、亜佐美さんも忙しくなって家のことができなくなるから、お手伝いさんに来てもらったらどうかと僕が勧めたんだ」
「はい、それも聞きました」と茜が言うと、「亜佐美さん、朝渡した履歴書持ってきて？」と言われて亜佐美は履歴書をまだ見てなかったことに気がついた。
「茜ちゃんも一緒に見よう」と保坂が言って、３人で履歴書を検討することになった。

「いいかい、茜ちゃん」と保坂が真面目な顔で茜に説明した。
「これはお手伝いさんの情報なんだよ。その人の個人的なことが書いてある。もしこの中で良さそうな人が居たら、実際会って話をして決める。でね、この情報は外で話しちゃいけないんだ。この３人だけの秘密だ」
「ひみつなの？」
「うん、そうだ。誰だって自分のことを自分の知らない人に話されたくないだろう？誰かに決まれば、たぶん茜ちゃんが一番長く一緒に居る人だから、今夜は茜ちゃんにも一緒に見てもらうんだ」
「はい、わかりました」
「よし！じゃ、この人から考えてみよう」と言って、一枚目の履歴書から３人で検討し始めた。

そうは言っても茜に全部を教えるわけではない。写真を見せるだけに止めた。

「亜佐美さん、面接はいつにする？」と言うので「土曜日か日曜日かな」と答えると、「土曜日の午後はどう？僕も同席できるし」と保坂がかって出た。

「え？良いんですか？」と亜佐美が言うと、「被災者だった人たちなので僕も慎重になっているんだ」と保坂は言った。

「それと、もう東北からの転勤は始まっているのでこれだけじゃないから。気に入らなかったらもっと候補者を持ってくる。気軽に面接してくれていいから」

「そうなんですか。会ってみないとわからないと思うので、、、、」と亜佐美が言うと、「僕と茜ちゃんは部屋の隅っこで見学してるから、面接は亜佐美さんにお願いしますよ」と笑いながら言った。

「僕が当人たちに連絡しようか？」と聞くので「私のお手伝いさんだから私から連絡しますよ」と亜佐美は答えた。

「あ、伯父のところに月曜日のお願いしなくちゃ」と亜佐美が言い出した。

「僕もお電話代わって貰って良いかな？」と保坂が言う。

亜佐美が伯父の家に電話をかけると、日曜日の夜から祖母の貴子が泊まりに来てくれることになった。保坂が合図するので携帯を渡すと、今までの経過を簡単に説明し月曜日の予定も伯父に話してくれた。

途中で欠伸をしている茜を寝室に連れていって寝かしつけ、ダイニングに戻ってみると保坂はちょうど伯父との電話を終えるところだった。

「はい、では土曜日の夕方に」と言ってから亜佐美に電話を代わった。

土曜日の夕方、伯父夫婦が祖母と一緒にここに来るということ。それから一緒に夕食を食べに行こうという話しになっていた。保坂も

同席するというので、亜佐美は落ち着かなくなった。

「駄目だった?」と保坂が聞くので、「いえ、ちょっと恥ずかしいなと思って」

「伯父さんたちに?」

「はい、伯父たちにはまだ何も言って無いから」

「土曜日、伯父さんたちに言ってもいいよね?僕たちのこと」

亜佐美は何も言わないで、冷蔵庫からビールを取り出した。

「僕たち個人的なお付き合いだけじゃなくて、仕事も一緒にすることになった。ちゃんと話しておいたほうが良い」

保坂はビールを受け取りながら亜佐美にそう言った。

「亜佐美さんに僕たちが付き合っているという自覚がないなら、今ちゃんと言うよ。僕と付き合ってください」

ちょうど一口目のビールを飲み込む時で、亜佐美は思わず咽てしまった。

「酷いなぁ。人が真剣に申し込んでいるときに。ビールを喉に詰まらせるだなんて信じられないよ」と保坂が笑って言ったので、亜佐美は救われるような気がした。

シリアスに言われたら照れてしまってまともに顔を見ることができなかっただろう。

「だって、ちょうど飲み込もうとした時に言うんだもの（笑）」亜佐美も照れ隠しに笑いながら、「伯父たちにはっきりと言っておいたほうがいいですよね」と言うことができた。

「うん。僕はそうしたい」

「ありがとうございます」

「急に改まってなんだい」

「ううん。やっぱりはっきりと言ってもらってなかったから、ちょっと不安でした」

「そうなの?」

「そうですよ。女のほうからは確かめ難いですし」

「そっか。ま、そうだよな。これからは気をつけるよ。亜佐美さんも言いたいことがあったら何でも言ってください」

というので、「わかりました、では早速！」と言って亜佐美は会議の資料をダイニングテーブルにドンと置いた。

保坂は「え？」と言葉に詰まって亜佐美を見ると、亜佐美は「工場のスタートは新年早々です。私が東京の会議に行く回数も少ないので、一度で効率よく準備していかないと間に合いません」と言った。

「とりあえず、金曜日にこちらの工場でミーティングがあります。その時までに私もこれを把握しておかねばなりません。ですからちょっとお付き合いください」と張り切って言い切った亜佐美に保坂はニヤリと笑って打ち合わせを始めた。

36　ミーティミング

木曜日、いつものように早起きをしてお弁当を作った亜佐美は、茜が出かけると今までに調べておいた資料をまとめて食堂の献立を作成した。その理由も献立毎に挿入する。

夏に作ったお弁当のレポートがかなり役立った。大会社で働いている人というのは優秀だ。1個のお弁当でこんなことまでデータとして活かせるのかと感心してしまった。

その後、食堂担当者が従業員に昼食についてのアンケートを取っていた。大いに役立たせてもらうことにしてつくりあげたレポートを10部ほど印刷する。

同じものをフラッシュドライブにコピーして持っていくことにした。これは保坂のアドバイスである。

保坂のプロジェクトは連絡をほとんど通信で行うらしい。

明日の工場でのミーティング中に亜佐美のノートブックで連絡用ツールの使い方を説明するというので持っていくことになっている。

保坂は予め亜佐美のノートブックPCも会社で速く立ち上げられるように整理するようにともアドバイスしていた。

金曜日は予定の15分前に亜佐美は工場に到着した。

来客用の駐車場に車を停めて正面の建物で受付するとすぐに担当者が来てくれた。

水曜日に話した人なので亜佐美も緊張することなく会議室について行く。

担当者は大前と言う名前で、東京出身と言うことであった。最初は月曜日に亜佐美と一緒に電車で東京に行く予定になっていたが、前日に実家に立ち寄って月曜日は実家から本社に行くことになったと亜佐美に告げた。

「そのためにも今日はしっかり打ち合わせしましょう」とニッコリ

笑った顔がどことなくジェニーズ系の可愛い顔で、亜佐美は『感じの人が担当でよかった、同年代みたいだし、気軽に話せそうと！』と嬉しくなった。

会議室には３０歳代後半の女性が二人すでに着席していた。大前が、「こちらは実際に調理を担当していただく方です」と名前を紹介してくれる。もうすでに委託業者のアルバイトとして実際に調理をしているらしい。

「キッチンにも慣れておく必要がありますから」と説明を受け、なるほどと思った。

女性二人はすでに亜佐美のブログを見たり、お弁当の写真を見せてもらったということだった。少し訊りがあるので聞くと東北出身者だと言った。

新しいレシピにはかならず写真をつけるから盛り付けも惑わないはずだということと、できれば時間のあるときに東北の家庭料理を教えていただきたいと亜佐美はお願いしてみた。

女性たちは喜んで協力すると言ってくれ、和やかな雰囲気で顔合わせを終えた。

担当の大前は年末に委託業者からの引渡しと来年からの稼動の現場リーダーをするということだ。

亜佐美は作ってきた献立とその資料と元に簡単に説明していく。

地元の季節の食材にも触れ、大前さんが仕入れもするなら地元の農家やＪＡを紹介できることを告げた。

亜佐美の作ってきた資料はそのまま使えるので、挿入して月曜日の会議までに仕上げて本社に送っておくと大前が言った。

「私たちはすべてデータはネットで送ることにしています。二条さんは手ぶらでどうぞ」と言われたが、ノートブックだけ持っていってもいいかと聞くと、「そうでした。今ＰＣに詳しい者が来ますのでお待ちください」と言って、内線で連絡と取った。

亜佐美と大前が献立の話をしていると、保坂がＰＣ担当者を伴ってやってきた。

「こちらは二条亜佐美さん、で、こっちは早瀬薫です。」と二人を紹介すると、会議テーブルの反対側の隅で大前と話を始めた。大前は亜佐美の作った献立を見せて説明している。

早瀬薫が「私たちも早速始めましょうか」と亜佐美を促してＰＣを立ち上げた。

「ちょっと中を拝見してもいいですか?」と早瀬が言うので、「はい、よろしくお願いします」と答えると、「一般の人のＰＣはセキュリティーが低いので、仕事の連絡用にセキュリティーを高くしますね。ちょうどこれです。ここを変えることによって変わりますので、一般に使う時に不具合がでたら一時的にここを元に戻してください」

スリープ時のパスワードの確認や、専用メールの使い方、資料の取り出し方や送り方など一通りレクチャーがあって、必要なツールをインストールしていく。

早瀬は「パスワードなどのメモは必要ないです。メモが無いほうが安全ですから。覚えてください」と言う。

亜佐美の関わる担当者への連絡先の一覧もあっという間にダウンロードされた。

「二条さん、今日お持ちいただいたレポートのデータはありますか?」と言うので、コピーを保存したフラッシュドライブを出すと、「これから使い方を説明しますね」と言って、資料のアップロードとダウンロードの方法やメーラの使い方を説明してくれた。

他にも2～3注意事項があって早瀬の説明が終わった。

「保坂さん、こちら終わりましたよ」と早瀬が声をかけると、「どう?問題ない?」と保坂が訊ね、「全然問題ないです。二条さん使い方も大丈夫そうよ」と言ってから、「二条さん、今わかったつも

りでも家に帰ると忘れちゃったりするから、いつでも私にメールしてきてね」と早瀬のメールアドレスを登録してある場所を亜佐美に教えた。

「じゃ、皆で移動するか。食堂に行こう」と保坂が言うと、「今日はご馳走様ですね」と早瀬がいち早くお礼を言っている。
保坂は「今日だけだぞ。特別レクチャーしてくれたから今日は奢るよ」と笑っていた。
「香川ちゃんも呼んでいいでしょ?」と聞いている。「香川?呼ぶのはいいけど、香川には奢らない」と言いながら皆で和やかに食堂に移動した。
食堂では慌てて走ってやってきた香川が挨拶をする。
「香川雅人と言います。二条さん、お目にかかりたかったです」と勢い込んで言うので思わず顔が赤くなった亜佐美を見て、「あぁ、もう!本当に可愛いなぁ、二条さんって。小阪がお弁当を持ってきた人が可愛い女の子だったと言ってたので是非お会いしたかったんだよ」と言う。
「女の子って・・・」と亜佐美がつぶやいて引いていると、早瀬が「二条さんこっちおいで。無視していいから、香川ちゃんは」と言って亜佐美を隣に座らせた。
早瀬が「亜佐美ちゃんって呼んでいい?」と聞くと「はい」と亜佐美が嬉しそうに答えるので、「私のことは薫って呼んでね」と早瀬が言った。
「あ、僕も亜佐美ちゃんって呼んで良い?」と香川が言うと、保坂と早瀬が「「駄目だ」」と同時に言った。
そのシンクロ加減に噴出しそうになった亜佐美だが「そう呼べるのは女子限定ですので」とサラっと香川に言うと、一同静かになって亜佐美を見つめた。
「いやぁ、そういうこと言う人だとは思わなかったよ」と香川が沈黙を破って言った。「ますますファンになりそう、俺」と香川が笑

い出した。その笑いにつられるように、皆も笑い始めた。
食堂が混む時間でもあり、食事が終わるとすぐに解散になった。
「これから僕たちの胃袋をよろしくお願いします」と香川が言ってくれたので、「頑張ってやらせていただきます。それとお弁当のレポートありがとうございました」と亜佐美は言って香川と早瀬にお辞儀をした。

保坂は駐車場まで亜佐美を送ってくれた。
「今夜も残業なんだ。終わる頃電話してもいいかい?」と言うので、「もちろんです。明日はよろしくお願いします」と亜佐美は言った。明日の午後はお手伝いさん候補と面接をすることになっている。家にきてもらおうか迷ったけれど、考えて近くのファミレスで時間差で会うことにした。
茜と保坂は隣のテーブルに座ってくれることになっている。途中、茜は保坂に本屋に連れていってほしいらしい。
それが終わると伯父たちが来る。保坂は明日のために残業するのだろう。
「遠慮しなくていいからね」と保坂は言って、車のドアに手をかけていた亜佐美の手の甲を指ですっと撫でた。
「じゃ、乗って」と保坂に言われて亜佐美は運転席に座り、「電話待ってる」と言ってから車を発進させた。

その夜、保坂から電話があったのは午後11時に近い時間だった。
「こんばんは」と言った保坂の声は疲れているようだ。
「お仕事終わりました?」と聞くと、「今終わったよ。亜佐美さんのレポート読ませてもらった。あのまま会議資料に差し込んだから東京に行く前に目を通しておいてくれる?それと、月曜日のこともメールしたからわからないことがあったら明日聞いてほしい」と保坂が言った。
「明日、せっかくのお休みなのに私のことで申し訳ないわ」と亜佐

美が言うと、「気にしないで。僕がそうしたいんだから。それに僕たちのことでもあるからね」と言う保坂の言葉に、二人が付き合ってる実感が湧いてきた。

「それから、明後日は僕のところにランチを食べに来てよ」と保坂が言うのでびっくりしてしまった。

「え～～、休めるなら少しでものんびりしたほうがいいんじゃないの？」と亜佐美が言うと、「休みだから一緒に居たいんじゃないか」と保坂が返した。

「茜ちゃんと亜佐美さん、二人の美女に得意のパスタを振舞うよ」と笑っている。

「それじゃお邪魔しようかな」と亜佐美も笑って答えると、「今日はこのまま帰ってぐっすり眠るよ。明日に備えて」と保坂が言ったので、「おやすみなさい」と電話を終えた。

37　面接

翌日の土曜日、保坂は久しぶりに時間を気にせずに目が覚めた。
コーヒーを準備し朝風呂に入った。そしていつものストレッチをこなした後、ジョギングに出かけた。
もうすっかり寒いが、１０分も走っていると汗が出てくる。４０分ほど走って部屋に戻った保坂は今度は軽くシャワーを浴びてニュースとメールのチェックをした。
翌日は亜佐美たちが来ることになっている、乱雑にはなってないが少し埃っぽいので掃除をした。
冷蔵庫もチェックして頭の中のメモに買い物リストを作った。
今日はあの伯父さんとの勝負がある。格闘技でもやっていそうな人だったよなと思い出し、怖気づきそうになる自分を『何事も作戦だ』と奮い立たせて考える。
直下型の人には怒らせてみるか、逆に下手に出るのがいいのか迷うところである。
しかし、亜佐美の伯父ならば怒らせるのは得策じゃない。しかも今日はその連れ合いも祖母も来るんだ。
大人しめに行こうと保坂は決めた。

約束の１時半少し前にファミレスに到着した。
すでに亜佐美は到着していて、店の人となにやら話している。
席に案内されてから、亜佐美が「ここの店長さんよ。今日は便宜を図っていただきました」と保坂に説明すると、その店長は「どうぞごゆっくり。何でも言ってくださいね」と言って保坂に会釈をして行ってしまった。
「亜佐美さんはたくさん知り合いが居るよね」と保坂が感心して言うと、「地元だもの。それにこのファミレスができる前から住んでるんだもの」と言って笑った。

「確かにそうだよな」と保坂の言葉には笑いが滲んでいた。

保坂と茜が隣のテーブルに座って注文が終わったときに、一人目の応募者が入り口に立った。

保坂が気がついて「亜佐美さんは座ってて」と言って迎えに行ってくれた。

飲み物を取ってきたり、茜の相手をしたりと保坂は甲斐甲斐しくサポートする。おかげで順調に3人の面接が終わった。

亜佐美は即断せずに、あとで連絡すると言って応募者を帰した。

「感想は後にしよう。ここでは話さないほうが良い」と保坂が言うのでもっともだと亜佐美も頷いた。

「亜佐美さん、疲れているだろうけど、茜ちゃんの本を先に見に行こう」と言って亜佐美を促して本屋に向かう。

「次は僕の面接だなぁ」と保坂が呟いたのを亜佐美が聞いて、「保坂さんでも緊張するんですね」とクスクス笑った。

「そりゃするよ」と保坂は照れくさそうに言ってから、「そうだ。今夜の食事なんだけど、中華料理はどう?」と聞く。「うちはみんな中華が好きだから大丈夫だと思います」と亜佐美が答えると、「今日は僕にご馳走させてね」と保坂が頼んだ。

保坂がどうしてもと言うので亜佐美は「ではお言葉に甘えます」と言って、ちょうど中華料理店の前を通ったので夜の予約をしておいた。

「この店ね。いつだったか亜佐美さんと茜ちゃんが大勢で出てくるのを見かけたことがあるんだよ」と保坂が言った。

亜佐美はちょっと考えていたが、「夏休みでしょ?従兄妹達とここに食べに来たことがあったわ。あとで会う伯父さんの子供たちよ」と答えた。

本屋で茜の勉強ドリルを選んで家に帰ると茜はさっそくドリルをや

りたそうだったが、「あとで伯父さんたちが来るから挨拶したら出かけるまで部屋でやっていいよ」と亜佐美は茜に言った。
「それまでにさっきのお手伝いさんたちのこと考えなくちゃ」と言って、二人の前に履歴書を広げた。
「茜はどう思った?」とまず聞いてみる。
しばらく考えていたが、「最初の小母さん、暗かった」と茜が小さな声で言った。
「そうだよね。暗い人だったわね」と亜佐美も同意した。
「2番目の人は感じ良かったよ。ちょっと怖そうだけど」と茜が言う。
「ふむふむ」亜佐美は聞いている。「3番目の人ね、タバコ吸ってるとおもう」と茜が言ったのでびっくりした。
「どうしてわかったの?」と亜佐美が聞くと、「指先がちょっと黄色かった」と茜が答えた。
やっぱり2番目の人かなと亜佐美も思った。最初の人は問題外で、最後の人は若すぎる。茜より小さな子が居るらしいが、子供は何が起こるかわからない。彼女の子供が病気になった時は自分の子供を優先するだろうと亜佐美は思った。

2番目の人は亜佐美の母の年齢に近かった。A社に勤める息子の転勤に夫と共に来たばかりらしい。震災で妊婦の嫁を失くしたこと、ご主人は元教員で引退したばかりということ、本人は小さな診療所で看護婦だったが今はもう医療の現場には戻りたくないとのこと。たいへんな時期を過ごしたのだろうとは簡単に予測できた。
亜佐美は「もう一度お話をしてみるわ」と保坂に言った。

そろそろかなと思って亜佐美がお茶の準備をしていると、伯父たち

が到着した。
茜が玄関まで迎えに行き、伯父達がぞろぞろとリビングに入ってきた。
亜佐美は保坂を紹介だけすると、保坂は卒なく名刺を出して自己紹介を始めた。
皆に亜佐美がお茶を出すと入れ違いに茜がドリルを持って自室へ行ってしまった。
「この度は姪がお世話になるそうでよろしくお願いします」と伯父が言うと、保坂はこれまでの経過をかいつまんで説明し、「月曜日は東京本社に顔合わせに行っていただくことになりました。これが大体のスケジュールです」と印刷したものを伯父たちに渡す。
「亜佐美さんには今回の仕事を快く引き受けていただきました。何かとご迷惑をかけますがよろしくお願いします」と保坂はきっちりと頭を下げた。

「それとは別に、仕事以外にも亜佐美さんとは個人的にお付き合いさせていただいています」と保坂が言うと、伯父が立ち上がって「とりあえず一発殴らせてくれるか?」と保坂に詰め寄った。
伯母が伯父のズボンを握っている。祖母は成り行きを見守っていた。
「いえ、まだ殴られるようなことはしておりませんので。いずれその時が来たらやぶさかではないですが、今日はまだ理由が無い」と保坂は下から伯父を見上げきっぱりと言った。
伯父はしばらく黙って保坂を睨んでいたが、伯母に何度がズボンを引っ張られて仕方なく座った。

「保坂さん」と祖母が口を開いた。「亜佐美のことが心配なので単刀直入に聞きますが、小学2年生の子供が居て一人で育てているこの子をどう思われますか?屈託なくご家族に紹介できますか?特に保坂家は今で言うセレブのご家庭でしょう?そんな中でこの子が苦労するのを考えて頂いた上でのことでしょうか?」

「貴子さん、そういうことはまだ早いです。私たちは何もそんな・・・」と亜佐美が言いかけると、「亜佐美。じゃ、どういうつもりで保坂さんは私たちにお付き合いの承諾を貰おうとしてるの?単にボーイフレンドってことなら名乗る必要もないことよ?」亜佐美は言葉が続かなくなった。

「私は姪の茜ちゃんを育てている亜佐美さんを尊敬しています。将来のことも考え始めています。ですが、まだ知り合って2ヶ月少々しか経ってないので二人の間はそこまで育っておりません」保坂は言葉を続けた。

「それからお気を悪くされるかもしれませんが、会社と二条さんとの間には取引がありますので一般的な調査はさせていただいております。亜佐美さんと茜ちゃんの関係についても今はある程度のことは知っております」と保坂は言った。

「次兄は別会社に居りますので知るところではないのですが、父と長兄が本社に居ります。二人とは同じ情報を共有しております。逆に保坂の内情が二条さんに受け入れて貰えるのか心配していると思います」という言葉を不思議に思って保坂の顔を見た。

「兄二人とは異母兄弟になります。隠しているわけではないので身上調査をしていただくと普通にわかることです。まだ亜佐美さんには話したことがありませんが今日は私から直接お話しできるちょうど良い機会だと思います。兄二人は今の保坂の母の子供です。僕は父の愛人から産まれた子供です」亜佐美は驚いて保坂を見ている。

「生後間もないときに実母が亡くなり、父が引き取ってくれました。保坂の母が兄同様に育ててくれました。私は高校を卒業するまでそのことを知らずに育ったくらいです」誰もが言葉もなく保坂を見ている。

「茜ちゃんと女性が二人で暮らすところに男性の私が出入りすることがそのうちご近所の噂になるかもしれません。亜佐美さんの評判が悪くなるのは避けねばなりません。ですから今日は時期は早いの

ですが親代わりの二条さんご家族にご挨拶させていただきました」口に出せるような状況ではなかったが、亜佐美は今日の保坂さんはとても凛々しくて格好良いなと思っていた。

しばらくして祖母が保坂に「健三さんはご壮健でいらっしゃいますか？」と聞いた。「祖父をご存知ですか？」と保坂が驚いて祖母に問うと、「ここの工場の土地の手配に一度お目にかかったことがあります。まだ私の夫も健在でした」と祖母の貴子が言った。

「はい。元気に過ごしております。もちろん足腰は弱くなりましたが、威厳だけは振りまいております。私たち兄弟は祖父に聞こえぬところで『クソジジイ』と呼んでおります」とニヤリと答えた。

それに祖母が笑い出し、やがて伯父も伯母も釣られて肩を震わせていた。「あの時代の人はしようがない。今とは時代が違うからな」と伯父が言うと、「そうなんです。保坂グループもたいへんな時代を迎えています。家族で力を合わせないと乗り切れそうにありません。そういうところに亜佐美さんを迎えるには、まず亜佐美さんに覚悟をしていただかなくてはなりません。私はそれを待つつもりです」保坂が静かにそういうと、伯父も祖母も黙って考えているようだった。

「とりあえず今日は近くの中華料理店に予約をしています。そろそろ予約時間になりますので、ご一緒していただけませんか？」と保坂が言うと、「茜を呼んでらっしゃい」と祖母が亜佐美に言って「中華は久しぶりなので楽しみだわ」と保坂に笑顔を向けた。

38　合格

伯父たちにも馴染みの中華料理店では、愛想の良い店主が出てきて賑やかに挨拶した。
予約していた個室に案内されるまでにはたっぷり5分くらいかかった。
料理は賑やかな店主に任せることにして着席すると、保坂がお茶を注いで皆に配る。
昼間のファミレスでもそうだったが、実に気配りの行き届く人だと亜佐美は再度感心していた。

「で、ふたりの馴初めはどんなだ?」と伯父が唐突に聞いた。
「伯父さん、なれそめって・・・」亜佐美は言葉に詰まってしまった。イマドキ、馴初めはないだろう。
保坂も笑いを堪えているようだ。
「あの公園が最初か?」と言うと、「いえ、その前に茜ちゃんを見かけて覚えていたんです」と保坂は話し出した。
「亜佐美さんの家の板塀、黒いですよね。僕はあの板塀に扉があるのを知らなかったのですが、ある日、ピンクのランドレスが塀の中に吸い込まれるように入っていくのを見かけたんです」
茜が『私?』という風に人差し指を自分の鼻に当てたので、亜佐美はお行儀悪いというように睨んだ。
「黒にピンクですからそのコントラストが印象的でした」それから何度か見かけたこと、最初は茜と亜佐美は母子だと思っていて亜佐美はなんと若い母親なんだと思っていたことなどを話した。
茜は最近は朝の通学時間に家から保坂と途中まで一緒に歩いていることや、ドリルを選んでもらっていることを嬉しそうに話している。
料理も次々と出てきて和やかに食事が進んだ。

「茜ちゃんは今とても向学心がある。僕でお役に立つことがあれば手伝いたいと思います」と保坂が言うと、亜佐美が「私はお勉強が苦手だったので、茜がお勉強好きというのを最近まで気がつかなかったのよ」と申し訳なさそうに言った。

茜が、「あーちゃん、ほっちゃんにあれお願いしてよ」と亜佐美に小声で囁くと、「ほっちゃん?」と伯母にその声が聞こえたらしく怪訝な顔をする。

「あ、茜が今保坂さんのことをほっちゃんって呼んでいて・・・」と亜佐美の声が段々小さくなる。

保坂がとりなすように「何かな?茜ちゃん」と茜に聞いてくれた。

「えっと・・・私、英語がしりたいの」

亜佐美以外の一同はびっくりしている。

「でもどうやってお勉強したらいいのかわからない。クラスの子も何人か英語勉強してるんだよ」そうやって訴える茜に、「茜ちゃん、ディズニーのDVDの歌おぼえたかい?」と保坂が茜に聞いた。

「うん、いくつかは唄えるよ」と茜は自慢げに答えた。

「あれをもっと観て、全部一緒に唄えるくらいになったら英語の勉強始めようか」と保坂が言うと「ほんと?やったー」と茜が嬉しそうにしている。、「アルファベットの書き方も覚えないといけないから、明日本屋に一緒に行こうか。亜佐美さんそれで良いですか?」と保坂は亜佐美に尋ねた。

「はい、よろしくお願いします」と亜佐美が言うと、やりとりを見ていた伯父や祖母が「良かったね、茜」と口々に言った。

茜がお手洗いに行きたいというので伯母が茜を連れて行った。

保坂は「保坂の家では僕らはずっと3人兄弟でした。知ってしまった後もそれは変わりません。同じように亜佐美さんと茜ちゃんは1セットです。それは僕の中では自然なことです」と伯父や祖母に言ってくれた。

伯父が「まぁ、当分様子見ということにするよ」と言い、祖母は「

私のことは貴子さんと呼んでください」と言ったので、「絶対にお祖母さんと呼んじゃだめってことよ」と亜佐美が補足した。
保坂は笑いを堪えた様子で、それぞれに「はい、わかりました」と返事をしていた。

亜佐美の家まで一緒に歩いて帰ったが、保坂は家の前で別れた。
伯父たちも帰るというので、明日からのことをもう一度お願いして亜佐美と茜は家の中に入った。
茜は早速ディズニーのＤＶＤを観ると自分の部屋に行ってしまった。
リビングとキッチンを片付け終えるとＣＰを立ち上げてみた。
携帯電話を見ると、メール受信のランプが点いている。保坂からのメールだった。
『皆さんが帰られたら、一度電話ください』という内容だった。

早速電話してみると、「亜佐美さん、疲れてないですか？」と保坂が聞くので、「大丈夫ですよ。ほっとしました」と亜佐美は答えた。
「そうですね。僕もほっとしました」と保坂が笑った。
「茜ちゃんはどうしてます？」
「早速ディズニーのＤＶＤ観てますよ」
「茜ちゃんが寝るのは何時くらいですか？」
「１０時頃かな、だいたいですが」
「じゃ、茜ちゃんが寝るまでに少し時間があるので、ＰＣの使い方をちょっと説明していいですか？」と保坂が言った。
「え？」と亜佐美が言うと、「金曜日に仕事用のものをいろいろ入れたので、それを使えるようになってもらいたいんです」と保坂が言った。
「亜佐美さん、ＰＣ立ち上げたでしょ、今」
「え～～～？わかるんですか？保坂さんエスパー？」と亜佐美が予想以上に驚いているので
「ストーカーと言われなかっただけマシですが」と保坂は笑いなが

ら言う。
「いや、一瞬ストーカーという言葉も横切りましたよ」と言うと保坂は「それは酷いなぁ」と笑っていた。

「亜佐美さん、ＰＣの画面の右下に見慣れない丸いアイコンが点滅しているでしょ？」と保坂は続けた。
「あ、あります。これ何だろう」と亜佐美が言う。
「それね、僕のスタッフだけが使えるメッセンジャーです。その点滅しているのをクリックしてもらえますか？」
それからしばらく亜佐美は新しいツールの使い方をメッセンジャーを通して教えてもらっていた。
途中茜を寝かしつけるときは休憩をし、再びＰＣの前に座って、言われたとおりにファイルのやりとりをした。
保坂はすでに月曜日のスケジュールを共通ストレージに入れてくれており、その取り出し方もやってみる。最後にはビデオカメラも作動させてライブメッセンジャーのテストもした。
「では、明日は１１時にお迎えに行きます。一緒に本屋へ行って、それから僕のところにランチを食べに来てください」と保坂が言った。「今日はいろいろとありがとうございました。おやすみなさい」と亜佐美も言ってメッセンジャーをオフにする。

長い一日だった。たっぷりとしたお湯に肩まで浸かりながら亜佐美は今日のことを振り返ってみた。
伯父が拳を固めて保坂に詰め寄ったときは息を呑んだものだ。保留とは言っていたが、保坂の真摯な態度でなんとか合格したようだ。
保坂の出生については驚いたが、暖かい家庭環境で育ったようで少し安心もした。セレブの家庭ではこういうことは多いのだろうかと思った。
それにしても結婚話でもないのに今日のこの緊張はなんなんだ。まだお付き合いして日も浅いのにと思う。

保坂が実家のことを話したということはいずれ結婚の話もでるのだろうか。
そこまで考えて亜佐美は気が重くなった。結婚ということになったら考えなくてはいけないことが多すぎる。
今の私の脳では無理！と決断を下してお風呂をあがることにした。
髪を乾かしていると猛烈な眠気が襲ってきた。
枕に頭をつけた記憶もないままに気がつけば朝になっていた。

一方保坂も亜佐美の伯父夫婦と祖母との面談を終えてほっとしていた。
なんとか殴られるのも回避できたし、様子を見るということで落ち着いた。
亜佐美は保護観察中の小動物のようなだなと思うと笑いがでてくる。
さて、次はこっちの関門だなと電話に手を伸ばした。
「母さん、一也です」
「首尾はどう？」
「掃除も洗濯も終わりました。トマトソースは明日の朝作りますよ」
「玉ねぎとトマトだけでできるから、あなたでも大丈夫よ」
「助かります」
「ご希望のものは明日の朝9時に届くようにしたから。間に合うでしょ？」
「はい」
「パンとデザートも一緒に入れておくから、パンはメモの通りに焼いて頂戴ね」
「はい。すみません、急だったのに」
「さすがに食器は買いに行く時間がなかったら、家にあるのを用意

しただけよ」
「僕も買いに行く時間がなかったんですよ」
「近いうちに聞かせてもらうから」
「え？（笑）」
「だめよ、惚けても。全部話してもらうからね」
「うわ～、やっぱり母さんに頼んだのが間違いだったかも」
「今更何言ってるの。ところで、月曜日はこっち泊まるでしょ？」
「はい、その予定です」
「じゃ、楽しみにしてるから」
「父さんにもそう伝えてください」
母との電話を終えると、亜佐美の伯父たちにしてもそうだけど、何故今回はこんなに早く家族を巻き込んでしまうのかと不思議に思った。

明日は亜佐美と茜をランチに招待している。
野菜を買って帰ってから、食器が無いのに気がついたのだ。
保坂一人分のものしか無い。
正午頃に気がついたが亜佐美との約束の時間も近づいていたので、どうしようもなくなって実家に連絡を取ってみたのだ。
母は笑いながら二つ返事で引き受けてくれた。
メニューを聞いて、缶詰のトマトソースを温めようとしていた一也に、「トマトソースは手作りすべし！」とレシピをメールで送ってくれた。
女性の好きそうなスイーツを荷物に入れておくからと言うので、何故わかるのかと思ったら、「男友達が来るなら紙皿でＯＫでしょ。普通の食器が必要なのは女性だからよ」と見事な推理ぶりだ。
月曜日には何と言い訳しようかとニヤつきながら、会議用の書類に集中していった。

39　保坂の手料理

日曜日の朝、亜佐美はパジャマのままで茜と一緒に軽く朝食を作り、保坂が11時に迎えにくることと今日は保坂の家にお邪魔することを茜に告げると、

「え？ほっちゃんのお家に？」

「うん、お昼ごはん作ってくださるって言うの」

「誰が？」

「保坂さんがよ」

「えっ？お料理できるのかなぁ、ほっちゃん」

「いつもお仕事で忙しいからお料理しているとは思えないよね」

「だよね～」

「いいこと茜、美味しいって食べるのよ、わかった？」

「あ～、でも～」

「茜が作ったカレー、保坂さん美味しいって食べてくれたよ？」

「うん、そうだね。でもあのカレーほんと美味しかったもん」

「私が美味しいって言ったら、うん、くらいは言ってよね。夜は貴子さんが来るから3人で美味しいもの食べよう」

「うんっ」

保坂の知らないところでとんでもない会話をしてる二人だったが、亜佐美はこれも躾のうちと真面目に捉えていた。

時間通りに保坂が迎えに来て本屋まで一緒に歩く。

アルファベットの書取りドリルを買ってもらって嬉しそうな茜は、ドリルが入った袋をずっと胸に抱えていた。

やがて保坂の住むマンションに到着した。

「引っ越してから初めてのお客様なのでスリッパがないんだ、ごめんね」と保坂が言ったが、部屋は適度に暖かく保たれており、「全然問題ないですよ」と亜佐美は言った。

普通の家族向けのマンションで、独りには充分な広さだ。

「洗面所はこっちね。先に場所を言っておくよ」と案内したあと、リビングに入った。

想像したとおりシンプルな部屋だった。

小さめのダイニングテーブルと椅子４脚。薄型ＴＶとソファーとラグ。隅にダンベルが置いてある。それだけだ。

テーブルの上にはすでにお皿が準備されていた。

美味しそうな匂いが漂っている。

「トマトソース大丈夫？」と言うので、亜佐美は茜と顔を見合わせて「大好物です」と言った。

続きの部屋には頑丈そうなデスクとＰＣ。壁にはぎっしりと本が詰まっていた。

夕べはこのデスクに座ってメッセンジャーでやりとりしてたのかしらと、保坂の姿を想像して亜佐美は顔がほんのり熱くなった。

「そろそろ食べる用意していいかな？お腹空いてる？」と保坂がキッチンから聞いたので

茜が「は～い。空いてます～、ぺっこぺこ」と言った。

冷やした小さなサラダとバスケットに入ったフランスパン。

飲み物も保坂がグラスに入れてくれ、着席したところに保坂が熱々のパスタを置いた。

「えっと、本日はほうれん草とチーズのラビオリ、トマトソースです」と言った。

立ち昇る湯気に美味しそうな匂いが漂って、「ほっちゃん、凄いよ！おいしそう」と茜が叫んだ。

「熱いから気をつけてね。サラダから先に食べたほうがいいかも」と保坂は亜佐美にも勧めた。

亜佐美も茜も「美味しい」「美味しい」と言って全部食べ、デザー

トは東京の有名パテシエ作のフルーツがたくさん乗っかったタルトだった。

エスプレッソを飲みながら「それにしても保坂さんがこれほどお料理出来るとは意外でした」と亜佐美がつぶやくと、「亜佐美さんだから打ち明けますが、トマトソースは母のレシピです。それは簡単なので自分で作りましたけど、ラビオリは冷凍食品ですよ」と保坂が言った。

「これは冷凍庫にストックがあっていつも食べているので失敗がないかなと（笑）」

「そうだったんですか。お皿も揃っているので驚いていたのですが何か魔法がある？」

保坂は、「亜佐美さんには隠せないなぁ。昨日、お皿が無いのに気がついて実家にＳＯＳ出しました。そうしたら今朝一番にお皿のセットが届きました。パンとケーキも一緒に」

亜佐美は一瞬ぽかんと口を開けて、そのまま笑い出してしまった。

亜佐美には言わなかったが、食器やケーキを運んで来たのは長谷川だった。

朝９時にドアチャイムが鳴ったので出ると、ドアの外に箱を持った長谷川工場長が居たのだった。

「週末東京に居たらお呼びがかかってさ、何かと思ったらどうせ田舎に帰るならこれを届けてくれと頼まれたんだよ」

「あ、すみません。宅急便で送ったのかと思いました。ほんとうに申し訳ないです」と保坂が言うと、

「まぁ、うちも同じケーキを頂いたので家内や娘が大喜びするだろうからいいんだけど」と大きな箱の上にケーキの箱を置いた。

早朝に実家に寄って荷物を積み、そのまま車で来てくれたとのこと。

「上ってコーヒーでも」と保坂が言うと、「当たり前だ。眠くてかなわん！それにトイレも行きたいし」と長谷川さんにしてはめずら

しくずかずかと保坂の部屋に上りこんだ。
「いつもは親戚だといっても遠縁の僕たちはたまに法事に呼ばれるくらいだろ？こんなことは初めてだよ」
「はぁ、ほんとうにお手数かけました」
「朝、お宅に到着したらちょうどケーキ屋が来ていて、よくＴＶで見るパテシエとかいうのが自分で届けに来ていたからびっくりしたんだ」と教えてくれた。
やっぱり母に頼むと大事になったようだ。次回からはよく考えてからにしないとと保坂は心の中で苦笑していた。
コーヒーを飲み干すと、「これで家まで帰れそうだよ。ありがとう」とお礼を言って、「急ぎだというのは解るけど、週末は仕事もほどほどにしておきなさいよ」と言い残して帰っていった。
保坂はほっとした。大きな箱の中身は知らないらしい。

「保坂さん、トマトソースはまだたくさん残ってます？」と亜佐美が聞くので、
「うん、まだあるよ。食べる？」と言うと、
「いえ、もうお腹一杯です。残ったソースは一食分ずつ小分けにして冷凍庫に入れると良いですよ」と教えてくれた。
「ほっちゃん、もう少しケーキ食べて良い？」と茜が言うので、牛乳を注ぎ足してケーキを一切れ茜の皿に移動させる。
「このケーキ、ほんと美味しい～」と言って茜はパクパク食べていた。
「一度食べてみたかったんです、ここのケーキ」と亜佐美が言った。
「そうなの？」
「えぇ、有名パテシエでよくＴＶに出てるんです。やっぱり粉とかクリームとか違いますね」と言って丁寧に食べている。
「そうだ、残りもので悪いけどあとは持って帰らない？」と保坂が言うと、茜が「やった～。夜も食べられるね」と嬉しそうに言った。

「いえいえ、せっかく保坂さんのお母様が保坂さんにって届けたものだもの、いただけません」亜佐美は辞退したが、「僕は食べる時間がないんですよ」と持って帰るように強く勧める。
「じゃ、あと一切れだけは保坂さんが召し上がってください」と言ったので、保坂は自分の分をケーキ皿に一切れ移して、あとは箱に仕舞って茜に持たせた。

「では、月曜日、朝お迎えに行きます。早い時間なのでインターコムは鳴らしません。ここを出るとき携帯にメールしますから出てきてください」
「それから、東京本社では社長と専務、数人の役員は保坂なんですよ。その人たちと会うことは無いと思うけど、もしも話すことになったら僕のことは一也と呼んでください」
「え・・・はい」
「じゃ、亜佐美さん、一也と練習してみてください」
「え？今？」亜佐美が戸惑っていると、「さあ、言ってみてください？」と保坂が言う。
と、横から「いちやっ！！」と茜が叫んだ。
一瞬の間があって、保坂が「はいっ」と茜に返事した。

亜佐美はうろたえて「これ、茜。保坂さんに失礼でしょ！」と言うのが精一杯だ。
「意外に簡単かも～」と首をすくめて舌を出した茜を見て、保坂が笑い出してしまった。
穴があったら入りたいとはこのことだ。亜佐美は顔が火照るのがわかった。

「では、亜佐美さんも言ってみてください」まだ笑いが収まっていない保坂がもう一度亜佐美を促す。
茜を見ると口元がピクピクしている。亜佐美は茜を睨みつけながら、

「一也さん」と言ってみた。
「はい。良く出来ました。明日までにもっと練習しておいてくださいね」と保坂がニッコリと微笑んだ。
保坂が微笑むのを見て亜佐美は、その笑顔は反則でしょ～と思いながらも恥ずかしさに勝てずに、「茜、そろそろお暇するわよ」と茜を促して立ち上がった。

茜はなにかブツブツ言っていたが、「私、やっぱりほっちゃんのが言い易いよ。ほっちゃんでいい？」と聞いている。
「うん、茜ちゃんだけにほっちゃんと呼ぶのを許そう」と言って二人でケラケラ笑ってる。

頂いたケーキの箱を大事そうに抱えた茜と亜佐美は、「近いし、今日は二人で帰ります」と言うので「また明日」と言って玄関で別れた。

家に帰ってから、大人の話の邪魔をするとは言語道断と茜がお説教されたのは言うまでもない。
夕方祖母が到着した後で昼間の出来事を説明すると、茜は祖母にも嗜められてどんどん元気が萎んでいく。美味しいケーキが残っていることだけが茜の希望の光だった。

祖母と話すことはたくさんあった。ようやく茜が休んで、亜佐美と祖母は風呂上りにビールを取り出した。
「明日は早いから一口だけね。貴子さんあとは飲んじゃってくれる？」と祖母のグラスを一杯に満たす。
「亜佐美はほんとよくやってるね」
「ほんと？褒めてくれるの？」
「うん、冷蔵庫みただけでわかるわ。お掃除もそれなりにしているようだし」

「頑張ってるのよ、とりあえず」
「そうかい」
「何をしていいのかわかんないんだけど、とりあえずあまり手抜きはせずにやってる」
「彼氏も出来たしね、それもイケメンじゃん」と祖母が保坂のことを話題にした。
「イケメンなんて言葉、よく知ってるわね」
「ふふん。まだまだ年寄り扱いしないでもらいたいね」
「貴子さんは年寄りじゃないよ～」と亜佐美が茶化すと、
「亜佐美、何事もよく考えて行動するんだよ。亜佐美が決めたことなら誰も反対しないから」
「うん。そうするつもり」
「頼むよ」と言った祖母が亜佐美を見て微笑んだ。
「じゃ、明日は早いからもう休もう。明日はお願いしますね」
「あぁ、おやすみなさい」とグラスを軽く洗ってそれぞれ寝室に引き上げた。

３９　保坂の手料理（後書き）

【お知らせ】
今日はこのサイトのメンテナンスがあるそうです。
作業予定時間：２０１１年９月５日１３時～１６時頃

無料で利用させていただいて、メンテナンスもしていただけるなんて有難いです。

40　東京本社

朝一番の特急に乗って保坂と亜佐美は東京に行った。今回、電車での席は隣同士である。

月曜の早朝のせいか指定車両は空いていた。数人がまばらに座っているだけである。

「まわりに誰も居ないから、ちょっと話しながら行こうか」と保坂が切り出した。

「午前中、顔合わせの会議に出るだけなのでそれほど緊張しなくていいよ」と保坂は言ってくれたが、お正月休みが明けたらすぐにスタートするので、もしかしたら濃い内容になるかもしれないと亜佐美は思っていた。

「駅には迎えが来ている。会議の時の席は大前君の隣です。次に、料理長を紹介するからその人は今後亜佐美さんと一番連絡が多くなると思うので覚えてください」

「はい」亜佐美は忘れないように頭のなかで反芻した。

「昼食は本社の社員食堂にしようか？見たいだろう？社食」

「ええ、工場とどう違うのか見てみたいです」

「そう言うと思ったよ」

「昼食の後、１時間だけ時間をもらえるかな。軽くミーティングをしたい」

「はい」

「それが終わったら、大前君と一緒に工場に戻ってくださいね」

「はい、わかりました。保坂さんは？」

「僕は東京に泊まります」

「ご実家に？」

「そうなる予定です」

「お母様にお礼を」と亜佐美が言うと、保坂は笑いながら「大成功だったとだけ伝えます」と言った。

保坂はしばらく下を見ていたが、「亜佐美さん、手を・・・」と亜佐美の手を取った。
「到着までこうしていて良いですか?」と言うと、亜佐美の手を包み込むように大きな手で握りこんだ。
亜佐美はその保坂の手を見ながらドキドキしていた。会議の前なのに何も考えられなくなりそうだった。
「亜佐美さん、昨日母はとても嬉しそうにしてました」
息子から連絡を貰って食器やケーキを用意する母親の気持ちを思って亜佐美は頷いた。
「普通ね、僕と兄たちが異母兄弟と言うと、母が後妻に入って僕を産んだと思いません?」
「あぁ、言われてみればそれを最初に想像するかも」と亜佐美は素直に言った。
「両親は祖父が勧めた見合いで結婚でした。父は大会社の次期社長、母は優秀な男の子二人を授かって皆が羨むような奥様業。そこに突然他の女が産んだ子供が現れた。お嬢様育ちの母がどんなにプライドを傷つけられたか・・・」
亜佐美は手に汗をかいていた。でも保坂は握った手を離しそうにない。
「僕は中学生のときにちょっと疑問に思ったことはあるのだけど、両親に事実を告げられたのは高校を卒業する時でした。年の離れた末っ子として母に一番甘やかされて育ちましたから、僕なりにショックは大きかったんですよ」
亜佐美は汗を気にせず保坂の手を握り返したくなった。
「それから大学時代はちょっと家族とは距離を置いてました。父の会社に入ってからもまだなんとなく距離を空けておきたくて、工場勤務にしてもらったのです。初めは会社の寮に入りました」
「え?保坂さんが寮にですか?」
「はい。楽しかったですよ(笑)」

「それは意外です」
保坂は身じろぎをして身体を少し亜佐美のほうに向けた。
「そんな僕が食事のために食器を送ってくれと連絡したから、母は張り切ってました」
「そうでしょうね」亜佐美はくすっと笑った。
「今夜はなるべく遅く実家に帰るつもりです（笑）母の質問攻撃から逃げるために」
いたずらっ子のような目つきになっている保坂に亜佐美はくすくす笑う。
「母の出場はもう少し後に考えています。もう少し僕達だけの時間を大切にしましょう」
保坂の言う意味がわかったので、亜佐美は素直に「はい」と答えた。

到着駅には迎えの車が来ていた。車のドアを開けて亜佐美を後部座席に座らせると、反対側のドアから保坂が亜佐美の隣に座った。
運転席に居た男性が、「私、社長秘書をしております高瀬と言います」と名刺を取り出して亜佐美に差し出した。「座ったままで失礼します。お見知りおき下さい」と言うので「二条亜佐美と言います。社員食堂のメニューを担当をさせていただくことになりました。よろしくお願いします」と挨拶すると、保坂が「亜佐美さん、高瀬さんに名刺は要らないよ。スタッフの情報はいつでも高瀬さんは取り出せるから」と言って、「父は？」と高瀬に聞いた。
「社長は別のものが迎えに行っております」
「僕らは社員食堂で昼食をとってからそっちに顔出すよ。1時前後かな」
「承知しました」
ほどなく車が大きな建物に近づいた。

「高瀬さん、今日は正面玄関に着けて下さい。亜佐美さんは初めてなので正面玄関から入っていただく。大前君は来てる?」
「はい、玄関で待機しているはずです」
車がゆっくり止まると高瀬が回りこんでドアを開けてくれた。
「僕はここでは降りないけど、大前君が案内してくれるからね。会議室で会いましょう」と保坂が亜佐美に言った。亜佐美は保坂に頷いて車を降りた。

大前が近づいてきたので亜佐美は高瀬に「ありがとうございました」と一礼すると、「先ほどの名刺を失くさないでくださいね。何かお困りのことがあればご連絡を」と言って高瀬は車に戻っていった。
保坂の乗った車を大前と見送り、大前に案内され臨時の通行ＩＤカードを発行してもらって会議室に入った。席は予め決まっており、大前と亜佐美は隣同士だ。
まだ時間は早いが会議のおさらいをしましょうと大前は亜佐美にＰＣを立ち上げるように促して自分もノートブックをテーブルに置いた。
「いいですか、保坂さんのプロジェクトは紙が用意されておりません。すべて予めストレージに準備されていますので、各自取り込んで会議の前に取り出しておきます」
今回の参加で一番驚いたのは、関わるスタッフがすべて顔写真付きで添付されていることである。大きな会社とは時間の無駄というのがないらしいと亜佐美は思った。
概ね説明が終わってもまだ時間に余裕があったので、大前に案内してもらって化粧直しをした後休憩室にやってきた。
熱いコーヒーを飲み終わるころには人も増えてきたので会議室に戻と、室内も人が集まり始めていた。
各席には部屋を出る前には無かったマイクの装置とペットボトルが置かれてあった。
「二条さん、ＰＣで席次を確認してみて下さい」と亜佐美が呼び出

した画面を指差しながら、「ここに座るのは料理長です。あとで質問されるかもしれません。マイクのスイッチはこうで・・・」と説明してくれた。

やがて会議が始まった。まず保坂の挨拶で始まり、今日から統括リーダーになるという人の紹介もあった。ＰＣの画面を確認しながら次々に議題を確認していく。有意義な意見もたくさんあって圧倒される思いであった。

実際の現場リーダーである大前には質問が殺到していたが卒なくこなしている。顔は見かけによらないと亜佐美はしみじみと実感していた。

いよいよ献立の話題になって、亜佐美にも質問が寄せられた。すでにＰＣには亜佐美の作ったメニューがあるのでそれを見ながら説明していく。コストを考えた仕入れルートの提案などもした上で、この会議は1月から工場でのスタートだけでなく社員食堂全体のスタートでもあるので、全体のゴールが知りたいと発言してみた。まだ会議の途中であるので最後まで内容を把握したら、ゴールに合わせてメニューも限りなく提案する用意があると亜佐美は言った。

亜佐美が息をつくと、隣で大前が音を出さずに拍手をしてくれた。どうやらこれでよかったようだ。議題は進んで、最初の全体会議だというのにほとんどの事項が決まってしまった。

たくさんの確認事項はあるもののあとは現場が動くだけである。

１５分の休憩をとって関係グループでの打ち合わせに入った。亜佐美は料理長に挨拶をし、試作の日時の調整と材料の仕入れについて細かな打ち合わせをした。経理担当からも挨拶があった。

やがて昼食の時間が近づくと解散になり、亜佐美と大前が会議室を出ると保坂と料理長が待っていた。保坂も先ほどまではいろんな人に囲まれて忙しそうであった。

本社の社員食堂は明るいカフェテリアのようになっていて、首から社員ＩＤをぶら下げた人が多く、工場とは違っていてスーツ姿の人

ばかりだ。
亜佐美は珍しそうにメニューやインテリアを見ていた。保坂はそんな亜佐美にはあまり声を掛けずに大前と話している。
お昼時で混んでいたので、食べ終わるとすぐに食堂を出た。大前は料理長とまだ打ち合わせをすると言うのであとで合流することにした。

保坂が亜佐美を連れて行ったのは落ち着いた色調の別のフロアーだった。静かで誰にも会わない廊下を進みあるドアを保坂がノックすると、駅で迎えてくれた高瀬がドアを開けた。
「早かったかな?」と保坂が言うと、「大丈夫ですよ。もうすぐ戻られますのでお茶でも淹れましょう」と高瀬が更に奥の部屋に二人を案内して亜佐美に椅子を勧めた。
部屋の隅にはワゴンが置いてあり、そこに用意をしていたのか高瀬がお茶を淹れはじめた。
「めずらしいね、高瀬さんが自ら」と保坂が言うと、「他の秘書はお昼休みで出てますから」という答えだった。
それを聞いて保坂は、他のスタッフにはなるべく亜佐美を見せないようにとの気配りかもしれないと思った。今朝も高瀬が運転する車から降りた亜佐美を、他の社員が見てどう噂になるのか高瀬が心配していたのだ。

高瀬が淹れたのは中国茶だったが、とても香りが高くすっきりとした味わいで亜佐美は気に入ったようだ。
それを口に出すと、「そうでしょ、そうでしょ。これは台湾産なのですが芽を摘む時に手間がかかりまして・・・」と高瀬の説明が続く。最後に高瀬は「社長は今中国茶がお好きなようで、私は隠し場所を知っているものですからちょっと拝借しました（笑）」と言って自分も一口飲んでいた。
保坂と亜佐美は呆れて顔を見合わせた。

「さあ、社長がお帰りになる前に片付けておきましょう」と言っているところに社長が帰ってきたようだ。入り口が騒がしくなった。

41　社長室

保坂によく似た眼差しの中年の男性が入ってきた。
高瀬が「社長、お帰りなさい」と言ったので、この人が保坂の父親かと亜佐美は緊張して肩に力が入った。
「お邪魔しています」と言いながら保坂は亜佐美の肩に手を軽く置き、「こちらは二条亜佐美さんです。今日は工場から来てもらったので社長室見学にお連れしました」と紹介した。
掌から伝わる熱で亜佐美は少しだけ肩の力を抜くことができた。
「二条亜佐美と申します。社員食堂の献立を担当させていただくことになりました。至りませんが精一杯取り組ませていただきます」と挨拶すると、「貴女が二条さんのお嬢さんですか。ご両親にはお世話になっておりました。今回も工場拡張の件、ありがとうございました」と丁寧に挨拶してくれる。
保坂と社長の声が似ているので驚いた亜佐美だ。

「なんか良い匂いがしてるな。中国茶か」と社長が言ったので「お淹れしましょうか」と高瀬が勧めたが、「いや、食後だし皆でコーヒーにしないか?」と言うので高瀬がコーヒーを取りに部屋を出て行った。
「どうせ中国茶は飲んだみたいだからね」と社長がつぶやいたのを保坂と亜佐美は耳にして顔を見合わせてしまった。社長は挨拶のために立ち上がっていた亜佐美たちにソファーを勧めた。

「さて、二条さん。ご両親ことはお気の毒でした。その後ご不自由はしてませんか?」と社長が亜佐美に聞いた。
「ありがとうございます。伯父も近くにいますし、有難いことに両親の遺してくれたもので生活はなんとかやっております」そして亜佐美は言葉を続けた。「でも両親がもう居ないというのは何とも頼

りなく寂しいものがあります。『かけがえのない』という言葉の意味を実感しております」

「そうでしょうな。伯父様たちとは行き来があるのですか？」と聞くので、「はい、祖母が伯父と同居しており、親代わりとして何事も相談しております」と言うと、「それは安心だ」と何度も頷いていた。

そこに高瀬がコーヒーを運んできた。

皆の前にコーヒーを置いて最後に誰も居ないところにもコーヒーを置いた。

「専務が今参ります」と高瀬が言い終わらないうちに、保坂より背が高く、少しふっくらした男性が入ってきた。

亜佐美が立ち上がると、「一也の兄の保坂優一です」と名刺を出した。亜佐美が慌てて名刺を出そうとすると、一也が「亜佐美さんの連絡先はわかるから、名刺はいらないよ」と亜佐美に言って、「兄さん、時間良いの？」と聞いた。「３０分くらいは大丈夫だ」と答えた声が社長や一也によく似ている。

社長が亜佐美に「冷めないうちにコーヒーをどうぞ」と暢気に言うと、一也が「工場の社食業者の交渉についてヒントをくれたのが亜佐美さんなんだ」と二人に言った。

「ほぅ」と社長が驚いた顔をしている。「そうらしいね」と優一はすでに知っているようだ。

今度は優一が、「ちょっといいかな？」と亜佐美に聞いた。

「はい」と亜佐美が優一を見ると、「今朝の会議で二条さんは、ゴールが知りたいと言ったそうだね」と言った。

突然会議の話題を振られて、亜佐美は注意深く話を聞かなくてはならないと思った。

「はい」

「このプロジェクトの趣旨はもちろん知っているよね？」

「はい」
「では、何故ゴールがわからないという発言を?」
「もちろん、まず来年から稼動する工場の社員食堂を手始めに、本社を含め全国の社食を順次見直すというのははわかります」
「うん」と言って優一は先を続けるように促した。
「そのあとはどうされるんでしょうか?」
「うむ」
「私がわからないのは、全部が終わった後のことなのです」
「もう少し、詳しく説明してくれないか?」
「結論がわからないので、単に私の空想の世界なのですが」
「うん、それでいいよ」
「今は、そしておそらく全部が終わるまでは食品部として本社の中で管理されると思っています、では、終わった後もこのまま本社の直営なのでしょうか。
保坂グループはメーカーです。サービス業は少ないですよね。大企業と言うのは、今日も会議に出させていただいて実感しているのですが、常に利益を考えるものだと思います。
メーカーで利益率の多い会社が、利益率の低いしかも社食で利益のでない部門をどうされるのか。
面倒だから別会社にして運営するのかもしれないと思ったりもしました。
でも、わざわざ利益の無いものを別会社にしても誰も運営したくないんじゃないでしょうか。」
一也と優一は顔を見合わせていた。社長が熱心に頷いて亜佐美に先を促している。
「別会社にする可能性は高いのではないかと思いました。
今のままでしたら福利厚生ということになるのでしょうが、全国規模にすると福利厚生にしては費用がかかりすぎるのではないかと思ったのです。
別会社になれば、社食だけでなく食品を商品として扱えますから。

それで利益が出る道を考えられるかもしれません。その時でも私はそれ用の献立やレシピのアイデアはありますと言ってみたんです」

亜佐美は最後に、「今日の会議はそこまでの議題ではなかったのですが、何か考えてしまってつい・・・すみません、まとまりのない話で」と俯いてしまった。

優一と高瀬がニヤニヤしている。

一也が亜佐美に声を掛けようとしたときに、「いやぁ、一也が二条さんを献立担当に推薦したのがよくわかりました」と優一が言った。

「今後どうするか考えるときが来る。その時までにまた考えをまとめておいて下さいますか？」と社長が亜佐美にやさしく声を掛けた。

亜佐美はますます恥ずかしくなるばかりで、どういう風に返事をしていいのかわからない。

「今は来年早々のスタートを考えて頑張ります。よろしくお願いします」と言うのが精一杯だった。

「さて、亜佐美さんはまだ料理長とのミーティングが残っているので送り届けるよ」と一也が言って立ち上がった。

亜佐美も同じく立ち上がると、社長が「二条さん、イケメンパテシエのケーキはお口に合ったかな？」と聞いた。

「は、はい。とても美味しくいただきました。ありがとうございました」と亜佐美が答えると、「しまった」と一也が顔を顰めた。

優一が「ほぉ」と面白がっている。

「何故分かったの？」と一也が言うと、「おまえが亜佐美さん、亜佐美さんと名前を呼んでいるからだろうが」と社長に指摘された。

優一が、「ははぁ、昨日のあのケーキか。うちにも届いたよ」と言う。

さすがの亜佐美も不味い展開になったことがわかった。社長の誘導尋問にかかったのだ。

「先に私がお目にかかったと言うと母さんは悔しがるだろうな」と

社長は面白そうに一也に言った。
「父さん、頼むよ！！」と一也が言うと、「まぁ、黙っていることもできるが。その代わり、しっかり働け！」と軽口を言って、亜佐美にウインクをした。
亜佐美は今見たことが信じられなかった。顔を赤くして一也と社長を交互に見ていると、優一と高瀬が肩を震わせて笑い始めた。

料理長と大前に合流しようとなんとか社長室を出て、エレベーターに向かう。
二人を見つけるまでには赤い顔がおさまっているといいなと亜佐美は思った。

一方、一也と亜佐美が出て行った社長室では、優一が「あいつ、確信犯だな」と言っていた。
高瀬もまだ笑いながら「一也様が女性スタッフをお名前でお呼びすることは考えられませんからね」と優一に頷いた。
「一体どういうつもりなんだ、あいつは」と社長が言うと、優一が「もちろんそういうつもりでしょうよ」と言い、高瀬は「一也様は二条さんをご自分で育てたいようですね」と言った。
「短大を出て父親の不動産事務所を手伝っていたようです。企業には勤務したことがないので、おそらく今日の発言は彼女自身の考えだと思います。誰かの受け売りということではなさそうです」
「それにしても一也が執着してるというのは珍しいな」
「二条さんがそれに気がついてくれると良いのですが」
「天然そうだしな」
「はい」と優一と高瀬が話しているのを社長は黙って聞いていた。

42　茜の父親

東京での会議が終わり、亜佐美は人生で初めて忙しい日々を過ごしていた。
関係者との打ち合わせはほとんどＰＣで行い、メールでのやり取りやメッセンジャーでのグループディスカッションもようやく慣れてきた。
献立の決定や料理長を迎えての試食も終わった。メニューデザインも発注は終わって、実際に食堂に張り出される日が楽しみだ。あとは実際にスタートを待つのみとなった。
現場のほうはもっと忙しいのだろうと思う。
料理長と大前を案内して地元の農家にも行った。それには保坂も同行して興味深くいろいろ質問していた姿が思い出される。
保坂はもっと忙しいのを亜佐美は知っている。今回、従業員のＩＤカードで社食料金が天引きされるシステムとか、社食の諸々のデータを本社に送るプログラムは保坂が作ったはずである。
スタッフが居るとはいえプログラムのほとんどに保坂が関わっているに違いない。たまには農家などの外の空気を吸うことは気分転換にもなるし彼にとって良いことではないかと亜佐美が誘ったのだ。
気がつけばクリスマスがもうすぐそこだった。
クリスマスの前に亜佐美はやらなければいけないことがあった。
姉、由佳の一周忌だ。この一年を過ごすのがどれだけたいへんだったか今更ながらため息がでた。
法要はお寺で行い、食事のほうは昔から法事のときに利用する料亭を予約した。
親戚はそれほど多くはないので電話連絡も簡単に済み、久しぶりに母方の祖父母にも会えると思うと姉には悪いが楽しみでもある。
母の実家は鹿児島で、祖父母も元気には暮らしているというがもう

歳でもあるし、もしかしたら最後になるかもしれないから出席すると言うのだ。
祖父母には家に泊まってもらうつもりなので、念入りに掃除をするようにお手伝いさんに頼んだ。
一回目の面接で選んだ人だが、最初はちょっと怖い感じがしたけど馴染んでくると気さくで良い人だった。何でもてきぱきとこなしてくれるので亜佐美はとっても助かっていた。亜佐美が居ない間の茜についての報告も業務日誌という形で丁寧に知らせてくれるので安心している。

明日は法事と言う日だった。
伯父が今からちょっとお客さんを連れて行くからというので不思議に思いながらも待っていたら、スーツを着た男性が一緒だった。
なんと、姉の元夫だった。茜の父親である。
「何で今頃・・・」と思わず口に出た亜佐美であるが、元義兄が言うには一周忌の今だから線香をあげに来たと言うのだ。
東京の大学を出て有名な商社に就職した姉は、そこで義兄に出会い誰もが羨む結婚をした。
東京での結婚式はきらびやかで、出席者の顔を見て都会の人は凄いなと思った記憶がある。
若手のポープだった義兄は結婚を期にさらに忙しくなり、そんな義兄を姉は自慢していたものだ。
それが茜を妊娠したころから姉は頻繁に実家に帰ってくるようになった。
そして出産直後に義兄の海外赴任が決まったが、姉は頑としてついて行くとは言わなかった。
ほどなくして茜の親権を持って姉は離婚して出戻った。
親権がある以上亜佐美は姉由佳が亡くなっても元義兄に連絡をとらなかったのだ。

仏壇に線香を上げ長く手を合わせていた元義兄は、それが終わると亜佐美のほうに向き直って「亜佐美さん、茜のことありがとう」と言った。

茜に会いたいと言う。亜佐美は渋っていたが、伯父が「親なんだぞ」と言うので、「茜に聞いてきます。あの子が嫌がったら会わせられませんから。少し時間がかかりますがいいですか？」と言うと、もちろんと言うので伯父に義兄を任せて亜佐美は茜の部屋に行った。

茜は部屋でディズニーのＤＶＤを観ていた。

「茜、ちょっと良いかな？」

「うん、何？」

「お客さんが来てるんだ」

「ふ～ん」

「茜は覚えてないと思うんだけど、でも知ってる人なんだ」

亜佐美がそう言うと茜はようやく画面から亜佐美のほうに顔を向けた。

「知ってる人？誰？」

「あのね、茜の・・・パパなの」

「えっ？」

「茜のママ、由佳姉さんが亡くなったのを知らなかったの。アメリカに行っちゃってたので知らせてなかったのよ」

「パパ？」小さな声でそう言った茜はなんともいえず複雑な表情をした。

「今日は由佳姉さんにお線香をあげに来てくれたんだ。それと、茜に会いに来たのよ」

茜はなにも言わない。亜佐美もしばらく黙っていた。

しばらくしてから亜佐美が「ねぇ、どうする？突然でびっくりしただろうけど、ここに連れてきて良い？」と言うと、茜はこくりと頷いた。

茜の気が変わらないうちにと元義兄を呼びに行き、茜の部屋の前まで案内した。

「茜の部屋はそのドアです。できればドアは開けて置いてください。私はしばらくしたらお茶を持って来ますので」と義兄を一人残して亜佐美は伯父と一緒にキッチンに向かった。

親子の対面はたぶんふたりっきりのほうが良いだろう。

伯父にお茶を出したが亜佐美は落ち着かない。

うろうろするのも大人気ないと、夕食の準備を始めた。

今夜は遠くから母方の祖父母が来る。母の兄も付き添いで来るので賑やかな夕食になる予定だ。

しばらくすると伯父が「そろそろ見て来いよ」と切り出すので、茜の様子を見ようとしたところだった。

茜と元義兄がリビングにやってきた。

「ありがとうございました。そろそろお暇しますので」そう言いながら頭を下げる。

「私は年末まで東京に滞在します。年始はアメリカに居なくてはなりません。

そこでご相談なのですが、クリスマスを茜と一緒に過ごしたいのですが」と元義兄が切り出した。

亜佐美は茜を見ながら、「ご存知の通り、今日と明日は私達も忙しくしております。茜ともゆっくりと話したいですし、伯父にも相談する時間が欲しいです。お返事はその後でよいですか?」と即答を避けた。

「もちろんです。明後日、ご連絡いただけますか?」と言うのでそれに頷いて、茜と元義兄を見送った。

「伯父さん、ちょうど良い機会なので明日みなさんに相談しようと思います。伯母さんと貴子さんに今日のうちに話しておいていただけます?」と亜佐美は伯父に頼んだ。

伯父は「亜佐美、よく考えるんだぞ。それから彼が茜の父親というのを忘れちゃいかん」と亜佐美に念を押して帰って行った。

「茜、もうすぐ鹿児島のおじいさまとおばあさまがいらっしゃるから、お夕飯の手伝いをしてくれる?」と言うと、茜は素直に肯くので亜佐美は少しほっとして茜と一緒にキッチンに立った。
食事の用意が終わると「さあ、今度はお部屋の準備をしてしまいましょう」と茜を促して客間に移動する。その間、亜佐美は義兄の話は何もしなかった。
寝具の準備をし花を飾って一段落すると今度は仏間に移動した。茜も何も言わない。
明日のために仏壇を整えてようやく亜佐美は気分が落ち着いてきた。

「茜、ここに座ってごらん」と仏壇の前に正座させる。
ふたりで手を合わせてから亜佐美は口を開いた。
「茜はパパと会ったこと、嫌じゃなかった?」
茜は首を横に振る。
「びっくりしたでしょ?」と聞くと、「うん」と小さな声で茜が言った。
「茜の部屋では、お勉強のドリルを見せた?」
「うん」
「何か言ってくれた?」
「うん、茜は勉強が好きなんだねって、言ってた」
「そう、よかったわね」と言うと茜はこくりと頷いた。
「それでクリスマスのことなんだけど、茜はパパからも聞いたの?」
「うん。あーちゃんが良いって言ってくれたら茜とクリスマスデートしたいって言ってた」
「どうなの?茜も行きたいって思う?」
「う〜ん、ディズニーランドでも良いよって言ってくれたけど・・・」

「え?ディズニーランド?」
「うん。でもね、私はディズニーランドは行きたくない」
「え?行きたくないの?」
「うん、寒いもん!」
「茜・・・」と亜佐美は噴出してしまった。

「寒いから行きたくないんだ?(笑)」と言うと茜はコクコクと頷いている。
「でも、パパには会いたいよね?」と聞くと、茜はしばらく考えてから「うん」と答えた。
「明日ね、皆さんが集まるからちょっと相談していいかな?」
「うん、いいよ」と茜が言うので、それではと話を打切って駅まで祖父母を迎えにいく準備をした。

その夜は、遠方からわざわざ来てくれた母方の祖父母と叔父と共に夕食をとり、一年ぶりの再会に心が温まるひと時を過ごした。
翌日は無事に姉の一周忌を済ませ、その夜も亜佐美の家に滞在した祖父母は叔父と共にその翌日帰っていった。
見送っていった駅のホームで何度も「何かあったらいつでも遠慮なしに連絡しておいで」と言ってくれたことが有難い。電車が見えなくなるまで茜と寒いホームで見送った亜佐美である。

伯父が親戚の集まる席で茜の父親の話を切り出してくれた。遠慮のない仲なのでいろいろとアドバイスを貰って、茜はクリスマスに父親と過ごすことになった。
連絡をとりあった結果、24日に混雑する東京は止めて茜の父親がこちらに来ることになった。

車でアウトレットまで買い物に行って一緒にお夕食をするコースに決まって、茜はそわそわしているみたいだ。亜佐美も誘われたのでアウトレットは一緒に行くことにして、夕食は茜と父親の水入らずでと勧めた。
アウトレットでは亜佐美は一人で見たいものがあるからと道中が一緒なだけで別行動である。

そういえば、保坂は次兄の結婚式があるので２４日から東京へ行くと言っていた。
思いがけず今年のクリスマスは一人で過ごすことになった亜佐美は、寂しいクリスマスだけれど久しぶりにゆっくりとブログ友達のサイト巡りでもしようかとぼんやりと考えた。

43　クリスマス

クリスマスの直前２３日の夜、亜佐美は数日振りに保坂とゆっくり電話で話をしていた。
毎日何らかの形でやりとりはしているが、法事と来客とで落ち着いた話はできなかった。

保坂は予定通りイヴには東京に行くらしい。
「亜佐美さんとクリスマスを過ごせなくて残念だよ」と何度も言うので、
「お兄様の結婚式じゃないですか。その前に親族でのお食事会とかいろいろあるんでしょ？」と聞くと、
「教会ではベストマンをしなくちゃならないんだよ。それも面倒だ」と言う。
タキシードかしら？フロックコートかしら？保坂の礼服はさぞ素敵だろうと想像すると亜佐美はため息が出そうである。
「それ、いいですね。絶対に写真欲しいかも～。保坂さん、写メ送ってくださいよ！！」と亜佐美が意気込んで言うと、
「写メ？！」と保坂は絶句していた。
「写真見たいんですか？」
「えぇ、えぇ、写メ希望です！」
「写真どうするんですか？」
「家宝にしますっ！！待ち受け画面にも、ＰＣのスクリーンセイバーにも！！」
「家宝？・・・って、亜佐美さん」
保坂がたじろいだ気配で、亜佐美はしまったと思った。
「やけに元気ですね、今日は」
「いえ、出来たらで結構です・・・」と亜佐美の声がしぼんでいった。

「そうですね、写真いいですよ？」
「えっ、ほんとうですか？」
「ええ、ですが、もちろんタダと言うわけにはいきません。何かと交換しましょう」
「交換ですか・・・」
「何と交換するかは考えて置きますよ」
「保坂さん・・・お手柔らかにオネガイシマス」
「亜佐美さん、最後、棒読みです」
そんな軽口を言いながら笑いあった。
つまらないことで笑いあえる日常というのが保坂には欠けているような気がしている。
シリアスになりがちな保坂に時々はリラックスしてもらいたいという亜佐美の考えでもあった。

「そうそう、亜佐美さん、まず写真を撮ることで交換条件があります」
「え？」
「だって、僕は写真を撮られるのはあまり好きではない。撮るだけでもかなり決心が必要なんですよ」
「はぁ、写真撮るのに交換ですか・・・」
「はい。これから二人のときには一也と呼んで下さい。今からそうしてもらえたら写真撮りますよ」
「保坂さん・・・」
「ほら、保坂さんじゃなくて・・・」
「うっ・・・」
「言えないんですか？」
保坂はもう何も言わずに亜佐美の言葉を待っていた。
こういう展開になったら絶対に相手がそうするまで食い下がるに違いない。

亜佐美は観念したほうが良さそうだと思った。

「い、一也さん・・？」

「はい。ようやく呼んでくれましたね」

丁寧だが保坂が喜んでいるのがわかった。

「写真、絶対ですよ？」

「わかりました。約束ですからね」

「楽しみにしています」

「じゃ、写真を差し上げるときの交換条件はまた考えて置きますから」

保坂が電話の向こうでニヤリと笑う様子が目に浮かんで、亜佐美は保坂は絶対にSだと確信した。

「明日は何時出発？」

「１０時頃かな」

「僕はお昼までに実家だから、間に合いそうだな。駅に行くときにちょっと寄ってもいいかい？」

「はい、そうしてください」

亜佐美と茜は保坂にクリスマスプレゼントを用意していた。いつ渡せるかなと思っていたところである。

「じゃ、明日ね」「おやすみなさい」

そうして二人は電話を終えた。

翌朝、保坂は家に上らずに亜佐美と茜にプレゼントの袋を渡した。

保坂は「買い物から戻ったらメール送って。心配だから」と言って亜佐美の腕にちょっと手を触れてから、出かけて行った。

亜佐美も小さな袋を渡すと保坂はびっくりしたようである。

「明日を待たないで、電車で開けていいよ」と茜が保坂に笑いながら言った。
あまり感情を表す保坂ではないが、よく見ると嬉しいとか嫌だというサインのようなものが表れることに気がついていて、亜佐美は少しだが保坂の表情から読み取れるようになっていた。

保坂を見送った亜佐美は、茜の手を?いで家に入りお出かけの準備をした。
亜佐美が運転してアウトレットに行くことになっている。イヴは混雑するだろうが最近買い物という買い物もしていなかったので楽しみでもある。
元義兄は茜とふたりで時間を過ごしたいと思うので、亜佐美はゆっくりと一人で見て回ることにしていた。

大混雑のアウトレットではそれぞれ買い物をして、車のトランクをほぼ一杯状態にして帰ってきた。
茜は父親に買ってもらった洋服に着替えて、予約しているレストランに出かけて行った。
亜佐美は荷物を部屋に運び終えて、しばらく座り込んでしまった。
一人で過ごすクリスマスイヴは初めてだった。
ゆっくりとした動作で部屋着に着替えて暖かいリビングに移動し、ソファーにごろりと横になった。
保坂に『今、買い物から帰ってきました。アウトレット凄い人でした』とメールを送ってからゆっくりと目を閉じた。

遠くから音が聞こえていた。それが携帯の着信だと気がついて慌てて出てみると、従兄妹の瑠璃からの電話だった。

「亜佐美ちゃん、今家に居る？」
「うん、居るわよ～」
「ちょっと寄って良いかな。茜ちゃんのクリスマスプレゼント持って行くわ」と言う。
「いいのに、そんなの」と言うと、
「駄目だよ～。皆から預かってるんだから」
「ありがとね。じゃ、待ってる」
眠っていたのは３０分くらいのようだ。
ちょうどよかったと思って亜佐美はソファーから起き上がった。

ほどなく瑠璃が到着したものの、外に人を待たせてるからすぐに行くねと紙袋をいくつかリビングに運び込んだ。
ちょうどその時、亜佐美の携帯が鳴りだした。保坂からの電話だ。
「亜佐美さん、今大丈夫？」
「あ、今ちょう従兄妹が来ていて」と亜佐美が言うと、その後ろから「私はすぐにお暇するから～」と瑠璃が叫んだ。
「あはは、元気そうな従兄妹さんだね。５分くらいしたらまた掛け直すよ」というので一度電話を切った。

「保坂さん？」と瑠璃が聞くので、「うん、そう」と答えると、
「顔が赤くなってるよ、亜佐美ちゃん」と瑠璃が笑った。
「私のプレゼントはこれだけじゃないのよ、亜佐美ちゃん」と瑠璃は言葉を続けた。
「大晦日から新年にかけて、茜はうちで預かるから」とニヤニヤしている。
「泊りがけで寄越してよ。初詣も連れて行くから。なんだったら３０日からでもいいよ」と言う。
「いつも悪いわよ」
「何、言ってるの。茜がくるとパパもママも喜んじゃって、私の監視が緩くなるから助かるのよ」

「なるほどねぇ」
「それに、保坂さんとちゃんとデートできるでしょ？」
「え？」
「お泊りデートしてないでしょ？ちゃんとすることしなきゃ駄目よ～」
「え？え？」
「これは私から亜佐美ちゃんに。お泊りデートの時、使って！！」
と言ってピンクの紙袋を押し付けて、亜佐美が何も言い返さないうちに瑠璃は帰っていった。

えっと、お泊りデートって・・・、高校生の瑠璃にそんなことを言われるとは思っていなくて驚いていると、保坂からまた着信があった。

「亜佐美さん、もう大丈夫？」
「大丈夫です、たぶん・・・」
「たぶん？何かあった？」
「あ、いえ・・。何でもないです」
ふ～～んと言いながらも保坂は、「朝渡したプレゼントもう開封しました？」と聞くので、
「プレゼントは明日でしょ？ツリーの下に置いてますよ」という亜佐美の答えに笑いながら、
「亜佐美さんへのプレゼント、今開けてもらえますか？」
「え～～？今ですか？プレゼントはクリスマスの朝って決めてるんですけどねぇ」
「他にもプレゼントは考えているので、今日渡したのは今開けてください」
と、いつになく保坂がしつこく開封を促すので、ツリーの下から保坂にもらった箱を取り出した。

包装を開けてみると立派なカメラの箱が出てきた。
「保坂さん、これ・・・」
「あ、酷いな亜佐美さん。一也って呼んでください」
「い、一也さん。カメラです」
「そうです。一眼レフですよ」
「こんな高価なもの・・・」
「今夜はそのカメラの説明書を読んでおいてください」
「でも、こんな・・・」
「まず、バッテリー充電すること！」
「は、はい」
「そのカメラは一眼レフだけどとても軽量にできているので、亜佐美さんでも大丈夫だと思います」
「びっくりしました。カメラは欲しかったんだけど、こんな良いものを・・」
「素直に、ありがとうって言って欲しいな」
「ありがとうございます」
「僕は明後日そちらに戻ります。２８日で実質仕事納めなので、社食ことはありますけど年末年始は時間があるのでお天気が良ければ一緒にどこかに撮影に行きましょうか」
「お正月はこちらで？」
「そのつもりです」
「じゃ、張り切ってお弁当作ります」
「それは楽しみだなぁ。僕もカメラを触るのはは久しぶりなので楽しみですよ」
「あの、ほんとうに有難うございます」
「うん。僕も亜佐美さんから頂いたタイピンを今していますよ」
「あ、気に入っていただけたら嬉しいのですが」
「今日と明日で大活躍しそうです、このタイピン」
亜佐美は保坂にネットで探して新素材の金属でできたタイピンをプレゼントしたのだ。

シャープでシンプルなデザインが保坂に似合いそうだった。

「あ、僕はもう行かなくてはなりません」

「ご家族水入らずのお夕食ですよね？」

「久しぶりに顔合わせたからなかなか盛り上がってますよ」

「明日は頑張ってくださいね。写メ忘れないでください」

「はいはい（笑）約束しましたからね。明日は電話できないかもしれませんから、今言って置きますね」と保坂が言った。

「メリークリスマス」

亜佐美も「メリークリスマス」と言って電話を終えた。

４３　クリスマス（後書き）

そろそろ二人の大人のデートシーンを書かなくてはなりません。
大人の付き合いにはどうしても避けられない。
Ｒ－１５の範囲ですが、なかなか難しいです。
頑張ります。

43　クリスマス2

保坂からプレゼントされた一眼レフカメラの使い方を探っていると茜の居ないクリスマスイブを亜佐美は一時的に忘れていた。
必要な箇所だけは説明書も読んだが、ネットを検索するとたくさんの記事があって興味のあるサイトを見るだけでも時間がかなり経過した。

茜が帰ってくるまで亜佐美はカメラに夢中になっていた。
翌日も迎えに来ますからと茜を送り届けた元義兄は宿に帰って行った。
久しぶりに茜と一緒にお風呂に入ることにして、茜が楽しそうに話す様子を感じながら、はやり親には敵わないのかなと思うと複雑な気持ちだ。
お風呂上りの茜の髪を乾かしたり一緒に牛乳を飲んだりしながら、この生活が変わるかもしれないと思うと堪らなく嫌だった。

興奮してなかなか眠らない茜をなんとかベッドに入れ、亜佐美はベッドの横に座った。
「茜のパパ、明日もお迎えに来るって言ってたね」
「うん、明日は算数と英語のドリルを買ってくれるって言ってた」
「そうなんだ。茜のパパはお勉強よくできたから、きっと茜に良いのを選んでくれると思う」
「パパもお勉強できたの？」
「うん、有名な学校だったもの」
「ふ～～ん。ママは？」
「茜のママもお勉強よく出来たよ～」
「あーちゃんは？」
「私？私は全然ダメだったデス」

「ダメだったの？」
「うん。いつも由佳姉さんと比べられて辛かったよ」
「あはは、でもあーちゃん全然困ってないよね」
「そんなことないよ。困ることもある」
「そうは見えないけどなぁ」
「お勉強できなくても、亜佐美には良いところがたくさんあるって、そういつもママが言ってくれたから」
「それって、茜のママが？」
「ううん、私のママ（笑）　茜からみたらお祖母さんだよ」
「ふ～～ん。ママがいっぱいでわかんなかった」
二人は顔を見合わせてクスクス笑った。

明日の朝プレゼントを開けるので、今夜はもう眠ろうと言うとようやく茜は目を閉じた。
ダイニングに戻った亜佐美は、保坂から貰ったカメラを今夜はもう触る気になれなくて丁寧に箱に仕舞った後、ワインを一本取り出した。
料理にも使うような安いワインだ。少しだけ酔えればなんでも良かった。
低い音量で音楽を流す。ワイングラスを持ってリビングのソファーに移動した。

今日の茜の様子からすると、突然現れた父親を拒絶することもなくむしろ嬉しそうだ。
宿に帰って行った元義兄の背中を思い出しながら、そういえば義兄はまだ３０半ばでまだまだ若いことに気がついた。
仕事もあるし子育ての経験も無いのに茜を引き取るとは言い難いだろう。可能性は低いかもと思う。でも言い出さないという保障は何もなかった。
伯父の「父親だということを忘れるな」と言う言葉を思い出す。

叔母の私でさえ茜のことがこんなに可愛く思えるのに、親となればもっと強い感情なのだろうと思える。
引き取りたいと言われたら、私はどう答えるのだろうか。まだ結論は出そうになかった。
ワインボトルを引き寄せてもう一杯グラスに注ぐ。

保坂にはかいつまんで事情は話しているが、亜佐美の迷いや胸の内はまだ打ち明けてはいなかった。
保坂は今頃どうしているのだろうか。次兄の独身最後の日を家族で盛り上げていることだろう。
明日は保坂がベストマンの衣装を着て式に参列する。格好良くて見とれる女性が続出だろうと想像できる。その写真は交換だと言っていた。亜佐美の何と交換するというのだろうか。
たいしたものは持っていない。
それともやっぱり男性が欲しいというと、この　か・ら・だ　？と自分で茶化しながら考えてもみたが、写真と引き換えじゃ自分が可哀想な気がした。

取り立てて運動することもなく、肥満とは言わないまでもどこもかしこもぷにぷにと柔らかい筋肉である。
胸だって・・・そうあるとは言えない。お腹だってほらこの通り！とばかり指先でつまんでみると余分な脂肪が簡単につまめる。
今からでも何か運動を始めたほうがいいかなとは一瞬思ったが、ジムに通う時間があるのかもわからなかった。

保坂とはこれからどうなっていくんだろうと亜佐美はぼんやりする頭で考えてみた。
これ以上は二人だけの問題でなくなるような気がする。大勢の人を巻き込んでしまいそうな予感がする。
では、進まなければ誰も巻き込まなくて済むのだろうか。少なくと

も一番近くに居る茜を巻き添えにはしなくなかった。

ワインですでに酔っているのかもしれない。あまり多くのことは考えられなかった。

もう休もうと立ち上がってリビングを横切ると、夕方瑠璃が役立てと亜佐美に押し付けた袋が目に留まった。

中身を引っ張り出すと瑠璃の思わせぶりな言葉を裏付けるように、セクシーな下着が出てきた。とんでもない高校生だ。こんなところに置いておけないよと思って品物を袋に突っ込んで自分の部屋に運び、部屋の隅に袋を置いた。

眠りに入る直前に亜佐美の母が言っていたことを思い出した。

「あなたはどうしたいの？亜佐美の思うように進んでいけばいいのよ」と母はよく言ってくれた。

姉も同じようなことを言ったことがある。

「亜佐美、いつか自分のしたいことがわかったらそれをすればいいの。でもそれが分からないうちは目の前のことをしてれば良いのよ」

姉の言ったとおり今は目の前のことをしている。たとえそういう生活だけだとしてもそれが変わるのが嫌だと思いながら亜佐美は眠りについた。

クリスマスの朝はプレゼントを開ける楽しみがある。去年は姉の葬儀直後で悲しいクリスマスだった。今年は茜と二人、華やいだ気分で恒例のプレゼント交換だ。

それが終わると、茜は父親が迎えに来て出かけて行った。

亜佐美は今年最後の休日をのんびり過ごそうと決めた。

亜佐美は保坂の工場の社食では献立担当だ。
献立は定番メニュー、月替わりのもの、季節替わりのものと3種類用意し、すでに1月のスタートを待っている。
２９日には現在の委託会社が出るので、その後に備品の搬入が行われる。
新しく届く食器の確認を料理長とすることになっている。
亜佐美単独では献立表の貼り替えとスタート後の利用者のフィードバックが主な仕事となるが、その他にも仕入れについては大前と一緒に働く時間も多くなる。
大前もクリスマスが最後の休日になるだろう。
亜佐美はブログ友達とクリスマスメッセージを交換したり、ブログの更新をして一日の大半を過ごした。

午後遅くに茜を送り届けた義兄はその足で東京に戻った。３０日には成田からアメリカに戻るらしい。ここで良いというので、そのまま家の前で茜と二人、義兄を見送った。
リビングに戻った亜佐美にくっついて茜もソファに座った。
「どう、楽しかった?」
「うん、ドリル買ってもらった」と袋を振って見せる。
どのお店に行ったとか、アイスクリームを食べたとか茜は楽しそうに話してくれた。
「よかったね」と亜佐美が言うと、「うん、でも・・・ちょっと疲れた」と茜がため息を吐いたので亜佐美は笑ってしまった。
「あれ?疲れたの?」
「うん、夜は家のご飯が良いわ」
「ご馳走ばかりも飽きるよね」と亜佐美は笑って茜に言った。

グリルチキンとサラダの簡単な食事をしながら、瑠璃の提案を思い出した。
「昨日ね、瑠璃ちゃんが来てたんだけど・・」

「うん」
「大晦日、茜に泊まりにいらっしゃいって言ってた」
「え？本当？行く！行く！」
「初詣も茜と一緒に行きたいって」
「うわ～い。嬉しいなぁ」
「あーちゃんも一緒でしょ？」
「うん。たぶんね」
「行くでしょ？」
「私、明日からお仕事なのよ。食堂の話、前にしたよね？」
「うん」
「１月早々に始まるから、明日からずごく忙しくなるかも」
「そうなんだ」
「２９日の後から忙しくなるのよ」
「うん」
「２９日の後になってもしかしたら行けなくなるかもしれないわ」
「そうなんだ。がっかり」
「まだ決めたわけじゃないけど、もしもの時は茜だけでお泊りしてくれる？」
「は～い。わかりました」
「いいな、茜だけ瑠璃ちゃん家で皆と一緒だもん」
「あーちゃん、かわいそう」
「でしょ？でもお仕事頑張るから」
「うん、うん」
亜佐美の胸がチクリと痛んだが、もしかしたら茜と一緒に伯父の家で年越しできるかもしれない。今、それを気に病むのはやめようと思った。

そのクリスマスの夜遅く、保坂から電話がかかってきた。
亜佐美はちょうどお風呂から上って、温かいココアを飲もうと作ったところだった。
携帯を片手に、もう一方ではココアのカップを持ってリビングのソファーに座った。
「素敵な結婚式でした？」
「うん。兄貴たちの友達って変わった人が多くて、かなり盛り上がってた」
保坂は思い出しているのか声に笑いが含まれている。
「保坂さん、約束の写真撮ってくれました？」
「え～、保坂さんはないだろう・・・」
「あっ・・・ごめんなさい。一也さん」
「お仕置きだな！」
「え？お仕置きって・・・」
「あはは、冗談だよ、亜佐美さん」
今夜の保坂は機嫌が良いらしい。声をあげて笑う保坂は珍しい。
「ところで、年末年始はどうしてる？」
「社食のことがありますので、ぎりぎりまで何かやってると思いますけど？」
「そうだな。僕もそうだ。でも３１日は仕事しないつもりだよ」
「あ、私もです」
「３１日から３日まで仕事は止めておかないか？」
「そうですね、私もそう思っていました」
「その間に写真を撮りに行こう」
「あ、はい。楽しみにしています。それとお正月はこちらですよね？」
「うん、その予定だよ」
「じゃ、簡単にですが御節を作ってお届けして良いですか？」
「いや、それは悪いよ。休みにはちゃんと休んでもらわないと」
「元旦の朝にちょっとつまめるものだけにしようと思うんです」

保坂は考えていたが、「では、お願いしようかな。せっかくだから」と言ってくれたので亜佐美はほっとした。

電話を切る前に保坂が、「明日そちらに戻るけど、仕事が終わったらお家に寄ってもいいかな?」と言ったので、亜佐美は「お待ちしています」と答えた。

４４　二人の夜

翌日から亜佐美も忙しくなった。大前からのメールも増え農家への交渉をしながら、お正月の準備もある。
茜が冬休みで家に居るのでお手伝いさんが通いで来てくれるのはほんとうに助かっていた。
そのお手伝いさんも３０日からは正月休みということで休んでもらい、茜は３０日から伯父の家に預かって貰う事にした。
保坂も相変わらず忙しいものの毎日仕事が終わると亜佐美の家に立ち寄る。亜佐美はそんな保坂のために簡単な食事を用意していた。

２９日はまだ委託業者が社食で作業をするというので、亜佐美は３０日に工場に行くことにした。
亜佐美が到着する頃には新しい献立表も届いている予定である。
その掲示を見届けるのが亜佐美の仕事だった。
朝、茜を伯父の家に送り届けて工場に向かう。工場はもうすでにお正月休みに入っていて、社食のある建物付近以外は人の姿がなかった。
亜佐美が社食に入ると大前が目ざとく見つけて亜佐美を案内してくれる。もうすでにメニューは貼り替えられていた。
何でもできることは早めに済ませておくのだと大前が言った。実際スタートするとどうなるのか、動線を考えながら何度かフロアーを動いてみる。
清算カウンターではＰＣを設置しているスタッフ、厨房では機材搬入をしており何人ものスタッフが行き来していた。

午前中で工場を後にした亜佐美は、家に帰ってキッチンに篭った。
クリスマスイブにアウトレットで買ってきたお重を箱から出す。保坂のお正月用にと現代風な絵付けの小さなお重を買っておいたのだ。

明日、大晦日はカメラを持ってでかけるはずなのでそのお弁当用の下ごしらえもする。
夕方まで時間を気にせず作れるだけものは作って保存容器に入れると、ようやく亜佐美はコーヒーを片手にリビングのソファーに座ることができた。
これで篭城しても当分は大丈夫だと思うと笑いがこみ上げる。一度も座ってなかったので足は疲れているが達成感があった。
甘いものも欲しいなぁと思ってクッキーを取りに行き、一枚頬張りながらゆっくりコーヒーを飲んだ。

今夜も保坂は仕事帰りに立ち寄るだろう。休みの前日の夜だ。ワインを勧めればきっと飲むに違いない。
茜が家に居ないことによっていつもとは違う夜になるのだろうかと亜佐美はほんやりと思った。

でもと亜佐美は考える途中でそれを止めた。考えがまとまらないときは気分転換が一番だ。
さて！と気合を入れてキッチンを片付けることにした。
洗って伏せてあった調理器具の水分を拭き取り仕舞っていく。シンクも綺麗に洗って拭き取り、ダイニングテーブルを片付け保坂との二人分の食器やカトラリーを並べる。
ワイングラスを置いてワインオープナーも出して置いた。
腰に手を当ててセッティングを確認して頷くと、亜佐美はお風呂の準備をするためにキッチンを出た。

お風呂の準備と言ってもボタンひとつでお湯が溜まる。
次に自室に行き、部屋の温度調節のボタンを押してから一度窓を開けて空気を入れ替えた。
ベッドシーツを換え、着替えを準備すると亜佐美はゆっくりとお風呂に入った。

脱衣所に携帯電話を置いて、のんびりと湯船に浸かる。
長風呂で柔らかくなった肌に保湿クリームを磨りこんで楽な服装に着替えると、濡れたタオル類を洗濯機に放り込んでスイッチを入れた。
軽く化粧を終わるとリビングに戻り、照明を調節してから音楽ＣＤを取り出す。今夜はボサノバにしようとセットし軽く柔らかな音楽が流れ始めるとキッチンに戻った。

スープを火にかけてから携帯電話を取り出して、伯父の家に電話をかけた。
茜は元気そうな声で「今日は蟹を食べに行ったの」と話してた。
叔母からは「年末年始も仕事でたいへんだね。元旦は休めるんでしょ？」と聞かれたので、「明日も遅くまでかかるかわからないから、元旦の午後にご挨拶に行きますね」と答えた。
この歳になって叔母たちに嘘を吐くうしろめたさで気分が落ちこんだ亜佐美は、その後電話を代わった瑠璃に「守備はどうよ？」と聞かれて苦笑いが出てしまった。
「お父さん達にはあくまでも仕事だと行って置くから、こっちは心配しなくていいよ」と瑠璃はすっかり共犯者気取りだ。
「うん。ありがと。でもまだどうなるのかわかんないけどね」と亜佐美が気弱に言うと、「駄目だよ、亜佐美ちゃん。考えちゃ駄目なんだってば。本能に従うのよ～」と瑠璃は亜佐美を励ますように言った。
「それにしてもさ、瑠璃ちゃんが何でそんな風にわかったことを・・？」
「今時の恋愛小説ってそんなことばかり書いてる」
「え？小説なの？」
「うん。でもさ、なるほどって思うもの」
瑠璃の経験から来るものでないとわかって亜佐美は少しほっとした。
可愛くて微笑ましい従兄妹殿だ。

皆によろしくと電話を切ると肩の荷が降りた気分だ。
亜佐美はオーブンを温めるためにキッチンに戻った。

保坂から仕事が終わったと電話があった時、亜佐美は保坂にプレゼントしてもらったカメラを触っていた。
１０分くらいで着くというので慌ててグラタンをオーブンに入れた。
保坂は一度自宅に戻っらしくラフな服装に着替えてやってきた。
暖かそうなコートを脱ぐと、ジーンズに柔らかそうなセーターを着ている保坂はどこから見ても格好良い。
亜佐美がしばらくぼーっと見惚れていると保坂が笑いながら「今日のメニューは何かな？」と聞いたので、はっと我に返って頬が熱くなってしまった。
「今夜はグラタンです」と亜佐美が答えると、「あぁ、あのグラタン、僕の大好物だ」と補佐かは嬉しそうに言いながら、テーブルに置いてあるワインを開け始めた。

亜佐美が作っておいた料理を並べている間、保坂は亜佐美が触っていたカメラを手に取った。
「何か撮ってみた？」と聞くので、「試しに数枚だけね」と亜佐美は答えた。
「ちょっと設定見ても良い？」と言うので、「どうぞ、どうぞ」と勧めておいて亜佐美はグラタンをオーブンから出した。
保坂がワインをグラスに注いで光にかざして色を見ている。軽く乾杯してから、保坂はワインのボトルを写真に撮った。
「軽いなぁ、このカメラ」
「ええ、ほんとうに私でも軽々と扱えそうです」
「じゃ、明日は楽しみだな」

「そうですね。どこに行く予定ですか？」
「う～～ん、一応山のほうとは思っているけど、明日の天候次第かな」
二人はどちらも仕事の話はしなかった。久しぶりに寛いだ夜だった。
他愛の無い話を続けて、時折ワインを飲みながら亜佐美の料理を平らげていく。

「あっ、保坂さん、ベストマンの写真は？」
「あれ？まだ保坂さんはないだろう」
「あ、ごめんなさい。一也さん・・・デシタ」
「ほんと、お仕置きするぞ～」
「あはは、ごめんなさいってば。それよりも写真ください」
「ん～～、亜佐美さんの携帯電話は？」
「あそこです」と亜佐美が電話を指差すと、
「じゃ、それ持ってここに来て」
「は～い」と、亜佐美が電話を取りに行くと、保坂は自分の携帯を取り出して
「ほら、先に確認するかい？」と亜佐美に言った。
保坂はダイニングチェアーにゆったりと座っている。
「ここに来て」と亜佐美にもう一度行った。
亜佐美が保坂に近づくと、保坂は亜佐美の手を取って「ほら、ここに座って！」と自分の足を見た。
「えっ？」と驚いて亜佐美が保坂の顔を見ると、保坂は亜佐美の手を引っ張ってから空いてる手を亜佐美の腰に回して保坂の膝の上に座らせてしまった。

亜佐美が自分の置かれた状況に目をパチパチさせていると、保坂は笑いながら亜佐美の腰に手を添えたまま、「交換条件があると言ったの覚えてる？」と聞いた。
亜佐美が頷くと、「じゃ、こうして」と亜佐美の足を軽く叩いて保

坂の膝にまたがるように促した。
保坂を見るとどうしてもそうしろという風に頷くので、亜佐美は恐る恐る保坂の膝を跨いだ。
保坂は亜佐美の携帯電話を取り上げて、亜佐美の空いた両手を自分の肩に置いた。
「そのまましっかりつかまっててね。このままで写真見せてあげる」
保坂の携帯にはフロックコートで王子様のような保坂が映っていた。
「誰にも見せちゃだめだよ」と言って、亜佐美の携帯にその写真を送るとあっという間に届いた写真を保存した。

二つの携帯を閉じた保坂はそっと携帯をテーブルに置き、亜佐美をじっと見つめた。
「亜佐美さんからキスして欲しい。それが僕の条件」
間近に保坂の顔があった。茶色っぽい保坂の目が今日は黒っぽく見えた。
やや薄めで形の良い唇をじっと見つめると、いつのまにか添えられている保坂の手が亜佐美の背中を軽く押した。
その押しに助けられて亜佐美は保坂に唇を合わせた。

どちらからともなく唇が開き、徐々に深い口付けになっていく。
何度か角度を変えているうちにいつの間にか亜佐美の手は保坂の首の後ろにしっかりと回されていた。
こういう激しいキスを亜佐美は誰ともしたことがなかった。それを今自分がしていることが驚きでもある。
普段は取り澄ましたような態度の保坂がこんなに激しかったり優しかったり、いろいろ入り混じったキスをするのが不思議な気がした。
誘われるように亜佐美が舌を出すと保坂がそれに吸い付く。保坂が亜佐美の歯を舌でなぞるので、次に同じように亜佐美がすると保坂が喜んだような気がした。
何度か唇が離れたがすぐにまたくっついて深いキスが続いていく。

胸がチクっとして保坂が胸を触っていることに亜佐美が気がついたときには、すでにブラのホックが外されていた。
何時の間に・・・と一瞬思ったが、考えが続かない。
服の上からだが保坂の大きな手が亜佐美の背中を支え、片方の手は胸に当てられていた。
「嫌じゃない？」とようやく唇を外した保坂が亜佐美の耳元で囁いた。
亜佐美がふるふると首を横に振ると、「ソファーに行くよ？」と保坂が言って、ふわりと亜佐美の体が持ち上がった。

45　二人の時間

保坂は亜佐美をソファーに降ろすと、自分は跪いて亜佐美の足首に手をかけて靴下の上から2～3度手の平で撫でた。
亜佐美はふわふわしたフリース素材のルームソックスを履いていた。亜佐美の目を見つめたまま保坂は靴下をゆっくりと脱がして、おもむろに屈むと亜佐美の親指にキスを落とした。
亜佐美がピクッと驚いて足を引っ込めようとしたが、保坂がしっかりと掴んでいてそれを許さなかった。
下から見上げる保坂の顔はどうしようもなくセクシーだった。亜佐美の心臓は更に大きく鼓動して周りの音はなにも聞こえなくなった。
保坂はそのまま亜佐美の指を銜え丁寧に舐めてゆく。
もう一方の足も同じようにキスを落とし舐められて、それだけで亜佐美は気が遠くなりそうだったが、それはまだ序の口だというのを後で知ることになる。

リビングのソファーで散々翻弄された後でも亜佐美はまだ服を着たままだった。
亜佐美の最初の波がおさまってしばらくしてから、保坂が立ち上がって亜佐美の手を引っ張った。
「立てるかい？」
「ええ、なんとか」と言った二人の声はどちらも掠れていた。
よろめきながらも立ち上がった亜佐美にぴったり寄り添った保坂は、
「寝室はどっち？」と亜佐美の耳元で囁いた。

亜佐美は保坂の手を取って先に歩き出した。
途中、ダイニングテーブルに置いてあったワインのボトルとグラスを保坂は器用に片手で持って、亜佐美に引っ張られてついていく。
廊下の突き当りの左側のドアを開けると、亜佐美の小さなリビング

になっていた。
「こっちよ」と言って亜佐美はうす暗い階段を昇っていく。
保坂はぴったりと亜佐美の後から付いて行った。
ロフト風の空間があり、セミダブルのベッドが中央にあってその側にナイトテーブルがある。
部屋は床暖房になっているのかほのかに暖かかった。

保坂がナイトテーブルにワイングラスを置きワインを注いでいる間に、亜佐美はキャンドルに火を灯した。
デザインされた大き目のガラスの鉢にキャンドルが入っていて、ゆらゆらと揺れている。それが壁に反射して幻想的な模様を作っていた。
保坂はワインを一口飲み黙って亜佐美に差し出すと、同じグラスから亜佐美も一口飲んだ。

その後のことを亜佐美はあまり覚えていない。いくつもの波に飲み込まれ、保坂にしがみついてその波を乗り越えるのに夢中だった。

いつの間にか眠ってしまったらしい。身体の向きを変えようとして自分の体が動かないことに気がついた亜佐美がうっすらと目を開けると、背中がポカポカ温かいことに気がついた。
お腹には太い腕が巻きついている。
動かない原因はこの腕なんだと思ったとたんに夕べのことを思い出した。
亜佐美をベッドに縫い付け、持ち上げ、そして支えた腕だ。
細身の保坂の筋肉がついた腕は、それだけで美しいと思った。
思わずその腕に掌を当ててそっと握ってみた。

「う〜〜ん」と保坂の声が頭から聞こえたのでぎょっとした亜佐美に、「目が覚めた?」と保坂の優しい声が聞こえた。

「起してしまいましたか?」と聞くと「大丈夫だよ」と保坂は言って、片手は亜佐美のお腹に回したままもう一方の手で時計を手繰り寄せた。
「まだ2時だ」そう言うと保坂は亜佐美から手を離して、上体を起した。
そして亜佐美を引っ張りあげて二人でベッドボードに背中を預けて寄り添って座った。
キャンドルはまだ残っていて、ゆらゆらと壁の模様に動きをつけていた。

「喉が渇いたな」と言うとボトルに残ったワインをグラスに注いで一口含む。
亜佐美の顎に手を添えて上を向かせるとそのままキスをしてきた。
口移しのワインが亜佐美の喉を通るのを見ると、保坂は満足そうにして自分もワインを飲んだ。
何度かそうやってワインを飲みながら黙って手を握りあってた。
沈黙は嫌ではなかった。ワインでほんのりと赤くなった肌をくっつけて指を組む。
この指で優しく全身を触られたのかと思うと更に顔が赤くなるような気がした。
明日からはこの指を見るたびに反応してしまうかもしれないと亜佐美は思った。

「寒くないかい?」と保坂が聞いた。
亜佐美が首を横に振ると、保坂は亜佐美の目を見たままつないだ手を口に近づける。
亜佐美の指先にキスを落としてから、今度は唇に軽いキスをした。
すこしだけ唇を離して、保坂が「柔らかい」と言った。
「どこもかしこも柔らかい」
亜佐美は指先がこんなに感じるとは思ったことがなかった。

「そして甘い・・・」と保坂は言って亜佐美の耳を舐めた。
亜佐美がプルッと震えたので、「寒いのかい？」ともう一度聞いた。
そして亜佐美は最初の時よりさらに高い波に巻き込まれていった。

次に目が覚めたのはすっかり太陽が昇ってからで、亜佐美が目を開けると保坂はすでに目が覚めていた。
「おはよう」と言うと、「亜佐美さん、声が掠れてる」と保坂が笑ったので、「誰のせいかしらね？」と言って二人でクスクス笑った。
意外に照れくさくないと亜佐美は内心ほっとした。

手をつないでキッチンに行くとまずコーヒーをセットした。
亜佐美がお風呂の準備をしている間に、保坂はダイニングからお皿をキッチンに運んでくれていた。
マグカップにコーヒーを注ぎ、保坂に渡しながら、「それ、保坂さん用だから」と言うと保坂はびっくりしていた。
アウトレットに行ったとき買っておいたのだ。
ソファーに座って保坂に凭れてコーヒーを飲む。こんな朝が来るなんて思いもしなかった。
一緒に夜を過ごしたあとはきっと気まずくて顔を合わせ難いと思っていたのに、実際はその逆でこんなに寛げるなんて知らなかった。
亜佐美はその気持ちに素直に感激していた。

保坂にお風呂を勧めて亜佐美は食器を洗った。
交代で亜佐美がお風呂に入っている間に、保坂は食器を拭いておいた。
温めたスープとトースト、分厚く切ったローストハムを焼くと、保坂がスクランブルエッグを作ってくれた。それにサラダを添える。

二人ともお腹が空いていたので凄い勢いで食べきった。

亜佐美がお弁当を詰めている間に、保坂は車を取ってくると言って一度自宅に帰っていった。

おにぎりと唐揚げ、フルーツを用意して容器に入れた後、キッチンを片付けた亜佐美は、浴室と寝室も片付けた。

寝室は一度窓を開け空気を入れ替えたが、二人の濃厚な時間まで出て行ってしまうようで少し寂しくなった亜佐美だ。

保坂は本当にすぐ戻ってきた。カメラとお弁当を積み込んで保坂の運転で写真を撮りに出かけた。

少しドライブすると撮りたい風景はいくらでもあった。

田畑の向こうに見える農家とか、落ち葉とか、枯れた山とか、そういう自然を二人はそれぞれのカメラで撮影する。

保坂のカメラはかなり本格的なもので、レンズもいろいろ持っていた。

お互いのカメラを交換しても撮ってみた。

何枚か撮るたびに写真を確認して、、撮影のポイントや設定方法を保坂に教えてもらいながら撮ると、時間の経つのも忘れていた。

午後になってしばらくすると風が強くなってきたので二人は亜佐美の家に戻ってきた。

熱い紅茶を淹れるとほぉっとため息が出る。

「生き返ったわね」と言うと、保坂がにっこり微笑んだ。

「亜佐美さん、鼻が赤くなってる」

「え〜〜、やだぁ」と亜佐美が慌てて洗面所に飛び込むと、後ろから保坂の笑い声が聞こえていた。

亜佐美が洗面所で鏡を見てみると、少しだけ鼻が赤くなっていた。
「外が寒かったので仕方ないよ」と言いながら保坂が亜佐美の背中にぴったりくっついて腕をまわす。
「今日はうちで夕飯を食べないか?」と保坂が鏡の中の亜佐美を見ながら言った。
「そうねぇ」と亜佐美はわざと考えるフリをした。
「オネガイします。亜佐美さん」と保坂が言うので亜佐美はクスクス笑った。
「じゃ、御節をたくさん詰めて持っていきましょうか」
「で、そのままお泊りコースで!」
亜佐美も考えなかったわけではないので、素直にコクリと頷いた。
「ありがとう」と保坂が亜佐美の耳に囁くように言ったので、亜佐美はくすぐったくなって首を傾けた。
「前を向いてて」と保坂が言う。
鏡の中には頬が赤くなった亜佐美と、その肩に顎をつけるような保坂が映っている。
「可愛い」と保坂が何か言うたびにくすぐったくて目をそらせてしまう亜佐美に、「見てて」と保坂が言う。
やがて前に組まれていた保坂の手が亜佐美の胸を包んだ。
「こうやったら亜佐美さんは感じるんだよ」と言うと本当に亜佐美がビクッと震えるような触り方をした。
スカートの後ろの裾を押し上げて、保坂がぴったりと腰を押し付けた。
「今度はこうやってみようか?」と囁く保坂の硬くなったものが亜佐美に触れる。
急に保坂が亜佐美の耳を噛んで、「続きは僕のところへ行ってから」と言ってスカートを下ろした。

保坂はキッチンでお重に御節を詰めていく亜佐美にまとわりついていた。
冷蔵庫を開ければ冷蔵庫のドアを持ち、保存容器が空いたら洗ってしまう。
まるで犬みたいと思うと年上の保坂が可愛く思えてしようがない。
お雑煮の分も用意して全部バッグに詰めるとかなりの量になった。

カメラとノートＰＣ、簡単な着替えを持つとかなりの荷物になるので、ノートＰＣは諦めた。
最後に化粧ポーチを入れて亜佐美の準備はできた。その間、着替えを選ぶ時も保坂は亜佐美の部屋についてきた。
詰めたバッグを保坂が持って車に積むと、亜佐美は戸締りを確認して、二人で家を出た。

46　年越し

保坂の部屋は相変わらず整頓されていた。
部屋が暖まるまでコートは脱がずに、持ってきた御節を冷蔵庫に入れたり、カメラを取り出したりしていた。
「亜佐美さん、こっち」と言って保坂は亜佐美を奥の部屋に案内した。
「シーツ換えるの手伝ってくれる?」と言うので、「いいですよ」と言って二人でダブルベッドのシーツを換えた。
保坂がシーツを剥ぎ取り、新しいシーツを広げる。
亜佐美は反対側に回ってシーツの端をベッドの隙間に押し込んだ。
ダブルベッドを置くと他にはあまりスペースのない小さな部屋だったが、保坂の体格を考えるとセミダブルでは狭いような気がする。
枕カバーも換えてベッドに置くと、「亜佐美さんの着替えはここに掛けて」とクローゼットに隙間を作ってくれた。
「僕はシーツを洗濯機に放りこんでくるから」と言って保坂が部屋を出て行くと、亜佐美は持ってきた着替えを吊るした。
クローゼットの保坂の服の間に亜佐美の服が掛かっているのは不思議な光景だ。
でも、なかなか良いものだと亜佐美は思った。
洗面所を覗くと保坂が洗濯機の蓋を閉めたところだった。
二人でリビングに戻り、保坂がエスプレッソを淹れてくれる。
それを飲みながら昨日撮影した写真を二人で見ることにした。
保坂がＰＣの準備をし、メディアを入れるとモニターに映し出される写真は、二人が同じ場所で撮ったはずなのに全然違った写真だった。
視点が違うとこうも違うものかと亜佐美は思った。

二人で気に入った写真をアルバムに作り、保坂がＴＶを点けると、ＰＣで見た写真がＴＶのモニターでも見ることができた。

「凄いですね」と亜佐美が感激すると、
「亜佐美さんのＰＣとＴＶでも簡単にできますよ」と保坂が教える。
「え？ほんとうですか？」
「知らなかったの？」
「えぇ、知りませんでした。家に帰ったらやってみます」
「わからなければいつでも聞いていいから」と保坂は亜佐美に微笑んだ。

亜佐美はきっとＴＶで観られるようになるまでは時間がかかるはずだ。
亜佐美が助けてと言えば分かりやすく教えてくれるだろうが、とりあえず亜佐美は自分でやってみたかった。
いつも私はそうだと思う。理解して使えるようになるまで時間が必要なのだ。
保坂は亜佐美がＳＯＳを出すまでは見て見ぬフリをしてくれるに違いない。
そういう気遣いが亜佐美には嬉しかった。

気がつくと、外はもう暗くなっていた。
「亜佐美さん、ちょっと来て」と呼ばれてダイニングに行くと、保坂が小さな冷蔵庫を開けて、
「飲み物何がいいかな？」と亜佐美に聞いた。
「そうですね、何があるんですか？」
「これね、ワインクーラーなの。ウイスキーとワインと日本酒があ

るよ」
「凄いですね」
「夕食はどうしますか？」
「御節食べちゃおうか？」
「え～～？じゃ、明日は何食べるの？」
「明日は、明日になってから考えてもいいじゃないか」
「ん～～」
考えてる亜佐美に、「だって、御節って酒のつまみに最適だと思わない？」と保坂がダメ押しをした。
「確かに、それは言えますね」
「だろう？」

「あ、一也さん、普通の冷蔵庫の中を見てもいいですか？」
「うん、良いよ」
亜佐美が冷蔵庫を開けてびっくりした声を出した。
「何ですか？これは・・・」
冷蔵庫には亜佐美の持ってきたお重と容器以外には、スポーツドリンクと調味料が少し入っているだけだ。
その代わりと言っていいのか、冷凍庫にはぎっしりと冷凍食品やパンが入っている。

「やっぱり今夜は御節にしましょう」と亜佐美はため息を吐きながら保坂を振り返って言った。
「じゃ、日本酒がいいな」と言って、保坂は吟醸と書かれた小さなボトルをテーブルに置いた。
お重をテーブルに出すと、蓋を開けると保坂が興味深気に見入っていた。
「やっぱり良いね、手作りは」
「全部じゃないですけどね。今は美味しくて便利なものがたくさん売ってるから。

この柚子釜は母の十八番で、こっちの鴨のローストは貴子さん直伝なのよ」

と、亜佐美は自分で作ったものを説明しながら、取り皿を保坂の前に置いた。

「今夜はゆっくり飲もう。少しずつ時間をかけて飲めば酔わないから」

「そうなんですか？」

「うん。ガブガブ一気に飲むから酔っ払うんだよ」

「なるほどね。ところで一也さんのご両親は？東京に居なくていいんですか？」

「毎年、両親は海外なんだ。今年はいろいろあったので自重して東京に居るけど、自宅に居れば年始の客が多いからホテルで過ごすって言ってた」

「あ、なるほどね。お年始の挨拶が凄いだろうなぁ」

「元旦は兄貴の家族もホテルに合流してるんじゃないかな」

「うわ～、新年からホテルですか、豪華ですね」

「甥と姪はお年玉欲しさに、義姉は御節つくらなくて済むからじゃない？」

「なるほどね」亜佐美もつられて笑ってしまった。

その夜は珍しく保坂は家族のことを話してくれた。

日本酒の小さな瓶を飲んでしまったので、次はワインを取り出した。

「亜佐美さんのこの御節、ちょっと洋風だよね？」

「あ、わかります？」

「うん、どれも美味しいよ」と言って、赤ワインをグラスに注いだ。

抜いたコルクを鼻の近くに持って行って保坂は匂いを嗅いだ。

亜佐美に手渡すので、亜佐美も同じように匂いを嗅いでみる。

「どうしてコルクの匂いを？」

「それはね、コルクって、このワインと外界を？ぐたった一つの関

所みたいなもんだろ？
どういう状態で保存されていたのか、酸化してないだろうか、香りによってそれを推理する楽しみがあるんだ」
「なるほど」
「次にグラスに入ったワインをこう光にかざして見ると、色が見えるよね」
「はい。キレイなワイン色ですね」
「で、グラスから立ち昇る香りを吸い込んで、口に少量含む」
保坂は実際に一口飲んでみる。
「外からの香りと、喉越し、そして内部から鼻腔に広がる香りを覚える」
亜佐美も一口飲んでみた。
「辛い、スパイシー、フルーツはダークチェリーが成熟したようなもので、微かに樽の匂いがする。後口の余韻は短い。酸味、タンニンはどう？強いけど嫌じゃない」
「その通りだわ」
「全体を覆う甘い香り。これがボルドーワインの特徴なんだ」
「凄い」
「美味しいかい？」
「ええ、とっても」
「じゃぁね、フランスのボルドーが好きと覚えて（笑）」
保坂は笑ってもう一口飲んだ。

「亜佐美さんは外食はあまりしないの？」
「ん～～、行きたい時もありますね。でも、夜はあまり出られないので・・・」
「でもさ、お弁当や献立作りの仕事をしていると、どうしても新しいもの、美味しいものの世界は広げておいたほうがいいよね？」
「そうなんですよね」
「ん～～、こうしない？来年からもう少し東京へ行くことを増やし

てみない？」
「できるかしら」
「すぐには無理かもしれないけど、ここの社食がスタートしたら次のプロジェクトがあるから、また東京で会議があるよ」
「そうですね」
「その時にやりくりして時間を作ろうか」
「考えてみます」
「うん。僕も考えてみるよ」

「さあ、もう一口飲んでみて？」保坂が亜佐美にワインを勧める。
「あ・・」
「どう？」
「味が変わってる」
「でしょ？さっき覚えた匂いや味が変化してるでしょ？」
「はい」
保坂は亜佐美のカメラを手にして、ワインボトルの写真を撮った。
「時間のあるときにネットで調べたら楽しいよ？」と言う。
「そうですね。そうします」

来年はもっと美味しいものを食べに行こうと亜佐美は思っていた。食に関して仕事をするならそうすべきだろうことは前から思っていたが、
なかなか実践できずにいたのだ。
保坂が協力してくれるなら心強い。
そんなことを考えていたら、保坂が使った食器をシンクに運び始めた。
亜佐美も手伝ってテーブルを片付ける。
ほんの数枚しかお皿は使ってなかったのですぐに洗い終わると、ワイングラスを持ってソファーに座った。

保坂がCDをデッキに入れるとバラードが部屋に流れた。
TVの音は消してあり、画面だけが次々に変わっている。
お互いに寄りかかりながら、保坂は亜佐美の手や髪を触っていた。
「今は僕に任せて?」保坂はそう言って亜佐美のセーターの下に手を入れた。
どちらからともなく唇を合わせた。
保坂のキスは巧みだ。昨夜もそして今も亜佐美は保坂の唇に翻弄される。
余すところなく保坂の指が亜佐美の身体を這い、保坂の唇が亜佐美の唇を塞いでいた。

亜佐美がもう駄目と我慢できなくなる頃、保坂は動きを止めて亜佐美を抱き上げた。
亜佐美が余韻から醒めると二人でバスタブに浸かっていた。
「いつの間に」と亜佐美がつぶやくと、保坂は笑いながら「さっき蓋を開けたままお湯を張っておいた」と言った。
「だからちっとも寒くないんだ」と亜佐美は感心したように言うと、「ポイントはそこじゃないと思うけどなぁ」と保坂はもう一度笑った。

保坂は亜佐美の隅々まで洗いあげ、いたる所を触り、もちろん亜佐美もできる限りお返しをした。
それは亜佐美がのぼせる寸前まで続けられた。

髪を乾かすと、飲みかけのワインを持って寝室に行き、先ほど二人で換えたシーツの中に身体を入れる。
ひんやりとした感触が今は心地良かった。

「今夜はセーブできないかも・・・」と保坂が言った。
亜佐美には今まで保坂が細心の注意を払って優しく触れてくれてい

たのが解っていた。
確かに触れ合うことに慣れていない亜佐美にはいきなり激しいのは無理だったし、
何も言わなくても解ってくれていた保坂に感謝している。
でもそれだけでは嫌だった。今更保坂に我慢してなど欲しくない。
昨日からの行為でそろそろ身体もついていけるはずだ。
「我慢して欲しくないわ」と保坂の目を見つめて囁いた。

「カウントダウンのキス」と言って保坂の唇が亜佐美の唇に触れる。
それをスタートにして亜佐美はセーブできない保坂を知った。
二人が眠りについたのはそれから随分後のことだった。

47　新年

目が醒めると誰かの腕に包まれているというのは良いものだと亜佐美は思う。
それが保坂だとわかっているので微笑まずにはいられない。
亜佐美がそんなことを考えながら目を開けると、すぐそこに保坂の顔があった。

「あけましておめでとう」
「おめでとうございます」
ぬくぬくとした布団のなかで保坂の背中に手をまわすと少し冷たい。
「あら?冷たい」と言うと「さっきちょっとお風呂場に行ってたから」と言う。
「あ〜」と亜佐美は昨夜のことを思い出して恥ずかしくなった。
脱衣所はどうなっているんだろう。確か脱いだ服はそのままのはず。

「亜佐美さん、お風呂入る?」
「うん、でもこの温もりも捨てがたい」
「じゃ、もう少しここでイチャイチャしていよう」と保坂が笑った。
「一也さん、手、何してるんですか?」
「ん?何って・・・。触ってるんだけど?」
「止めてくださいよ〜」
「ヤダ!」
「まったく子供みたいじゃないですか。くすぐったいんだから」
と亜佐美が言っても保坂は止める様子はない。
「感じてるみたいだよ〜」と笑っている。
結局朝から保坂に翻弄され、亜佐美がお風呂に入って服を着たのはお昼前のことだった。

お雑煮を食べ、荷物をまとめると部屋の片付けはいらないからとそのまま車に乗せられた。
午後、亜佐美は茜を迎えに行き、伯父のところで夕食を一緒にしてから茜と帰る予定だ。
その前に初詣に行こうと言い出した。
毎年行く神社は家から２０分ほど離れている。
そこが良いと保坂が言うので神社の近くに車を停めて、二人で参道を歩くことにした。

神社の由来を読んで手を清める。
並んでお賽銭を放りこみ拍手を打って、二人はしばらく目を瞑った。
去年のお正月は喪中だったので来ていない。
亜佐美には隣に立つ人も居なかった。それが今年は保坂と一緒に参拝している。
周りの環境が激変した1年でもある。今年はどんな年になるのだろうか。

隣で保坂も目を瞑っていた。
久しぶりの神社である。今年は隣の亜佐美にいろいろ考えていることがある。
押し付けれたものは嫌がるはずなので、亜佐美が自分で選んだと思わせるようにすれば良いのだ。
下手は打てないが、自分ならきっと上手くやれるだろう。
何事も慎重にすれば大丈夫と言い聞かせた。

社務所の前に並べられているお守りを見ている時だった。
「あーちゃ～ん」と言う声が聞こえた気がして振り返ると、茜が手

を振っていた。
その後ろには瑠璃とその兄たち、慎吾と昌紀が居た。
「あ、従兄妹達です」と保坂に告げると、保坂はそちらに目を向けながら頷いた。
茜はこちらに駆けてくる。瑠璃たちももうすぐそこまで来ていた。

「ほっちゃん、おめでとう」
「明けましておめでとう」茜と保坂が新年の挨拶をすると、従兄妹達がそれをじっと見ている。
亜佐美は皆を紹介して、とりあず年賀の挨拶をする。
「お名前は伺ってますよ」と慎吾が言うと、「ご両親にはお目にかかりました」と保坂が答えていた。
瑠璃は亜佐美の肘を突っついて「後で聞かせてもらうから」と笑っている。
茜をこのまま連れて帰ろうかと亜佐美は言ったが、伯父達が待っているからと従兄妹達がそのまま茜と参拝をして予定通り家につれて帰ると言った。
「じゃ、後で」と言って港は分かれたが夜は質問攻撃になるのを亜佐美は覚悟した。

亜佐美たちが保坂の車に戻る頃、亜佐美の携帯が鳴った。
瑠璃からの電話で、伯父に連絡したら保坂も一緒に来てはどうだということだった。

「家に電話して亜佐美ちゃんと保坂さんが初詣してたって言ったら、保坂さんもご一緒にどうかと誘ってみてと言われたの」
「え〜〜〜?もう電話したの?」
「うん、だって茜の前では話題には出さないけど、うちの家族の間では亜佐美ちゃんと保坂さんのことは女性週刊誌並みの扱いだから」と瑠璃はケラケラ笑っている。

「ちょっと待ってね、あとで電話するわ」と言って亜佐美はとりあえず瑠璃との電話を切った。

「どうしたの？」
「う～～、伯父たちが今夜保坂さんもご一緒にどうかって・・・」
「え？」
「私が茜を迎えに行く時に一緒に行って、夕飯をご一緒にどうですかってこと」
「あぁ。そうか。でも元旦に他所のお宅にお邪魔しないだろう、普通は」
「う～ん。でも伯父は裏表のない人ですから、お誘いしたということは都合が悪くないからだと思います」

保坂は車のハンドルに手をかけて数分考えていたが、「わかった。お邪魔しよう」と言った。
保坂が運転している間に亜佐美は瑠璃に電話をかけ、保坂も同行することを伝えた。

亜佐美の家に到着すると荷物を運び終えた保坂は、一度家に戻ってまた来ると言って亜佐美にキスをしてから戻って行った。
家は亜佐美が出かけたときのまま何も変わっていなかった。
変わったのは私だけなんだ亜佐美は思った。

伯父の家に電話をすると伯母が出た。家の電話には伯父は出ないのを知っているのでわざとそうしたのだ。
「ほんとに保坂さんもお連れして良いの？」と聞くと、
「うちの人も会いたいんじゃないの？私も会いたいけどね」と叔母は笑いながら言う。
「ところで夕べは保坂さんと一緒だったの？」と今度は伯母が聞いた。

直球だな伯母さんは、と亜佐美は苦笑しながら、「ええ、一緒でした」と答えた。
「うちの人にはまだ言わないことね。刺激が強すぎるわよ」
「そうですよね。本当は今日もお連れするのをちょっと躊躇ってるんですけど」
「保坂さんが良いって言ったなら、覚悟はできてるんじゃないの？」
「伯母さん・・そんな」
「お正月だし、物騒な話にはならないと思うけど、私もそうさせないように気をつけるから」
「すみません。お気を遣わせて」
「いいのよ。瑠璃の予行練習にちょうどいいんじゃない？」
「じゃ、夕方にお邪魔します。家を出たら電話します」
「うん。何時でもいいよ。早く来てもいいからね」
「はい。いつもありがとうございます」
そう言って電話を切った。

次に保坂に電話をした。
「一也さん、今夜はお酒を勧められるかもしれないから、私の車で行きましょう」と提案してみる。
「伯父さんはお酒は飲むの？」
「はい」
「じゃ、僕の車じゃないほうがいいか」と保坂は笑って、亜佐美の運転で行くことになった。

伯父は上機嫌で亜佐美と保坂を迎えた。保坂は二条家の歓迎ムードにほっとしながら挨拶をしている。
家を出る時の伯母との電話のやりとりを亜佐美は思いだしていた。

「男の人は、都合の悪いことは聞きたくないものよ」
「えっと、どういう意味ですか？」
「うちの人に都合の悪いことは言わないことね。そう保坂さんにも伝えてくれる？
保坂さんならすぐにわかるから」
運転しながら保坂にそれを伝えると、「なるほど」と笑った。
「伯父さんは亜佐美さんの父親代わりだと張り切っているだろう？」
「はい、そのようです」
「父親だったら、娘に彼氏が出来て朝帰りしたらどう思うだろうか。夜通し若い二人がしていたことは知りたくないどころか、その夜ですらなかったことにしたいはずなんだ」
「はぁ」
「そういうものだと思うよ？つまり、何も口を滑らさないほうが賢明ってことさ」
「う～ん。まぁ何も言えないですけどね」
「そう、それでいいんだよ。伯父さんは何も聞かないはずだしね」
「そうだと良いのですが・・・」と亜佐美が言うと保坂は笑った。

保坂は伯父のために年賀の手土産を持参していた。
珍しいお酒らしく伯父の機嫌は一層良くなったような気がする。
そういう保坂の気遣いが亜佐美には嬉しかった。
祖母の貴子も「今年は全員集合で賑やかで良いお正月だわ」と目を細めている。
食事のあとは伯父、従兄妹そして保坂は一緒にお酒を楽しんでいるようだ。
亜佐美たち女性陣もおしゃべりに花を咲かせた。

正月休みが終わると次の週にはいよいよ工場の社員食堂がスタートした。
調理に携わるだけではないのだが、亜佐美は食堂を利用した人の反応が気になる。
毎日の集計データを見ながらスタッフとＰＣを使って連絡と取ることになる。
半年分の献立は考えてあるが、実際には３ヶ月毎に見直す予定だ。
メニューが変われば社内のメールマガジンにもそれが掲載される。
実際の記事は社内スタッフが作るのだが、亜佐美にも問い合わせがあるのでフィードバックしなければならない。

毎月のＪＡの献立とスーパーのチラシについては継続して仕事をしていた。
自宅でのお弁当作りは3月末で終了することになった。
出かけることもあるので、毎日のお弁当が負担になってきたのだ。
注文してくれていた人に話すと、問題なく終了して良いと言ってくれたのだ。

亜佐美が緊張したのは、社内報に載せたいとインタヴューの申し込みがあったことだ。
亜佐美だけではなく料理長や主任の大前も予定されているらしい。
ちょうど東京で会議があるので、その時にインタヴューさせて下さいと担当者から連絡があった。
1月半ば過ぎのことである。

前回と同じように朝一番の特急で上京し、朝の会議と午後から取材という予定を組んだ。
保坂も一緒の会議に出るので同行できると聞いて嬉しくなった亜佐美である。

お正月以来、保坂はますます仕事が忙しくなっており、あまりゆっくりとした時間が持ててなかった。
電車とはいえ片道1時間半、座ってゆっくると話せるのは魅力的だ。

会議が決まった時、保坂がランチをどこかレストランに行けるように考えておくと行っていた。
店のインテリアやカトラリー、メニューなどもたくさんヒントがあるに違いない。
亜佐美はその日を心待ちにしていた。
前回同様、祖母が先日から泊まってくれ、お手伝いさんが午後から来て祖母と交代してくれると言ってくれた。
亜佐美は夜までには帰ることができるので茜と一緒に夕飯をと思っていた。

東京に行く日は前回と同じように保坂が迎えに来てくれた。
祖母や茜を起こさないようにそっと家を出る。
まだ薄暗い中で吐いた息が白くなる。その向こうに保坂の笑顔が見えた。

48　ランチ

東京に行く電車の中で、保坂は亜佐美の手をずっと握っていた。
「駅には迎えが来ている。それから・・・」と保坂は先を言い澱んだ。
「何か・・・？」と亜佐美が聞くと、
「すまない。昼食だが一緒に行けそうに無いんだ」と言い難くそうに保坂が答えた。
「でも、レストランは予約しているので、亜佐美さんが楽しめるように一緒に食事をしてくれる人を手配しているから」
「そうなんですか。でも、私は今度で良いですよ」
「いや、なかなか外食のチャンスがないからね。行ったほうが良い」
「それはそうなんだけど。私は一也さんと一緒のほうが良いですから」
「嬉しいなぁ。でも、予約取るのが難しい店なので、キャンセルすると次はいつになるのか・・・」
「そうなんですか。何と言うお店ですか？」
そんな良さそうな店はどこなのかと亜佐美は聞いてみた。
「内緒にしておいて驚かせたかったんだけどなぁ」と保坂は渋々と言った様子で打ち明けた。
「銀座のＹ・Ｏ（ワイ・オー）だよ」
「あぁ、フレンチですね」
「夜はそこそこ気取っているんだけど、ランチは夜に比べて気軽なメニューらしいんだ」
「そうだったんですか」
「だから僕も残念なんだけど、行ってくれるね？」
「ん～～」
「うん。そうしてくれると助かる。オーナーシェフ、東京には月に

１０日くらいしか居ないんだよ」
「え?そうなんですか?」
「うん。フランスの本店に居て、月に１週間か１０日間だけ東京さ」
「うわ～～、それって凄いですね」
「１１時半に高瀬秘書が迎えにくるから、亜佐美さん行ってきてよ、ほんとに」

今日の服装はその店に合うのだろうかと亜佐美は不安になってきた。まさか星がついているような高級なお店に行くとは思っていなかったのだ。
ある程度のところには行けるように、薄めの素材で明るいベージュ色のワンピースにざっくりとした織込みのボレロ風ジャケット、そしてコートである。
見透かしたように保坂が、「大丈夫、素敵なワンピースだよ。亜佐美さんに似合ってる」と言った。

終点の駅のホームが見えてきた。
保坂は亜佐美に素早くキスをした。
亜佐美はビックリして、「信じられない。人が見てる・・」と小さな声で抗議したが、
「誰も気にして無いよ」と保坂は笑っている。
保坂も電車の中でそのようなことは過去にしたことがないが、亜佐美と居るといつもくっつきたくなるので彼自身が自分の行動に驚いているくらいだ。

本社での会議は社員食堂がある支社の全体会議だった。
第一号である工場での報告から始まり、全体のコンセプトを確認す

る。
本社のプロジェクトチームと各支社とはすでに何度もやりとりをしているので、何事もスムーズに進んでいく。
今回は特に改革の順番を話し合う会議だ。
有意義な意見も多く出され、前回と同じように企業力の凄さを亜佐美は感じていた。

会議終了後に亜佐美が料理長と簡単な打ち合わせをしていると保坂がやってきた。
3人で少し話して、調理長はプロジェクトチームのほうに移動していった。

「亜佐美さん、今、高瀬秘書がこっちに向かってるから」と保坂が言うので、
「今日のランチは私と高瀬秘書さん?」と亜佐美が聞くと、保坂は一瞬考えてから亜佐美を通路の端のほうに促した。
「いや、高瀬秘書が銀座まで送ってくれますが、食事は別の人、女性をお願いしました」
「え?」
「お料理の好きな人なのでたぶん亜佐美さんと話が合いますよ」
「でも、知らない人とじゃ・・・」

保坂は慎重に言葉を選んだ。
「僕の他のプロジェクトで難しい案件があるんだ。
そのことで急遽、大口クライアントと会うことになったんだよ。
亜佐美さんとの食事を楽しみにしていたのに」
「いえ、お仕事ですから私のことは気にせずに居てください」
「僕が気にしてないと思うのかい?」
「もちろん、気にしていただいて嬉しいですが、そんな場合ではないでしょ」

と、亜佐美はあっさりと言った。
「僕が気にしていたら、あるご婦人が、その人も昼間は一人のことが多いので
できたら僕の代わりに若い女性と楽しく昼食ができれば嬉しいと言うんだ」
「年上の方なんですね」
「うん。どうだろうか。亜佐美さんの母上よりも少し上の年代かもしれないが、
同席を許してもらえないか？」
あくまでも保坂は丁寧に頼む。
「いったい誰なんですか？」
「僕の、母なんだよ」

これには亜佐美は驚いて声が出なかった。
「夫も息子たちも忙しいから、いつも一人で食事してるんだ。
急でびっくりしただろうけど、食いしん坊で楽しい人だから、お願いできないかな？」
努めて表情にでないようにしていたが、亜佐美はこれ以上ないくらい狼狽していた。
保坂は心配になって「亜佐美さん」と呼んでみると、亜佐美がゆっくり保坂の顔を見上げた。
「予約は正午ごろですよね？もうお家を出られてるじゃないですか」
「うん、そうだろうね」
「一也さん、私、どうしましょう。緊張しちゃって・・・」
「いつもの亜佐美さんだったら大丈夫だよ」

そこに高瀬がやってきた。
保坂は亜佐美に「お願いしても良いよね？」と念を押して聞く。
こんな直前ではキャンセルできないと思った亜佐美は、仕方なくコクリと頷いた。

「二条さん、こちらにどうぞ」と高瀬に誘導され、保坂とはそこで別れて亜佐美はエレベーターに乗った。
車に乗ってからも亜佐美は無言だった。
高瀬が気を利かせてか、「今日行かれるお店は初めてでしょうか？」と亜佐美に話しかける。
保坂の母のことを考えていた亜佐美は、高瀬が言ったことが聞こえていなかった。
とっさに顔を上げると、それに構わず高瀬が言葉を続ける。
「オーナーシェフが自ら作ってくれるらしいですよ？」
「え？」
「今日は一也さんの代わりに母上が来店されるということで、素敵なレディ2人に腕を振るうのを楽しみにしていることでしょう」
「あの、保坂さんのお母様はシェフをご存知なのですか？」
「ええ、奥様はパリの本店にも行かれたことがあるはずです」
「そうなんですか。凄い方ですね」
「一也様が二条さんを最初にお連れするレストランとして選んだのは、奥様のアドバイスもあるのかもしれません」
「そう、なのですか？」
「おそらくそうだと思います」
「保坂さん母子は仲がよろしいんですね」
「はい。それと、社長が先に二条さんにお会いしたことがあると奥様が知ってしまわれて・・・」
そう言うと高瀬はクスっと笑った。
「かなり一也様と社長が恨まれておいででした」
「そんな・・・」
「大丈夫ですよ、二条さん。奥様はとても素敵な方ですし、常日頃から食事はまず楽しまなくてはと仰っておられます。今日も楽しい昼食となることでしょう」
「そうですね。ありがとうございます、高瀬さん。私、お料理を楽

しんできます」と言った。
「それでよろしいんですよ」と高瀬は言った。

ほどなく現代的なビルの前に車が止まった。
高瀬がドアを開け、「レストランはこのビルの最上階になります。保坂で予約していると言って下さい。奥様も到着されている頃です。3時から本社でインタヴューがありますので、2時半にまたお迎えに来ますが、早くなりそうだったら電話をください」と言って亜佐美に一人で行くように促した。
亜佐美は高瀬に「わかりました。ありがとうございます」と一礼をしてエレベーターに向かった。

レストランまでは一階から直通のエレベーターがあり、ドアが開くとすぐ正面にライトアップされたお店のロゴが目に入った。
そのフロアはそのレストランが占有しているようだ。
受付で保坂の名前を出すと、広いフロアーのほぼ中央にあるテーブルに案内された。
テーブルにはまだ保坂の母は到着していない。
どちらが上座の席になるのかわからないので案内の人に聞いて、亜佐美は下座に着席し、店内をざっと見渡す。
思っていたより明るくスタイリッシュで、想像していたよりは緊張しなくて済みそうだった。
他のテーブルもほぼ埋まっており、人気の高さが伺われる。
隣のテーブルには前菜が運ばれて来ていて、その彩の鮮やかさに亜佐美は目を奪われていた。
ただ、あまりキョロキョロするのは田舎者みたいで恥ずかしいので、チラッと盗み見る程度だ。

亜佐美のテーブルに誰が近づいてきた。
顔を上げると、亜佐美の母より一世代ほど上の女性がにこやかに立っていた。
慌てて亜佐美が立ち上がると、「二条さん?」とその女性が聞いた。
「はい、二条亜佐美と申します。本日は急なことにもかかわらずありがとうございます」と小さいがはっきりした声で答えた。
「一也の母です。ここは注目されそうな席だからあとは座ってからね」と言って、亜佐美にも座るように促した。
「保坂百合絵(ほさかゆりえ)です。今日は一也が急に都合が悪くなったと言うので、嫌がるあの子をうまく丸め込んで、私が代理で出席させていただくことになりました」と笑って話す保坂の母は、華やかだけど気取らない人だと感じた。

ウエイターがメニューを持ってやってきた。
メニューはフランス語、英語、日本語の順に書かれてる。
亜佐美がざっと目を通すと、百合絵はウエイターにいくつかメニューの質問をしている。
百合絵が亜佐美に、「二条さん、メインは何が良い?」と聞いた。
プリフィックスのコースになっていて、前菜、魚料理、肉料理をそれぞれ1品づつ選ぶ。
「そうですね、私は・・・」と言いかけたところに恰幅の良いシェフがやってきた。
シェフのアドバイスで注文が決まると、「今日は作り甲斐がありますよ」と微笑んで厨房に下がっていった。

「やはり食べる人の顔を見て作るというのは最高よね」と百合絵が言う。
「私は家族の食事は私が作りたいと思ってね。包丁を持つのも怪しかったけど、毎日作っているうちになんとかなるものよね」と言う

ので、亜佐美も「最初はドキドキしましたけど、ほんとなんとかなってしまいますね」と相槌を打った。

前菜が出て、パンが出てくる。食べ進むうちに亜佐美は百合絵がとても自然に優雅に食べているのに気がついた。

48　ランチ（後書き）

『銀座のＹ・Ｏ』というフレンチレストランは架空のお店です。
女性向きのおしゃれなランチということで銀座を想定してみました。

49　変化

緊張しながら始まったランチだが、料理が出る度に百合絵が前に食べた同じようなその料理のことや、食材についてウエイターが説明する以外の話をしてくれた。
あとは保坂の子供の頃の様子や好きな食べ物の話で盛り上がり、亜佐美は茜のことも正直に話せて、会話が止まることはなかった。

いつの間にかメインの料理も終わって、ウエイターがデザートメニューを持ってきた。
「一応メニューをお持ちしましたが、今日はシェフが特別に作らせていただいてもよろしいでしょうか?」と言う。
やはり保坂の母は特別なんだと亜佐美は思った。

「その前にお化粧直しをして良いかしら?」と百合絵がウエイターに断って、「こういうお店はお手洗いも素敵なのよ、是非一度見てらっしゃい。私はここに着いた時に行ってきたから大丈夫よ」と亜佐美に勧める。
確かに洗面所までがモダンでスタイリッシュだった。
亜佐美が感心しながら化粧室を出ると、店のスタッフがドア近くに居て、亜佐美を別の小さな部屋に案内してくれた。

「二条さんはあまりここに来る機会が少ないとおもって、デザートは個室にしてもらいました。いろいろ見たほうがお勉強になるでしょ?」と百合絵が言った。
「はい。ありがとうございます」
「一也から、亜佐美さんの職業柄、食べ歩きを増やすと聞きました」
「はい」
「今日のように一也が急に来れなくなった時、私がまたご一緒して

よろしいかしら？」
「はい。有難いです。ご迷惑じゃないですか？」
亜佐美がそう言うと、「もちろん時間の取れないときは参加できませんけど、私はそれほど忙しくないので。二条さんさえ良ければ」と百合絵は亜佐美の顔色を伺うように言った。
「はい、もちろんです」
「あぁ、よかった。断られたらどうしようかと思ってた」
「まさか私が断るだなんて・・・。今日はとても楽しかったですし、また一也さんの子供の頃の話をお聞かせください」
「あの子の話でよければ幾らでも」と言って百合絵は嬉しそうに笑った。

シェフが自ら運んできた特製デザートは独創的な飾り付けで、亜佐美はしばらく手をつけずに見とれてしまった。
「見てもお腹は一杯になりませんからどうぞ召し上がって下さい」とシェフが優しく勧めてくれる。
シェフから直接今日の料理についてや食材について興味のある話を聞くことができた。
シェフやスタッフに見送られながらエレベーターに乗ると、百合絵が「二条さん、私にも名刺を一枚くださいな」と言って、受け取った亜佐美の名刺を大切そうにバッグに仕舞った。

百合絵は久しぶりに銀座を歩いてみるといって、ビルの前で別れた。
亜佐美はまた高瀬の運転で本社に戻る。後部座席に深く座って亜佐美はノートを出し、今日のランチを忘れないように記した。
その様子を高瀬がバックミラーで伺っていたことを亜佐美は知らない。

本社に戻ると社員食堂で社報の取材があった。
昼食時間をとっくに過ぎた食堂は閑散としている。
数人が自動販売機で買った飲み物を静かに飲んでいるだけだった。
取材は簡単な質問に答え、写真を撮るだけだった。
レストランでこの取材の話題になったとき、百合絵が少し化粧直しをしてくれたので少しはマシに写ることだろう。
それにしても大人の女性って凄いなぁと改めて百合絵のことを思い出していた。

3時半になると保坂が合流して駅にと急ぐ。
4時の特急に乗って指定の席に座った時には、亜佐美はほっとため息が出てしまった。
隣に座った保坂が「どう？疲れた？」と優しく声をかけてくれたが、
「ん～、緊張しました」と保坂を睨んでしまった。
「いきなり一也さんのお母様と二人っきりの食事ですよ？緊張して冷や汗ものですよ」
保坂は肩を少し竦めて何かを呟いたが、亜佐美には聞き取れない？
「え？何て言ったの？」
「いや、なんでもない。それよりも料理はどうだった？」
保坂は上手く話題を変えて亜佐美の気を逸らしたかった。
案の定亜佐美は料理のことに気をとられて、保坂にいろいろと説明を始めた。
母親には好ましい感触を持ったようで何よりだ。
保坂には料理よりそれのほうが大事だった。

一通り亜佐美の話が終わったので、次に保坂は亜佐美に新しい提案

があった。
女性誌の取材を受けないかという話だった。
週刊誌にしても月刊誌にしても、女性誌には料理コーナーが存在する。
スイーツ特集だったりお弁当特集だったり毎回趣向を凝らした記事が掲載される。
ある雑誌で、人気ブロガーのお勧めレシピという特集を考えているそうで、
保坂の同級生その雑誌社に居て、誰か知らないかと言わのので、亜佐美のブログを推薦してくれたらしい。
連絡が届いたら考えてみてくれと保坂は言った。

亜佐美がどうしようかとあれこれ考えているうちに、亜佐美の降りる駅が近づいてきた。
保坂は会社に行かなければならないので、亜佐美だけが降りる。
保坂の降りる駅はほんの数分先なので、保坂も荷物を持って亜佐美の後を降車口まで一緒に歩いた。

閉まる電車のドア越しに保坂の顔を見ると、亜佐美はもの凄く離れがたい想いに囚われた。
突然湧き出てきた感情は亜佐美を戸惑わせる。
こういう気分になったのは過去には無かったし、それが亜佐美をどこかに運んで行くような奇妙な気分になった。

保坂のことは好きだし、今はその気持ちに逆らうことなく恋人として付き合ってはいるが、
家の管理や茜のことがあるのでこれ以上は望めない制限付きのお付き合いと思ってきた。
保坂とのゴールを考えてみるとそれが見えないことに改めて気がついた亜佐美は、駅のホームからしばらく動けなかった。

一方保坂は、電車のドアが閉まってから見上げた亜佐美の表情が気になっていた。
いつもの素直そうな眼差しは無く、何かに戸惑っているような揺れる目をしていた。
母との食事中に何かあったのだろうか、それとも雑誌の取材で不安になったのだろうか。
何があったにしても亜佐美が逃げ出さないように捕まえておかなくてはならない。
とりあえず今日の仕事を終わらせてからと亜佐美の確認は保坂の最重要フォルダに入れた。

その後はいつもの日常が続いた。
保坂の会社とはほとんどインターネットでのやり取りで終わり、たまに大前の仕入れに付き合うくらいだ。
ブログのほうは社内報に載ったせいかアクセス数が飛躍的に増えており、コメントもかなり増えて手がかかる。
他には家に居てできることとして、食品メーカーのモニターにも応募したり、一昨年と比べるとかなり忙しい毎日だった。

保坂は相変わらず忙しく、工場に居る時は仕事が終わってからはほとんど亜佐美の家に寄り、軽い食事をしてから帰って行く。
茜が寝かしつけて、保坂の遅い夕食に付き合いながら、保坂といろんな話をするのが楽しみになっていた。

女性雑誌の取材を受けることになったが、それも含めて今後どの程度活動を広げていくか保坂と話し合った亜佐美は、自分なりに方針

を決めた。

銀座でランチをしてから、やはり本社の午後の会議に出席した後、保坂と素敵なレストランで夕食を摂って東京で一泊したこともある。保坂の母は、亜佐美の名刺に載せていたブログを見たとメールを送ってきてから時々メールでやり取りしている。

「今ではすっかりメル友ね」と嬉しそうに言ってくれるので、亜佐美も悪い気はしない。

あれから一度、東京に製菓用品を買いに行った時に、待ち合わせてランチをご一緒した。

ファッションについても時々アドバイスを貰ったりして、保坂の小母様と呼んで懐いている。

ひとつ気になるとすれば、茜のことだった。

春休み前に、茜の父親から連絡があった。

茜の父親は春休みを利用して、茜をアメリカに呼びたいと言ってきたが、

「春休みはあまり充分な日数がないので」とやんわりと断ったのだ。

このことを茜には知らせていなかった。

茜はというと、アルファベットの書き方も覚えて、次はちゃんと英語が習いたいと言い始めた。

父親が住んでいるところの言葉だから興味があるのかしらとも思う。

ある日、夕食を食べに来た保坂にそのことを話したところ、保坂は食べている手を止めて箸を置いた。

亜佐美を正面から見つめて、「亜佐美さん、それちゃんと考えたかい？」

「はい、考えましたよ。今更あの子の父親が何を言ってきても、私はなるべく茜に近づけないつもりよ」
「なるほど」と保坂は言って、茜の英語の勉強についてある提案をした。

「まず、茜ちゃんの学力だけど、かなり賢いと思う」
「うん、成績も良いんだよ」
「だろう？この先大学に行くにしても、茜ちゃんが将来何をするにしても、向学心のあるときにいろいろ習わせたほうがいいと思うんだ」
「それはそうでしょうね」
「語学もその１つだ」
「はい」
「兄の子供達は幼児の頃から英語教育を始めたんだよ」
「え？そんなに早くから？」
「うん。そして、僕達兄弟もだ」
「え～？そうなんですか？」
「その頃は英語のビデオだけどね。小学校に入る頃には英語の家庭教師をつけられた」
「うわっ。本当ですか？」
「小学４年生になるとフランス語も始まった」
「嘘っ」
「嘘ついてどうするんだ」と保坂は軽く笑って、「僕はフランス語よりドイツ語のほうが好きだったけど」と言った。

亜佐美が頭を抱えていると、「この街に英語塾はあるんだろう？」と保坂が聞いた。
「クラスメイトも何人か通ってるようなのであるとは思いますが・・」と亜佐美は頼りなげに答える。
「でもね、学習塾は通う時間の無駄と、非行に走る可能性もある」

「まさか？」
「よく考えてご覧よ。亜佐美さんは忙しい時は家に居ない。お手伝いさんか曾孫に弱い貴子さんだ。塾でどんな悪い仲間と知り合うかわからないし。第一、行き帰りが心配じゃないか」
亜佐美にはぐうの音も出なかった。
「ラッキーなことに、亜佐美さんには収入があるじゃないか。茜ちゃんの身につくことにお金を使わなくてどうするんだ」と説得され、
結局家庭教師という線で保坂が候補者を探してくれることになった。

50　喧嘩

茜に家庭教師を付けるということで一段落し、保坂は箸をとって食事を再開した。
亜佐美は気分を落ち着けるために、お茶を淹れなおして保坂と前にも熱いお茶を置いた。

保坂が食べ終わってお茶に手を伸ばした。
亜佐美がまだ考えている様子を見ながら、どのように中断している話を再開するか考えている。
亜佐美が湯飲みをテーブルに置いたので、保坂も同じように置き、
「亜佐美さん、さっきの話だけど・・・」と切り出した。

保坂の声が改まったような気がして、亜佐美は顔を上げた。
「茜ちゃんの父親から連絡があったということだけど」と保坂は言い難そうに話し始めた。
「春休みにアメリカへの招待を断ったって？」
「うん」
「茜ちゃんには連絡が来たというのを言って無いんだね？」
「ええ、言ってないわよ。何しろあの人と茜は接触させたくないの」
「二条の伯父さんは知ってる話なの？」
「うん、まぁね。伯父のところにまず連絡が来るから。
一度は伯父を通じて断ったんだけど、そうしたら私に直接メールが来て・・・」
「で、二条さんは何と？」
「父親だということを忘れるなっとはいつも言われてるけど？」

保坂は難しい顔をしていた。
「これからも連絡をよこすだろうか？」

「ん～、わからないけど、たぶんね」
「で、亜佐美さんはいつまで茜ちゃんに言わないつもり？」
「え？」
「今年、茜ちゃんは１０歳だろう？何歳まで父親に接触させないつもり？
小学校卒業するまで？中学卒業？それとも成人するまで？」
「えっと・・・」
「それって、ちゃんと考えてないってことだよね」

亜佐美はとっさに、「考えてないなんて言わないで！茜のことを一番考えているのは私なんだから」と言い返した。
「じゃぁ、聞かせてもらおうか。その考えとやらを」
今夜の保坂は、本来の彼らしく一歩も引き下がらないつもりらしい。
いつになく保坂のことを怖いなと思う亜佐美だった。

亜佐美が頭のなかであれこれ考えている間、保坂は使った食器をシンクに運んでいる。
ついでに食器を洗って、手を拭きながらダイニングテーブルに戻ってきた。
「で、考えを聞かせてもらえるかな？」
「そんなこと言ったって、姉は離婚する時に親権を持ってきたんだよ。
姉が亡くなった後は、私がそれを引き継ぐに決まってるじゃない。
私は茜の親代わりで、元義兄が手出しできないでしょ？」
「ほんとうにそうなのか？ちゃんと法律を確かめたのか？」
「役所に言って手続きしたもの」
「ほう、君に親権があるのか」
「いや、監督権だけど・・・」

保坂はなにか考えていたが、「それなら解る」と答えた。

「茜ちゃんの父親が海外に居るからと、あっさり君に親の代理権が降りたのは解るよ。
しかし、親権などは保留なんじゃないか？」
「それは・・・」と亜佐美は言葉に詰まった。
茜の父親が親権を申し立てれば、亜佐美は弱い立場だ。
少なくとも養育権に関しては勝ち目が無さそうだというのは亜佐美にもわかっていた。

「実の父親が居るのに、会うことも君は邪魔をするのかい？」
「そういうつもりでは・・・」
「じゃ、どういうつもりなんだ？さっきの答えもまだ聞いてないけど、君の考えそうなことは解るよ」

「とにかく、嫌なのよ。義兄と茜が接触するのが」
「ほお、生理的に嫌というのが理由か」
今夜の保坂は悪魔のようだと亜佐美は思った。

「君ははっきり言わないと気がつかないのかもしれないから、僕はあえてキツイ言葉で言っているけど、もう一度よおく考えてご覧よ。
親が子供に会いたいのは当たり前であり、子供のほうはもう無条件に親に会いたいんだ。
その気持ちをもう一度考えてあげてよ」

亜佐美は言葉もなく、目にいっぱい涙を溜めていた。
「言い過ぎたかな。でも、ほんとうに今夜はゆっくりと考えてみて。今日はもう遅いからお暇するよ」と保坂は上着を手にとって立ちあがった。

見送らない亜佐美を振り返り、「僕は、父に引き取ってもらって嬉

しかった」と保坂は言った。
亜佐美ははっとしたように保坂を見た。
一瞬、保坂の顔に浮かんだ複雑な表情を見逃さなかったが、それでも亜佐美は「嫌なものは嫌なの」と呟いた。
「亜佐美さんは意外に頑固だな」と保坂はため息をついて、「戸締り忘れないでね」と言って、出て行った。

しばらくの間、亜佐美はそのままそこを動かなかった。
やがて戸締りを確認してベッドに入ったものの、眠れない夜となった。
何度考えても、いくら考えても答えは出ない。
ようやく目を閉じたのは明け方になってからだった。

それから数日、保坂は亜佐美の家に来なかった。
『今日は遅くなるので寄れません』というメッセージが届いただけだ。
来るべき時が来たのかと亜佐美は考えた。
いずれにしても出口のない恋愛だったのかと思うと憤りのない寂しさが染み渡る。
茜の居る時は元気に振舞っているけれど、茜が寝たあと一人になると涙が出てきて眠れない夜が続いていた。

保坂のほうは仕事に手をとられていたが、顧問弁護士に連絡をして親権のことを聞いてみた。
弁護士はあっさりと、養育のほうは父親が手続きをすれば簡単に父親のものになること、茜が母親から相続した財産についての管理は亜佐美が優先されることを告げた。

何事にも特例はありますが、と弁護士は言っていたが、茜のことを考えると父親を無視するわけにはいかない。
父親が茜を引き取りたいと言ってくるのは時間の問題だなと保坂は考えていた。
それよりも亜佐美の気持ちをなんとかしなければならないほうがやっかいだ。

そんなある日、亜佐美の元に百合絵から電話があった。
「亜佐美さん、保坂の母です。お元気？」
「あ、小母様。はい・・・」と戸惑い気味に答えた亜佐美だった。
いつもはメールなので電話は珍しい。
「一也がよく夕飯をご馳走になってるんですってね」
「はぁ。一也さんの帰り道ですから、寄れる時には寄っていただいてますけど」
「最近忙しくて、ここ数日亜佐美さんの手料理を食べてないから元気が出ないって言ってたわよ」
「そんな。一也さん、東京へ行かれたのですか？」
「あら、昨日来てたけど？」
「そうなんですか」
「あらあら、元気がないわね。今日そちらに帰ると思うから、連絡があったら夕食よろしくね」
「はい」
「あ、そうだ。今日は一也の話じゃないのよ。茜ちゃんの家庭教師のことなの」
「はい？」
「一也が茜ちゃんに家庭教師をと亜佐美さんに勧めたらしいわね。うちの子供たちは塾に行かせずに家庭教師を付けたので、そのことを亜佐美さんにお話しようと思ってお電話したのよ。この歳になる

とコンピューターでメール書くより、電話のほうが楽だからお電話したけど、今お時間よろしいかしら？」
「はい」と亜佐美が言うと、百合絵はなぜ家庭教師にしたのか百合絵夫婦の考えを話し出した。

「とにかく、親は子供の可能性を引き出してあげないといけないと思うのよ。
お勉強も大事だけどそれ以上に自分の人生を決められるような子供に育てなくちゃいけないと思わない？」
「はい、そうですね」と相槌を打つのが精一杯だった。
百合絵は。「一也がもう少ししたら家庭教師の候補者を何人か見繕うと思うけど・・」と前置きして、面接のポイントを亜佐美に語り出した。
途中から亜佐美はメモを片手に百合絵の話に聞き入っていた。

「よろしいこと？亜佐美さん。子供のためにを第一に考えなくてはならないのだけど、親の希望だけではいけないのよ。まだ小さいとはいえ子供にも嗜好があって、それをちゃんと見てあげないと単に押し付けになるのよ、それを覚えておいてね」と言って百合絵は電話を切った。

電話を終わって亜佐美は手に汗が出ているのに気がついた。
百合絵は相変わらず彼女のリズムを保ったまま会話を進めていく。
今日はそれに助けられたような気がした。

保坂のほうはというと、亜佐美からは連絡が無いのが気にいらなかった。

亜佐美から会いたいと言われたことは数えるほどしかない。
たいていは保坂が連絡して亜佐美がそれを承諾するという形が多い。
いつか亜佐美から保坂を求めるようになって欲しいとは思っているが、それはまだ先の話らしい。
亜佐美の頭が冷えて冷静に考えられるようになるまでと思っていたが、どうやら惚れたほうの負けだと悟った。
保坂は気が重いまま亜佐美にメッセージを送るために携帯電話に手を伸ばした。

そんな姿を保坂のスタッフは恐る恐る窺っていた。
ここ数日、ボスの機嫌は最悪だ。
チームゼロの部屋が凍るのではないかと言うほど冷たいオーラを保坂は出しているのだ。
考えに沈んでいた保坂がいきなり携帯でメッセージを打ち始め、やがてニヤリと口の端を持ち上げたのを見て、良い兆候であってほしいと祈るばかりだった。

51　仲直り

数日振りに保坂が亜佐美の家に寄ることになった。
『今夜、仕事の帰りに茜ちゃんの家庭教師候補の履歴書を届けます』というメールを受け取った亜佐美は、ほっとして嬉しくなると同時に、先日の保坂の怖い顔を思い出していた。
どんな顔をして会えばいいのか・・・。
別に私が謝る問題でもないだろう、と亜佐美は思っていた。

『何時ごろになりますか?』と亜佐美はメールを返した。
しばらくして、『今日は早めに終われるので、7時頃に会社を出ます』と保坂からの返事があった。
終わったわけじゃないんだなぁと一息つく。

仲直りできるような献立が良いなとは思う。
しばらく考えた亜佐美は、怒りっぽい人にはカウシウムたっぷりメニューにしようかと思いついてニヤリと笑った。

茜が「あーちゃん、ご飯まだ?」とキッチンに入ってきた。
「うん、ほとんど出来てるんだけど、もう少ししたら保坂さんが来るから」と、亜佐美が言うと、
「ほっちゃんが来るの?」と茜が嬉しそうに言った。
「待たないで食べようか?」
「ううん、待つよ~」
「じゃ、とりあえずお茶碗を並べよう」

今では保坂用のお茶碗もお箸もあり、席も決まっている。
茜がそろそろと大事そうに3人のお椀を並べるのを見ながら、いずれこのテーブルには2人しか座らなくなるかもしれないと思うと、落ち着かない気分になった。

「あーちゃん、他に出すものは？」
「今のところこれでいいかな」と茜に返事しながら、今日はまだ3人だ、今日のことだけ考えようと気分を切り替えた。

インターコムが鳴ったので茜が走って保坂を迎えに行く。
亜佐美は冷やしていたサラダを冷蔵庫から出した。
保坂が手を洗っている間に、作ったものを皿に盛ると茜がそれを運んだ。
さくら海老入りのサラダ、ほうれん草のお浸しにはちりめんを乗せた。
お味噌汁は若布と豆腐だ。カルシウムは足りるだろうか？
亜佐美がニヤニヤ笑っていると、「今日は機嫌がよさそうだな」と保坂が戻ってきて言った。

たいていは茜の寝る時間にやってくるので、3人で夕食をとるのは久しぶりだった。
茜は特に嬉しそうだ。
保坂は前回のことは何も言わずに、茜と機嫌よく話しているので、今夜はこのまま何事もありませんようにと亜佐美は心の中で祈っていた。

やがて茜が自室へ行ってしまうと、保坂は鞄から書類を取り出して亜佐美に渡した。
家庭教師の候補者だと言う。読めば解るようになっているからと言

って、保坂は帰り支度をしていた。
「いつもご馳走様。次の本社での会議のことをいつものようにストレージにアップしておいたので、明日にでも見ておいてね」と言って靴を履こうとする。

え?それだけ?もう帰っちゃうの?何もなさ過ぎる・・・と亜佐美は胃の中に冷たいものが落ちていくような気がした。

保坂が「おやすみ」と言って背を向けたので、亜佐美は「あの・・」と思わず声がでてしまった。
「ん?何?」と保坂が亜佐美を見る。
「えっと・・・」と言ったまま亜佐美はその後を続けられないでいた。

亜佐美の顔色を伺っていた保坂は、鞄を下に降ろして、「ここにおいで?」と亜佐美に言った。
亜佐美は何も考えられずにふらふらと保坂に近づく。
保坂は片手を伸ばして亜佐美の手を掴むとくいっと引っ張って、自分の胸のなかに亜佐美を閉じ込めた。
亜佐美はおずおずと保坂の背中に手をまわす。
「どうしたんだ?」と言っても亜佐美は何も言えずにただ保坂に寄り添ったままだ。
保坂の手が亜佐美の背中をゆっくり撫で始めた。

「次の東京ではまた美味しいものを食べに行こう。いいね?」と保坂が言うと、亜佐美はゆっくり頷いた。
「じゃ、おやすみ」そう言って、亜佐美を離してドアに手をかける。
「おやすみなさい」亜佐美は保坂を見送った。

私達は終わったわけではなさそうだ。でも今夜保坂は亜佐美にキス

をしなかった。
いつもなら必ず帰り際に濃厚なキスをして帰るのだ。
そのことに亜佐美は不安を感じた。

数日後には茜の家庭教師が決まった。
週に一度、近くの短大に英語教師として来日しているイギリス人女性に来てもらうことになった。
子供が好きだということ、片言の日本語が話せるので亜佐美にとっても都合が良い。
亜佐美は英語だけではなく、国語と算数の勉強も補強しようと週2回近くの女子短大生も採用した。
早速翌週から来てくれるというので茜は大喜びである。
亜佐美は自分の子供の頃と大違いの茜にびっくりしていた。

茜の家庭教師が決まったので、亜佐美は保坂の母親にお礼のメールを送った。
百合絵のアドバイスが面接に随分役立ったのだ。
すると同じ日に百合絵からメールの返事が返ってきた。
それには、『次の上京時にまた美味しいものを食べに行きましょう。時間とってくださいね』という内容で、お店のリストが何軒かあった。
亜佐美がインターネットでそのお店を検索すると人気の店ばかりだ。
順番に全部行きたいお店である。

そこまで考えて、亜佐美は今手がけてる社員食堂はどうだろう、社員がこぞって行きたい食堂になっているのだろうかと思ってみた。

亜佐美はもう一度ＰＣに向い、食堂スタッフからのフィードバックと社員アンケートを見直し始めた。
もう桜の季節も終わり、ゴールデンウィークの直前だった。

ゴールデンウィークに、亜佐美は一度東京に行くことになっていた。
社員食堂のことではなく、亜佐美自身の仕事だ。
ブログを通じて食品メーカーのモニターに参加していたところ、子供の日にちなんで親子クッキングのデモンストレーションを企画していて、そこで是非一日講師にという依頼があったのだ。

はやり亜佐美のブログ仲間も選ばれたらしく、午前中はその友達が簡単なランチメニューを担当し、亜佐美は午後にデザートを担当することになった。
会場はデパートの公開キッチンで、応募者の中から5組の親子を選び、その人たちに亜佐美のレシピで料理してもらっているところを一般に公開するという。
５０席の椅子のほか、様子が店内に設置しているモニターに映し出されるとのことだ。
その食品メーカーのものを使用する決まりだというので、食品リストを見て、野菜のパウンドケーキとゼリーに決めた。
冷たいゼリーは夏に向けて好まれるし、主催の食品メーカーから簡単に使える新しいタイプのゼリーが商品化されていることもあった。
パウンドケーキのほうにも新商品を使うことになっている。

主催者側に打診して、ブログへの記載の許可をもらった。
映像のほうは後でコピーして貰えるらしい。報酬は少ないが楽しそうな仕事である。

打ち合わせも全部終わって、亜佐美は保坂の母親にこのことをメールで知らせた。
すると、『ブログでも拝見しましたよ。当日、観に行ってもよろしいですか?』と返事が届いた。
『ありがとうございます。嬉しいです。会場に到着されたら携帯にご連絡いただけますか?』と早速メールを返す。
その日の夜遅く、百合絵から『楽しみにしています』とメールが届いた。

亜佐美はいつ上京するか悩んでいた。
パウンドケーキのほうはあらかじめ完成品を作っておかなくてはならない。
前日に家のオーブンを使ったほうが断然作り易いのだが、当日会場のオーブンの使い勝手も試しておいたほうが良い気がする。
それと家で作ったものを運ぶ手段も考えなくてはならない。手荷物を持ったまま駅まで移動できるかもわからなかった。
会場はデパートが閉店後にしか使えないと担当者から返事が届いた。
夜は茜をホテルで一人にするわけにいかない。連れて行って夜更かしさせるわけにもいかない。

亜佐美があれこれ考えているのを夕食を食べに来ていた保坂は黙って見ていたが、諦めたようにため息をついて、
「亜佐美さん、ここに皺が寄ってるよ」と人差し指で亜佐美の額に触れた。
「当日皺がＴＶに映ったらどうするの?」
「え~~、それはイヤだ!」と言って亜佐美は一生懸命に額を擦り始めた。
「君って・・・僕の存在忘れてない?」
「え?そんなことはないですよ?」
「僕って頼りないかな?」

亜佐美は、保坂から黒いオーラが出ているのを見て、ぶんぶんと首を横に振る。
「今まで僕がしてきた手配で何か手落ちがあったかい？」
「いいえ」
「ほんとうに？」
「完璧でした」と亜佐美は保坂の目をみて答えた。

「じゃ、話してご覧？君の可愛い頭で何を悩んでいるのか」
「あ、一也さん、今バカにしましたね？」
「いやいや、違うよ、今日の髪型が素敵だからそう言ったまでだ」
こうやって私はいつも上手く保坂に言いくるめられるのだと思いながらも、亜佐美は保坂に考えていることを打ち明けた。

亜佐美の説明を聞いた保坂は少し考えてから、亜佐美に行った。
「問題ないよ。前日に一緒に東京へ行って、会場の近くのホテルに泊まろう。
夜、君が仕込みをしている間、僕が茜ちゃんの面倒をみてるよ」
「え～～～！一緒に行ってくれるんですか？」
「ゴールデンウイーク中は仕事も休みだ。君達が東京に居る時は僕も東京だと思っていたから」
「ほんと？ありがとう！早速連絡とらなくちゃ」
そう言って、亜佐美は凄い勢いでキーボードを打ち始めた。

保坂は苦笑しながら、食べ終わった食器をシンクに持っていく。
洗い終える頃、亜佐美もメールを終わってダイニングに戻ってきた。
コーヒーを飲みながら泊まるホテルについて亜佐美に聞いてみると、デパートの隣にあるホテルが良いと言う。
前日の仕込みは遅い時間になりそうなので、すぐ隣だと都合が良い。
ホテルはどうしても亜佐美が負担したいと言うので、保坂は逆らわずに任せることにした。

今夜の保坂は機嫌が良いように思えた。
もうすっかり仲直りしたと思える。
亜佐美は昨日茜の父親から届いたメールのことを保坂にしばらくの間黙っていることにした。

52　保坂の母

デパートでのクッキングイベントは大成功だった。
前日にパウンドケーキを焼くことができたので、本番ではオーブンの扱いも問題なくスムーズに焼きあがった。
ゼリーのほうも前日予め大量に作ることができたので、当日の朝はゆっくりと過ごすことができた。

保坂の母親も気を利かせて早めに来てくれたので、保坂と百合絵に茜を託して、スタッフとの打ち合わせや主催会社への挨拶も充分にできたと亜佐美は感謝していた。

茜は本番に強いようだった。いつも自宅でアシスタントやっているように自然に振舞っている。
保坂は黙って会場に居て必要な時だけ手を貸してくれた。保坂の手には一眼レフカメラがあった。どうやらイベント中の亜佐美と茜の姿をカメラに収めていたようである。

百合絵は帰る時に、「明日の朝はゆっくりしてね。そしてもしよかったらブランチ食べに来て頂戴な」と亜佐美と茜を誘った。
保坂が慌てて、「母さん！」と止めに入ったが、「だって、うちの人はゴルフだし、誰も家に居ないんだもの。亜佐美さんとゆっくり話せるチャンスってそうないのよ。今回も久しぶりにお目にかかったのに」と百合絵は保坂に詰め寄っている。

「あの・・・」と亜佐美は声をかけた。
「お出かけになるのがお嫌じゃなければですが、もしよかったら明日は私達が泊まっているホテルで早めのランチをご一緒にいかがですか？」

「え？ほんと？」と百合絵は嬉しそうにしている。
「「ねぇ、いいでしょ？」」と亜佐美と百合絵に同時に言われた保坂は唖然としていたが、茜までもが「ねぇ、いいでしょ？」と言ったので笑い出してしまった。

「このデパートの隣のホテルなんですが、最上階のレストランが人気なんです。
景色も良さそうですし、一度行ってみたくて・・・」と亜佐美が言うと、「亜佐美さんのお勉強のためにお付き合いするわ」と百合絵はいたずらっぽく笑った。
「そうだな、今日は疲れているはずだから、明日の昼にしよう」と保坂も同意して、待ち合わせの時間を決めた。

保坂は百合絵を自宅まで送っていくことになり、亜佐美と茜はイベントに来ていたブログ仲間と同じフロアにあるカフェでお茶をすることになっていた。
そのあとデパートで買い物をして帰る予定である。
茜と二人、ホテルの部屋に戻った時にはかなりくたびれていた。

その夜はゆっくり休んだせいか目覚めもよく、翌朝はホテル近所のカフェでモカとベーグルの朝食を終わった。
ゆっくりとモカを飲んで寛いでいると、保坂が「そういえばこの近所に大きな公園があるんだよ。少し歩くことになるけど、時間もあるし行ってみないか？」と亜佐美と茜を誘った。
亜佐美の住む街であればとっくに始動している時間でも、夜遅くまで賑わうこの街の朝はひっそりとしている。
駅前とは違って細い路地がいくつも交錯している場所を、保坂は迷いもせずに二人の歩調にあわせてゆっくりと誘導していった。
突然突き当たりに緑が見えたかと思うと、その緑の塀に沿って少し

歩き、大きな門をくぐった。
整備された大きな庭というイメージを亜佐美は持った。田舎の自然の緑とは違って、大きな箱庭だ。
茜は亜佐美と？いでいた手を離して、花壇に近寄った。
亜佐美も目の届く範囲に居るかぎりは茜の好きに歩かせて、その後を保坂とのんびり歩いていた。

「亜佐美さんに見せたいものがあるんだ」と保坂は言って、目線の先にある大きな木を指差した。
亜佐美には見覚えがあった。ハンカチの木だ。
「この幹と葉っぱが亜佐美さんの家にあるあの木を似てるなと思ったんだ」
「今、まさに満開ですね」
木下に居ると白い花が落ちてくるかのように亜佐美は掌を上にして見ている。
「去年、亜佐美さんの家の木も白い花をつけていたのを見たよ」
「ハンカチの木って言うんですよ、これ。ほら、白い部分がハンカチを干したように見えるでしょ？」
「なるほどね」
「でも今頃咲くんですね。うちの木はもう少し後だなぁ」
「うん。夏に見たような気がする」
「なかなか花が咲かなくて、ここ2～3年前からかなぁ。あ、白いのは葉っぱの一部らしいです。花はその中に可愛いのがあります」
「ああいう大きな木は珍しいよ」
「私が生まれた歳に植えたらしいんですよ。今あの大きさだけどもっと大きくなりそうですね」と亜佐美は公園の木を仰いで見ている。

「あ、ほらここに立て札がある」と亜佐美は保坂を呼んだ。
並んでいる木の下に、学術名を記載した小さな立札があった。
茜もやってきた、「あ、家と同じ木だ」と見上げている。

もしかしたら亜佐美のご両親は、この木のように大きくそして清潔な白い花をたくさん咲かせるような女性に育って欲しいと願ったのではないかと保坂は思った。

百合絵と約束の時間が近づいたのでホテルにはタクシーで戻った。
買い物したものは宅急便で送り、荷物をまとめておく。
それから百合絵と約束したスカイレストランで落ち合った。
ビュッフェランチだというので、一度席に座ったもののすぐに料理を取りに行くことになった。
百合絵は朝は軽くしか食べてないと言い、亜佐美たちは公園を散歩したので全員お腹が空いていた。
百合絵が茜に寄り添って、ビュッフェの取り方を教えている。
マナーについては亜佐美より百合絵のほうが数段優雅なので、亜佐美は安心して百合絵に任せていた。

食事が終わると、茜がホテルの隣にある大きな書店に行きたいと保坂に強請ったので、
保坂が茜に付き添ってくれることになり、亜佐美と百合絵は部屋に戻って、リビングでお喋りをすることにした。
今回、亜佐美は保坂の部屋を含めて2部屋予約したのだが、保坂の会社が提携しているホテルということで、同じくらいの料金でスイートルームが取れたのだ。
リビングを挟んで寝室が二つもついた豪華な部屋で、ツインベッドの部屋に亜佐美と茜、大きなダブルベッドがあるほうは保坂が使ったのだ。
ビュッフェレストランは制限時間がありあまりゆっくりとは出来ないので、部屋のリビングでコーヒーを飲みながらレディーストーク

をすることにしたのだ。

「なかなか良い眺めじゃない」と言いながら百合絵はソファーに座った。

亜佐美はコーヒーをセットしながら、「もうお腹いっぱいですから、コーヒーだけでいいですか?」と聞いた。

「ええ、ありがとう。亜佐美さんも座ってね」

「はい」

「茜ちゃん、良い子ね」

「ありがとうございます。姉に似たのかお勉強が好きなんですよ」

「あら、亜佐美さんは?」

「私は、お勉強ってあまりしませんでしたね」と首を竦めると百合絵がころころと笑った。

「うちは男の子ばかり3人だったから、女の子と言うのは不思議な気がするわ。華奢で壊れそうな感じよ」

「そうですか?うちは女ばかりだから・・・」

「私も二人姉妹で、私は次女。亜佐美さんと同じようね」

「そうなんですか」

「でも、お見合いで結婚したあとは、主人と子供で男4人に囲まれての生活でしょ。人生わからないものね」と言って優雅に笑っている。

「私も男性の心理はよくわからないです」と亜佐美が言うと、

「特に一也はあまり感情を表すような子じゃないから、亜佐美さんもたいへんじゃない?」と百合絵が言った。

「いえ、一也さんは結構表情に出るから、解り難いってことはないんですけど・・・」

「あら?そうなの?」と百合絵は何か考えていた。

「実はね、一也に女の子を紹介してもらったのは、亜佐美さんが初めてなの」と百合絵は話し始めた。
「上の二人の子は、女性も含めて友達とか彼女とか時々家に連れてきたんだけど、一也だけはそれがないのよ。中学生くらいまではクラスメイトも来てたような気がするんだけど、それから誰も家には呼ばないし、ましてや彼女なんてとんでもない。全然なのよ」
「それは今でもそうかもしれません。お仕事ばかりしているようで、同僚と出かけるという話は聞きませんね」
「でしょ?そんなあの子が、亜佐美さんとのランチに私を呼ぶだなんて信じられなかったわ」

「あの子ね、見た目もあんなだし、結構モテたはずなのよ」
「はぁ」
「気を悪くしないで聞いて頂戴な?今は亜佐美さんしか居ないんだから、あの子には」
「はい」
「なのに一度も女の子の影さえ見せたことがないの。恋人が最優先じゃないって感じね、あれは」
「解るような気がします」
「ほんとストイックでしょ。ところが亜佐美さんのことは違うの。特別なのね」
亜佐美は頬の熱が上昇するのがわかった。

「母親の私が言うとフライングだと言われそうだけど、亜佐美さん、これは覚えておいて?」
「はい」
「一也と亜佐美さんが決めたことには反対しませんからね!」
「はい」とは言ったものの、それはどういう意味なのか亜佐美には図りかねていた。

「一也は私が産んだ子じゃないってのは知ってます？」
「はい」
「一也を最初見たとき、私、感動してしまったの」と、百合絵は目を細めてその時を思い出しているようだった。
亜佐美は黙って頷いた。
「主人と私は親同士が手配したお見合い結婚だったのね。当然政略結婚だったのよ」
百合絵は言葉を選んでいるようだった。
「きっかけはお見合いだったけど、主人とデートしているうちに好きになって、旦那様に恋をして嬉しかった。
跡継ぎの男の子も、しかも2人も男子を産んで誇らしかったし、それはもう毎日が素晴らしかったわ」
百合絵は少し言葉を切ってコーヒーを一口飲んだ。

「お受験などで張り切っている時だったから気がつかなかった。
結婚当初から帰宅時間の遅い人なので、仕事だと信じていたし、その分私が子育てに頑張って当然だと思ってたのよ。
そうしたら、ある日突然義父に呼ばれて、主人には他に子供が出来たと言われたの。
そして、主人が引き取りたいと言っているといわれたのよ。義父からそう言われたの。」
亜佐美は座っていても落ち着かなくなった。

53　決心

百合絵は泣いてはいなかった。コーヒーを飲みながら話を続ける。
「他所のご家庭では、愛人の子を引き取るという話も時々聞いてはいたけれど、
それが自分の身に降りかかるとは・・・青天の霹靂だった」
亜佐美は無言でコクコクと頷くだけだ。

「ところがね、主人と一也の母親は愛人関係じゃなかった。
ふたりは恋人だったの。
それを知った時に私は酷く動揺してしまって・・・。
主人にも暴言を吐いたりしたのよ。でも、主人は引き取るからって
一歩も引かないの」
亜佐美は胸が詰まって慰めの言葉も出ない。

「私と離婚したいと思ったことは?と聞くと、二人ともそれは考えたことが無いと言われたわ。
彼女が亡くなったから僕が育てるのは当たり前だと言ったの。
一也は僕の子で保坂の子だと。だから家に連れてくるよって・・・。
その翌日、まだ生後1ヶ月半の一也が連れてこられて、一目見た瞬間に・・・
一也は私をみて笑ったの。主人は今でもそれは私の気のせいだって言うんだけど（笑）
でもね、とっても美しい子だった。主人に似てたし、私の二人の子にも似たところがあった。
一也はまるで天使のようだったわ」
そこまで話して、百合絵はほぉっとため息を吐いた。

「亜佐美さんが泣くことないじゃないの」と百合絵は笑ってティッ

シュを手渡してくれる。
「私が一也を抱き上げて、天使みたいって呟くと、主人がありがとうって言ってくれた。
一番甘やかせて育てたんだけれど、高校卒業のときに真実を告げてから、しばらく家に寄りつかなくなって、あんな工場に行っちゃうし・・・」と百合絵は笑った。

「でも亜佐美さんと知り合えたんだからよかったのかな」と百合絵は立ち上がると窓辺に行って、しばらく景色を眺めていた。

しばらくすると保坂から電話があって、デパートで合流することになった。
亜佐美は荷物をまとめて宅配を頼み、百合絵に手伝ってもらいながらチェックアウトを済ませ一緒にデパートまで歩いて行った。
昨日、茜が英語を習っていると話すと、「私は外国のお友達からはユーリーって呼ばれているの。茜ちゃんもそう呼んでくれるかな？」と言って、それから茜は「ユーリーおばさま」と懐いていた。
茜の洋服を選びながら、百合絵は「やっぱり女の子のは可愛くて良いわねぇ」としきりに感激している。
茜は百合絵の着せ替え人形になっていた。
亜佐美はそんな様子を保坂と笑いながら見ていたが、この綺麗で優雅な女性にも人に言えないような悲しいことがあったのかと思うと複雑な心境だった。

買い物が終わって百合絵をタクシーに乗せて見送った後、亜佐美たちは駅まで歩いて行った。
茜は本や洋服を買ってもらって嬉しそうだった。

帰りの電車の中で、眠ってもたれ掛ってくる茜を抱えながら、亜佐美は自分が恵まれていることを感じていた。
すぐ近くには親身になってくれる伯父や祖母が居るし、百合絵も親切にしてくれる。
可愛い姪も居るし、何よりも隣に座って手を握っている一也が居る。
これから先、いつかは来る決断の時を間違えないようにしなければいけない。
選ぶものを間違えてはいけないと肝に銘じた。

保坂が握っている亜佐美の手を少し揺すって、「何を考えている?」と聞いた。
「ん?何でもないよ」と答えると、「母に何か言われたのか?」と言うので、
「ん〜〜、そういえば、一也さんって子供の頃可愛かったんだってね?」と言うと、
「当然じゃないか!」としれっと保坂が返した。
亜佐美はくすくす笑った。
「なんかね、天使みたいな赤ちゃんだったらしいね」
「今も天使だろうが?」
それで百合絵から保坂の事情を聞いたのがわかったのだろう。
保坂はそれ以上は何も言わなかった。

ゴールデンウィークが終わってから亜佐美にはメールでの問い合わせが増えていた。
ブログのアクセスもぐんと伸びている。デパートでのイベントの影響だった。

特に丁寧で熱心なメールは、イベントを主催した食品メーカーだった。
夏休みのイベントへの打診と、保坂の会社の社員食堂での商品の取り扱いについての営業だ。
亜佐美は食品メーカー側に、イベントの件と商品の営業については別の担当者にしてもらうように提案してみた。
メーカーのほうはもちろんですと言って、早速各担当者から連絡が届く。
社食で扱う商品については保坂の会社の担当者に紹介して任せてしまった。
それは亜佐美のような外部者が口を出せる問題じゃないのだ。
イベントのほうは亜佐美が個人で受けるものなので、直接やりとりできる。

そんな中、亜佐美はアメリカに住む茜の父親にメールを送った。
どう考えているのだ?と会うたびに聞いてくる伯父には、メールを出してから簡単に報告しておいた。
亜佐美が物事に向き合って考え始めたと知って伯父は安心したようだ。
翌日届いた茜の父親からの返信メールを読んで、亜佐美はいよいよ保坂に相談することにした。

『今週末、こちらに居ますか?それとも東京ですか?』と珍しく亜佐美からの問い合わせに保坂は嫌な予感がした。
『こっちに居るよ』と返信すると、すぐに『お話したいことがあるので時間作ってください』と返事が来た。
お話があると言うのはあまり良い話しでないことが多い。
『土曜日のランチを一緒にしようか?』と折り返し送ったが嫌な予感を拭えない保坂だった。

一方、亜佐美は、保坂から返事を貰うとすぐに伯父のところに電話をした。
伯父のところはメールではなく電話のほうが早い。
茜のことで保坂に知恵を借りたくて時間をとってらった。その間、茜を預かってもらえないかと頼むと、伯父は二つ返事で土曜日は茜を連れ出すと約束してくれた。
伯父への電話を済ますと、つぎは祖母に電話を掛けた。
祖母にも茜について考えていることをかいつまんで話す。保坂に相談することも告げると、「しっかりおやり」と言って、他は何も言わないでくれた。

亜佐美は保坂のことを「A社の手配師」とこっそり名づけていたが、伯父や祖母に電話を終えてみると、自分も手配師になったようでニヤリと笑ってしまった。
さて、あとは土曜日の献立である。
保坂に頼みごとをするなら、保坂の好物を作ろなければならないと思った。

土曜日の朝は茜の英語のレッスンがあった。
それが終わるのが11時半なので、保坂には正午に来てくれるように頼んでいる。
家庭教師の先生が帰るのと入れ違いに伯母が来て、茜を食事に連れて行ってくれた。
食事のあとは貴子さんのところで遊ぶことになっている。
保坂からこれから家を出てこっちに向かうと連絡があったので、慌ててグラタンをオーブンに入れた。

保坂はいつも通りにダイニングに座ったが、亜佐美が何を言いだすのか油断はしていなかった。
「外に食べに行ってもよかったのに」と保坂が言うと、
「うん、でも外で話せる話じゃないから」と亜佐美は言いながら食事の準備をしている。
「で、何？」と何気なく装って聞くと、「食べながらでもいいなぁ」と言って、ＰＣの横においてあったプリントを保坂に手渡した。

「それ、茜の父親とのメールのやりとりなんです」
「え？」
「ゴールデンウィークの前後からょっとね・・・」と言って、「飲み物は？」と保坂に聞いた。
亜佐美が黙ってお皿を並べているので、保坂は椅子に座ってそれを読んだ。

「今日はグラタンにしたの」と言って、保坂の前に焼きあがったグラタンを置く。
亜佐美もようやく席に座った。
「熱いうちに食べて、それからお話しましょ？」と亜佐美が言うので、保坂も頷いてフォークを取り上げた。

茜の父親は、茜を引き取ることを希望していた。
その前に、今度の夏休みにとりあえず旅行で茜を呼びたいこと。
その後茜の気持ちを確認して、できればアメリカに呼び寄せたいと書いていた。
それに対して亜佐美は、茜の今の生活環境を説明し、茜の父親が仕事をしながら育児と両立できるのかと質問していた。
それについてアメリカでの環境をどこまで整えることができるのか、茜の父親から具体的な内容のメールが届いていた。

お互いに口数が少ないまま食事を終え、コーヒーをカップに注いで保坂に渡した。

「さて、一也さん、今日来てもらったのはこのことについて知恵と力を貸していただきたいの」

亜佐美は単刀直入に保坂に言った。

「うん、僕にできることなら」と保坂は頷いた。

「伯父からも散々言われていたし、保坂さんにも意見されていて、私なりにずっと考えていたのよ、茜のことは」と亜佐美は前置きをした。

「皆が助言してくれるのは、私が前向きに考えないといけないからなんだなって解ったの」

保坂は頷いている。

「それで、今日、茜が帰ってきたら夏休みにアメリカ旅行をするかどうか聞いてみようと思うの」

「うん」

「茜はたぶん行きたいと言うと思う」

「うん、そうかも」

「でしょ？一度行かせるといいかもしれない」

「そうだな」保坂は決して亜佐美の話の邪魔をしなかった。

「最終決定は、その旅行から帰ってきてから茜の意思によるけど、もし茜が父親と一緒に暮らしたいと言いだしたときのことを考えているの」

「うん。どう思ってるの？」

「アメリカには行かないと言えばこのままだしね。でも、行くことの可能性が高いので、そうなった時のために、誰か弁護士さんを紹介していただきたいの」
「ほう。弁護士ね」

1つは、引き取る引き取らないに関わらず、茜の父親と交わす約束。もう1つは茜が相続した財産に関する契約書を作成することだった。両親からの相続を姉と等分したが、姉の死後は姉の分を茜がそのまま引き継いでいる。
茜が成人するまでは代理・監督権のある亜佐美と茜の父親との間ではっきりさせておくべきだろう。
それを法律家の下で整えておきたいというのが亜佐美の考えだった。

「うん、よくわかったよ。それにしても亜佐美さん、ちゃんと考えたね。偉いよ」
亜佐美はちょっと照れ笑いしたものの、「一也さん、もう怒ってない？」とおずおずと聞いた。
「怒ってないよ」と答えるとほっとした表情をした。

53　決心（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒに登録してみました。
アカウントはｗｇａｒｄｅｎｉａです。
仲良くしてくださいね。

54　出張

亜佐美はそれからも頑張って、保坂の会社との仕事をこなし、弁護士とも何度も打ち合わせて契約書を作り、従来の家の業務もきちんとやっていた。

茜は夏休みに入ってすぐ1週間ほどアメリカに行き、無事に帰ってきたと思ったら、亜佐美が予想したとおり父親と一緒に暮らすことになった。

最初は父親とは一緒に暮らさない言っていたが、それは自分がアメリカに行ってしまえば亜佐美が一人になってしまうと思ったからで、どうも塞ぎがちな様子の茜に保坂が問いただしてみると、本当はパパと暮らしたいと白状した。

それについては保坂が亜佐美を一人にしないからと茜と秘密の約束を取り交して、茜の背中を押した。

亜佐美はもう1年間茜を手元に置きたかったが、茜とその父親の熱い希望に負けて夏休み中に引っ越すことを認めてしまった。

夏休み中の学校で手続きを済ませ、迎えに来た父親と茜を見送った後は、家の中がやけに静かで広く感じることを知った。

2〜3日はなんともなかったが、日が経つにつれ、家のあちこちに茜の想い出が漂っているようでなんとも落ち着かない。

保坂は夜はたいてい立ち寄って夕食を一緒に食べるし、時々は泊まっていく。

週に何回かは通いのお手伝いさんも来るし、伯父のところにも顔を出していた。
夏休みに再び東京のデパートで開催されたイベントは、ゴールデンウィーク以上に盛況だった。
それでもあまり気分が向上しない。
毎日するべきことをしているというだけの毎日だった。

「亜佐美さん、ちょっと痩せたんじゃない？」と保坂が言った。
「そうかな？まぁ、2～3kgは減ったかも」と亜佐美はあまり気にせずに言った。
それについてはそれ以上保坂は言わなかったが、
「そうそう、来週末は何か予定が入ってる？」と亜佐美に聞いた。
「出かける用事はないですよ～。ブログの更新くらいかな」
「じゃ、木曜日から仕事も兼ねてお出かけしないか？」
「ん～～、どうしようかな」
「僕には関西出張が入ってる。亜佐美さんも一緒に行って、阪神工場の社食を見てきてくれないか？」
「私も出張？」
「うん。そうだよ。木曜日の夜が大阪で金曜の夜から京都へ行って食べ歩きしないか？」
「わお～！ほんと？」
「亜佐美さんが良ければだけどね？」と保坂がいたずらっぽく笑った。
さっそく亜佐美と保坂はインターネットで大阪と京都の情報を調べ始めた。

「申し訳ないが・・」と保坂は前置きして、大阪では宿泊は一緒だけれど食事は一緒にできないことを詫びた。
「お仕事だもの大丈夫。それに食事は友達を誘ってみるから良いよ」と亜佐美はあっさりとしたものだった。

どんな友達なのか、男か女か聞きたかったがそれを言うのも大人気ないと保坂は黙っていた。
「それよりも、暑くも無く寒くもないこの時期に京都に行けるのは嬉しいなぁ」と単純に喜んでいる。
久しぶりに亜佐美が元気になったようで保坂は京都に誘ってよかったと思った。

関西出張は朝早い出発だった。
一泊分の用意と会食用の服を鞄に詰め、他の持ち物はノートPCと保坂からのクリスマスプレゼントの一眼レフカメラ、そして筆記用具だ。
大阪では一人の時間も多い。それを利用して滞在中の服や小物は現地で見繕うつもりだった。

電車で隣同士に座りながら、こうやって保坂と一緒に電車に乗るのは何度目のことだろうかと亜佐美は考えていた。
知り合って1年少々、いろんなことがあった。亜佐美の周りの状況は激変した。
隣に座っている保坂が優しいだけの人ではないことを亜佐美は知っている。
時折、すでに亜佐美のものだと言わんばかりの表情をすることがあるが、まだ亜佐美の知らない保坂が居るような気がしていた。
亜佐美の手が届かない場所で活躍する保坂のところまで、どうやったら行くことが出来るのか。
どうやったらこの人を手に入れることができるのだろうか。
亜佐美にはまだ解らなかった。

途中で新幹線に乗り継ぎ、新大阪駅で下車すると迎えの車が2台来ていた。
保坂は大阪市内を何箇所か訪れるらしく、亜佐美を阪神工場からの担当者に紹介すると先に車に乗り込んで行ってしまった。
事前に行動予定は打ち合わせているので特に話すこともなく、保坂を見送ってから迎えの車に乗った。

工場からの迎えは女性担当者だった。
「二条さん、今日はようこそお越しくださいました。私、二条さんのファンなのでお目にかかれて嬉しいです」と亜佐美と同じ年頃の担当者が運転しながら話しかけてきた。
「毎月のメールマガジンも楽しみに読んでますし、二条さんのブログも拝見しています」と言うので、亜佐美は照れながら、「それはありがとうございます」と笑顔でお礼と言うと、
「あぁ、二条さん、素敵な笑顔です～～！」という反応があった。
関西の人はエネルギッシュと聞いてはいたが、この担当者もかなり元気な人だと亜佐美は思った。
立地や環境のことなどの質問にもいろいろと答えてくれて、工場に着くまでおしゃべりが途切れることがなかった。

関西工場は海の近くの工業地帯にあった。
門を入ると広い駐車場がありその奥に建物が点在している。
工場の外には飲み物の自動販売機くらいでコンビニも見当たらない。
亜佐美は案内されて社員食堂に入るとさっそくメモを取り始めた。
まだお昼前ということもあって、厨房で働く人以外は社員の姿がない。

何度か行き来をしながら、気がついたことを書き記し、必要な場所はサイズを測ってみた。
東京本社からのプロジェクトスタッフも合流して軽くミーティングをし、そのまま社食でランチを一緒に食べた。
その後は会議室に移動して、ランチの感想などを意見交換して亜佐美の仕事は終わった。

宿泊予定の大阪のホテルまで送ってもらい、亜佐美は一人でチェックインすることになっている。
受付で保坂の名前を言うと、すぐに部屋に案内してくれた。
さっそくＰＣを取り出しメールをチェックした後、保坂の携帯に部屋番号を知らせ、『鍵は受付で貰ってください』とメッセージを送ってから亜佐美はそのまま街に飛び出した。
ホテルは駅前にあり、デパートが３軒、他にもお洒落なお店がたくさんある賑やかな場所だ。今日は片っ端からお店に入ってみるつもりだった。

そして夕方、亜佐美はいくつかの紙袋を手にしてホテルに戻ってきた。
洋服を買うのは久しぶりだった。
東京とはファッションの傾向が違うので、見るものどれも目新しく、楽しく買い物ができた。
クローゼットに紙袋を押し込むと、浴槽にお湯をたっぷりと張り、肩まで浸かってほっと一息ついた。
今日の買い物を保坂は喜ぶだろうか。

そう考えていると、いきなり浴槽のドアが保坂が顔を覗かせた。
あまりにも突然だったので、亜佐美は「ひゃ～～っ」という声をあげてしまった。
「亜佐美さん、そんな悲鳴じゃ誰も助けにこないよ?」と笑ってい

る。
「い、いったいどうしたの?」とようやくの思いで声を出すと、
「これから会食なんだけど、ちょっと時間が空いたので荷物を置きに来た」と答えて一度ドアを閉めると、今度は浴室に入ってきた。

「一也さん・・・」全裸の保坂を見て目のやり場に困った亜佐美であるが、目線は外せない。細身には見えるけれど、張りのある筋肉がついたバランスのとれた身体だ。
「汗を流してから出かけるよ」と言って保坂はバスタブに入ってきた。
足の間に亜佐美を入れ、亜佐美の肩を後ろに引っ張って自分の胸に凭れさせると、
「もう身体は洗った?」と聞いた。
「まだ・・・今、お湯に入ったところ」と亜佐美が答えると、
「そうなんだ」と言って、亜佐美の胸を触りだした。

くすぐったくて身体を捻ろうとしても保坂に抱えられていて動かせない。
「一也さん、時間は大丈夫なの?」と言ってみると、「うん、行かなきゃなぁ」という答えが返ってきたが手を止める様子がない。
でもすぐに、「先に体を洗うよ。亜佐美さんはまだ浸かってて」と言って保坂が立ち上がった。
シャワーを出しながら保坂は身体を洗っている。
亜佐美はその姿から目を離すことができないでいた。

「亜佐美さん、いやらしい目つきになってるよ」といつの間にかシャワーで泡を洗い流した保坂が声をかけるまで、亜佐美はぼ〜っと見ていた。
恥ずかしくなって顔を背けると、保坂が「後でちゃんとあげるから」と言って笑った。

何も言い返せずにいる亜佐美を残して、保坂は浴室を出て行った。
なんて人なんだぁ～と思いながら、亜佐美も身体を洗って浴室を出た。

亜佐美が髪を適当に乾かしてから部屋に戻ると、保坂はすでにスーツを着て、ＰＣを開いていた。
「今夜は？」と保坂が顔を上げずに聞くので、「予定通り、ブログ仲間さんたちとオフ会です」と亜佐美は笑って答えた。
関西のブロガーが集まってくれて、駅の近くの店で夕食をとることになっていた。
東京のデパートでのイベントに参加してくれた人も居て、なかなか楽しい集まりになりそうだった。
「ちゃんと髪を乾かしてから出掛けるんだよ」と保坂は言って、ＰＣを閉じた後、亜佐美に近づいてかなり濃厚なキスをした。

「いいかい？誰にもついて行ってはだめだよ？」と言う。
「美味しいお菓子を呉れても？」と亜佐美は笑いながら聞いた。
「もちろんお菓子を差し出されてもダメ。ついでにイケメンにもついてっちゃダメ」
「そうなの？イケメンが好物なのに・・・残念だわ」
「やっぱり、君はイケメンが好みか」
と言って二人で笑った。

保坂は「もう迎えが来る時間だ」と言って出掛けたので、亜佐美はゆっくりと化粧をして服を着替えた。

55　プロポーズ

保坂が会食を終わってホテルに戻った時、亜佐美はまだ帰ってなかった。
メールチェックして各部所に指示を出し終わった頃、亜佐美がようやく帰ってきたが、かなり酔っ払っていた。

「ただいま～」と言ってベッドに近づくと、そのまま横になってしまった。
肩を揺すってみたが何か呟きながら眠りに入っていくようだった。
洋服が皺になるのが心配で、亜佐美の服を脱がせ、見よう見まねで化粧を落としてみた。
しばらく顔を観察していたが、洗面所で熱いお湯を湿らせたタオルで顔を拭きとり、化粧バッグのなかを探して化粧水とクリームをつける。
亜佐美の肌がつやつやとなったので保坂はほっとした。
やれやれと思いながら亜佐美をシーツの間に押し込み、自分も服を脱いで亜佐美の寄り添った。
アルコール臭い亜佐美を横にして、その背中から包み込むようにして保坂も眠りについた。

亜佐美がはっとして目を開けると、保坂の腕がお腹に巻きついている。
何がどうなっているのかわからなかったが、とりあえず全裸だというのはわかった。
まだ外は暗いようだ。
保坂も服を着ていないらしいのもわかったが、動けないので仕方なく目を閉じた。

次に目を開けると、保坂が目の前でニヤニヤ笑っていた。
すでにシャワーを浴びたようで髪が濡れている。
「おはよー、亜佐美さん」
「オハヨウゴザイマス」
「昨日のこと、覚えてる？」
「ん～～っと・・・」
「まぁ、良いよ。ぐっすり眠ったようだね。朝ごはん食べようよ」
と亜佐美に手を差し出した。
亜佐美はその手を取って起き上がり、とりあえずシャワーを浴びる。
どうしても夕べの記憶がなかった。
居酒屋を出て、ホテルまで何人かに送ってもらい、エレベーターに乗ったのは思い出した。
でもその後は全然記憶になかった。

亜佐美がシャワーを終えると朝食が届いていた。
バスローブに包まって、二人で朝食をとっているのがとても幸せな気がしていたが、保坂のほうはあまり機嫌がよくないようだった。
聞かれたわけではないが、亜佐美は夕べの集まりのことを話していた。
ホテルには皆に送ってもらったこと、エレベーターに乗ったあたりから記憶が曖昧なことを話すと、保坂は幾分気分が回復したようだった。
「あんなに酔っ払うまで飲んだ亜佐美さんを初めて見たよ」
「大阪の人って、どんどん勧めるんだもの。いつもよりたくさん飲んでしまって・・ゴメンナサイ」と亜佐美は素直に謝った。

朝食が終わると保坂は出かけて行った。
亜佐美は先に京都のホテルに移動することもできたが、まだ大阪の街を散策したかったこともあって、保坂が仕事を終わるのをまって一緒に行くことにした。

保坂から電話があったのは夕方になってからだった。
荷物もまとめてあるし、車を手配したというので宅急便も使わず、荷物をクロークに預けて亜佐美はロビー横の喫茶室でお茶を飲んでいた。
保坂がエントランスに入って来るのが見えた。
すらりとして都会の匂いを纏った保坂は、誰よりも格好良い。
カウンターでチェックアウトをしている保坂の会計をしている女性も、入り口に立っているベルガールも保坂に見惚れているようだ。
そんな保坂が誇らしいのと同時に、彼女達に嫌悪感を感じて亜佐美はドキっとした。
今の感情は何なんだろうか。イケメンには亜佐美もドキっとするじゃないか。
彼女達が悪いわけでもないのに・・・と思ったが、その感情を持て余している自分に気がついた。

領収書を受け取っている保坂に近づいて声を掛ける。
荷物の番号札を渡して、荷物を車のトランクに積んでもらうと、保坂は亜佐美に手を貸して後部座席に座った。

「思ったより早かったのね」と亜佐美が言うと、「もう、凄い勢いで仕事終わらせたよ」と保坂が苦笑した。
「これでようやく週末の夜って感じだ。定時で終わるなんて、信じられないよ」とネクタイを緩めながら呟いた。
「私のせいで?私が待ってるから急いでくれたの?」
「ん〜〜、君は鋭い。そのとおりだ」と言って、ほおっと一息つい

た。

「この時間、高速が混むから京都までは少し時間がかかるよ」と言って保坂は目を閉じた。

亜佐美が保坂の顔を見ると、目の下にうっすらと隈が出来ている。

亜佐美は少し端に座りなおして、保坂の肩を揺すって、「一也さん、こうすれば少し楽かもよ」と言って保坂の頭を亜佐美の膝に乗せるように促した。

保坂はうっすらと目を開けて、やがて亜佐美に言われたとおり上半身だけ倒して頭を膝に乗せる。

保坂は、車の振動と亜佐美の膝の心地よさでホテルにつく直前まで眠ってしまっていた。

運転手が「もうすぐホテルです」と言うのを聞いて保坂は上体を起した。

ホテルにチェックインすると、保坂はカードキーを持って亜佐美をエレベーターに急がせた。

「今夜は食べるお店を決めてなかったよね?」と聞く。

今日は何時に仕事が終わるかはっきりわかってなかったので、どこにも予約を取ってなかった。

そう告げると、「お腹空いてる?」と聞かれた。

「大阪で待ってる時にケーキを食べたから、それほどでも・・・」と亜佐美が言うと、「それはよかった」と言って保坂はニヤリと笑った。

鍵を開けるのももどかしく、部屋に入ったとたんに保坂は亜佐美を

壁に押し付けた。
唇で唇を塞ぎ、亜佐美が呻くのも気にせずにキスを深めていく。
ドアがノックされたので、ようやく保坂は亜佐美を放し、「お風呂にお湯を溜めてて」とバスルームに押し込んだ。
ボーイが荷物を運んできたようで、保坂がそれを受け取っている。

保坂は大阪のホテルからの車の中で、亜佐美の甘い匂いに酔っていた。
うたた寝から覚醒したときに、あたりに漂う空気を全部一人占めしたかった。
人目があるのを気にしただけ自分を褒めてやりたいと思いながら亜佐美をエレベーターに乗せてようやく部屋までたどり着いたのだ。

バスルームにぼんやりと立ち尽くしている亜佐美を部屋に入れ、「亜佐美さん、洋服買ったの？」と聞いた。
「うん」と亜佐美が頷くと、「それなら安心だ」と言って、保坂は亜佐美のブラウスに手をかけた。
ボタンをいくつかはずして肩だけずらして露にすると、亜佐美の腕が動かなくなった。
そんな亜佐美を軽々とベッドに座らせてから、保坂は上着を脱いだ。
いつになく保坂は激しい目をしていると亜佐美はぼんやり思った。

保坂は亜佐美がどう反応するか知り尽くしている。そのことを亜佐美に知らせようとしていたのだろうか。
ただ翻弄されるだけでは足りないようで、亜佐美が何度か限界になっても許してもらえなかった。
実際、今日はただ波を乗り越えるだけでは済ませない、そう保坂は思っていた。

いくつか波を越えたあとで、亜佐美は保坂に「この手をはずして・・

・」と囁いた。
ブラウスはまだ亜佐美の腕を拘束して、スカートはたくし上げられ、もう本来の用を足さなくなったストッキングが足に貼りついている。
「どうするの？」と保坂が聞くと、「一也さんに掴まりたいの」と掠れた声で言った。
「仕方ないなぁ」と言いながら、丁寧にブラウスのボタンをはずし、袖を脱がしていった。

亜佐美は自由になった手をそのまま保坂の首に回して、胸とお腹を保坂にくっつけてぎゅっとしがみついた。
保坂はその可愛いしぐさに一瞬理性を失いそうになったが、思いとどまって亜佐美の好きなようにさせていた。
「お願い・・・」亜佐美が囁いた。
「何？」保坂が答えると、「お願いだからもう・・・」と甘える声を出す。

「だから、何？」ともう一度聞くと、保坂の耳元で「欲しいの」と小さく囁いた。
保坂は、漸くだ！ようやく亜佐美に欲しがってもらえたと思うと胸が熱くなって押さえが効かなくなった。

それから随分後になって二人は一緒にお風呂に入った。
気がつけばお腹が空いている。注文したシャンパンと料理が届いて初めて、亜佐美はそこがスイートルームだということに気がついた。
お腹がくちくなると、またベッドに戻って愛し合った。
保坂は何度も「亜佐美」と呼び捨てにし、亜佐美もまた「一也」と名前を呼んだ夜だった。

目覚めればもう陽はすっかり高く昇っていて、明らかに昨日とは違う二人のような気がした。
朝食の時間はとっくに過ぎているので、とりあえず外に出て散策しながら適当に昼食をということになった。
交代でシャワーを浴びて出掛ける準備をする。

服を選びながら、亜佐美は保坂に「そういえば一也さんの今の住まい、いつが契約更新なの？」と何気なさを装って聞いた。
「あー、いつだっけ。たぶんもうすぐのような気がする。来月だったかも」
「じゃぁ・・・」と亜佐美は思いついたように言った。実際に思いついたのはさっきシャワーを浴びてるときだったからいいよねとは思ったのは内緒だ。
「更新なしにして、うちに来ない？」
「え？」
「部屋が余ってるから、下宿したらどうかなと思って」と亜佐美が言うと、保坂はびっくりした顔を亜佐美に向けた。

「あ、そういうわけには」と歯切れが悪い。
なおも亜佐美が勧めると、「う～ん。何も無しでは一緒に住むのは無理だ」と言った。
「それって、亜佐美が僕と結婚するって約束がないと同じ屋根の下には住めないよ」と言う。
「一也さん、プロポーズしてくれないの？」と亜佐美が責めるように言った。

「え？もしかして僕、プロポーズされたのか？」と驚いて亜佐美を見ている。
亜佐美は何も言わずにニヤニヤしていた。

「このタイミングで言うか・・・」と保坂は頭を抱えた。

「あのね、よく聞いてくれる？大事なことなんだ」と亜佐美をソファに据わらせて保坂は話を続けた。

「実はあと1年ほどしたら僕は本社に移動になる」

今度は亜佐美がびっくりする番だった。いや、いずれはそうなるだろうと思ってはいるが、その時期が1年後とは・・・・。

55　プロポーズ（後書き）

いよいよ次話で最終回です。

56　未来へ

1年と言えば、長いようで短い。
保坂は1年後のことをどう考えているのだろうか。
亜佐美は保坂の次の言葉を待った。

「僕は本社に移動して、今度は経営に参加する。
本社役員になって、住まいも用意してから亜佐美に結婚を申し込めると思ってた」
と保坂は打ち明けた。

「何故役員になってからなんですか?」と思わず亜佐美は聞いてみた。
「亜佐美は、君が僕より年収が多いということを気がついているのか?」
「え?」
「大きな会社とはいえ、僕は一介のサラリーマンにすぎない。
君の収入を計算したことはないが、不動産収入だけでも遥かに上回ってると思う。
しかもうちの会社は大きすぎてこの不景気を乗り越えるのは骨の折れることだ。
特に君と出会った頃は会社がたいへんなことがわかって、
三男の僕ですらこれからは会社のことに頑張ると宣言したところだった」
亜佐美は黙って聞いていた。

「僕は、母のように専業主婦になって欲しいわけでもない。
もちろん子供が出来て亜佐美が育児に専念したいと思うならそれでも構わない。

でも君にはタレント性がある。仕事をする能力があるんだ。
今は僕の傍に置いて、僕の手で君の能力をもっと引き出したいと思っている。
その時なってから決めても良い問題もあるだろう。
できれば僕とともに仕事でも家庭でも分け合って欲しいんだ。
僕はそういう家庭というか、いや家庭というより、僕と君の関係を築いていきたんだ」

「私は・・・」と亜佐美は口を開いた。
「一也さんの収入とか考えたこともなかった。ただ、忙しいあなたの夕飯を用意して、
一緒に眠って、朝ご飯を一緒に食べて、何しろ一緒に居たいだけなの。
そんなにたくさんのこと考えてなかったのよ」

「なるべく亜佐美の希望に沿うようするよ。
だから、とりあえず、僕と将来結婚してください」

亜佐美は感激して何度も頷きながら、最後に「はい。よろしくお願いします」と返事をした。

二人はしばらく抱き合っていたが、やがて「お腹が空いたな。出掛けよう」と保坂が言い、
「私もお腹ぺこぺこです」と亜佐美も笑って返した。

二人は手をつないで京都の街を散策し、気の向くままお店に入ったり写真を撮ったりして楽しんだ。
夜は予め保坂の母から予約してもらっていた和食の店に食べに行った。
いわゆるイチゲンさんお断りの店で、紹介者が居ないと席を取れな

い。
次から次へとでてくる彩のある料理の数々に、亜佐美はとても満足したのだった。

日曜日は予定を変更して早朝に京都を発った。
新幹線に乗り、二人は東京に向った。
保坂が見せたいものがあるという。
タクシーを降りたところは工事現場だった。
マンションの建築現場あらしい。広告塔があった。
それを見ながら迂回して大きな公園に入った。

「この公園覚えてる?」
「あ、もしかしてここは・・・」
「そう、茜ちゃんと3人で来たことのある公園だよ。
ハンカチの木があっただろう?」
「はい、覚えてます」
「あの時はちょうど反対側からこの公園に入ったけれど、
ゴミゴミした街の反対側は静かな場所なんだ。
あのマンションが来年竣工するからどうかなと思っている」
「え〜〜〜?あの建築中の?」
「うん。来年、亜佐美を驚かせようかと思ってたけど、そういうのは止めるよ。
なんでも相談しながらいこう」
「あー、それでももう決定事項のような気もしますけど?」と亜佐美が上目遣いに保坂を見上げると、
保坂はニヤリと口の端を持ち上げて笑った。

「来月は亜佐美のところに転がり込んでいいかな?」と保坂が聞いたので、
「保坂さんの部屋にするところを、ちょこっとだけ改装してもいいかしら?」と亜佐美が言った。
「あまり無理はしないでほしい。でも、もう決定事項のようだけどね」と言って二人でくすくす笑った。

「本当はこれから実家に寄って欲しいけれど、二条の伯父さんにまだ挨拶してないから、
とりあえず帰って伯父さんのところに行こう」
「いいのに、そんなこと」
「いやいや、良くないよ。大事なところだよ。伯父さんに承諾してもらったら、東京にもう一度来てくれるね?」
「はい、仰せの通りに」と言って二人はまた笑った。

それから二人はそれぞれ電話を掛けた。
亜佐美は伯父に、夕方保坂と一緒に訪問することを告げ、保坂も実家に報告をした。
保坂のほうは、亜佐美の伯父に承諾を貰うまで家の敷居は跨がせないと言われたらしい。

電車に乗る前にもう一軒だけ付き合ってと言われて、宝飾店に連れて行かれた。
「保坂の奥様から伺っております」と言う店員の案内で、店の奥の個室に通されて婚約指輪を選んだ。
「月給の3か月分だったかな」と保坂が言うので、亜佐美は「税引き後の3か月分で良いわよ」と皆を笑わせた。
亜佐美の雰囲気にあうぴったりのデザインが見つかって、サイズ直しも不要だったので、そのまま嵌めて帰ることにした。

伯父は食事にでも来るのだろうと気軽に考えていたようで、保坂が結婚の許しを請うとあんぐりと口を開けて驚いていた。
祖母と伯母は、やっぱりねというように頷いただけだ。
やがて正気にかえった伯父が「よろしくお願いします」と頭を下げてくれ、亜佐美は思わず涙ぐんでしまった。
夕飯を食べて行けと強く勧められたが、疲れているからと言って早々に引き上げた。
ようやく亜佐美の家に到着したときは、二人ともしばらくは言葉もなく黙って座りこんでしまった。
やがて、亜佐美がくすくす笑い出し、保坂も釣られて笑い始めた。

「頭のなかでいろいろ考えているより、簡単だったね」と亜佐美が言うと、
「ほんとうだな。皆に喜んでもらえてよかったよ」と保坂も頷いた。

「ご飯より乾杯の気分だな」と保坂が言うので、亜佐美はワインを取りに行った。
ワイングラスを目の高さでコツンと合わせて一口飲む。
保坂の顔が近づいてきて、亜佐美の唇に触れた。
「ワインより亜佐美に酔いそうだ」と言うと、「酔う前に、ちょっとこっちに来て」と亜佐美は保坂を引っ張っていく。
亜佐美の部屋のすぐ手前の部屋に入り、「ここを保坂さんの仕事部屋にどうかしら?」と客間を見せた。
「でも、僕は来週も出張で、その次も週も出張があるよ。引越しどうしよう」
「合鍵預けてくれたら、業者に頼んで全部やっておこうか?」
「亜佐美に手間取らせるの悪いな」
「ふふふ、見られて都合の悪いものだけ処分してくれたらあとは適当にやっちゃうけど?」

「見られて悪いものなんかないよ」と保坂が言うと、「じゃ、任せて！」と亜佐美は言ってくれた。

「でも、改造間に合うかな。いつも頼む大工さんはお年寄りで時間がかかるのよ」と亜佐美が言うと、
「どうしてもその人でないとだめってことでなければ、知り合いに聞いてみようか？
内装だけなら大人数を投入すると後期が短縮される」
「なるほど。じゃ、そちらはお願いしていい？。プランは私が考えるから」
「うん、よろしく」

「家賃はどうしようか？」と保坂が言った。
「ん～～、難しいところね」と亜佐美が言うと、
「居候は肩身が狭くなるので払わせてください」と保坂が言う。
「お安くないのよね。なにしろまかない付き、メイド付き、さらに添い寝付きだもの」と亜佐美が笑う。
「裸エプロン付きだったら、全財産注ぎ込みます。あ、全精力も」
と言って保坂も笑った。
「お手柔らかに！」と亜佐美も返して、「光熱費も考えて適当に良心的なところを出してみるね」と会話を終わらせた。

まだ一緒に居たいと思う二人は別れ難くて、結局は亜佐美が化粧ポーチと着替えを持ち、保坂の部屋に行くことになった。
ワインを抱えて二人で夜道を歩く。
保坂の冷凍庫には大量の食品があるので、そのなかからピザを焼いてワインを飲みながら夕食にした。

保坂がＰＣで仕事をしている間、亜佐美はＴＶを見たりお風呂に入ったりした。

やがて保坂がＰＣを閉じて風呂から上がると、亜佐美はすでにベッドに座ってワインを飲んでいた。
保坂が亜佐美の横に身体を滑り込ませると、亜佐美が保坂の唇にキスをしそのままワインを口移す。
保坂が亜佐美の胸に手を這わせると、いつもとは異なる感触があった。
「見せて」と保坂が言ってシーツをめくると、亜佐美はやけに大胆な下着を身に着けていた。
いっそのこと何も着ていない方が健全、そんな下着だった。
「どう？気に入った？大阪で買ったのよ」と言う。

「明日は仕事だから、今夜は簡単にね。いいでしょ？」と誘うように言う亜佐美の頬は真っ赤だ。
たまには亜佐美のしたいようにさせるのも良いなと思って、保坂は「女王様の仰せの通りに」と言って亜佐美の手に口付けた。

それからも保坂は相変わらず忙しそうだった。
保坂の実家にも行って、皆に歓迎してもらったあとは、
亜佐美は家の和風の客間を洋室に改造し、保坂の出張中に引越しを手配した。
やがて保坂が引っ越して来てからは、できるかぎり保坂の夕食を作り、同じベッドで眠った。
朝は一緒にコーヒーを飲んでから、それぞれの仕事をこなす。
亜佐美は相変わらずの仕事に加えて、食品メーカーのイベントの料理教室にも時々参加していた。
ラジオ出演やＴＶの出演の話もあって、ブログはますますアクセス

が伸びている。
今は料理本出版の誘いが来ていた。
少しでも多く保坂の役に立てるように考えて仕事をしていた。
保坂に追いつくためには、もう少し経験を積まなくてはならない。

茜にも保坂を婚約したことを知らせた。すると茜からは結婚式には絶対に日本に帰るからと返事があった。
いつ結婚するのか具体的には見えてなかったが、あまりそれを焦る気持ちにもなれない。
入籍を意識する日が来るだろう。保坂と話し合って決めればいいと思っている。
亜佐美は、保坂が東京に帰るとき、その時にまた亜佐美から保坂にプロポーズしてもいいと思っていた。

――――完――――

56　未来へ（後書き）

長い間お付き合いくださってありがとうございます。
ようやく完結しました。
生まれて初めて書いた小説で、毎日更新を目指しました。
最後まで読んでくださって本当にありがとうございます。

途中、何人かの方から誤字脱字のアドバイスをいただいてたいへん助かりました。重ねて御礼を申し上げます。

ハンカチの木は、ゴールデンウィークの頃、白い花をつけます。
ある程度大きく育ってから出ないと花が咲きません。
東京の新宿御苑に少し植えられているそうです。
花言葉は「清潔」です。

もし感想がありましたらお聞かせください。

S1　保坂の引越し1（前書き）

ハンカチの木は初めての作品にも係らず、多くの方に読んでいただきました。
ほんとうに有難うございました。
今回は番外編ということで、その後の二人の結婚までを書いてみたいと思います。
不定期の更新となりますが、お楽しみいただければ嬉しいです。

S1　保坂の引越し1

保坂が契約している賃貸マンションの更新時期が近づいていた。
亜佐美は、東京本社に移動するまでの約1年を亜佐美の家に下宿しないかと提案したのだが、
言い方はどうであれ二人はしばらくの間「同棲」するということになる。

旅行先の京都であっという間に結婚を視野に入れてしまった二人であるが、お互いの家族に賛成してもらえるかどうかとても気になる。
計画魔の保坂のほうは、近いうちに亜佐美にプロポーズする日がくると考えていたので、旅行中に亜佐美から提案されたことには驚いたが、とっくに東京での新居なども考えていた。

亜佐美の気持ちがはっきりしたとたんに保坂にスイッチが入った。
京都から東京に戻り、建築中のマンションを見せて、保坂の母にも連絡し婚約指輪を選び、その足で亜佐美の伯父や祖母にまで挨拶に行ってしまった。
後で思い出しても、電光石火という言葉を目の当たりに体験したなと亜佐美は思う。

家に戻った翌日には保坂の紹介で建築業者から連絡があり、亜佐美はさっそく改装の打ち合わせをした。
家が建てられたころの流行でそれほど良いとは言えない建材を使っているために、あまり斬新な改造は出来ないと建築業者に言われた。
それは亜佐美もわかっているので、1年ほどだけ使えればいいやと

開き直って、床下に少しだけ補強を入れ、天井と壁はなるべく躯体に負担をかけない軽い素材で仕上げることに決めた。

８畳二間続きの和室の押入れ部分がクローゼットに変わり、８畳部分を保坂の書斎にして続きの残り８畳にベッドを置く。

廊下に面した襖は、寝室と接する部分は壁になり、書斎部分は全面を半透明のガラス戸にして開けると廊下越しに中庭を望めるようにした。

反対側の窓は、そのガラス戸と同じデザインの窓枠に変える。

夜通しやれば３日で出来る工事らしいが、材料の手配や部品の準備、後片付けなども入れて１週間でやってみせますと担当者が言うので亜佐美はびっくりしてしまった。

その工務店は保坂の工場の仕事もたくさん受注しているらしく、保坂の言うことなら何でも聞く勢いだった。

同じ日の夜、保坂が帰宅する頃に素材見本と簡単な絵コンテを持って再び説明に来るというので更に驚いてしまう。

しかし、近いうちに保坂が出張に出ると言っていたのであまり時間がないと思った亜佐美は、急いで保坂にメールを出して夜の約束を取り付けた。

建築業者が帰るともうお昼だった。

ちょうどお手伝いさんが来ている時で、たまには二人で昼食も良いかもしれないと亜佐美は彼女を探しに立ち上がった。

息子の転勤に東北から一緒についてきた佐知子は、不定期な仕事の亜佐美を手伝って掃除や洗濯、茜のお守りなど頼んでいて、もうす

っかり二条家に馴染んでいる。
茜がアメリカに行ってしまってからは週に三度、定期的に通って来てもらっていた。

佐知子はお風呂場に居た。

「佐知子さん、一段落したらお昼にしない？」
「あ、亜佐美さん。そうですね。ここが済んだら休憩にします」
「カレーで良いかしら？」
「私はお弁当持ってますから」
「あ、お弁当。いいなぁ。じゃ、お茶だけ用意しておきます」

佐知子は元看護婦だけあって、何でもてきぱきと段取り良く仕事をこなしていた。
あまり計画性のない亜佐美としては助かっている。
茜が居た時も多少のスケジュール変更には予め相談しておけば、亜佐美の都合で働く日を増やしてくれたりもしたのだ。

亜佐美はキッチンに戻ると、ご飯とカレーを解凍して自分の昼食を準備した。
お湯を沸かし、試供品であるフリーズドライのお味噌汁を佐知子にと用意する。
京都で買ったお漬物を出すと、テーブルは少し賑やかになった。

ほどなくして佐知子がダイニングにやってきた。
手には小さなお弁当の包みを持っている。

「亜佐美さんの前でお弁当は恥ずかしいんですけど・・・」と言う佐知子に椅子を勧めながら、
「このお味噌汁、試供品で貰ったんだけど、食べてみてね」と亜佐美は勧めた。

「良いんですか？いただいて」
「もちろんよ。最近は試供品が多くて。感想も聞きたいし。それに最近のは美味しいのよ」

佐知子は亜佐美の母に近いくらいの年齢ではある。
茜が居なくなってからは、時々二人で休憩のお茶を一緒にすることもあった。
亜佐美の家の仕事をいつも淡々とこなして、人が来ているときは別の部屋で作業をするなどして邪魔をせず、目立たない存在だ。
亜佐美が話しかけるとニコニコと答えるが、おしゃべりが好きなタイプでもなくいつも静かに仕事をしていた。
そしていつも小さなお弁当を持ってきていた。
2～3回見たことがあるが、弁当の半分には白いご飯、残りのスペースにおかずが2品ほどの大雑把なものだった。

フリーズドライのお味噌汁の美味しさに驚いたり、京都のお漬物はさすがに美味しいと箸も進んでいるようなので亜佐美としてもほっと一安心だ。
食事も終わりかけてお茶を淹れながら、亜佐美はようやく口を開いた。
保坂が引っ越してくることを言わなければならないが、佐知子の息子は保坂の工場の従業員だ。
亜佐美はすごく慎重になっていた。

「佐知子さん、さっき建築屋さんが来てたでしょ？」
「はい」
「客間を改造することになって・・・」
「そうなんですか」
佐知子はお茶を両手に持って、うつむき加減で亜佐美の言葉を待っている。

「実は、保坂さんと婚約して・・・」
「えっ？」
顔を上げた佐知子の驚いた顔が徐々に嬉しそうな顔になっていく。

「とうとうですか？それはおめでとうございます」
「あ、ありがとう、ございます」

「旅行中にプロポーズですか？」
「まぁ、そうですね。そういうところかな・・・」
「保坂さん、何て言ったのですか？」
「いや、保坂さんと言うより・・・私が」
「は？」
芸能レポーター張りの質問攻めである。

「素敵な指輪ですね」
亜佐美が佐知子の言葉に顔を上げると、佐知子のにこやかな顔が目に入った。
「そうではないかと思っていたのですよ」
佐知子はなにやら一人納得して、うんうんと頷いている。

「それでですね、保坂さん、ここに引っ越してくるんです」

亜佐美は一気に言った。
びっくりしている佐知子に、和室を改造して保坂の部屋にすること、保坂の今マンションの引越しもすることを告げる。

「私もお手伝いしますから、何でも言ってください」
そう佐知子は言った。
「改装期間中は何かと心配なので毎日来ます。お掃除も必要ですから」と佐知子に言われて、「じゃ、お願いします」と頭を下げたのは亜佐美のほうだ。

「引越しの荷造りもお手伝いしますから」と言う佐知子には、「楽々コースで全部やってもらうから」と亜佐美は断った。
少し考えていた佐知子は、
「じゃ、ここの改装中は亜佐美さんは、保坂さんのマンションに行って荷造りするというのはどうですか？
工事が始まると煩くて落ち着きませんよ？」と言う。
それはそうだ。亜佐美は今夜保坂に聞いてから決めますと佐知子に答えた。

「それでですね、まだ婚約したことを誰にも言ってないのです。家族はもちろん承知してますけど、発表の時期は保坂さんにお考えがあるでしょうから・・・」と亜佐美が言い澱むと、
「もちろんです。私は誰にも言いませんから」と言ってくれた。
亜佐美の一番気がかりだったことである。
保坂は保坂一族の三男である。
保坂の方針が決まる前に噂が飛び交うのは避けたい亜佐美であった。
しばらく何かを考えていた佐知子が顔を上げた。
「引越し屋さんはもう決まっているのですか？」
「いえ、まだ。午後にでも電話帳に載っているところに連絡して見

積もりをと思っているのだけど」
「まだ決まってないなら、心当たりがありますのでちょっと待ってもらえませんか？」
「ええ、いいですよ」
「ご婚約のことは私からは他言しませんが、保坂さんの引越しについてはちょっと考えがあります。実はですね・・・」
と佐知子が話し始めた。

佐知子の息子と同じように東北工場からここの工場へ転勤になった同僚が何人も居る。
その家族のなかで引越会社に勤めてる人が数人居るというのだ。

「息子たちの転勤に関して、保坂さんは何度も東北工場に足を運んで親身に説得してくれたんです。
代々住んでる土地を離れたくない人ばかりでした。
初めは転地なんて考えられませんでしたが、引越し先での仕事や生活のことも何度も説明してくれて。
引っ越してからでも東北のことが思い出されて辛い毎日でした。
でも、今はもうこの街が大好きですよ。
怖い夢はまだ見ますけど、ここに居れば大丈夫って思えるようになりましたから」
泣いてはいなかったが、佐知子の目には涙が光っているように思えた。

「その保坂さんの引越しですもの。声をかければ皆協力しますよ」
と言うのである。
「ただ、ご婚約のことをどこまで内緒にしておけるかわかりませんが・・・」と言うので、
「そういうことであれば、今夜、保坂さんに聞いておきますから」
と亜佐美は答えた。

「明日、連絡しますので、それまで待ってくださいね」と言いながら、亜佐美はとても温かい気持ちになった。

その日、保坂はいつもより少しだけ早く帰ってきた。
保坂にとっては訪れたと感覚かもしれないが、亜佐美にとっては帰ってきたという感じがする。
「お帰りなさい」と言うと、保坂が嬉しそうに「ただいま」と答えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0978v/

ハンカチの木

2011年10月19日08時01分発行